掴んだ新たな希望

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掴んだ新たな希望

【Ｎコード】
Ｎ１７０８Ｖ

【作者名】
暁

【あらすじ】
気がついたら、目の前には車のライト。あぁ、終わった。
その次に気がついたら、目の前には金髪のお兄さんが立っていて、こう告げる。
「生きたまま、転生してみない？」
する！　させて！
そうして転生した先は、貴族。私は公爵家の末子で、優しい兄と姉がいた。

楽しい生活。家族を愛し、愛される生活。

人生って、こんなに楽しいの？
――ものすごく病弱な体ですが。

それでも、生きますよ！　せっかく手に入れた第二の人生。無駄にするつもりはありませんっ！
数日に一度は熱を出すけど、それでも頑張って生きていくのだ！

子の心、親知らず。親の心、子知らず。
それでも、互いに愛し、生きていく家族愛がテーマのお話です。

神との契約

その日は、暇だった。だから、最近あんまり外に出ていないことを思い出し、外に出たんだ。
家の中用の服から外用の服に着替え、私は久しぶりに買い物に出かけた。
そして、気がつくと、目の前には、白く光る車のライト。
――――終わった。さよなら、私。さよなら、みんな。
鉄の臭いが、私の鼻腔をくすぐった。

神埼有紗。享年十五歳、か。笑えないなぁ。

＊＊＊＊＊

あっという間だった。気がついたら車が目の前にいて、私は撥ねられた。……つまり、私は死んだ。

「いや、死んでないよ。意識不明だけど」

そう思っていると、どこからか、声が聞こえてきた。何だろう。
あたりを見回すと、そこには、白い服を着た、金髪のお兄さんが立っていた。

「君、死んでないよ。まぁ、しばらくは意識が戻らないけどね」
「しばらくってどれくらいさ？」
「短く見積もって、三年位かな」

……長いよ。

「うん、長いよねぇ。だからさ、君、生きたままで、転生してみない？」

曰く、先ほど、「しばらく意識が戻らない」と言ったのは嘘で、本当は、意識が戻ったらそれは奇跡と言えるほどに、私の状態は悪いらしい。

だから、お兄さんは提案した。この世界で生きたまま、ほかの世界に転生することを。

「もちろん、一つの魂が二つの体を持とうとするわけだから、丈夫な体でいられるはずも無い。転生したら、君は脆弱な身を持つことになる」

だが、人生を楽しむことは、出来る。メリットも、デメリットもある。だから、ゆっくり決めるといい。お兄さんは、優しく微笑みながら私に告げる。

でも、私の答えは、もう決まってるよ。

「転生させて、お兄さん」

今の人生は、ひどく悪いわけではないが、好きと言える人生じゃなかった。だから、新しい生をください。今度こそ、人生を好きだと言えるように。

「決意は固いみたいだね。なら、行っておいで、君の新たな家族の元へ」

そして、今度こそ、幸せな人生だと言える暮らしが待っていることを、ここで祈っているよ。

有紗（アリサ）、君の来世に、幸多からんことを。

新たな家族

転生してから、早五年の月日が流れた。私は、幸か不幸か、前世と同じ名であるアリサと名付けられ、幸せな、新たな人生を送っている。――ベッドの上で。

あのお兄さんが言っていたように、転生した私の体は、思いの外、脆弱だった。

少し無理をすればすぐに息切れし、それで尚無理をすれば、翌日は間違いなく熱を出した。

でも、それでも幸せだと言える。だって、優しい家族が、私にはいるから。

「アリサ、調子はどうだい？」
「やぁ、アリサ」
「にいさま！」

ベッドに横たわりながら前世と今を比べていると、兄たちが私の部屋を訪れた。訪れたのは、一番上の兄、ルウィンと、二番目の兄、セインだった。

ちなみに、今の私には、兄が三人、そして、姉が二人いる。前世では一人っ子だった私としては、とても嬉しい状況だ。

それに、兄も姉も、私とはずいぶんと年が離れているからか、こうやって私の部屋を訪れては、たくさん可愛がってくれるのだ。だから、私は兄と姉が大好きだ。

「あぁ、アリサ。無理に起き上がるんじゃない。ほら、横になって」
「だいじょうぶだよぅ」

「いいから。僕たちを心配させないためにも、横になっていて？」

二人の兄の来訪に、体を起こそうとしていた私だったのだが、二人の兄のその言葉に、渋々諦め、またベッドに横になる。

すると、私の行動を優しく見守っていた兄たちは、私の頭を撫でる。よしよしと、撫でられた。

でも、撫で方が荒いです、にいさま。私は声に出して、二人の手を止める。

「ルゥにいさま、セイにいさま、撫でるの、いたい。頭ぼさぼさになっちゃう」

私が言うと、二人の手は即座に止まる。そして、キョロキョロと、何かを探し始めた。

ちなみに、ルゥにいさまや、セイにいさまとは、私がこの二人の兄を呼ぶときの呼び方である。私しか呼ばない呼び方だ。

子供の舌では、ルウィンという名は言いづらく、何度も何度も言おうと努力しているうちに、何故かルゥにいさまになった。

セイにいさまは、ルゥにいさまだけ愛称で呼ばれるのがイヤだったらしく、私に直接こう呼んでくれ、と頼みに来た。

……ちなみに、これはほかの兄や姉も同様である。

そんなことを考えていると、突如、部屋の扉が開かれる。上の姉、ジャスリーンが来たのだ。

「探し物はこれかしら？　兄さん、セイン」

そう言ってリンねえさまがルゥにいさまたちに見せたものは、櫛だった。

……先ほど、自分たちが撫でたせいで、私の髪がぼさぼさにな

ったからか。
　リンねえさまは、悔しそうな顔をしているルゥにいさまとセイにいさまをよそに、私のいるベッドの開いている場所に腰掛けた。

「アリサ、今日は調子はいいみたいね」
「うんっ！　アリサは元気いっぱいだよ！」

　私がにっこり微笑みながら答えると、リンねえさまも微笑む。そして、先ほどから持っていた櫛を使って、先ほどにいさまたちにやられた髪をきれいに梳き始めた。
　そんなリンねえさまと私を、にいさまたちは悔しそうに眺める。
……にいさま、その目、怖い。

「あーっ！　ルウィンにぃも、セインにぃも、ここにいたーっ！　母さんが二人を呼んでるよ」
「うるさいぞ、カイン。そんなに叫ばなくても聞こえてる」
「おにーちゃんたちも十分うるさいって。早く行きなよ、お母さんが首を長くして待ってる」
「エルミナ、お前も母さんの手先か」

　そうしていると、またも部屋の扉が開かれた。次に現れたのは、私のすぐ上の兄と姉の、カイにいさまと、ミアねえさまだ。二人は、双子である。

「誰が手先ですって？　ルウィン、セイン。その、悪の手先のような言い方はなんですか」
「あ、母さん。待ちきれなくなったのか」

　すると、何だか恐ろしいものが近づいてきていたことが分かる。その恐ろしいものは、かあさまだった。そして、ルゥにいさまとセ

イにいさまと捕まえたかあさまは、にっこり笑って私を見て、口を開く。

「今日は調子がいいみたいね、アリサ。いいことだわ」
「うん。ねえさまにも言ったけど、アリサ、元気いっぱいだよ」
「そう。ほら、あなたたちは仕事の時間でしょう。早く行きなさい！」

私が言うと、かあさまは一度その笑みを消し、にいさま、ねえさまたちに告げる。その言葉を告げられたにいさまたちは、急いで私の部屋の時計で時間を確認し、慌ただしく出かけていった。

「アリサも、今日は少し、お庭に出る？」
「いいの！？」
「少しだけならね。太陽の光にたまには当たらなくちゃ、逆に悪くなっちゃうから」

かあさまはそう言って、私をベッドから起こし、抱き上げる。そしてそのまま、私はかあさまと一緒に、庭に出た。
庭には、きれいな花がたくさん咲き誇っていた。以前外に出たときに、かあさまが家の誇りだと言っていた花は、今、きれいに咲き誇っていた。

「かあさま、お花、近くで見たい。おろして」
「転ばないよう、気をつけるのよ」
「うん！」

かあさまはそう言いながら、抱き上げていた私をゆっくりと下に下ろした。下ろされた私は。すぐに花の元へ向かい、のんびりと花を眺める。その瞬間。

「きゃうっ！」
「アリサ！？」

花の中に隠れていたらしい虫に、指を刺された。痛い。
かあさま曰く、私の指を刺した虫は、強くは無いが、一応、毒を持っている虫だったらしい。結果、この日の庭の散歩はこれで終了し、家の中に戻ると、すぐに刺された指の消毒をされ、しばらく眠っているよう命じられた。
……大丈夫だと思うけどなぁ。
でも、この身が脆弱であることは、生まれる前から分かっていたことだ。だから、休んでおくことにした。これで病気でもしようものなら、にいさまたちが揃って、家の誇りである花のすべてを刈り取りかねない。
そんなことにならないためにも、今は、ゆっくり休むことにした。
むにゃ。

それから目を覚ましたのは、お昼前だった。お腹がすいて、目が覚めた。

「おなかすいた……」

私は呟きながらベッドから降りて、食堂へと向かった。

「おや？　噂の末の姫君ですか？　ドーリス公爵殿」
「えぇ、ちょっと失礼」

今日は、お客様が来る日だったのか。……油断した。
そう思っていると、ドーリス公爵と呼ばれた人、っていうか、とうさまが私の元へ駆けてくる。

「アリサ、寝ていなくていいのか？　ほら、お部屋に戻ってなさい」
「だって、おなかすいたの」

私が言うと同時に、お腹がきゅるるるーっと、子犬の鳴き声のような音をたてる。それを聞いたとうさまは笑い、聞こえてしまったらしいお客様も、同じように笑っていた。
それからとうさまはお客様のところへ戻り、私はメイドを呼ばれ、メイドに先導されながら食堂へ向かった。

「あら、アリサ。どうしたの？　お腹がすいた？」
「うん。ご飯、まぁだ？」

私が問うと、かあさまは「もう少しだから待っていなさい」と、微笑みながら告げる。
そして、ふと思い出したかのように、口を開いた。

「そういえば、お客様に会わなかった？」
「会ったよ？　それがどうかしたの？」

そして、お客様でふと思い出した。あのお客様が言っていた『噂の』って、何だろう。
聞いたら、答えてくれるだろうか。そう思いながら、私は尋ねてみた。

「アリサはまだ知らなくていいからね。ほら、ご飯用意できたみたいよ？　食べようか」
「とうさまは？」
「お父さまはね、さっきのお客様と一緒に食べてくるんですって」

あぁ、だから二人分しか用意されてないのか。

「さ、いただきます、しようね」

「うん。いただきます」

私が手を合わせて言うと、かあさまはにっこりと微笑んだ。そして、私はそんなかあさまを見ながら食事に手を伸ばした。

だって、お客様の前でお腹が鳴るくらい、お腹がすいていたんだ。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　父

「では、続きは移動してからにしましょうか」

「えぇ」

そう言って応接間を出、玄関に向かっていると、部屋にいるはずの末娘の姿が見える。

何をしているんだ、あの子は。寝ていなくていいのか。そう思いながら、私は来客者に一言断り、アリサの元へ駆け寄る。

「アリサ、寝ていなくても大丈夫なのか？　さぁ、熱を出す前に部屋に戻ろうね」

私は、あの子に無理をさせる前に部屋に戻そうとする。が、アリサがソレを阻んだ。

「だって、おなかすいたの」

そう言うと同時に、小さな小さな子犬の鳴き声のような音が、あたりに響く。それが、この子のお腹が鳴った音だと気づくのに、少しの時間を要した。

そして、それがそうだと分かってしまうと笑いが零れる。それは、来客者である伯爵殿も同じのようだった。

まったく、この子は。そう思いながら、私はメイドを呼び、アリサを食堂へと向かわせる。

「お待たせして申し訳ない」

「いえいえ。あれが病弱と噂の、末の姫君ですか」

ドーリス公爵家の末の姫は、病弱であるがために、父であるドーリス公爵や、宰相補佐、ルウィン、近衛大隊長、セイン、王宮図書館司書、ジャスリーン、セインと並び、近衛隊長候補筆頭、カイン、そして、王宮薬剤所の天才薬剤師、エルミナによって、社交界に顔を出すことは、全面的に止められている。

それが、貴族間で広まっている、アリサの噂だ。

ルウィンも、セイン、ジャスリーン、そして、カイン、エルミナも、アリサの年の頃には、既に社交界デビューを果たしていた。

今のアリサがデビューをしないのは、ひとえに、病弱な体のせいだ。但し、それは表向きの理由である。

本当の理由は、シスコンの兄と姉たちが、アリサの社交界デビューを、父に止めるよう説得したのだ。……五人がかりで。

だが、この本当の理由を知る者は、説得をした子供たちと、された本人、そして妻しか知らない。説得のときは、メイドにも席を外させていたからだ。

そしてもちろん、このことを、アリサは知らない。全員が、アリサの耳には入らないよう、画策していたからだ。

「噂どおり、お可愛らしい姫君ですね」

そして、その噂には、アリサは『超』がつくほどに可愛い姫だと

言うものも含まれている。決して否定はしない。
それほどに、末娘を溺愛している父であった。

ご飯を食べて、その後、かあさまからの命令で部屋に戻り、横になっていた私は、玄関が開き、にいさまやねえさまが帰ってきたことに気がつく。

気がついた私は、すぐにベッドから降りて、扉の元へ向かう。それからすぐ、部屋の扉は開かれ、仕事から帰ってきたにいさまたちが部屋に入ってきた。

その中で、私はルゥにいさまをターゲットに、駆け寄り、抱きついた。

「おかえりなさい、にいさま、ねえさま」

「ただいま、アリサ」

「アリサ、僕にも抱きついてよ」

「セイン、私が先よ。そういうのは、年功序列なのっ！」

「そんなもん関係ない。カイン、エルミナ、お前等もそう思うだろう！？」

「いや、僕は単純に、アリサが元気ならそれでいい」

「私もそうだね。……って、アリサ、指、どうしたの！？」

セインにいさまとリンねえさまの言い合いを聞いていたミアねえさまが、私の指の怪我に気がつく。

そしてその瞬間、五人全員の目が、包帯を巻かれている私の指に集中した。

「アリサ、この怪我はどうしたのか、にいさまに正直に言ってごらん？」

「アリサに怪我をさせた奴を、僕がやっつけてあげるから、言いなさい」

「セインにぃ、僕も手伝う。だから、アリサ。誰にやられたの？……あぁ、そういえば、今日は来客があったよね。その人かな？」

カイにいさま、何だか怖いです。

私が恐怖で少し後ずさっていると、ねえさまたちがこの怖いにいさまたちを止めてくれた。

リンねえさまがルゥにいさまと、セイにいさまの、ミアねえさまが、カイにいさまの頭に一撃を入れて、黙らせた。

「兄さん、セイン、カイン。アリサが怯えてるからやめなさい」

「特に、カイン。落ち着きなさいよ、まだあの伯爵が悪いって決まってないんだから」

まぁ、原因のどこかに伯爵があるのなら、許さないけど。

ミアねえさまは呟くのだが、それも、怖い。私はミアねえさまから少し距離を取り、リンねえさまの腕をしっかり掴んだ。

リンねえさまは、私の言わんとしたことをすぐに理解し、口に出してくれる。

「エールーミーナっ。アリサが怯えてるよ。カインを止めたあんたが怖がらせてどうするの」

「え？　あ、ごめんね、アリサ。もう怖くないから、こっちにおいで」

リンねえさまが言うと、ミアねえさまはあの怖いよく分からないものを引っ込め、私を呼ぶ。

呼ばれた私は、リンねえさまの手から逃れ、ミアねえさまの元へ向かった、のだが、セイにいさまから妨害が入った。

「アリサ、年功序列なら、僕が先だろう？」

にいさまの大人気ない一面を見た瞬間。……少し、にいさまをいじめてみることにした。

「ねんこうじょれつって、なぁに？」

私は、ミアねえさまの横で、少し首をかしげながら尋ねてみる。

かつては、登校拒否の引きこもりオタク中学生であった私は、この仕種がとんでもなく、凶悪的に可愛いものだと言うことを、よく知っている。

オマケに、にいさまはシスコン。勝負は、あった。

「くぅっ」

セイにいさまはそう言って、部屋を駆け出て行く。

「セイにいさま、どうしたの？」

「アリサは気にしなくてもいいからね。セインはたまにおかしいから」

セイにいさまの奇行を、理由を分かっていながらも、故意に聞いてみた。すると、返ってきた答えは、知らなくていいという答えだった。

まぁ、五歳児にロリコンだ何だって言うのは、教育に悪いかな。

それからは、セイにいさま抜きで、五人、私の部屋に集まり、話をする。

もちろん、指の怪我のことをしっかりと聞き出されました。

セイにいさまが出て行った後、四人全員からベッドに戻らされ、

それから指の怪我の原因を、しっかりと聞き出された。

「クソ虫が……。可愛いアリサの指を刺すとは……」
「今度、その虫を滅ぼせる薬の材料とかを図書室で、仕事中にでも探しておくわ」
「頼んだ、姉さん。俺は、今度からその虫を見かけたら、即、殺す」
「姉さん、薬の材料が分かったら教えて。作るから」

……にいさま、ねえさま、みんな、怖いなぁ。たかが、虫如きにそんな恐ろしいことを考えないでください。
だいたい、ちょこっと刺されただけですよ？それだけなのだから、そんなに目くじら立てないでください。怖いよぅ。
そうして、私はいつの間にか泣いてしまっていたらしい。兄姉たちが、急いで私の頬を伝う涙を拭う。

「どうしたの、アリサ？　指が痛い？」
「まさか、具合が悪くなった？」
「私、お母さん呼んでくるっ」
「ぼ、僕も行くっ」

違う。違うよ、にいさま、ねえさま。指は痛くないし、調子もいいよ。大丈夫だから。
でも、涙は止まらない。そして、ついに、今まで抑えてきた声が、零れた。

「う、えぇぇえぇぇん」

その瞬間のにいさまとねえさまの焦りようは、すごかった。かあさまはまだ来ないのか、と扉のほうをちらちら見るし、医者を呼んだほうがいいか、とか話してるし。

そうしていると、ミアねえさまとカイにいさまに先導されて、かあさまが部屋にやって来た。

「アリサ！　どうしたの？　ほーら、もう大丈夫だからね」

二人に先導されてやってきたかあさまは、泣いている私を優しく抱き上げる。

それからは、思い切り泣いた。何故泣いているのか分からないまま、とにかく泣いた。

かあさまも、にいさまも、ねえさまも心配そうにしてたけど、それでも、思い切り泣いた。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　母

ずっと泣いていたアリサがようやく泣き止んだかと思うと、あっという間に眠りに落ちた。

泣き疲れたのだろう。これで、明日熱が出なければいいのだが。

母は、そう思いながらほかの子供たちのほうを向く。さて、これからは、アリサが泣くにいたって、何があったかを聞き出す時間らしい。

母は、子供たちの名を、上から順に呼んだ。

「ルウィン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ。何があったのか、正直に言いなさい」

「母さん、セイン兄さんはいないよ」

カインに言われ、母はあたりを見回してみる。そこには、探している人間の姿は見えなかった。

「あの子がいないなんて珍しいわね。どうかしたの？」

「アリサの可愛さに負けた」

ルウィンが言った瞬間、母は、瞬間的に停止した。が、すぐに分かったらしい。

そのことはこれ以上気にすることを止め、本題に戻ることにしたらしい。まずは、ルウィンに回答を促した。

「僕たちにも分からないんだよ。アリサ、本当にいきなり泣き出しちゃったから。なぁ？」

「うん。気がついたら、目に涙が溜まってて、それからはあっという間だった」

それから、アリサが泣き出すに至るまで、何があったかを一部始終聞き出した母は、深い溜め息をついた。

「あんたたちは、この子の前で、そんな危ない話をしないの。怖かったのよ、多分」

母は、泣き疲れ、鼻を真っ赤に染めて眠る末娘を柔らかな目で見ながら、そう告げる。

同時に、ほかの子供たちに、アリサの恐怖の基準をしっかりと教え込まなくては、と、母は力強く意気込んでいた。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

私は、いつの間に眠っていたのだろう。気がついたら、いつものように、見飽きるほどに見慣れた部屋の天井が目に映り、そして、顔を動かすと、そばにはかあさまがいた。

にいさまやねえさまたちはどこだろう。そう思いながら私はキョロキョロとあたりを見回すが、部屋には、にいさまたちの姿は見当

たらない。
　にいさまたちはどこにいるんだろう。いつも、夕飯の時間までは私の部屋で、たくさん話を聞かせてくれるのに。
　そう思いながら、起き上がり、にいさまたちを探しに行こうとすると、今まで黙っていたかあさまが、ようやく答えをくれた。同時に、私をベッドに押し戻す。

「あの子たちなら、今、お父さまからのお説教を受けてるわよ」

　だから、あなたは横になっていなさい。私はかあさまにそう言われ、ベッドに完全に固定された。まぁ、精神的に、と言う意味でだが。
　でも、お説教って、どうしてだろう。……まさか、私がさっき泣いたせいだろうか。

「かあさま、にいさまたち、悪くないよっ」
「どうして？」
「悪くないのっ！　とうさまを止めなくちゃ！」

　かあさまの静止を振り払い、私はとうさまの書斎へ向かう。……いや、向かおうとしたのだが、かあさまに軽々と持ち上げられ、止められた。
　それでも、私は足掻く。下ろしてもらえるように、暴れたのだ。

「こら、暴れたら熱を出すでしょう。やめなさい」
「やぁだっ！　とうさまを止めるのっ！」

　そう言って、私は足掻き続けた。すると、上から深い溜め息の音が聞こえてきた。……あれ、何だか、怖いですよ、かあさま。
　なんとなく、身の危険を感じた瞬間だった。

父、ご立腹

「何をしてるんだ、お前たちはっ！」

アリサと五人の兄弟たちの父であるドーリス公爵の書斎。そこには、セインとアリサを除く四人の子供たちが集められ、父からの雷を受けていた。

「ルウィン！　お前は宰相補佐として、それでやっていけるのかっ！？」

「ジャスリーン！　司書は、いろいろな人と関わるんだぞ。それで、いいと思っているのか！？」

「カイン！　一人前の騎士を目指す前に、妹をもっと大事にすることを覚えろ！」

「エルミナ！　仕事中にこんな調子だと、いつか、調合に失敗して、とんでもない薬を作り兼ねんことになるぞ！　気を引き締めろ！」

彼は、心の底から怒っていた。理由は、彼の子供たちにあった。

理由は、彼の子供たちが、体の弱い、最愛の末娘を大号泣させたからだ。末娘であるアリサは、生まれつき、体が弱く、ちょっとしたことで、すぐに熱を出す。

そして、アリサは、熱を出すと抵抗力が格段に下がるため、ほかの病気を併発しやすい。だからこそ、彼も、彼の妻も、アリサの病気には、細心の注意を払ってきた。

それは、彼のほかの子供たちも同じのはずだった。

だが、彼の子供たちは、末娘を大号泣させた。それは、熱を出す可能性を格段に高める。

つまり、ほかの病気を併発させて、時に、その命すら危ぶませかねないのだ。
故に、彼は、次が無いよう、子供たちをしっかりと叱ることにしたのだ。

彼や、彼の妻にとってアリサは、ずいぶんと年を取ってから産まれた子だったため、可愛さも一入だった。
それに、体が弱く病弱となると、可愛さはより一層増した。

だから、彼は、アリサの周辺に関しては、力を入れた。アリサが健康とは行かずとも、少しでも元気に生きていけるように。
アリサが立派に、成長できるように。

「ルウィン、ジャスリーン、カイン、エルミナ、返事はどうした！？」
『……ごめんなさい』
「謝るのは、アリサにしなさい」

子供たちの心からの謝罪に、父は、ようやく淡く笑顔を浮かべる。
そして、優しく、子供たちに告げた。

「きつく叱って悪かったね。さぁ、アリサに謝りに行っておいで」
『はい』

そして、彼はアリサに謝罪に行く子供たちの後をついて、見守る。
そして、アリサの部屋の前につくと、彼の妻と、末娘のよく分からないバトルが展開されていた。

「とうさまのところ行くもん！」
「だから、ダメと、何度も言っているでしょう！」

「やーだぁ！　行くのぉ！」

「どうしたんだい？」

「とうさま！」

彼が声をかけると、彼の可愛い末娘は、彼の妻の手を全力で振り払い、彼に飛びついた。そして、言う。

「とうさま、あのね、にいさまたち悪くないの。だから、怒らないで。悪いのは、アリサだから」

アリサは、お願い、と彼を小さな手で、ぎゅっと抱きしめる。最愛の娘のそんな攻撃に敵う者など、そこにはいなかった。

「アリサ、とうさまは、もう怒っていないよ」

「ほんとう？」

「本当。だから、アリサはベッドに戻ろうか。無理をすると、熱を出してしまうからね」

彼は、そう言って必死に弁明をする愛娘を抱え上げ、そのままアリサの部屋に入り、アリサをベッドに下ろした。

そして、アリサが両親の指示に従い、ベッドに横になると同時に、子供たちは口を開いた。

「アリサ、ごめん」

「ごめんね、アリサ」

「にいさまたちが悪かった」

「ごめんね、アリサ」

突然の兄と姉たちの謝罪に、アリサは目を白黒させる。今のアリ

サの表情は、アリサが今思っているであろうことを、素直に写していた。

つまり、今のアリサの考えは「にいさまとねえさま、どうして、いきなり謝るの？」と言うことになる。

今も依然としてその考えに包まれているアリサに、彼は助け舟を出した。答えを教えたのだ。

「ルウィンたちはね、君を泣かせてしまったことに対して謝っているんだよ」

「にいさまたち、悪くないよっ！！」

そして、彼が言うと同時に、アリサは声を張り上げ、言う。

そんなアリサを、彼や、彼の妻、そして、彼の子供たちは、よしよし、と丁寧に頭を撫でる。すると、アリサはまたも、何事！？と言う顔をしていた。

彼は、そんな末娘の行動を愛おしく思う。そして、それは彼だけではないはずだ。それは、この部屋にいる全員が思ったことだろう。……つまり、セイン以外が。

後に、この話を聞かされたセインは、悔しさと寂しさが入り混じった表情で、その話をした兄弟を見ていたと言う。――さもありなん。

そしてセインは、それ以来、今まで以上にアリサに執着するようになり、結果。

「セイにいさま、うっとうしい」

と言うアリサの言葉にばっさり切られ、それを眺めていた兄弟たちに、失笑をいただいたとのこと。

それからは、セインのアリサ付きまといは、若干だが、マシにな

ったそうだ。

そして、四人の兄弟たちが父からお説教を受けたこの日、アリサは、夕飯を食べた後、二人の姉と一緒に、お風呂に入っていた。

それが決まったときの、兄たちの反応は、すごかった。ジャスリーンとエルミナに羨望の眼差しを向け、アリサには、至極、悲しそうな目を向けた。

アリサ自身は、別に、兄と入るのに抵抗を感じてはいなかった。何せ、まだ体は五歳と、とても幼いからだ。

だが、彼らの両親が、ソレを止めたのだ。

「アリサ。貴族の子女が、いくら兄妹と言えど、異性に肌を見せるのは感心しないよ。君は、公爵家の末子なんだ。貴族なんだよ。だから、一緒にお風呂に入るのなら、ジャスリーンや、エルミナと入るんだよ、いいね？」

父のその言葉に、ジャスリーンとエルミナは喜び、ルウィン、セイン、カインは落胆した表情を見せた。

だが、彼らの両親の言うことには、筋が通っている。故に、彼らは諦めざるを得なかった。

そして、彼らは今日も、嬉しそうな顔をして末妹の腕を取り、浴室へ向かうジャスリーンとエルミナを見送ったのであった。

予想を裏切らない展開

昨日、リンねえさまやミアねえさまと一緒にお風呂に入り、きれいに髪を乾かして、いつもよりも若干早く就寝した私ですが、――熱を出したようです。

目が覚めてから、どうも、頭が重たくてかないません。こんなことを考えるのも、実際、結構辛いです。

もちろん、起き上がり、食事のために食堂へ向かうなど、夢のそのまた夢です。

そうしていると、私がなかなか起きてこないことに、疑問を抱いたらしい、私の世話長のメイドである、シャーナが、部屋の扉を申し訳程度にノックして、部屋に足を踏み入れる。

そして、目を覚ましているにも関わらず、起き上がらない私を見て、何か悟ったらしい。「少々お待ちください」と一言言い置いて、部屋を出て行った。

戻ってきたときは、シャーナだけではなく、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさまたちと、何故か勢ぞろいだった。

そして、シャーナと共に部屋に入ってきたかあさまは、急いで私の横たわるベッドに近づき、私の額に手を当てた。かあさまの手、冷たくて気持ちがいいな。

「あなたの熱が高すぎるの。アリサ、どこか痛い所はある？　頭とか、喉とか」

呟くと、そう返された。

うーん、痛い所。……頭……は、ぼうってするけど、痛くはない。でも、喉は少し痛い気がする。正直にそう告げると、口を大き

く開かされた。

「あぁ、喉が少し腫れてるね。……侍医を呼んで、診てもらいましょう」

かあさまはそう言うと、ふと時計を眺め、とうさまや、にいさまたちのほうを向く。そして、口を開いた。

「あなたたちは仕事でしょう。早く、朝ごはんを食べて、行ってらっしゃい」

……気のせいでしょうか。実際には聞こえなかったのだが、頭の中に「邪魔だからとっとと消えろ」と言う、かあさまの心の声が聞こえたような気がします。

そして、それはとうさまたちにも聞こえていたらしい。とうさまたちは、なんとも言えないような表情をして、私の部屋から出て行った。

「アリサは、食欲はある？　無くても、少しくらいは食べなさいね」

「食べたくなぁい。ごはんいらない」

「ダーメ。食べたくなくても、少しは食べて、栄養を摂りなさい」

そうじゃないと、ずっと治らないでしょう？　かあさまのその言葉に私は諦めを覚え、用意されたら食べなくては、と言う恐怖概念が浮かんできていた。

だって、この状況で食べなかったら、多分、かあさまが怖いから。

そして、私はシャーナの持ってきたお粥をのんびりと、少しずつ口にいれ、嚥下する。飲み込むと同時に、腫れているらしい喉が痛んだが、あまり気にしないことにした。

その後、無理やり三分の一ほどを流し込むようにして食べた私は、限界が来て、かあさまにお粥の入った器を返す。

それからは、ベッドに横になり、眠ることにした。熱を早く下げるには眠るのが一番だと言うことは、小さい頃からの経験上、よく分かっているから。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　子供たち

朝食を食べた父や子供たちは、アリサの様子を見に、アリサの部屋を訪れていた。仕事へ向かう前に、アリサの様子を見るために。

「アリサ」
「しぃっ」

一度、声をかけて、部屋に入ってきた子供たちは、母からの言葉で、声を潜めた。そして、ベッドに横たわるアリサに目を向けた。

――眠っている。若干呼吸が荒いが、それでも、気持ちよさそうに寝入っていた。

「アリサは大丈夫だから、あなたたちは仕事に行きなさい。遅れるわよ？」

そして、時計を見た子供たちは、時間の危険を感じ、焦って駆け出て行くのであった。――一人を除いて。

「エルミナ、あなたも急がないと、遅れるんじゃない？」
「今日休み。有給取ってるから」

のんびりとそう告げるエルミナは、すやすやと眠るアリサを、優しく、温かい目で見守っていた。

母が、いつの間にかアリサの部屋を離れ、侍医を連れて戻ってくるまでの間、ずっと。

「アリサ、侍医が来たから起きなさい。起きて、きちんと診てもらいなさい」
「んぅ……眠い……のぉ」
「いいから起きなさい。診てもらったら、また眠っていていいからね」
「むぅ……」

母とエルミナが言うと、アリサは眠い目をこすりこすりしながらも、何とか目を開いた。
そして、開かれたその目は、侍医とぴったり合う。

「おはようございます、アリサお嬢様」
「おはよ、ごじゃます。じーせんせー」

ちなみに、アリサの言う「じー」とは、爺ではなく、侍医のことであると、一応、説明を入れておこう。
つまり、アリサはこう言っていることになる。「おはようございます、侍医先生」と。

「アリサお嬢様、本日は、どう調子が悪いか、お分かりになりますか？」
「んー、喉が痛い。ご飯食べるとね、少しずきってするの」

アリサが言うと、侍医はアリサに口を開くよう言い、喉を見る。
侍医には、喉が腫れているのがすぐに分かったらしい。
そしてその後も診察は続き、終わる頃には、眠たかったアリサの目も、ぱっちりと開き、完全に覚醒していた。

「奥様、今回のお薬です。例によって苦いので、お嬢様が飲むのを嫌がるかもしれません。その際は、たくさんの水に溶かして、飲ませて差し上げてください」
「えぇ、ありがとうございます」

その会話は、アリサに聞こえないよう、部屋の扉の外でされていたのだが、『苦い』と言う言葉だけは、しっかりアリサの耳に届いたらしい。

エルミナの見ている前で、とっても嫌そうな表情を見せた。エルミナは、そんな妹を宥め、落ち着かせる。「熱が下がるまでの辛抱だからね」と、優しく声をかけてやりながら。

その後、まだまだ体が辛いらしいアリサはあっという間に眠りに落ち、エルミナはその様子を見守るに留まった。

可愛い妹と一緒に遊びたいが、いかんせん、今の妹の熱は、とても高い。早くまた遊べるよう、エルミナは、アリサの額に置かれたタオルを、ちょこちょこと交換してやるのであった。

そして、昼。

「アリサ、起きて。お昼ごはん食べて、お薬飲まなくちゃでしょ？」
「ん……」

お昼ごはんを持ってきたシャーナの姿を確認したエルミナは、アリサの体を軽く揺らし、アリサを起こす。

そして、アリサの体を起こしてやったエルミナは、スプーンを手に取り、アリサの口元へ、お粥の乗ったスプーンを出した。

「アリサ、あーん、して」

姉に言われ、アリサは素直に口を開く。が、あまり食べたくないのか、表情は、嫌そうだった。そんなアリサに、エルミナは苦笑しながら言葉をかける。

「アリサ、そんなに嫌そうな顔しないで。ご飯を食べなきゃ、お薬飲めないでしょう？　お薬飲まないと、いつまでも熱が下がらないよ？」

いいの？　と問いかける姉に、アリサは首を横に振った。それを見たエルミナは、優しく微笑み、もういらないと言う妹の飲むべき薬を取りに向かうのであった。

もちろん、「お薬飲むまでは、寝たらダメだからね？」と、アリサに忠告をした上で。

「お母さん、アリサの薬は？」

「あら？　アリサの部屋に置いておいたでしょう。それにしても、もう食べ終わったの？」

「うん」

「あの子ったら……。朝も殆ど食べていないのに……」

母とエルミナは、そう言いながら、アリサの部屋へ向かう。そこでは、姉の言葉を忠実に守り、睡魔に襲われながらも必死で起きているアリサの姿があった。

「ほら、エルミナ。ここに置いてあるから。シャーナ、水を少し多めに用意してちょうだい」

母が言うと、シャーナは急いで部屋から出、そして、急いで戻っ

てくる。

「アリサ、お薬飲みましょうね。たくさんのお水で溶かすから、あんまり苦くないからね」

母の言葉を信用し、その薬を一気に口に含んだアリサ。

この日、この時、アリサの部屋では、アリサの絶叫がとどろいた。

「苦いーっ！！　かあさまの嘘つきーっ！」

嗚呼、妹よ（前書き）

兄姉たち視点です。
主人公、アリサは出てきませんので♪

嗚呼、妹よ

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ルウィン

アリサは大丈夫だろうか。ルウィンは、宰相補佐と言う仕事の傍ら、そう考える。

「ルウィン！　ボーっとするなっ！　さっき言ったこと、聞いてたか？」

「え？　あ、すみません。考え事をしていて、聞いていませんでした。申し訳ありませんが、もう一度お願いいたします」

いかんいかん。最愛の妹のことを考え、仕事が疎かになっていたルウィンは、気を切り替え、真剣に仕事に励む。

そう、気にかけているからか、今後、大きなミスをすることは無く、宰相である公爵に叱られることも無かった。

だが、何か考えていることは、ルウィンや宰相のいるこの執務室の主である王には分かっていたらしい。

宰相である公爵が図書室へ足を向けると同時に、優しく、ルウィンに問いかけた。

「ルウィン宰相補佐、末の妹姫に、何かあったんですか？」

「お分かりに、なられますか？」

王の質問に、一瞬停止したルウィンだったが、主の質問に答えないわけには行かない。静かに、返事を返した。

「宰相補佐がこうも気を取り乱すのは、末の妹姫が原因だと、誰もが分かっていますからね。あぁ、あなただけではありませんね。あ

なたのご兄弟、皆さんがそうですね」
「そ……そうですか……」

そして、少し焦っているらしいルウィンに、王は更なる攻撃を加えた。

「何があったのか、話して御覧なさい。ほら」
「陛下、楽しんでいらっしゃいますね？」
「分かりますか？　まぁ、いいじゃないですか、そんな些細なこと」

王はそう言って、アリサの発熱話をルウィンに強請り、それを聞いた王は、国で一番だと言われている医者を、ドーリス公爵家に行かせると、ルウィンに約束したのであった。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ジャスリーン

「ジャスリーンさんっ！　しっかりしてください。お客様が参られてますよっ！」

王宮の図書室。ジャスリーンは、ここで司書として働いていた。のだが、今は、はっきり言って、仕事のことなど、全く考えられない。

考えられるのは、ただ一つ。彼女の愛する最愛の末妹、アリサのことだけだった。

アリサは大丈夫だろうか。熱は、少しくらい下がっただろうか。辛いだろう、可愛そうに。

今のジャスリーンは、とにかくそんな考えに包まれていた。

故に、今自分のいるカウンターの前に、人がいることになど、全

く気がついていなかったのである。

「あ、宰相様。申し訳ありません、本日はどのような本をお探しでしょうか」

「ジャスリーン殿、あなたまでこうということは、末の姫君に何かあったんだな？」

カウンターの前で眉を顰めながら告げる宰相に、ジャスリーンは焦る。こうも簡単にバレてしまうとは、と。

ちなみに、彼女は気がついていなかった。アリサの熱によって、普段どおりの仕事が出来ていないのは、自分だけではないと言うことに。

「ジャスリーン殿、妹姫が大事なのはよく分かる。が、仕事だけはきちんとしなさい。いいね？」

「はい、申し訳ありませんでした。ところで、本日はどのような本をお探しですか？」

「この国の歴史が事細かに書かれた本を頼もう。殿下の勉強用でな」

宰相の言葉に、ジャスリーンはどれがいいか少し考え、そして、ちょうどいい本が頭の中で見つかったのか、カウンターから出、本を取りに向かう。

そして、貸し出し処理を行ったジャスリーンは、再度の謝罪と共に、宰相に本を手渡すのであった。

ちなみに、この後で、彼女が同僚に叱られたことは、最早説明するまでも無い。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　セイン　カイン

今日は、セインの所属する近衛第三隊と、カインの所属する近衛第五隊の合同訓練日だった。

が、セインもカインも、集中できているはずもない。理由は、彼らの大事な末妹（アリサ）にあった。

あぁ、僕たちの大事な妹、アリサ。高熱を発して、辛いだろう。苦しいだろう。代われるものなら、代わってやりたい。

そんなことをずっと考えているから、全く集中など出来ず、二人は揃って、上司からのお叱りを受けることとなる。

「ドーリス兄弟！　集中しろっ！」

「集中できないなら、隅っこ行って見学してろっ！　訓練に参加するなっ！」

そこまで言われて、ようやく二人は集中する。そして、集中した二人は、訓練用の剣を持ち、互いに切りかかった。

この二人の実力は、近衛隊の中でも、かなり上位に当たる。故に、セインは大隊長の位を持ち、カインは、そんな要職には就いていなくても、出世コースにきっちり乗っているような人間だった。

そして、この二人の実力はひっ迫している。故に、この日の訓練の責任者は、模範試合をこの二人にやらせようとしたのだが、二人は集中しておらず、どこからどう見ても、剣が乱れていた。

結果、二人はお叱りを受け、そこでようやく集中するに至ったのである。

二人の激しい剣戟の音が、あたりに響き渡る。刃を潰してあるといえど、重たい金属の剣を紙のように扱い、激しい剣戟を繰り広げる二人に、新人の兵たちは釘付けだった。

二人の剣戟を見慣れているほかの兵も、参考にするところがあるらしく、二人の剣戟を真剣な眼差しで見つめ続ける。

「全く、この家族は、末の姫君がかかると、途端に弱くなりますね」
「それだけ、妹姫を愛しているんだろうさ。まぁ、実戦で腑抜けたことしなければ、大丈夫だろ？」
「それもそうですね」

二人は、上司のそんな言葉をＢＧＭに、尚も激しい剣戟を続け、最後は、セインがカインの首元に潰された刃を当て、終了した。

「カイン、降伏しろ」
「くっ……、参りました」

そして、カインが降伏の言葉を告げると同時に、セインは上司のほうを向き、口を開く。

「隊長、本日の僕の役目、これだけでしたよね？　でしたら、僕は帰らせていただきますね」
「え？　あ、あぁ……」
「セインにぃ、ずるい！　隊長、僕も帰らせていただいてよろしいですかっ！？」

そうして、妹大好きな二人は、隊長の許可を得て、愛するアリサの待つ家へと急ぐのであった。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

考えることは、皆一緒

そしてこの日、普段よりも早く、兄弟全員が帰宅した。帰宅した兄弟たちが向かうのは、アリサの部屋である。

『アリサっ！』

「あ、おかえり、兄さんたち。今日は早かったんだね」

アリサの返事を期待して扉を開いた兄弟たちだったが、返ってきた声は、アリサのそれではなく、エルミナの声だった。

兄弟たちは、首をかしげる。何故、エルミナが仕事場ではなく、ここにいるのかと。

「エル、お前、仕事は？」

「今日休み。ついでに言うなら、明日も休み」

カインに問われたエルミナが、あっさりと答えを返した瞬間、聞いていた子供たちが、大声を上げた。

その声で、アリサが目を覚ましてしまうほどに。

「にいさま、ねえさま？」

目を覚ましたアリサは、まだ寝ぼけ眼で、声の主の予想をする。

そんなアリサを、そばでずっと見つめていたエルミナが、再度、眠りを促した。

「アリサは、夕飯まで休んでいようね」

そう言ってアリサの小さな顔を手で覆い、アリサの視界を奪う。

視界が塞がれ、真っ暗になったアリサは、再び、眠りに落ちていった。

そして、エルミナの怒りは、叫び声をあげた兄弟へ向けられる。

「兄さんも姉さんも、眠っているアリサの枕元で大声を出すなんて、何を考えてるの」

「う……」

せっかく気持ちよさそうに寝てたのに。また寝たからよかったけど……。

エルミナは、声のボリュームを落として、兄と姉に文句の言葉を投げる。無論、ルウィンをはじめ、ほかの兄弟たちは、エルミナのその言葉に、何も返せない。

そして、四人はエルミナと眠っているアリサに謝罪の言葉を告げ、そのまま、アリサの寝顔を眺め続けていた。

朝と比べると、熱が下がったのか、少しマシになっている呼吸。それでも、その寝顔は穏やかで、とても気持ちがよさそうで。

兄弟たちは、そんなアリサに安堵の息をこぼしつつ、ただただ、誰も口を開くことなく、アリサの寝顔を眺め続けるのであった。

――帰って来た父が、アリサの部屋を訪れ、偶然にもアリサが目を覚まし、父に抱きつくまでは。

「ただいま、アリサ。調子はどうだ？　少しは善くなったか？」

「おかえりなさい、とうさま。アリサ、もうだいじょうぶだよ」

だから、お薬飲まなくてもいいよね？　そう言うアリサの熱は、アリサが大丈夫だと言うほど下がってはいない。

つまり、これは苦い薬を飲みたくないアリサの、必死の抵抗だと、父と兄弟たちは、すぐに理解した。

そして、それを聞いた父は、優しく微笑みながら、アリサの額に手を当てる。そして、溜め息をついた。

「アリサ、まだ熱は高いよ。もう少し、お薬は飲まなくてはね」
「やーだぁ。お薬苦いもん。飲みたくないよぉ」
「ちゃんと飲まないと、熱は下がらないだろう。とうさまたちを心配させないためにも、薬はきちんと飲んで、しっかり休んでおくれ？」

父の言葉に、アリサはむぅ、という顔はするものの、それ以上の反論はしなかった。
そして、父によってベッドに横にされ、毛布をきれいにかけられる。もう一度休め、と言うことらしい。
だが、アリサは一日中眠っていたからか、眠れないらしく、一向に眠ろうとしない。
横になって、きちんと毛布は羽織っているのだが、眠らないアリサに、兄たちは優しく声をかける。

「アリサ、眠れないのかい？」
「うん。だって、ずうっと眠ってたもの」
「でも、頑張って休みなさい、アリサ。そのほうが早く元気になれるからね」
「そうそう。ほら、僕たちに心配をかけないためにも、目を瞑って？」
「……はぁい」

兄と姉に続けて言われたアリサは、渋々ながらも、目を瞑った。
それから、アリサが眠りに落ちるまでは然程時間はかからなかった。

それを確認した父は、持ち帰ってきた仕事を済ませるべく、自らの書斎へ足を向ける。
父は、末娘が予想以上に元気にしていたことに、ひどく安堵していた。
アリサが熱を出すと、ひどい時は何日も寝込み、時には話す余裕もないほどに衰弱していることもあった。
それと比べると、この日の熱は、然程ひどいものとは言わず、元気なアリサを見れたことに、父は心から喜び、神に感謝していた。

そしてこの日の夕飯時、母はアリサにつき、子供たちは、父と共に、急いで夕飯を取っていた。
理由は、早くアリサの元へ行くためだ。兄弟たちは、アリサの食事を見守り、アリサが眠ってから夕飯を取るつもりだったのだが、それは、母に反対を受けた。
結果、母がアリサにつき、兄弟たちは父と共に食事を取ることになったのであった。

「アリサ、もう食べないなら、薬を飲みなさいね」
「お薬、苦いからヤだ」
「苦くても、飲みなさい」

母はそう言って、アリサの言う苦い薬を水に溶かしていく。それを見たアリサは、心の底から嫌そうな顔をするが、飲まないと言う選択肢はない。
母から薬の溶けた水の入ったカップを受け取ると、アリサは少し躊躇いながらも、一気に飲み干した。

「うえー、苦いー」
「はい、普通のお水」
「ありがとー、かあさま」

そして、受け取った水を、アリサは一気に飲み干した。それほどに、口の中に苦味が広がってしまっていたらしい。

そして、一気に飲み干したからか、依然として、口の中には苦味が広がっているようだ。舌を出して、少しでも苦味を薄めようと努力していた。

そんな愛娘に、母は、先に用意してもらっていたものを差し出す。それは――ホットミルクに蜂蜜とレモンの絞り汁を入れたものだった。

「ほら、甘いのを用意してもらったから飲みなさい。熱いから、気をつけるのよ？」

母が言い、カップを手渡すと同時に、今まで苦味で辛そうな表情をしていたアリサが、嬉しそうな表情をする。

そして、アリサは「あちっ」と言いながらも、口の苦味を消すために、甘い飲み物を口に含んでいくのであった。

そして翌日。どうしても仕事を休めなかった長兄、ルウィンを除き、全員が仕事を休み、アリサについているのであった。

示し合わせたわけでもないのに、休みの日程を合わせることになった兄弟は、目を合わせ、溜め息をついていたそうな。

必死の抵抗

翌日、ルウィンを除く子供たち全員が仕事を休み、最愛の末妹、アリサの部屋で、優しくアリサを見守り、看病をしていた。

その、肝心のアリサだが、この日は、昨日と比べて熱が上がったのか、兄弟たちの言葉に、何か返すことも億劫らしく、ただ、黙ってベッドに横たわっているか、眠っていた。

もちろん、食事もとろうとしなかった。食事のために体を起こすことすら億劫だったらしく、兄弟たちが食べさせようとしても、首を背け、一切食べなかった。

食事をとらなくては、薬は飲めない。薬を飲まないアリサの熱は下がることなく、アリサの苦しみは増すばかりだった。

「アリサ、少しでもいいから、食べて、薬を飲もう？」

「そのほうがアリサも楽になるから。ね？」

兄弟たちは、ベッドから起き上がることすら辛いらしいアリサに優しく告げるのだが、アリサは、悉く拒否した。完全に口を閉ざしたのだ。

そんなアリサの様子に、兄弟たちは揃ってため息をつく。そして、兄弟の一人が立ち上がり、部屋を立ち去る。

それから戻ってきたときは、横に、母が立っていた。末妹の説得を母に託したらしい。

「アリサ、一口だけでも、食べなさい」

いや。そう言うかのように、アリサは首を小さく横に振る。

兄弟たちは、妹のその反応だけで諦めるのだが、母は諦めなかった。続けて告げる。

「食べないと、薬が飲めないでしょう。アリサは、ずっと辛いままでいいの？」

いや。アリサは再び首を横に振った。

「なら、一口だけでも食べなさい」

いや。アリサは再び首を横に振る。そしてその瞬間、母の雷が落ちた。

「アーリーサ！　いい加減になさい！　わがままばっかり言わないの！」

がみがみがみがみ。母の、アリサへのお説教は続く。アリサは辛そうにしていても、それでも母の言葉を聞いていた。

そうしていると、不意に扉がノックされ、メイドが顔を出す。

「奥様、王宮医師の方が、お見えになられていますが、如何いたしましょう」

「王宮医師？　どうしてそんな方が、家に？」

「その方の仰ることによると、陛下がルウィン坊ちゃまとお約束なさっていたそうです」

母は、ならばと、医師をアリサの部屋へ通す。それと同時に、王宮医師の言葉に従い、侍医も呼び、アリサの部屋には、母や兄弟たち以外に、王宮医師と、侍医が揃った。

「では、失礼しますね、アリサお嬢様」

医師はそう言って、熱の辛さで何の反応も返せないアリサの服を捲くり、肌を露出させ、診察を始める。ドーリス公爵家の侍医にも話を聞きながら、診察を進めていった。

体力の尽きているアリサは一切の反応を見せないが、依然として、辛そうだった。

「やはり、熱が高すぎますね。……注射をしておきますか？」

これは、アリサではなく、母に言われた言葉なのだが、その言葉には、アリサが一番に反応した。

辛い呼吸の中で、必死に、声をあげる。

「注射、……いやっ！　アリサ、だいじょぶ、だもんっ！」

だが、母はにっこりと微笑み、アリサのその言葉を、――――完全に無視した。

「お願いします」

その瞬間、兄弟たちは固まり、アリサの表情は、泣きそうなそれになる。

王宮医師は、そんなアリサを見、苦笑しながら注射のために、腕を取る。アリサの目には、次々に涙が溜まり始めていた。

そして、医師が注射の支度をするために、一時的にアリサの腕を放すと、その瞬間、アリサは腕を毛布の中にしまう。僅かながらも、抵抗らしい。

そのアリサを再び絶望に突き落としたのは、公爵家の侍医であった。侍医は、苦笑しながらアリサの腕を毛布から出し、引っ込められないよう、押さえる。

「お嬢様、我慢していれば、すぐに終わりますから。下手に動くと、変な場所に針が刺さるかもしれませんから、大人しくしていてください」

「やーぁ……っ！　注射、いや、だもっ！」

アリサは、苦しそうに、それでも必死に抵抗の意思を見せる。が、その抵抗は、王宮医師が完全に打ち砕いた。

アリサは、医師が注射を見せた瞬間に、気を失ったのだ。兄弟たちは、注射がトラウマにならないだろうか、本気で思案していた。

だが、医師や母は、これ幸いと抵抗のないうちに注射をうち、そのままアリサを休ませておくことにした。

そして、王宮医師は、普段アリサが飲んでいる薬と一緒に使っても問題ない薬をリストアップし、処方していく。

「もし、食事をとれないほど弱っていたら、まず、これを飲ませて、それから少し時間を置いてからこの薬を飲ませてください」

王宮医師はそう言って錠剤を母に手渡し、ほかの薬は侍医の出したものをそのまま使うよう指示して、公爵家を出て行った。

その間、アリサは気を失ったままである。

そして、気がついたアリサは、知らないうちに注射をされていたことにひどくショックを受け、それからは医者を呼ぶと言うと、本気で嫌がるようになった。

同時に、注射をされることになった原因が、ルウィンが王と話をしたせいだと分かると、アリサは、ルウィンにはっきりこう告げた。

「ルゥにいさま、きらい」

それからアリサはしばらくの間、ルウィンと一切口を聞かず、話しかけられても無視し、ルウィンに多大な被害を与えたそうな。

そのせいで、ルウィンの仕事に、ますます熱が入らなくなり、宰相や王に叱られることになるのは、どうでもいい話である。

「とうさま、アリサも、そろそろお勉強したい」

にいさまも、ねえさまも、アリサの年の頃には、かてーきょーしに、お勉強教えてもらってたんでしょう？

アリサが言うと、父は、少し渋るような表情をする。そして、母に顔を向け、目で会話を始めた。どうすべきか、二人で考えているのだろう。

「アリサ、そのことは考えておく。今は、答えを返すのは出来ないからね」

「でも、勉強をしたいって言う心意気は、かあさま、いいと思うわ」

アリサの言葉に、両親は続けてそう告げた。だが、両親は本気で考えていた。――何故、今になって家庭教師や勉強と言う言葉が出てきたのだろうか、と。

以前も、アリサからは、何度か勉強がしたいという頼みはあった。だが、その度に、「アリサは体が弱いから、お勉強はもう少し大きくなってからにしようね」と言って、黙らせてきていたのだ。

そして、そのお願いが以前されたのは、そこまで前ではない。強いて言うならば、最近だ。

その短い期間に、アリサが何を考えたのか、本気で思案する両親であった。

「にいさま、ねえさま、ダメだったよ？」

「うーん、父さんと母さんなら、アリサの心からのお願いで受け入れると思ったのにな」

「まぁ、何かあったら私たちが少しずつ教えてあげるから」

アリサが両親に勉強を強請った理由は、彼女の兄と姉にあった。
アリサは、ずっと勉強がしたいと思っていたため、どうすれば両親（とうさまとかあさま）が勉強をさせてくれるか、兄たちに相談したのである。
もちろん、注射をする羽目になった原因であるルウィンを除いて。

あれから、ずいぶんと時が流れ、アリサの熱も下がり、元気になったのだが、アリサは依然として、兄を、ルウィンを許していなかった。

「ア……アリサ……」

ルウィンは、控えめにアリサに話しかけるのだが、アリサは、ルウィンが話しかけてくると同時に、ルウィンから目線をはずす。アリサの怒りは、まだ消えない。
そして、ほかの兄弟たちは、そんな兄の様子を、哀れむような目で見ていた。可愛そうに、兄さん。でも、自業自得だよね。
いろんな意味で腹黒い、ドーリス公爵家の子供たちであった。

だが、そんな腹黒い考えも、数日後には消え去った。理由は、兄が仕事中も呆けていて、文句が自分たちに飛んでくるからである。

「ジャスリーン殿、ルウィンに何があった？　呆けていて使えん。何とかならないのか？」
「セイン、カイン。君たちの兄に、何があったんだい？　さっき見かけたのだが、完全に茫然自失のような状態だったよ？」
「エルミナ。宰相様から、あなたの兄を正気に戻せる薬を作るよう、依頼があったんだけど……」

何とかする方法は、ある。薬を使わずとも、簡単に治す方法はある。

アリサがルウィンを許し、今までのように兄に懐いていればいい。そうすれば、兄は以前の、バリバリの仕事人である兄に戻る。

だが、――――どうすれば、アリサが兄を許すだろうか。

アリサは、心の底から、兄に、注射に対して、恨みを抱いている。そこまで深いものを、どうすれば治せようか。

そうして子供たちは、ルウィンとアリサを除き、ジャスリーンの部屋に集まり、何とかするための相談会を行うのであった。

「注射のことを、忘れさせられれば話は簡単なんだがね」

「あの子が、どうやったらそれを忘れるのさ？　根深く、覚えてるよ？」

「アリサに変な薬は使いたくないし」

セイン、ジャスリーン、エルミナが揃って話をする。カインは、ついていけず、置いてけぼりだ。

だが、三人はそんなカインに一切気がつくことなく。話は伯仲していった。

「というか、エルミナ。忘れさせる薬自体、あるのか？」

「あるっちゃあるけど、人によっては副作用出るから、アリサには使えないよ」

その答えを聞いたセインは、むぅ、と、頭を悩ませる。どうすれば、アリサが兄を許すだろうか。

その話し合いは、母が、ジャスリーンの部屋を訪ねるまで続いた。

「あら？　みんな、ここにいたの。もう遅いから、いい加減休みな

さい」

「休もうにも休めないよ、母さん」

「うん、この問題が解決しないと、眠れないね」

子供たちの言葉を聞いた母は、首を傾げる。子供たちがそこまで言うような問題とは、なんだろうかと。

「何があったのか、言って御覧なさい。何か、手伝えること、あるかもしれないわよ？」

母の言葉に、子供たちは笑みを浮かべ、そして、事情を話した。アリサが、兄を嫌っていること。兄が、その影響で仕事にかなり悪影響を及ぼしていること。そして、いろいろな場所で、その兄を何とかするよう頼まれたこと、などだ。

「……あの子ったら。いいわ、明日、かあさまが説得してあげるから」

「本当！？」

「ええ。だから、早く休みなさい。明日、寝坊しないようにね」

母の言葉に安心した子供たちは、それから、ぞろぞろと自分たちの部屋へ戻っていく。

これで、心から安心して眠れるだろう。そう考えた母は、アリサの部屋へ向かう。

気持ちよく眠っている娘の寝顔を眺め、そして、脱ぎ出てしまっている毛布をきれいにかけ、自身も寝室へ足を向けるのであった。

そして、翌日は、母による、娘の説得の時間となった。

兄想う一時

「アリサ、今、ルウィンを嫌っているんですって？」

その日、娘の部屋を訪れた母は、率直に話を切り出した。

理由は、昨夜子供たちから聞いた話で、長兄があまりにも不憫に感じたからだ。

アリサを思って取った行動だったというのに、逆に嫌われるなんて、不憫すぎる。今の母は、そんな思いに縛られていた。

だから、率直に話を切り出したのだ。

「どうして、ルウィンが嫌いなの？　かあさまにだけ、教えて？」

「だって、ルゥにいさまが、あのお医者様呼んだんでしょう？　アリサ、注射嫌いなのに……」

愛娘のその言葉に、母は、深いため息をつく。それだけで、ここまで怒って、根に持っているのかと。

そして、ほかの子供たちとの約束どおり、説得に励むことにした。

「アリサ、ルウィンだって、わざと注射をする先生を呼んだわけじゃないでしょう？　注射は、アリサの調子が悪かったからなんだから」

「でも、アリサ注射きらい。その原因のルゥにいさまも、いや」

全くもう、この子の頑固さは誰に似たのかしら。母は、アリサに聞こえないよう、小さく呟く。

私じゃないわよね、なら、あの人かしら。母は、アリサが何を考えているのだろう、と不思議そうに見守る中で、その考えに縛られ続けた。

ちなみに、アリサのその頑固さは、神埼有紗であった、前世からの継承物である。

それを知らない母は、ずっと、何が原因だったのか、真剣に考え続ける。だが、いつまで経っても答えは出ない。それも、当然ではあるが。

結果、考え込み、黙り込んだ母を、彼女の小さな愛娘は心配し、声をかけることになるのであった。

「かあさま、どうしたの？　だいじょうぶ？」

「え？　あぁ、ごめんね、アリサ。かあさまは大丈夫だからね」

「ほんとう？」

そう尋ねるアリサの瞳は潤んでいて、よっぽど耐性のある人でなくては、その目には勝てないであろうほどに、アリサのそのときの表情、目は、凶悪的であった。

本人は、全く意識せずにしていたが。

「本当に大丈夫だからね。アリサは気にしなくてもいいの」

心から心配しているらしいアリサに、母は大丈夫だと告げ、そして、話を元に戻す。何故、ルウィンをそこまで許さないのか、再度聞き出そうとしたのだ。

そして、アリサがルウィンを許すようならば、許した途端にルウィンの部屋へ連れて行き、謝らせようと考えていたのだ。

ルウィンは、この日、休みを取っていた。否。正確には、宰相命令で休まされていた。

宰相曰く、「元に戻るまで、仕事に復帰するな。元に戻ったら復

帰しろ」とのことで、今は、元に戻るどころか、おかしいままであるルウィンは、宰相命令に従い、休んでいたのだ。
もちろん、アリサはそんなことは知らない。今日は、全員きちんと仕事に行っていると、思っている。
さぁ、母の、説得の時間だ。

「アリサ、そろそろ、ルウィンを許してあげる気にならない？」
「いや。アリサ、ルゥにいさま、きらいだもん」
「どうしてそんなに、根に持つの？　アリサ」
「だって、注射きらい」

アリサの恨みの原因は、どこまで遡っても、注射にしか戻ることはないのであった。
それを聞いた母は、戦略を変えることにした。理由を知り、そこからアリサの考えを変えさせるつもりだったのを、どこまで行っても注射にしか行かないため、そこから、同情作戦に切り替えたのだ。

「そういえば、アリサ。ルウィンが、今城でどう言われてるか知っている？」
「ルゥにいさま？　知らない」
「あの子はね、今、腑抜けって言われてるのよ」
「にいさまが？　どうして？」

ちなみに、腑抜け云々は、母の考えた嘘である。だが、純粋素直な五歳児アリサは、母の言葉を、しっかりと信じている。

「どうしてって、それはアナタが一番分かっているでしょう？　あの子が腑抜けるのは、どんなとき？」

母に問われ、アリサは真剣に考える。だが、答えは出ないらしい。

――天然とは、かくも面倒なものか。

しばらく考え、答えが出ず、頭から湯気を出そうとしている娘に、母は淡く微笑みながら答えを教えてやる。

同時に、湯気の出そうなほどに熱い頭に手を置き、冷ましてやりながら。

「あの子が腑抜けるのはね、あなたに何かあったときよ。今回は、あなたに嫌われたのが、辛かったようね」

「……そうなの？」

「えぇ。――――ねぇ、アリサ。本当に、ルウィンが嫌い？」

母が問うと、アリサは、目に涙をため、首を横に振る。

「きらいじゃない。アリサ、ルゥにいさま、本当は好きだもん……」

そして、そんな末娘の言葉を聞いた母は、にっこりと微笑んだ。

そして、泣いているアリサの涙を拭い、抱きかかえる。

抱きかかえた娘としっかりと目を合わせた母は、にっこりと微笑んだままで、口を開く。

「アリサがルウィンのことを好きなら、謝りに行きましょうか。嫌いだなんて嘘だって、ごめんなさい、って」

「うん、行く。アリサ、ルゥにいさまにあやまる」

でも、にいさま、今仕事じゃないの？　尋ねるアリサに、母は微笑んだ表情を崩すことなく、答えを返した。

今日は、（強制的に）休みだと。それを聞いたアリサは微笑み、そのまま兄の部屋へ足を向けるのであった。

そして、ルウィンの部屋の前につくと、母はアリサをおろし、部屋の扉をノックする。

返事が聞こえると同時に扉を開く。すると、開いた瞬間に、アリサが兄の下へ駆け寄っていった。そして、飛びついた。

「ルゥにいさま、ごめんなさい。きらいなんてうそだから！　アリサ、ルゥにいさま大好き！　だから、にいさま、アリサのことをきらいにならないでぇ！！」

うえーん。兄に飛びつき、抱きついたアリサは泣きながらそう告げる。そんな愛妹の様子に、ルウィンは戸惑いながらも、それでも、また好きだと言われたことが嬉しかったらしい。微笑んでいた。

そして、泣き続ける妹を下に下ろし、目線をあわせ、にっこりと微笑みながら、告げる。

「アリサ、僕は、アリサのことを嫌いになんて、ならないよ。僕も、アリサのことは大好きだから」

そうして泣き続けるアリサと、嬉しさに微笑むルウィンを見ながら、母は、「手のかかる子供たちだこと」と思いつつも、微笑んでいた。

そしてその日、アリサとルウィンの仲直りを記念して、ルウィンとアリサを除く兄弟四人と、母による祝杯が挙げられたことを、アリサとルウィンは知らない。

そして、泣いた翌日の定番として、アリサは、熱を出したのであった。

災厄再び

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ルウィン

「先日はご迷惑をおかけしまして、大変申し訳ございませんでした、陛下、宰相閣下」
「もう、大丈夫なんですね？　宰相補佐殿」
「今度バカをやったら、父君に協力してもらうからな」

アリサが泣いて、謝罪をしてきた翌日、ルウィンは仕事に復帰し、まず、主である王と、自分の補佐すべき対象、宰相に謝罪の言葉をこぼしていた。

「先日は私情でご迷惑をおかけいたしましたこと、深く反省しております」
「いえいえ。末の妹姫からは、許していただけましたか？」
「はい。泣いて、謝罪をしてきました。おかげで、今日もまた寝込んでいますが」

なら、また王宮医師を派遣しますか？　にっこり笑ってそう告げる王に、ルウィンは遠慮の言葉を返す。何せ、今回、ルウィンがアリサに嫌いだと言われた原因は、王の派遣した王宮医師にあったのだから。

これで、仮に再度診察を受けさせ、再び注射をうつようなことになれば、恐らく、次はそう簡単には許してもらえないだろう。彼の妹は、恨みに関しては根深く持つタイプなのだ。

「遠慮しなくてもかまわないんですよ？　宰相補佐殿。王宮医師のほうが、妹姫の熱が引くのも早くなるでしょう？」

「いえ……」

ルウィンはそう言って、今回、自分が妹（アリサ）に嫌いだと言われることになった原因を、宰相と王に、簡単に話す。

そして、それを聞いた宰相と、王は声を揃えて笑い声を上げることになった。

「可愛らしい姫君ではないですか、宰相補佐殿」

「ククッ……。注射で根に持つあたり、まだまだ小さな姫君だな、ルウィンの末の妹姫は」

笑い事ではありませんよ。ルウィンは、真剣な表情で、続ける。

「大体、小さいのは当たり前です。アリサは、まだ五歳ですよ？」

「おっと、まだそんなに小さかったか」

「五歳とは、可愛い盛りでしょう」

それはそれは可愛いですとも。ルウィンが力強く言うと、またも、王と宰相の口からは、笑い声が零れる。

今回の笑いは、ルウィンのシスコンぶりへの笑いらしい。

だが、シスコンに関しては、ルウィンもひどいが、ほかの兄弟も同様にひどいことは、王は知っていても、宰相は知らない。

宰相は、後に実際自らの目で見て確認することとなり、本気で、ドーリス公爵家の行く末について、思案したそうである。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

この日のアリサは、先日、兄（ルウィン）に泣いて謝罪をしたことが原因の一端となり、現在、熱を出して寝込んでいた。

しかも、今回の熱は最初から思いの外高く、侍医も、早い段階で、

強い薬を使う方法を、選択した。

そして、熱を出したアリサは、何度も何度も、魘されては泣いて目を覚まし、その場にいる母に宥められ、そしてもう一度眠り、そしてまた魘され、泣いて目を覚ますと言う、あってほしくない無限ループにはまり込んでいた。

眠らなくては、熱は下がらない。だが、眠ると魘され、大泣きし、目を覚ましたときにはまた、熱が上がっている。

そんな状態の繰り返しに、母も、どうすればいいのか分からなくなっていた。

寝かせたほうがいいのか、魘されることを避けるためには、起こしておいたほうがいいのか。

「こちらからお呼び立てして、本当に申し訳ございません」

「いえいえ。陛下からは、ルウィン殿から頼みがあったときは、よっぽどのことがない限り、行くよう命じられておりますから、お気になさらず」

それは、侍医に相談しても解決せず、結果として、王宮医師を呼び、見てもらう方向に走ったのであった。

「寝るたびに、魘されて目を覚ます？」

「えぇ。本当に、眠るたびに魘されるので、寝かせるべきか、魘されないよう、起こしておくべきか、悩んでしまいまして……」

「……失礼」

王宮医師はそう言うと、何とか起きたままのアリサの元へ向かい、質問を始めた。

熱が高いせいで頭が良く回っていないであろうアリサは、答えに少し時間がかかりはするが、それでも、医師の質問に、少しずつ答

えていった。

そして、アリサの診察を終えた医師の判断は、結局、注射を使って熱を下げることであった。

が、前回のアリサの嫌がりようを覚えている医者としては、その方法には、若干の抵抗があった。結果として。

「お嬢様、これから何度も怖い夢を見て、泣いて目を覚ますのと、注射をうって、嫌な夢を見なくなるの、どちらがいいですか？」

「ちゅうしゃ……、いやぁ……」

「なら、嫌な夢を見ますか？　注射が一番早く熱が下がるんですよ」

医者は、アリサに決断を迫る。嫌がるのを無理やりするよりは、同意を得た上でするほうが、医者としても、気分がいいからだろう。

なかなか決断を下さないアリサに、医者は、ふと思い出したのか、もう一つの方法を提案した。但し、それは、基本的に子供だろうが大人だろうが、よっぽどではない限り、絶対にイヤと言う方法ではあったが。

「……それとも、座薬にしますか？」

「……ザヤクって、何？」

「座薬というのはですね……」

そして、やはり座薬を知らなかったアリサに、医者は、簡単に説明をする。

それを聞いたアリサは、本気で嫌そうな表情を見せた。それは、注射のことを話したとき以上に嫌そうな顔で、注射と座薬どちらを選ぶかと問われると、間違いなく注射を選ぶだろうと想像が出来るほどに、両者の反応の差は、歴然だった。

「どちらにしますか？」

医師は、アリサがどちらを選ぶか、大体想像をつけた上で、問う。

そしてアリサは、医者の予想通り、注射を選び、注射の最中に動かないよう、そばで見守っていた父や母に抑えられ、注射を打たれ、何とか魘されないようになったのであった。

安堵の心（前書き）

すいません。
本日二度目の更新です。

安堵の心

ルウィンが王に頼み、王宮医師をドーリス公爵家に呼んで数日後、アリサの熱は大体下がり、あとは微熱が完全に下がるのを待つだけとなっていた。

そして、今回は、アリサがルウィンを嫌いとは言わなかったため、ルウィンは心の底から喜んでいた。

彼は、両親から、アリサが注射をうってもらって、大分熱が下がってきている、と聞いたとき、また自分は嫌われるのだろうかと、怯えていたのだ。

故に、王宮医師が公爵家に来た日、家に帰って来たルウィンは、アリサから嫌いという言葉を聞かされるかもしれない、と思いつつ、アリサの部屋を訪れていた。

だが、アリサから向けられた言葉は、純粋なまでな思慕の心。熱で辛いだろうに、アリサはいつものように微笑み、彼に声をかけた。

「おかえり……なさい、ルゥにいさま」

その言葉が、どれだけ彼を喜ばせただろう。

その一言で、彼はどれだけ救われただろう。

嫌われていない。そう思えることが、どれだけ幸せなことか、アリサは、ルウィンに教えることとなった。

今回の注射の件は、アリサは、医師を恨んでなどいなかった。それが、仕方のないことだと、割り切っていたから。

注射は嫌でも、仕方のないことならば、抗っても、恨んでも何も変わらない。だから、アリサは恨むこともなく、ただただ、熱を下げることに集中していたのだ。

――――座薬が嫌だったと言うこともあるが。

ただ、これはアリサは知らないことだが、医師は、母に、「また熱が高くなるようでしたら、お嬢様が眠っているときにでも、この座薬を使用してください」と言って、渡していたのだ。

今回は、使用されることはなかったが、次に高熱を発したときは、アリサの知らないうちに座薬を使われていた、と言うこともあるだろう。

仮に、使われていることがアリサにバレれば、またも、ルウィンはアリサに嫌われかねない。よって、彼は母に、「使うときは、絶対にアリサに知られないように使ってくれ」と頼んでいるのであった。

バレたらその瞬間、アリサの嫌いな人ランキング一位は、間違いなくルウィンになることは、確実である。

そして、数日間寝込み、元気になったアリサは、いつものように、仕事から帰って来た兄弟たちと戯れ、可愛がられ、遊ばれたりしているのであった。

「ほら、アリサ。今日、街に出たときに見つけたんだよ。アリサに似合うと思って買ってきた」

「うわぁ、きれいなリボン。ありがとう、ミアねえさま」

エルミナが買ってきたリボンを見たアリサは、嬉しそうな顔をし、声を出す。そんな妹を見たエルミナは、買ってきたリボンで、アリサの髪を結ぶ。

そして、結んだ後は先に持ってきておいた鏡をアリサに見せる。自分の買ったリボンがアリサに良く見えるよう、角度をしっかりと調整したうえで。

「ほら、アリサ、似合ってるよ」

「ほんとう？　にいさまたちも、そう思う？」
「あぁ、よく似合ってる。エルミナ、いいのを選んだな」
ルウィンや、ジャスリーン、セイン、カインは、揃って親指を上に突き上げる。そして、その目は、こう語っていた。”Ｇｏｏｄ Ｊｏｂ！”と。
大好きな兄たちにもほめられたアリサは、そんな兄たちの様子には一切気づかずに喜びを隠せずにいたが。
「ミアねえさま、大好き」
但し、兄たちがエルミナにそうした目を向けるのは、アリサがそう言って、エルミナに抱きつくまでだった。その瞬間、先ほどまでは賞賛の眼差しだった目からは、嫉妬の炎が見え隠れしだしている。
翌日から、兄弟たちは全員がアリサの好きそうなものを買ってきて、あまりにもお土産が溜まったアリサが母に相談し、母が子供たちに雷を落とすまで、そのお土産合戦は続いたそうな。
だが、結局、一番喜ばれたのは、最初に買ってきたエルミナのリボンだったりする。
「アリサ、ねえさまのくれたリボン、だぁいすき」
アリサが、数々のお土産を広げた前でそういった瞬間、エルミナは喜び、ほかの兄弟は一様にして、しょぼーんとしていたそうな。
――さもありなん。
但し、それも一時のこと。ある日、父が、お土産にカチューシャを買ってくると、アリサのお気に入りはそのリボンからカチューシャに変わり、エルミナを悲しませ、父を喜ばせた。

父は、「そんなに喜んでもらえると、とうさま嬉しいよ」と、相好を崩し、同時に子供たちは、「もっとアリサの気に入るものを探さなくては」と、心意気を新たにさせた。

無論、兄弟たちの心意気を、アリサが知る日は、来ない。

「アリサ、ほら、可愛いぬいぐるみを買ってきたよ。一緒に寝るといいよ」
「かわいいー。ありがとう、リンねえさま」
「アリサ、僕の買ってきたこれも使って」
「……ルゥにいさま、これ、なぁに？」
「兄さんのはアリサにはまだ難しいよ。僕のは気に入ってくれるよね？　アリサ。本を買ってきたよ。今度読んであげようね」
「ほんとう？　ありがとう、セイにいさま」
「え？　セインにぃも本？　僕も本買ってきたのに。ま、いっか。アリサ、僕も今度読んで聞かせてあげるからね」
「うん！　やくそくだよ、カイにいさま」
「私はこの間のリボンの色違いを買ってきた。このぬいぐるみに、つけておく？　そしたら、ぬいぐるみとアリサ、お揃いだね」
「うわぁい。ミアねえさま、だぁいすき」

そうして再び白熱したアリサの好きそうなお土産合戦は、母からの雷が再度、以前より激しくなって落ちてくるまで、行われたと言う。

ちなみに、このバトルには途中から父も参戦し、父も同様に母に叱られたそうな。オマケに、父は、子供たちと一緒に怒られたのみならず、寝室で、父個人だけでも叱られたそうな。

もちろん、そんなことも。アリサは全く知らない。兄弟たちも、父も、母も同様に、アリサに知られないよう画策していたのだから。

初めての外出

この日、アリサのわがままが、父や母、兄弟たちを襲っていた。

「とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。アリサ、お庭以外のお外、行ってみたい」

その言葉を聞いた家族は、皆揃って硬直する。理由は、外に出たアリサに襲い掛かる、危険の数々を考えていたからだ。

アリサは、停止している家族の様子を、不思議そうに、眺める。何を考えているのだろう、大丈夫なのだろうか。アリサの頭の中は、そんな考えに縛られ始めていた。

結果、耐えられなくなったらしいアリサは、横に座る母の服をちょいちょいっと引き、自分に関心を向けさせる。

「あ、ごめんなさい、アリサ。考え事をしていたわ……」

「うん。……で、ダメ？」

アリサは、母が正気に戻ると同時に同じく正気に戻った家族に向けて、目を潤ませ、尋ねる。その目に、家族はたじろいだ。

これは、ダメだというと、間違いなく、泣く。全員がそう実感した瞬間だった。

結果。

「アリサ、明日、僕が休み取るから、一緒に出かけようか」

セインが、アリサのその目に負けた。

「アリサ！　僕も休むから、僕も一緒に行くよ！　セインにぃだけ

じゃ、頼りない！」

セインの言葉に、カインが続く。その二人の言葉に、父は、「騎士である二人がついていれば、危険は薄いだろう」そう考え、許可を出した。

但し、「アリサに何かあったら、どうなるか、考えた上で行動するんだぞ？」と、脅しをかけた上でだが。

ちなみに、脅しをかけたのは父のみではない。休むことが出来ないルウィンやジャスリーン、エルミナも、父同様、脅しをかけていた。

「アリサに何かあったら、宰相補佐権限で、お前等、クビ」

「ま、そのときは、私が図書室で呪いの本でも探してあげるから」

「私は、今作ってる薬の実験体にしてあげるから」

三人とも、なかなか怖いことを考えている。一番怖いのは、エルミナだろうが。薬の実験体って、一体何の薬だ。セインとカインは、心の中で、同時にそう突っ込んだそうな。

もちろん、そんな会話は、喜びに打ちひしがれているアリサには、聞こえていない。この末娘大好きな家族が、そんな危ない会話を聞かせることなど、絶対にありえなかった。

そして翌日。初めて庭以外の外に出るアリサは、母の手によって、きっちりと外用の服に着替えさせられ、リビングで、兄たちの準備が完了するのを待っていた。その目は、キラキラと輝いている。

それから数分後、騎士の正装ではなく、動きやすい服を着て現れたセインとカインは、腰に剣を下げ、アリサに害を成すものには手加減しないと、オーラが語っていた。

母は、そんな二人に恐れることなく近寄り、アリサに聞こえないよう、小さな声で、二人に告げる。

「アリサに何かあったら、分かってるわね？」

あなたたちも、無事ではいられないんですからね？　母は、目で、その言葉を告げた。

母のその言葉に、セインとカインは、こくこくと、頷く。それほどに、母は怖かった。

それから、嬉しそうに微笑んだまま、兄たちの用意がまだかまだかとそわそわしながら待っているアリサに、セインたちは微笑みながら近寄り、手を取る。

そうして外に出ると、そこには馬車が待っていた。高くて自力で馬車に乗り込めないアリサに、カインがアリサを持ち上げ、馬車に乗せる。

そして、セインがアリサに続いて馬車に乗り込み、馬車は動き出した。――カインを乗せることなく。

「カイにいさまは？」

カインを乗せることなく動き出した馬車に、アリサはセインに尋ねる。そんなアリサの質問に、セインはいやーな笑みを浮かべた。

……アリサが不安になる笑みを。

だが、アリサが本気で不安がっていることに気がついたセインは、すぐにその表情を消して、答えを返してやる。

「カインは、外で馬に乗ってるよ。もし、変な人が襲ってきたとき、二人とも馬車の中だと、アリサを守れないからね」

「……そうなの？」

「うん。中から外に出るときに、何かあって、変なのが馬車に入ってきたら、アリサが被害に遭っちゃうだろう？　まぁ、そんなバカ

は、僕が倒すんだけど」

セインのその言葉に、アリサはおぉ、という顔をする。……セインが最後に呟いた言葉を聞いていなかったが故に、出来る表情だろうが。

そうしてしばらく走ると、馬車は街に着く。そして、そこには、いるべきでない人が、彼らの兄、ルウィンと共に立っていた。

「どうして、こんなところにいらっしゃるんですか、陛下！」

その姿を確認したカインは、急いで馬から下り、跪き、臣下の礼を取る。そして、そんなカインの声が聞こえたのか、セインも急いで馬車から降りて、カイン同様、臣下の礼を取った。

「あぁ、セイン殿も、カイン殿も、妹姫が馬車にいらっしゃるのでしょう？　お守りして差し上げてください」

あぁ、でも、私も一目くらいは、ドーリス公爵家の噂の姫君のご尊顔を拝したいですねぇ。

王が言うと、その瞬間に、セインとカインは馬車へ走り、アリサを宥め、馬車から降ろす。

「アリサ、この方は、この国の王であらせられる方だ」

「ほら、陛下にご挨拶して」

「あ、アリサ、です。よろしくお願いします、へーか」

陛下と言う言葉の意味が分からず、とりあえず言ってみる。そんな様子のアリサに、ルウィンやセイン、カインはおろか、王すらも微笑ましげに眺める。

そして、王は、アリサと目線を合わせるために、しゃがんだ。その瞬間、兄たちが静止の声をかけるのだが、それを黙らせた。

「初めまして、ドーリス公爵家の末のお姫様。私は、この国の王です。普段は陛下と呼ばれているが、言い辛いようだから、名前で呼んでくれると嬉しいですね」

王は、そう言って自らのファーストネームをアリサに告げる。それを聞いたアリサは、小さな声で、告げた。

「ジェームズ、さま？」

「うん。君は本当に可愛いですね。君の兄君たちが、君に執着する理由がよく分かりますよ」

王の言葉に、首を傾げ、執着の意味を尋ねるかどうか考えていたアリサだったが、それは、ルウィンが止めた。

「陛下、もうよろしいでしょう。城に戻りましょう。まだ、執務は終わっていないんですから」

「宰相補佐殿は厳しいですねぇ。分かりました、戻りましょう。では、姫君。またいつか会えることを祈っていますよ」

「いいから戻りますよ、陛下。僕たちの可愛いアリサに、変な毒を蒔かないで頂きたい！」

「本当に宰相補佐殿は厳しくていらっしゃる。毒なんて、蒔いてなどいないではありませんか」

「無意識に蒔いていらっしゃるんです！　僕たちのアリサが考えすぎで、熱を出したらどう責任を取ってくださるんですか」

アリサは、そんな言い合いを続けながら城へ戻る兄と王と、本気で、王の言った言葉を考えながら、見送る。

そして翌日。ルウィンの言ったように、アリサは考えすぎで、熱を出した。

このことで、ルウィンが王を責めたのは、最早、説明するまでもない。

オマケに、これに関しては、宰相すらもルウィンの味方と化し、王を責めたため、王は、じきじきに謝罪の文を認め、王宮医師の派遣と共に、言付けたのであった。

外出の対価

「熱いー、毛布いやぁー」

初めて外出をした翌日、アリサは、王の言葉の意味を考えすぎたせいか、再び高熱を発していた。

熱いと言いながら毛布を剥ぎ取ろうとするアリサ。だが、そばで看病をする母は、それを許さない。アリサが毛布を脱ぐと、すぐにまた着せ、脱ぐと着せるを繰り返していた。

「きちんと着ていないと、治るものも治らないでしょう？　熱くても、きちんと着ていなさい」

「だって、熱いよぉ」

「熱いからって毛布を着ずにいたら、熱が上がるでしょう。熱が上がったら、また注射か、座薬よ？　いいの？」

「いやっ！」

母は、アリサに言い聞かせるための方法を、しっかりと持っていた。アリサの嫌がることを方法として、しっかりと毛布を着させる。

そして、熱い熱い言いながらも、注射や座薬の使用だけは避けたいアリサは、しっかりと毛布を肩まで掛ける。

すると、突然アリサの視界は、真っ暗になった。何故か。母が、アリサの額に、濡れタオルを置いたからだ。その際、タオルが目元にまでかかり、アリサの視界は奪われたのである。

「ほら、眠たいでしょう？　早く元気になるためにも、休みなさい」

「ん……」

「いい子ね。ゆっくり休みなさい」

そうして、アリサは夢の世界へと旅立った。そして、アリサは夢を見た。

それは、前世。

彼女は、ドーリス公爵家の末娘、アリサではなく、神埼有紗という、どこにでもいる、普通の少女だった。

彼女は、普通の人生を、普通に楽しんでいた。――――十歳までは。

彼女が十歳の誕生日を迎えた日、彼女は家族でドライブを楽しんでいた。

いつもより少し遠くにお出かけをして、誕生日プレゼントに彼女が欲しかったものを買ってもらい、幸せだった。

なのに。なのに、その日の帰り、彼女は家族と一緒に、事故にあった。

両親は、彼女を庇って命を落とし、彼女だけが、生き延びた。

何故、一緒に連れて逝ってくれなかった。何故、自分だけ残した。

目を覚ました病院で、両親の訃報を聞かされた少女は、何度も死のうとした。両親の元へ、逝こうとした。

でも、死ねなかった。何度死のうとしても、場所が病院である以上、すぐに処置がなされ、彼女は生き延びた。

それからしばらくして、彼女の前に、後の両親となる人が現れる。

それは、彼女の母の妹で、彼女も、何度か会ったことのある人だった。

「有紗ちゃん。一緒に、暮らそう？　姉さんの代わりにはなれないけど、叔母さんの家の子になって？」

それを聞いた彼女は、泣きじゃくり、叔母にしがみついた。一人じゃないことに安堵し、ただただ、泣いた。

「有紗ちゃん、彼は、私の旦那。有紗ちゃんのお父さんになる人ね」

「……よろしく」

彼女の父となる人は、仏頂面ではあったが、優しい人でもあった。思いがあまり顔に出ず、分かりづらい人ではあったが、それでも、彼は有紗を娘として愛していた。

学校で両親が実の両親ではないことでいじめてくる人がいると、有紗から話を聞けば、「そんな学校、行かなくていい」と、いつものように仏頂面で告げ、そして、有紗が学校へ行っていない日に、学校へ抗議に向かった。

いじめていた子が教師に叱られ、いじめがなくなっても、それでも怖いから学校に行きたくないと有紗が告げれば、「有紗の好きなようにすればいい。勉強は、教えてやる」と、やはり仏頂面で告げていた。

だが、いつだってそうして甘やかしてばかりではなかった。叱るときは徹底的に叱り、有紗を泣かせてでも、とにかく反省させていた。彼は、彼なりに、有紗の父になろうとしていた。

だから、有紗も、血の繋がらない父である彼を、愛していた。本当の親のように、慕っていた。

そんな日が、ずっと、続いていけると思っていたのに。

――車のライトが、目の前で光る。
――避けきれない位置で、車が急ブレーキを踏んでいる音をたてながら、近寄ってくる。
――車体が、彼女の体に触れる。
――――そして、彼女は吹き飛ばされた。

「アリサ！　アリサ、どうしたの！？」
『嫌だ死にたくない助けて叔父さん！　死にたくない！　助けて叔母さん！』

麗されているアリサを母が起こすと、アリサはこの世界の言葉ではない言葉で、何かを叫ぶ。それは、必死で、何かを求めているようだった。

「アリサ、どうしたの？　大丈夫よ」
『やだやだ！　死にたくない！　連れて行こうとしないでぇっ！　お父さん、お母さん！　私はまだ生きたいんだよっ！』

必死で叫び続けるアリサを、母は、優しく抱きしめる。大丈夫だと伝わるように、アリサに、安心を与えるために。

「怖い夢を見たの？　アリサ。もう大丈夫だからね。かあさまがいるから」
「か……あさま？」

そうして抱きしめていると、ようやく聞き覚えのある言葉が聞こ

えてくる。母がアリサから少し離れ、顔を見てみると、さっきまでは合っていなかった焦点が、しっかりと合っていた。

「怖い夢を見たのね、アリサ。でも、大丈夫。それは、夢だからね」

「ゆめ……？」

「えぇ、夢よ。だから、安心して、もう一度休みましょうね」

「やだ。……こわい」

「大丈夫。かあさまがそばについていてあげるからね」

母が優しく告げると、アリサはようやく眠る気になったのか、目を瞑る。そんな愛娘の額を、母は、安心できるよう、撫で続けていた。アリサが健やかな寝息をたてるまで、ずっと。

そうしてアリサが眠って、母は考える。この子は、一体どんな夢を見ていたのか。あの時叫んだあの言葉は、一体なんだったのか。

彼女の生家も貴族であったため、彼女も大体の教養はある。その中で、この国以外の言語にも学び、彼女は、言語に関しては、かなり詳しいほうのはずだった。

そんな母でも、先ほどアリサが叫んだ言葉は、耳覚えのないものだった。発音も、その言葉自体も、何もかもが、母には分からないものだった。

この子には、一体どんな不思議が隠されているのだろうか。親として知りたいような、知らないほうがいいような、複雑な気分に、母は襲われていた。

そしてその日の晩、大分熱が下がり、楽そうになったアリサを横に、父にこの日のアリサのことを話し、相談する母の姿が見受けられたそうな。

喪失の恐怖

何故、この子までもが。有紗の事故の連絡を受けた叔母であり、今は母親である彼女は、心からそう思った。

姉夫婦を事故で失い、今現在、その姉夫婦の忘れ形見であり、自分たち夫婦の子となった姪までも、交通事故で失いたくない。彼女はそう思いながら、知らされた病院へ向かう。

「加奈、こっちは用意できた。行くかい？」

「うん、行こう、たっちゃん」

彼女は、急いで出発の支度をし、夫である達也と共に、車に乗り込み、病院へ向かう。

彼女たちが病院に着いたとき、有紗はまだ処置中で、ずっと、危ない状態が続いていた。

「大丈夫だ。あの子は、強い」

「分かってる。……分かってるけど、怖いの」

姉さんたちが、あの子を連れて行っちゃいそうで。彼女の言葉に、達也は彼女をきつく抱きしめる。そして、祈る。神に、有紗の本当の両親に。

『あの子を、連れて行かないでください』

あの子は、僕たちがずっと守っていきます、育てていきます。だから、僕たちから、あの子を奪わないでください。加奈を、まだ絶望の淵に追い込もうとしないでください。

達也は、心からそう祈る。有紗の無事を、加奈から、失う怖さを

奪うことを。

「神崎さんの、ご両親ですか？」

そうしていると、警察らしき人間が、彼女たちのそばへやって来る。今は反応が出来ない妻の代わりに、達也が返事を返した。

「そうですが、何か」

「いえ、一応、状況の説明をさせていただこうかと思いまして。お時間、大丈夫でしょうか？」

「今は、遠慮させていただけませんか？　せめて、あの子の無事が、分かるまでは」

「……そうですね。失礼いたしました」

それから、どのくらいのときが流れたのだろう。彼も、彼女も、時間の感覚が分からなくなるほど、ずっと、手術室の前に置かれた椅子に座り込んでいた。

どれだけ時間が流れても、有紗のいる手術室の扉は開かれない。その時間の長さが、どれだけひどい状態なのか、嫌でも彼らに知らせることになる。

そこで響く音は時計の針の音だけで、それが、更に時間間隔を麻痺させた。どれだけ時間が経ったのか分からないまま、彼らはそこに座りつくす。

そして、ようやく、手術室の扉が開かれた。彼も、彼女も、一目散に医者の元へ向かう。

「先生！　娘は！？」

「一命は、取り留めました。詳しい説明は、後ほど。今は、娘さんについていてあげてください」

そう言われ、医者の目線の先に目を向けると、そこには包帯でぐるぐる巻きになった有紗が横たわっていた。

その包帯が、傷のひどさを物語り、体中に繋がれたコード類が、彼女の命の危険性を、激しく語っていた。

――でも、生きている。そのことが、救いだった。どれだけひどい怪我でも、有紗は、生きている。

だが、その喜びも、医者からの説明を受けるまでだった。

「娘さんは、今後一生、意識が戻らないかもしれません。現状では、生命維持装置を使って何とか、命をつないでいる状態です」

一生、意識が戻らない。それは、生きていながら、死んでいるようなもの。それでは、二度と、あの子の声は聞けない。あの子の笑った顔は見れない。

その言葉が、彼女に、加奈に、かなりのダメージを与えた。

「う……そよ。あの子は、目を覚ます。絶対に、目を覚ますの！姉さんたちみたいに、失ってたまるものですかっ！」

そしてその日から、彼女は、有紗の意識を戻すために、いろいろなことをやった。有紗の怪我の様子を見ながら、出来る範囲でやれることをやっていった。

しばらくはそんな妻を傍観していた達也も、一月も経つころには、一緒に有紗の意識を戻すために、奮闘するようになった。

だが、一年経っても、有紗の目が開かれることはない。

事故から早一年もの年月が流れ、有紗は十六歳になっていた。だが、依然として、有紗は眠りっぱなしだった。

事故のときの怪我も殆ど治り、包帯が巻かれている場所など、一箇所としてなかったとしても、有紗は目を覚まそうとしなかった。

それでも、彼も、彼女も、諦めなかった。一年くらいで何とか出来るとは思っていなかったらしい。まだ時間をかけ、ゆっくりと起こそうと考えていた。

二年の月日が流れた。依然として、有紗は目を覚まさない。

それでも、彼らは頑張り続けた。西でいい方法を聞けば、それを試し、東にいい方法があると聞けば、東へ駆けて行き方法を聞いて、試したりしていた。

三年経った。まだ、有紗は目を覚ます気配を見せない。

この頃になると、起こそうと頑張ってはいても、少しずつ、諦めの色が見えるようになり始めていた。

四年経った。有紗の体が、少しずつ限界を訴えるようになり始めていた。

それでも、まだ有紗は生き続けた。眠りっぱなしでも、それでも、生きていた。

五年経った。ついに、有紗の体に限界が訪れた。

ある日、有紗の生命維持装置が、警告の声を上げた。駆けつけた医者が診てみると、有紗の呼吸は既に停止し、心臓も、止まりかけていた。

医師が必死で命を繋げようと努力するのだが、その努力は、無駄に終わろうとしていた。——有紗の心臓は、止まった。

「心臓マッサージだ！　早く！」
「はいっ！」

医師たちは、有紗を蘇生させようと、頑張る。だが、それを、彼女たちが止めた。

「もう、楽にしてあげてください。有紗を、本当の両親の元へ、逝かせてあげてください」

泣きながら告げる有紗の母の言葉に、医者は手を止めた。そして、――有紗の心臓は、完全にその鼓動を止めた。

片羽の喪失

「アリサ。神埼有紗は、死んだよ」

魘されて目を覚まし、その後、再び眠ったアリサの夢で、あの日、有紗に生きたままの転生を促した青年は、静かに告げる。

それに、アリサは目を真ん丸にする。そして、静かに、尋ねた。

「叔父さんと叔母さん、悲しんでた？」

「あぁ、とても、悲しんでいたよ。守ってあげられなくてごめん、と、葬儀で言っていたな」

そう言えば、私が叔母さんの家の子になったばかりの頃、何度も何度も、「有紗ちゃんは叔母さんが守ったげる」って、言われてたっけ。アリサは、のんびりとそう考える。

あれは、叔母さんのせいじゃないのに。同時に、そうも考えた。

あの事故は、アリサの叔母には全く責任などなかった。アリサが外出したのが夜だったとしても、まだ六時半くらいで、大して暗くはなかった。

だから、叔母も「気をつけて行って来るのよ」とだけ告げ、アリサも「分かってるよー」と返して、外出した。

それが、叔母とアリサの、最後の会話となった。

「叔母さん、悪くないのになぁ」

アリサは、視界を滲ませる原因である涙を、服の袖で拭いながら告げる。その声は、泣くのを我慢していると、すぐに分かる。

だから、青年はアリサを抱き寄せ、告げた。

「我慢するな。泣きたいんだろう？　泣けばいい、思い切りな」

「……でもっ」

「気にするな。泣け。どうせ、これは夢だ」

その言葉が、アリサの涙腺をくすぐった。アリサは、思い切り泣き出した。青年の胸を借りて、盛大に泣いた。

「叔母さんにあんな言葉、言わせたくなかったよ！　死にたくなんて、なかったよ！　事故なんて、二度と遭いたくなかったよ！」

アリサは泣き続ける。そんなアリサを、青年は優しく抱きしめ続けた。

僅か十歳で、事故で両親を亡くし、その五年後、再び事故に遭い、遠くない未来に、命を落とす運命（さだめ）だった少女。

それをかわいそうだと思ったから、彼は、彼女が死ぬ前に、転生するかどうか、選択肢を与えた。まだ死んでいない魂を、転生させるという荒業をやってのけた。

本来、やるべきではない荒業。否、かつて、どの神ですらもしたことのない荒業。彼女のためだからこそ、彼は、やってのけた。

一つの魂で二つの体を共有するが故に、病弱な肉体になり、そして、本来の肉体の衰弱スピードは速くなることは分かっていたが、それでも、彼は、アリサに人生の楽しさを知ってもらいたいが故に、転生させた。

そんな、自分の行動を、彼は少しずつ、後悔し始めていた。

――自分が転生させなければ、彼女は、いつか目を覚ましたかも

しれない。
――そうやって目を覚ましていれば、優しい叔父叔母の元、人生を楽しめていたかもしれない。
――彼女ならば、運命を自力で変えることが出来たかもしれない。
――ならば、今、彼女がここで泣いているのは、自分が悪いんだ。

「ごめんね、アリサ」
「へ？　なんで、おにーさん、あやまるっ、の？」

彼が、アリサに素直に謝罪の言葉を告げると、アリサはわけの分からないと言った顔で、何故謝るのか、彼に尋ねる。
彼は、アリサとしっかりと目線を合わせて、先ほど謝った理由を告げた。

「僕が、君を転生させなければ、君は自力で運命を変えていたかもしれない。こうして、今泣いていなかったかもしれない」

だから、君が今泣いているのは、僕のせいなんだよ。彼は、自虐的に微笑みながら、アリサに告げる。

「違う！　お兄さんが転生させてくれなかったら、私は、にいさまたちに会えなかった！　お兄さんが転生させてくれたから、私はにいさまやねえさま、とうさま、かあさまに会えたんだよっ！」

だから、謝らないで！　アリサの言葉に、彼は優しく微笑み、アリサをぎゅっと抱きしめた。
自分が転生をさせたが故に、以前会ったときと比べ、格段に小さくなっている少女。そんな小さな少女を、彼は壊さないよう、慎重に抱きしめた。
そして、耳元で小さく呟く。「ありがとう」と。

「さぁ、もうお戻り？　君は、神埼有紗であって、そうではない。君は、ドーリス公爵家の末っ子のアリサだ。……楽しい人生を送りなよ、アリサ」

彼のその言葉をＢＧＭに、アリサの意識は少しずつ薄れていく。そして、聞き覚えのある声が、アリサの耳に届く。それは誰の声だっただろう。少し考えて、答えが出た。この声は。

「おかえりなさい、にいさま、ねえさま」
「ア……リサ？」
「魘されてたから起こしたんだけど、大丈夫なのかな？」

その声の持ち主は、彼女の愛する兄弟たちの声だった。アリサが魘されていたため、起こそうと、声を掛けていたらしい。

「だいじょぶです。心配させて、ごめんなさい」
「あぁ、謝らなくていいよ、アリサ。大丈夫なら、よかった」

アリサの兄弟たちは、そう言って、アリサの額に手を置く。そして、優しく微笑んだ。

「大分熱は下がってるみたいだね。よかったね、アリサ」

有紗の大切なものは、叔父と叔母。
アリサの大切なものは、彼女を心から愛しいと言ってくれる、家族。

この日、アリサは、神埼有紗から、アリサ・クライシス・ドーリ

スとなった。

陽射しと共に

夢で、たっぷり泣いて目を覚ますと、そこには、目を真っ赤に染めたかあさまやねえさまたちがいて、横には、泣きそうだが、泣くのを我慢しているとうさまやにいさまの姿が見えた。

「よかった……アリサ」
「心配したんですから……」

とうさまもかあさまも、そう言って私を抱きしめるが、どうして、そこまで心配するのだろう。私が熱を出して寝込むことなんて、いつものことじゃないか。

なのに、どうして、そんなに目を真っ赤に染めているの？　泣くのを我慢しているの？　私は、大丈夫だよ。

二人に抱きしめられながら、私はそんなことを考える。だって、本当に大丈夫なんだから。

すると、とうさまとかあさまの手が離れ、次はにいさまたちの手が伸びてきた。私はにいさまたち五人に、ぎゅうっと抱きしめられる。

「アリサ、五日間も眠りっぱなしだったんだ。少しくらい抱き方が強くなっても、我慢してくれ」
「本当に心配したんだから」
「呼びかけても全く反応は見せないし」
「王宮医師に見てもらっても、目を覚まさないし」
「どれだけ、私が薬の研究に没頭したと思ってるの」

……どれだけ心配をかけていたのかが、よく分かりました。

確かに、娘が五日間も目を覚まさず眠りっぱなしなら、心配するよ

ね。
　オマケに、私のこの体は病弱。それなら、命の危険性すらもあったかもしれない。

　とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。心配をかけて、本当にごめんなさい。でも、もう大丈夫だよ。
　あぁ、何だろう。さっきまでずっと眠っていたはずなのに、まだ眠たいんだ。眠ってもいいかな、いいよね。
　おやすみなさい、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。目が覚めたら、何があったのか、話してくれると嬉しいな。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　家族

　現在のドーリス公爵家は、パニックに陥っていた。原因は、末娘、アリサ。熱を出して寝込むまではいつもと同じなのだが、この日のアリサは、眠ったままで、何度呼んでも、体を揺らしても、何の反応も見せなかった。
　それをメイドから聞いた家族は、急いでアリサの眠る部屋へと駆けつける。眠っているアリサは、熱のせいで若干呼吸は荒いものの、それでも、ぱっと見では、眠っているようにしか見えなかった。
　だから、兄弟たちは呼ぶ。彼らの最愛の妹の名を。

「アリサ」

　だが、愛する妹は、眠ったままで何の反応も見せない。だから彼らは、幾度でも呼ぶ。彼らの心から愛する、小さな妹の名を、呼び続ける。
　だが、彼らの愛する妹は、目を覚ます気配を、微塵として見せることはない。

「眠っているだけのように、見受けられます。恐らく、体が体力を回復させるために、強制的に深い眠りについておられるのだと……」

自分たちが何度も挑戦し、起こせなかった彼らは、侍医を呼んで、どこかに異常がないか確認をしてもらう。

だが、返ってきた答えは、『眠っているだけ』。ほかに異常は見られない。とにかく、眠っているだけ。

その日から、家族は全員が仕事を休み、アリサに付きっ切りになった。

アリサの目を覚ますために。

早く、彼らの可愛いアリサの笑顔を見るために。

そのために、彼らは奔走する。すべては、小さな小さなアリサのために。

それから五日後、彼らの可愛いアリサは、唐突に目を覚ました。

目を覚ますと同時に、全員が部屋にいるのが意外なのか、目をまん丸にしている。

そして、目をまん丸にしているアリサを、まずは両親が抱きしめた。

「よかった……アリサ……」

「心配したんだから……」

それは、心からの思い。彼らは、目を覚まさない娘を、この五日間、ずっと心配し続けてきた。

何故目を覚まさないのか、明確な理由が分からない、小さなアリサ。

いつ目を覚ますのか、分からない、彼らの小さな末娘。

目を覚ますことなく、そのまま死んでしまいそうなほどに、弱りきっていた、兄弟たちの小さな姫。

だから、アリサが目を覚ましたときは、みんな喜んだ。泣いていた母や姉たちも、涙を拭って、アリサに微笑みかけた。

父や兄たちは、誰かの前で泣くのもなんなので、必死で泣くのを我慢し、アリサに優しく微笑んだ。

すべては、可愛いアリサのため。アリサに余計な心配をかけないように。

だから、彼らは両親の手から離れた小さな妹を、きつく、抱きしめた。

「アリサ、五日間も眠りっぱなしだったんだ。少しくらい抱き方が強くなっても、我慢してくれ」

ルウィンが、そう言いながらぎゅっと抱きしめ、

「本当に心配したんだから」

ジャスリーンが、兄の隙間を縫って、愛する妹を抱きしめ、

「呼びかけても全く反応は見せないし」

「王宮医師に見てもらっても、目を覚まさないし」

セインとカインが、兄や姉ごと、アリサを抱きしめ、

「どれだけ、私が薬の研究に没頭したと思ってるの」

エルミナは、そんなアリサを抱きしめることは諦め、アリサと目

線を合わせて、そう告げた。

その後、久しぶりに起きて話をしたのが疲れたのか、アリサは再度、眠りについた。

それと同時に、久しぶりに安心した家族も、眠りにつく。

アリサの部屋で、椅子に座ったまま、そのまま眠っていた。

母は、ソファーの上で、父に寄り添い、眠りにつき、

父は、ソファーの上で、妻の温もりを感じながら、眠り、

ルウィンとセイン、カインは、椅子に座ったまま寝入り、

ジャスリーンとエルミナは、アリサのベッドに突っ伏しながら、

眠った。

そんな彼らに、メイドたちは風邪を引かないようにと、毛布をかける。

安心した笑顔で、気持ちよさそうに眠る主一家を起こさないよう、

気をつけながら。

彼らは、目を覚ますと同時にはっとする。可愛いアリサは大丈夫だろうか。彼らは、そう思いながらまだ起きていない家族を起こし、アリサが目を覚ましたことを確認する。

そうしなければ、アリサが目を覚ましたことが、夢のように感じられて、怖かったのだ。

「ルウィン！　ジャスリーン！　セイン！　カイン！　エルミナ！　起きなさい」

先に目を覚ました父と母は、真実を確認するためにも、アリサ以外の子供たちを起こす。

そして、子供たちがしっかりと目を覚ますと、次はアリサの番だった。父たちは、ゆっくりとアリサの肩に手を置き、ゆっくりと揺らす。

「アリサ、起きてくれ。アリサ？」

「アリサ、お願いだから起きてちょうだい」

両親が声をかけ、体を揺らすと、アリサは「んぅ～」と言いながら、寝返りをうち、再度眠りだした。

そんなアリサの様子に、彼らはホッとする。アリサが目を覚ましたのは、夢ではなく、現実であったと。

そのことに安堵しながらも、彼らはアリサを起こそうと努力する。起こして、何か胃に入れさせるつもりだった。

「アリサ、起きなさい。少しくらい、何か食べておこうね？」

「食べたらまた眠ってもいいから。だから、起きてちょうだい？」

「ん……う……」

そこまで言われたアリサは、眠たい瞼をこすりこすり、目を開く。

それを確認した父たちは、いつの間にやら用意をさせていたお粥を、スプーンで掬い、アリサの口元へ運んだ。

まだはっきり覚醒できていないアリサは、無意識に口を開き、お粥を受け入れる。

「おいしい？」

「んー」

そうして食べさせている間に、ようやくアリサの頭は覚醒し始めたらしい。少しずつ、目がパッチリと開かれていく。

器に盛られたお粥を、珍しく完全に食べ終える頃には、アリサの目はしっかりと開かれていた。

ただ、それは良かったのか、悪かったのか。

「うえぇえ」

食事を終えて少しすると、突然の食事に驚いたらしいアリサの胃が、悲鳴を上げた。起き上がった状態のまま、まず、アリサの小さな手に吐き戻し、それは、布団へと落ちていった。

それを見た父たちが焦ったことは、言うまでもない。

結果、アリサの戻したものは、アリサのベッドのマットレスまでも汚し、しばらくベッドが使えなくなったアリサを、父が抱きかかえ、自らの部屋へ運ぶ。

両親の部屋のベッドは、アリサが五歳になる前まで、つまり、つい最近までは一緒に寝ていたベッドだ。両親は、アリサのベッドがきれいになるまで、自分たちの部屋で、昔のように一緒に寝ること

を選んだのだ。
　但し、ほかの子供たちから反対の声は飛んできたが。
「父さんたちと一緒に寝るなら、僕たちだっていいじゃないか」
「兄さんたちより、私か、エルミナがちょうどいいでしょ？　お父さん」
「何を言う、ジャスリーン。僕たちだって、なんの問題もないはずだろう」
「僕、どーでもいー。アリサが元気ならそれで」
「私もそう思うわー」

　そうして子供たち（上三人に限る）は言い争いを続けるも、両親は、自分たちの部屋からアリサを動かすつもりはなかった。
　それに、子供たちの部屋に移動しようものなら、子供たちのアリサ争奪戦が起こることは、目に見えていたため、それは避けるべく、彼らは自分たちの部屋にアリサを置いたのであった。
　それに、アリサ自身も、両親の部屋は、つい最近まで自分が眠っていた部屋であるため、何の違和感も感じず、眠れる場所となっている。
　つまり、アリサとしては、兄弟たちの部屋よりは、両親の部屋のほうが、安心して眠れる部屋なのである。
　それを、兄弟たちに言うことは、決してしないが。言えば悲しまれることが、分かっているためである。

　そして、両親の眠るベッドの、嘗ての定位置、真ん中に寝かされたアリサは、家族の視線の中で、再び眠る。
　先ほど戻すのに体力を使ったのか、父に運ばれている時点で、既に眠たそうにしていた。
　そして、ベッドに下ろされると同時に、完全に、堕ちた。

そんなアリサを見ながら、父は、ほかの子供たちを、部屋から追い出す。

「明日から仕事に行かねばならんだろう？　用意をしておきなさい」

そういう口実をつけて、父は子供たちを部屋から追い出し、そして、妻と共に、彼らの可愛い愛娘の寝顔を、ただただ、ずっと眺めていた。

アリサが、「とうさま、かあさま。アリサ、おなかすいた」と言って、潤んだ瞳で、彼らを見つめてくるまでは。

彼らの小さなアリサは、ベッドに横たわったまま起き上がろうとせず、そのまま空腹を訴える。その目の可愛さは、最早凶悪的だった。

それにとどめを刺すように、アリサのお腹は、空腹を訴える小さな子犬の鳴き声のような音をたてる。

その目と、子犬の鳴き声のような音には、父も、母も勝てやしなかった。彼らは、メイドを呼び、先ほどよりもとろとろにさせたお粥を用意させる。

今度こそ、戻さなくてもいいように。アリサが、満足できるように。

そして、食事を終えたアリサは、今まで寝込んでいたのが嘘のように、元気いっぱいに兄たちの元へ、遊んでもらうために、向かうのであった。

そうしてアリサが遊んでもらうために兄たちを訪れたことで、兄たちが喜び、仕事の用意をほったらかして、遊んであげたことは、最早言うまでもない。

神埼有紗

アリサは、夢を見ていた。それは前世で、彼女が神埼有紗という名の人間であった頃の思い出だった。

彼女は、小さなアパートの一室で、両親と共に暮らしていた。貧乏ではあったが、それでも、彼女には両親がいれば、楽しかった。

彼女の両親は、休みの日には、いつだって彼女と遊んでくれた。

「有紗、明日は公園で遊びましょうか」

「うんっ！　お父さんも一緒？」

「当たり前だろう、有紗。お父さんが、有紗の頼みを聞かなかったことなんて、あったか？」

いつだって、彼女は両親と一緒だった。学校へ入り、遊びに行く時間が減っても、それでも、休みの日はいつだって両親と一緒だった。

両親は、彼女の誕生日は、いつだって手作りのケーキで祝ってくれた。そして、その数日後には、必ずどこかへドライブに出かけた。

それが、いつまでも続いていくと思っていたのに。

どうして、あんなことになったんだろう。有紗は、考える。

あの日、帰り道での事故は、どうして起こったんだろう。

お父さんは、制限速度内で走り、きちんと、車道からはみ出ることなく走っていた。

なら、どうしてお父さんたちは死んだの？

それは、相手方のトラックが、中央分離帯を乗り越え、彼女たちの乗った車に突っ込んだからだ。

運転席に乗っていた父は、即死。

後部座席に、有紗と一緒に乗っていた母は、有紗に覆いかぶさる

ようにして、亡くなっていた。

彼女は一人、残された。齢十歳にして、一人だと言うことを、実感させられた。

「やだ!!　お父さん!　お母さん!　私もお父さんたちのところ行く!!　死なせて!　死なせてよぉっ!」

それからの彼女を待っていたのは、絶望の日々だった。両親共に親戚と言う親戚が見つからず、それが、ますます一人だと言うことを、彼女に知らしめた。

だから、彼女は何度も死のうとした。何度も何度も手首を切り、医師による処置によって生かされ、屋上から飛び降りようとして、偶々居合わせた看護師や患者に止められた。

何度失敗しても、彼女は諦めなかった。一人で生きることは、そこまでも、彼女にひどいダメージを与えた。

そんな彼女の自殺未遂が止まったのは、彼女の母に、妹がいることを知ってからだった。彼女も会ったことのある人ではあったが、その人が、母の妹であることは知らなかったらしい。

「有紗ちゃん。有紗ちゃんは、一人じゃないから。叔母さんがいるから。だから、死なないで」

その言葉が救いになったのか、その日から、彼女は死を選ぼうとしなくなった。生きることに必死になった。

その様子を、医者は温かい目で見守り、彼女の新たな親となる叔父と叔母も、同様に優しい目で見守った。

そうして、彼女は退院し、両親と一緒に暮らしていたアパートを

出て、彼女の叔母夫婦の住む家に移り住んだ。
それと同時に、学校も転校した。転校に伴い、有紗は新たな友達を作ろうと、必死で頑張った。
なのに、世間の風は冷たかった。子供たちは、本当の両親と暮らしていない有紗を迫害し、無視という名のいじめを行った。
子供は、自分たちと違うものを排除する生き物だと言えど、両親を失ったばかりの有紗に、この仕打ちはあんまりだった。

結果、有紗は少しずつ、学校をサボるようになっていった。
いじめのことを、叔父叔母に話すことはしない。引き取ってもらった上に、余計な心配を掛けたくなかったからだ。

だが、それはバレた。あまり学校に来ない有紗を心配した担任が、家に連絡を入れたのだ。
そして、帰ってきた有紗は、叔父叔母から、何故学校へ行かないのか尋ねられ、そして、そこで初めていじめのことを話した。

怒られる。反射的に身を硬くする有紗を、叔父と叔母は、優しく抱きしめる。それが、有紗を驚かせた。

「早く相談してくれればよかったのに……。辛かったでしょう？」
「そんな学校、行かなくていい。好きなだけ、休むといい」

その言葉が、有紗の涙腺を緩めた。有紗は、叔父と叔母にすがり付いて、大声で泣いた。

叔父と叔母は、有紗が泣いてすがってくれたことを、心から嬉しく思っていた。やっと、自分たちを頼ってくれている、と。

それからは、有紗と叔父叔母は、本当の親子のように暮らしてい

った。

有紗はいつまでも学校へは行かなかったが、家で勉強はきちんとしていた。

教科書を見ながら、自力で勉強をし、分からなくなったら叔父や叔母に聞きにいく、と言う形で、頑張り続けていた。

叔父も、叔母も、それでもいいと思っていた。

ただでさえ辛い思いをした子なのだから、有紗には幸せになって欲しいと思っていた。

楽しかった。叔父と叔母は、甘やかしてくれるし、有紗が悪いときは、きちんと叱ってくれた。

だから、有紗は二人を本当の両親のように慕っていた。

なのに、どうしてあんなことになっちゃったんだろう。有紗は、思う。

あの日、外に出なければ良かったのかな。

久しぶりだからって、外に出ず、家に引きこもりっぱなしのほうが良かったのかな。

でも、それだと、とうさまやかあさま、にいさま、ねえさまに会うことは出来なかった。

どっちがいいんだろう。

でも、会いたいよ、叔父さん、叔母さん。私の、第二の両親。

アリサがふと目を覚ますと、目の前が滲んで見える。小さな手で目元に触れると、そこには、涙が浮かんでいた。

「どうしたの？　アリサ。怖い夢でも見たの？」

「大丈夫だ、アリサ。アリサはとうさまたちが守ってあげるからね」

そして、そんなアリサの様子に気がついた第三の両親である彼らは、優しくアリサに告げる。そして、服の袖で、アリサの目元を濡らす涙を拭ってやる。

すると、アリサが突然、母に抱きついた。

「どうしたの？　そんなに、怖い夢を見た？」

「かあさま、とうさまも、絶対にアリサのそばにいてね。いなくなったりしないでね」

アリサが言うと、両親は、アリサの頭を優しく撫でる。そして、優しく告げてやる。

「とうさまたちが、アリサのそばからいなくなったりするわけないだろう？　ずっと、アリサが望むまでそばにいるよ」

「ほんとう？」

「当たり前でしょう？　親は、子のそばにいるものよ？」

母が言うと、アリサは、ホッとした表情をする。

そして両親は、そんなアリサを再び寝かしつけるのであった。

街を歩こう

「とうさま、かあさま。アリサ、またお外に行きたいな」

アリサの攻撃に、彼らは、半端ではないほどのダメージを受ける。
それほどに、アリサのお願いは、強烈だった。
そして、そんな目で見つめられた両親を、子供たちは悔しそうな目をしながら眺める。

「とうさま、かあさま、――――……ダメ？」

父は、元来娘をこよなく愛する生物。つまり、父がアリサのこのお願いに、首を横に触れるはずもなかった。
父は、母や公爵家の私兵と共に行動をすることを条件に、アリサに外出の許可を出した。

「まぁ、王都で公爵家のものに手を出す馬鹿はいないだろうが」

父はそう言うが、用心に越したことはない。よって、彼らは公爵家の私兵に、アリサの護衛について街へ行くよう命じる。
すると、私兵の中で、バトルが勃発した。

「お前は、今日は屋敷の護衛だろうが。俺が行く！」
「お前こそ、今日は休みじゃなかったのか？　せっかくの休みを無駄にさせないためにも、俺が行こう」

等々。
つまり、私兵が普段からあまり外に出ることがないため、見かけることのないアリサを一目見ようと、護衛の任を、争ってるのであ

る。
まぁ、その争いは無駄に終わったのだが。
「セシル、ロザンナ、頼んだぞ」
父は、男どもの馬鹿な争いを冷めた目で見つめていた女性の兵に、アリサの護衛を任せる。その瞬間、無視された男どもは、発狂に近い叫び声をあげたと言う。
まぁ、その声が聞こえる範囲内にアリサがいたため、さりげなく控えていたセインとカインが瞬時に黙らせたのだが。
――それ、時に延髄落しとも言う。
そのおかげか、アリサは男どもの醜い争いの結果の声を聞くことなく、母と共に、嬉しそうに外出の用意をするのであった。
兄弟たちは、そんなアリサを微笑ましげな瞳で見つめながら、後ろ髪を引かれる思いだが、仕事へ出かけていった。
兄弟たちの考えは、皆同じである。――アリサと一緒に出かけたい。
だが、それは不可能な話だ。この日は、全員どう足掻いても仕事は休めなかったらしい。
結果、子供たちは、仕事に行く前に、揃ってアリサに声を掛けていった。
「アリサ、絶対に知らない人についていったりするなよ」
「お母さんから離れたら、絶対に、ダメだからね」
「無理をして、熱を出さないようにな？」
「転んだりしないよう、気をつけるんだよ」
「とにかく、無茶をしないでね？」
アリサの肩を優しく掴み、視線を合わせて兄弟たちは告げる。それに、アリサは「分かってるよぉ」と、へにゃと笑って答えた。

その笑顔にホッとしたのか、兄弟たちは家を出、アリサが見ていなくなった瞬間に、駆け出す。実は、時間が危なかったらしい。

それからしばらくして、用意が出来たらしい母とアリサは、護衛の兵であるセシルとロザンナと共に、馬車に乗り、街へ向かう。

その馬車の中で、楽しそうに景色を眺める愛娘に、母は質問をする。

「アリサ、街で、何か見たいものはある？」

「おしろ。ルゥにいさまと、リンねえさまがそこにいるんでしょう？」

「そうね。でも、ルウィンやジャスリーンには会えないわよ？」

「いーの。中に入るつもりはないよ」

アリサが言うと、母は「なら、外からお城を見ましょうね」と言ってアリサに微笑みかける。そんな母に、アリサは元気いっぱいに頷いた。

そして、そんな会話を馬車の外で馬に乗り、聞いている護衛二人は、微笑ましい親子の会話に頬を緩めていたそうな。

――――それも、一時のことではあるが。

そうして走っていると、馬車は王都の中心部に着いたらしい。止まり、セシルとロザンナが、「ここからは人が多いので、馬車は無理です。お降りください」と言って、二人に下車を促した。

アリサの場合は、自力で降りられないので、護衛二人に抱えてもらい、降りることになったのだが。

そして、馬車を降りた母は、横に立っていた娘の手を掴み、しっかりと手を握る。そうしていれば、はぐれる心配もない。

「さ、まずはアリサが見たいって言ったお城を見に行きましょうか」
「うん！」

二人はそう言って、城の方向へテクテクと歩いていく。母は、アリサが疲れないよう、アリサのスピードにあわせ、ゆっくりと歩いてやる。

そうしてしばらく歩くと、大きな城の外観が見えてきた。だが、城までは、まだまだ遠い。

「アリサ、あそこに見えるのが、この国の王様たちの住む、お城よ」
「うわぁ、おっきいねぇ」
「近くに行くと、もっともっと、大きいわよ？　アリサはびっくりするでしょうね」

そう言って、二人と護衛二人は、城への道を、テクテクと進んでいく。

そうして、城の間近へついた。アリサは、母の予想通り、驚いていた。上を見て、ずっと上のほうを見て、首が痛そうなくらいに上を見て、驚いていた。

ちなみに、アリサたちの住む家も、十分に大きい。公爵家故に、体面を考え作られたこともあるが、それでも、十分に立派な家である。

だが、城はその何倍も立派な建物である。王が住む場所であるが故に、果てしなく大きい建物となっている。

「陛下！　ダメだと言っているでしょう！　宰相殿、あなたも止めてください！」

そうしていると、アリサたちにとってはようく聞きなれた声が聞

こえてくる。それは、ルウィンの声だった。それと同時に、アリサたちの前には、この国の国王が現れる。

「お久しぶりですね、ドーリス公爵夫人、アリサ嬢」

「陛下」

王を見た瞬間、母は、反射的に跪いた。同時に、アリサも無理やりしゃがみこませる。

「あぁ、そんなに畏まらないでください、公爵夫人。アリサ嬢も、立ってください。……私の名は、覚えていますか？」

「んっと、ジェームズさま、ですよね？」

「正解です。覚えておいていただけて、嬉しいですよ。――ぐぇっ」

王がそう言って、アリサの手を取り、微笑みかけた瞬間、蛙の潰れたような声が、アリサの耳に届く。

それは、宰相に服を引かれ、首が絞まりかけた国王の発した声だった。

「何をするんですか、宰相殿？　一瞬息が止まりましたよ？」

「陛下が執務を放置して、ドーリス公爵家の末の姫君に会いに来られるからです。きちんと、執務を終わらせてからにしてくださいね？　陛下」

さぁ、戻りますよ。宰相はそう言って、王を引きずっていく。

「公爵夫人、アリサ嬢。今度は、城の中にも遊びに来てくださいね」

「陛下、僕たちの可愛いアリサに、毒を蒔かないでくださいと、頼んだ覚えがあるんですが、お忘れですか？」

「嫌だなぁ、覚えていますよ、宰相補佐殿。これは毒ではなく、ただのお誘いですよ」

王とルウィンは、そうやって話をしながら、城の中へ戻っていく。

その様子を、呆然とした母とアリサが見送ったのであった。

爆弾投下

「陛下、あなたは、何を考えていらっしゃるのです」

僕たちの可愛いアリサに毒を散々振り撒いて下さって。

執務室へ戻った王に、ルウィンは進言する。それは、可愛いアリサを守るための進言だ。

だが、王はそんなルウィンの言葉を無視し、少し遠くを見ながら口を開く。それは、爆弾と同レベルの威力を持つ、言葉だった。

「宰相補佐殿は、末の妹姫のことになると、性格が変わりますね。大体、変なことは考えていませんよ？　ただ、アリサ嬢に、私の可愛い王子の婚約者（フィアンセ）になってもらいたいと考えているだけで」

王がそう言った瞬間、ルウィンが完全に停止した。否、ルウィンだけではなく、宰相すらも停止している。

それから、先に我に返ったのは、宰相だった。宰相は、未だ呆けたままのルウィンの頬を軽く叩き、正気に戻す。

「こら、ルウィン、しっかりしろ。逃げたいのは分かるが、しっかり受け止めるんだ」

「……っは！」

そして、正気に戻ったルウィンは、即座に、王に雷を落とした。

「陛下！　アリサは、まだ五歳ですよ！？　婚約者など、無理に決まっているでしょう！　何を考えていらっしゃるのですか！！」

「おやおや、私は本気ですよ？　第一王子は、今九歳。五歳のアリサ嬢とは、年齢差的にもちょうどいいでしょう？」

「よくありません！　アリサは病弱なんです。子を残すことも、今の段階では、難しいと言われているんですよ！？」
「成長につれて、丈夫になるかもしれないじゃないですか」
王は、諦めない。そんな王を見ている宰相は、溜め息をつく。最近妙にルウィンの末の妹姫にこだわっていると思えば、そんなことを考えていたのかと。
だが、ルウィンの言いたいこともよく分かる。ドーリス公爵家の末の姫君は、体が弱い。
しょっちゅう熱を出し、寝込み、ドーリス公爵をはじめ、家族を心配させている。
確かに、成長に伴って今よりは丈夫になるかもしれないが、今の段階では、王子の婚約者としてアリサを発表するのは、不可能だろう。
例え、それを王が決めたとしても、世継ぎの関係上、ほかの貴族からの反対は避けられない。
それに、まず、アリサの父であるドーリス公爵が、反対派の筆頭となるだろう。
――――全ては、彼らの大事なアリサを守るために。
アリサを守るためならば、絶対に、ドーリス公爵家は、家族ぐるみで、反対派につくだろう。
それを避けるためにも、ほかの公爵家の姫を婚約者にすればいいだろうと、ルウィンや宰相は説得するのだが、王は聞き入れない。
「私は、宰相補佐殿、あなたの妹姫を気に入ったのです。アリサ嬢以外を、息子の婚約者（フィアンセ）とは認められません」
「他国から姫を娶ればよろしいでしょう」
「嫌です。アリサ嬢という立派なお嬢様を知った以上、他国の姫な

ど、必要ありません」

王のその言葉に、ルウィンと宰相は溜め息をついた。宰相は今後のこの国の行く末を考えて溜め息をつき、ルウィンは、中々諦めない王に呆れ、溜め息をついた。

「とにかく、アリサは陛下には差し上げません。アリサは僕たち、ドーリス公爵家の姫ですからね」

大体、そういうものを決めるのは、父ですから、勝手にお答えすることは出来ません。

ルウィンが自信たっぷりに言うと、王は、にやりと笑って、次の言葉を告げる。それは、悪の微笑みでもあった。

「――王妃が、アリサ嬢の輿入れを楽しみにしていてもですか？」

その瞬間、ルウィンと宰相は、再び停止した。その様子に、王はしてやったりと言う顔をする。

この国の王妃は、普段は温厚だが、芯が強く、こうと決めると、絶対に変えることはしない、悪く言えば、頑固な王妃だと、国中に知られている。

自分の決めたことを否定されたりすると、その瞬間、普段の温厚さはどこへ行ったのかと言いたくなるくらいに、怒るのだ。

王妃が決めたとなれば、この国の貴族は、全員が逆らえない。逆らうと、後からどうなるか、知っているものは口を閉ざし、知らないものは、知らないほうがいいのだろうと、知らないようにしている。

ちなみに、そんな恐怖の対象である王妃は宰相の姉でもある。

「……ルウィン、姉上が決めたのならば、諦めろ。悪いが、姉上までも楽しみにしているのならば、これ以上協力は出来ない」

それを聞いたルウィンは、家に帰ったら本気で父さんと母さんと相談しなくては、と考えたそうな。

「さて、宰相補佐殿も認めてくださったようですし、そろそろ執務に戻りますか。宰相殿、次の書類はどれですか？」

「え、あぁ、これです」

そうして王は執務に戻り、アリサの輿入れの話のせいで使い物にならなくなったルウィンは、宰相命令により、暖かい眼差しと共に、

「ルウィン、今日は帰れ。帰って、父君たちと相談して来るんだ」

という優しい言葉に背中を押され、家に帰ることになったのであった。

そして、家に着いたルウィンは、帰ってくる時間の早さに驚いているアリサを、黙って、ぎゅうっと抱きしめた。アリサが不思議そうな顔をしていても、その表情を見ることもせず、ただただ、抱きしめ続けた。

その後は、相談の時間らしく、ルウィンはアリサと別れ、父の書斎へ足を向ける。

「父さん、相談があるんですけど、いいですか？」

「あぁ、ルウィンか。お前が相談ごとなど珍しいな。……どうした？」

父に問われ、ルウィンは、執務室で王が言った言葉を、余すことなく父に伝える。

それを聞いた父は、ルウィン同様、固まった。完全に停止した。

「父さん、大丈夫か？」

そんな父に、ルウィンは慎重に声をかける。すると、父はいきなり正気に戻った。そして、立ち上がる。

「城へ行って来る！　ルウィン、お前はアリサについていろ」

そして、その日。城では、第一回、ドーリス公爵　ＶＳ　国王のバトルが勃発したそうな。

その様子は余すことなく、王宮勤めの侍女が見ていたそうな。

次の日の噂は、その話で溢れ返っていたそうだ。

家族会議（前書き）

若干短めです

家族会議

国王からルウィンへ、衝撃の告白があったこの日、子供たちは翌日の休みを取り、夜のうちから、家族会議を開いていた。――もちろん、アリサは抜きだが。

「何で、そんなことになったわけ？　セイン、カイン。あの日、何があったのか包み隠さず言いなさい」

そして、そんな中で、事情を全く知らなかった両親と、ジャスリーン、エルミナは、事情を知っているセインとカインに、説明をさせる。

しっかりと、隠し事無しで話をさせるために、彼らは、威圧感を出した。全ては、可愛いアリサのため。アリサがいないからこそ、出来る方法である。

「セイン、カイン」

とっとと吐け。そんな心の声が聞こえてきそうな中で、話題の中心となっていた二人は、ようやく口を開いた。

「前、アリサが街に出ただろう？　そのときに、陛下も町にいらしてたんだ」

「アリサに会いに行くと、駄々をこねたからな」

「それで、アリサの顔を見たいって仰るから、アリサを馬車から降ろして、会わせたんだ」

カインの言葉にルウィンが補足をいれ、それに、セインが続ける。

結果、王はその一目でアリサを気に入り、息子の婚約者にしたい

と決めたわけだ。あのおどおどした状態で、どこを気に入ったのか真剣に思案する二人だったりする。

「今日、陛下と話をしてきたが、アリサを気に入った理由は、静かで可愛いからだそうだ」

『アリサ嬢を気に入った理由ですか？　一つは可愛らしいこと、もう一つは、静かで大人しいこと。で、これが肝心ですが、家族が反対していることですね。――ご家族が反対していると、逆に落とすのに燃えますよね』

そんな王の言葉は、父は家族には話さない。反対が逆に燃えると言うことは、この子供たちの反応は、間違いなく王を燃えさせることになる。

そうなると、王はますますアリサを王子の婚約者として公に発表し、彼らを黙らせようと画策するだろう。

「発表などして、アリサがほかの貴族などに狙われたら、どう責任を取ってくださるんですか」

王がそうして話しているとき、父は、心から思っていたことを告げた。それは、アリサの安全。王族に名を連ねると言うことは、命を狙われることと同義となる。

それは、アリサを愛する父としては、賛成できなかった。

だが、王の考えは単純だった。

「王妃の歓迎する王子の婚約者に、害を成す馬鹿（貴族）がいますか？」

いないだろう。王妃に逆らうこと、これ即ち、精神的死と同義だ。

目の前でアリサの安全について熱く語る家族に、このことを話すべきか黙っておくべきか、父は真剣に思案したそうな。

「大体、アリサを王子の婚約者として発表なんてさせたら、アリサが王子の婚約者を狙う馬鹿な貴族に狙われるじゃないか」
「そうよ。ただでさえ、アリサは体が弱いんだから」
「それに、婚約者として発表なんてさせたら、今まで僕らが必死で社交界への出席を反対してきたのが、意味を成さなくなる」

『なら、何が何でも、阻止しなくては』

この日、家族の意見は、反対方向で完全に一致した。
翌日から、彼らは王へ、絶対的な反対の意思を見せることになる。

それが、たとえ王妃の逆鱗に触れる行為であろうとも。

『我ら、ドーリス公爵家は、末娘、アリサを王子の婚約者（フィアンセ）にするのは、絶対に反対です』

ある日、王に直接そう告げたドーリス公爵とルウィンを見て、王はこう呟いたそうである。

「王妃に喧嘩を売るとは、ドーリス公爵家のみなさんは、挑戦者（チャレンジャー）ですね」

アリサと王子の婚約騒ぎは、まだまだ続くのであった。

王妃からのお誘い

ある日、ドーリス公爵家に、一通の招待状が届いた。それは、ジャスリーンとエルミナ、アリサ宛で、差出人は、王妃。目的は女子お茶会のお誘いだった。

『女性だけで、お茶を楽しみ、会話を弾ませましょう』

招待状にはそう書かれており、目的は、どう考えても、アリサと王子の婚約騒ぎの話をしたいのだろうと、招待状を見た両親や兄たちは、考えた。

もちろん、アリサはそんなことは微塵として考えておらず、両親や、兄姉に、「おうひさまって、どんな人？」と尋ねていたが。

ちなみに、その質問に対する家族の回答は、「アリサがもう少し大きくなったら教えてあげようね」だった。

貴族たちの恐怖の対象である王妃は、アリサの教育には悪いと、家族は判断したようだ。

それに、アリサをこのお茶会に出席させるつもりはないのだから、わざわざアリサに王妃の話をする必要もない。

「お父さん、お母さん。これ、私とエルミナだけで行って、王妃様に話を伺ってくるわ」

「そうだな。頼んだぞ、ジャスリーン、エルミナ」

父の言葉に、二人の姉は、大きく頷く。

そしてその直後、アリサの小さな手が、父の服の袖を引っ張った。

「とうさま、アリサは？」

アリサは、自分にもお誘いがかかっていることを知ってか知らずか、父に期待の目を向ける。外に出れるのならば、行きたい、と。
だが、父はそんなアリサを、微笑んで退けた。

「アリサはかあさまと、一緒にお留守番だ」
「えーっ！　アリサもお外行きたいーっ！　とうさま、行かせてほしいな」

そんなアリサの言葉と瞳に、父はたじろぐ。だが、そのお茶会の目的をアリサに知らせないためにも、しっかりと、アリサを説得する。
――――全員で、全力で。

「アリサ、無理は禁止」
「王妃様に聞きたいことがあるなら、私たちが代わりに聞いてあげるから」
「アリサがお茶会に出席すれば、熱を出すかもしれないじゃないか」
「大人しくお留守番していて？　僕たちを心配させないでよ」
「アリサはいい子だから、聞いてくれるよね？」
「おいで、アリサ」

そうして、母がアリサを呼ぶと、アリサは素直に母の元へ駆けて行く。そして、母の胸に飛び込んだ。
母は、自らの胸に飛び込んできた末娘を優しく抱きしめ、髪を撫でながら、告げる。

「アリサはかあさまと一緒にお留守番していようね。そうだ、本を読んであげようか」
「ほんとうに？」
「えぇ。だから、アリサは大人しくお留守番していようね」

「……わかった」

渋々ながらも頷くアリサに、彼らは揃って安堵の息をつく。だが、アリサはやはり、おもしろくなさそうだ。

――――今現在自分の置かれている立場を知らぬと言うことは、かくもよいことか。家族は揃ってそう考えるのであった。

まぁ、全員が全員して、アリサにこのことを知らせるつもりは全くないのだが。アリサのために、アリサを守るためにも。

だから、彼らは尽くすべき主に喧嘩を売る。全ては、可愛いアリサのために。

故にアリサは、王妃からのお誘いであるこのお茶会が、ジャスリーン、エルミナ姉妹と、王妃の勝負の場になることは、全く考えていない。

ただ純粋に、お茶会とだけ信じている。純粋素直なアリサ。そんな小さなアリサを、彼らは守るために戦う。敵わぬ相手だとしても、それでも彼らは戦うのだ。

そしてお茶会当日。ドーリス公爵家には、緊張で固まろうとしているエルミナと、要は度胸だと開き直っているジャスリーンがいた。

「じゃあ、行って来るね、アリサ」
「うん。いってらっしゃい、ねえさま」

そして、大好きな姉を見送った後、母の本を読んでくれると言う約束をしっかりと覚え、母に無言で強請るアリサがいた。

「アリサ、分かったからそんな潤んだ瞳で見るめるのは、止めてくれるかな？　ほら、どの本がいいか、選んでおいで」

母が言うと同時に、アリサは笑顔を浮かべる。そして、メイドと共に、家の書庫へと走っていった。否。走り出そうとしたのだが、それはメイドが制した。

「お嬢様、急がなくても大丈夫ですから。無理をなさらず、ゆっくり行きましょう」

メイドの言葉に、スピードを緩め、歩き出すアリサ。母は、そんな愛娘とメイドを、優しく見守りながら、見送るのであった。――アリサがどんな本を持ってくるのか、勝手に想像をしながら。

そして、アリサの持ってきた本は、神話の一つだった。いくら子供用に要約してあると言えど、まだアリサには早いような気もする母は、アリサにほかの本にしないか相談するのだが、アリサは聞かない。その本がいいと、はっきりと言い切る。

そんなアリサに負けた母は、アリサの持ってきた神話の本を開き、少しずつ、アリサにも分かるよう読み進めて行くのであった。

＊＊＊＊＊　ｓｉｄｅ　アリサ

かあさまが本を読んでくれると言うことで、メイドと共に図書室へ向かう。今の私は本のタイトル、大体の話等、全く読めないため、メイドに頼み、説明をもらう。

そこで、私はいいものを見つけた。この国の神話だ。神話、これ即ち、神の話。それならば、あのお兄さんのことも少しくらい分かるかもしれない。あのお兄さんも、神のはずだから。

「お嬢様には少々難しい話だと思いますが……」

「でも、それがいいもん」

「まぁ、お嬢様がどうしてもと仰るのでしたら……」

メイドはそう言って、私の選んだ神話の本を手に取り、そして、あまった片手で私の手を掴み、かあさまの待つ部屋へ戻る。

そして、その本をかあさまに見せた結果、かあさまからも、「これは、まだアリサには難しいわ。ほかの本にしましょう？」という、さりげない反対は飛んできたが、意地でもそれがいいと言い張り、結局、かあさまは私のその頑固さに負け、神話の本を開く。

本によると、この国では考古元来、神の存在は崇められており、時折、生まれる前に神に会ったという者もいるらしい。

そして、この国では、生まれる前に神に会った者は魔力が強いものが多く、国から重宝されているらしい。……この場合、私ってどうなるんだ？

私は、転生前に神に会っている。だが、魔力なんてもの、全く分かりやしないし、第一、私の体では、勤めること自体が不可能だろう。

もう少し成長したら、子供用じゃなくて、もっと詳しくそういうものが書いてある本が読みたいと、心の底から思った瞬間だった。

――そういえば、ねえさまたちは、お茶会楽しんでるのかな？

私も、行ってみたかった。

優雅なお茶会

「本日は、お誘いくださいまして、ありがとうございます」
「あぁ、二人とも顔を上げて。今日は、そんな畏まってもらうためにお誘いを出したのではないのだから」

ところで、末の姫君はどちらかしら？　にこやかに問いかける王妃に、固まっているエルミナをさりげなく隠したジャスリーンは、同様ににっこりと微笑みながら告げる。

「あの子でしたら、体調面を考慮して、欠席させていただいております」
「あら、そうなの。残念だわ」
（本当は、私に会わせたくないだけでしょう？）
「あの子は体が弱いですからね」
（アリサに、王子殿下との婚約云々の話を聞かせるわけにはいかないんですよ）

にこにこにこにこ。王妃とジャスリーンの、水面下のバトルは続く。

「今日は、体調はいいのかしら？」
（いいのなら、連れて来ればいいのよ）
「いいほうではありますが、油断は出来ませんからね」
（無理をして、熱を出したりしたら、私たちが心配のし過ぎで変になるんですよ）
「人間、元気が一番ですからね」
（王宮は医療設備も万全ですから、アリサ嬢が体調を崩しても大丈夫よ？）

「そうですね」
（アリサを王子殿下に嫁がせたら、元気じゃなくなるのが目に見えているでしょう）
ちなみに、二人とも表情だけは笑顔だが、あたりを覆うオーラは、とんでもなく冷たく、恐ろしい。
事実、お茶の用意をしていた王宮勤めの侍女は、支度が済むと同時に、「失礼いたしますっ！」と言って、急いで逃げていった。
つまり、現在この冷たいオーラの被害に遭っているのは、エルミナだけである。
子のバトルは、いまだ終焉が見えない。
「今度、アリサ嬢の調子のいいときに、アリサ嬢に会ってみたいわね」
（将来の義娘の顔くらい、見せてもらえるでしょう？）
「アリサは簡単に調子を崩してしまいますからね。お約束しても、寸前で反故にしてしまうかもしれませんので、遠慮させていただきたく存じます」
（アリサの顔を見たら、間違いなくハマりこむから、絶対ダメです）
王妃と姉が立って（表情だけは）にこやかに談笑している中で、エルミナは勝手に座ることなど出来やしない。体力無きエルミナに、限界は少しずつ襲い掛かっていた。
体力が無いのは、エルミナだけではなくジャスリーンもなのだが、ジャスリーンは、王妃との水面下でのバトルに意識を向けているからか、疲れを感じていないらしい。依然として、バトルを続けていた。
「あら、そんなこと、気にしませんよ？　体調など、いつ変わるか

わかりませんからね」

（だから、アリサ嬢を今度連れてきてちょうだい）

「いえいえ、王妃様がお気になさらずとも、私たちが気にしますから」

（だから、アリサを王子殿下の婚約者にするだなんて戯言、二度と吐かないでいただけます？）

ニコニコ。ジャスリーンは笑みを浮かべながら、そう告げる。その瞬間、王妃は溜め息をついた。そして、自分たちが立ったままであったことに気がつき、ジャスリーンとエルミナに、座るよう促す。

王妃とのバトルをやめ、一気に疲れが襲ってきていたジャスリーンは素直に席に着き、姉と王妃のバトルが終わるのを待っていたエルミナも、席に着いた。

そしてそれと同時に、どこに隠れて見ていたのか、あまりにもちょうどいいタイミングで侍女が現れ、給仕に徹する。

その際、エルミナと目のあった侍女は、分かりやすいほどに、エルミナに同情の眼差しを向けていた。――さもありなん。

そして、お茶が入った後は、先ほどの水面下のバトルもなりを潜め、今度こそ、純粋なお茶会となった。

「ジャスリーン嬢、エルミナ嬢、あなたたちは、まだ結婚の予定は無いの？」

「残念ながら、アリサがもう少し大きくなるまでは、結婚は遠慮させていただいております」

「あら。相手の方は、何も仰らないの？」

にっこりと微笑みながら、そう告げる王妃。その目は、笑っていなかった。

ちなみに、ジャスリーンもエルミナも、家と同じ爵位の家の子息

と、婚約はしている。だが、アリサの体を考え、まだ結婚はしないようにしているのだ。もちろん、それは先方も承知の上である。

「アリサ嬢はまだ幼いからね。まだ、姉が恋しいだろうから、アリサ嬢が大きくなるまでは、結婚は止めておこうか」

これは、ジャスリーンの婚約者、エドアルド公爵家次男、シャーリットの言葉である。

「エルミナが結婚を躊躇う理由がよく分かる。だから、アリサ嬢が大きくなるまで、僕は待つよ」

そしてこれが、エルミナの婚約者、ジャカルテッド公爵家長男、ガイアスの言葉である。

二人して、結婚はまだ先でもかまわないと考えているらしい。ガイアスやガイアスの両親にいたっては、長男なのだから、早く跡継ぎが欲しいだろうに、アリサのことを考えて、まだ待ってくれている。

そんな両家に、ジャスリーンやエルミナのみならず、父も母も感謝していた。家と同じ爵位を持っている二人の婚約者。時々しか会えないが、二人は、婚約者を心から愛していた。

だが、だからと言って、そう簡単に結婚をするつもりは無いらしい。全ては、アリサをそばで見守るために。

――彼女たちの今の生きがいは、アリサの成長を見守ることなのだから。

優雅なお茶会（後書き）

１０／３１日、報告を受け、誤字の訂正をしました。

婚約者来襲

「ジャスリーン、エルミナ。明日、シャーリット殿と、ガイアス殿が来るそうだ。用意をしておきなさい」

王妃のお誘いから数日後、仕事から帰ってきた二人に、父は静かに告げる。その言葉に、ジャスリーンとエルミナは、嫌な予感を感じていた。

そして、その予感は、当たることになる。

「申し訳ない、ジャスリーン。王妃様に、君たちの説得を頼まれてね」

「すまないね、エルミナ。僕もシャーリットと同じなんだ」

二人の婚約者であるシャーリットとガイアスは、二人に居心地の悪そうな表情で、まずは謝罪の言葉を告げる。

そして、そんな二人に、ジャスリーンとエルミナは笑顔を見せた。その瞬間、冷たい言葉が二人の口から出てくる。

「そんな馬鹿なことをするなら、帰ってもらえる?」

「ガイアス。あなたもよ」

その言葉を告げたジャスリーンとエルミナの表情は、先ほどの笑顔はどこに行ったのかと問いかけたくなるほど、冷たかった。

ドーリス公爵家の客間に、冷たい空気が流れる。

その冷たい空気を取り払ったのは、将来の義兄に挨拶をしにきたアリサだった。

「こんにちは、シャルにいさま、ガイアにいさま。久しぶりに会え

て、うれしいです」

アリサがそう言って入ってきた瞬間、ジャスリーンとエルミナは、今の今まで纏っていた冷たい空気を取り払い、彼女たちの小さな可愛い妹を部屋に招き入れる。

そして、二人の間に座らされたアリサに、将来の義兄となる二人は、にこやかに挨拶の言葉を告げた。

「久しぶりだね、アリサ。今日は調子がいいみたいで、何よりだ」

これは、アリサにシャルと呼ばれた、シャーリットの言葉だ。

「まだその呼び方を覚えていてくれたんだね、アリサは。久しぶりにそう呼ばれて嬉しいよ」

これは、ガイアと呼ばれたガイアスの言葉である。

この呼び方は、アリサが三歳くらいの頃に初めて会ったときに、シャーリットやガイアスと言えず、二人から提案された呼び方である。

今のアリサは、きちんとシャーリットやガイアスと言えはするのだが、ずっとシャルとガイアなので、いまさら呼び方を変えられないらしい。

二人も、それを嬉しそうに受け入れた結果、アリサの二人の呼び方は、シャルとガイアという、愛称になっているのだ。

「シャルにいさまと、ガイアにいさまは、今日はどうしたんですか？　ねえさまたちに会いに来たんですか？」

「あー、うん。そうだねぇ。……そうだよね、ガイアス？」

「あぁ、そうだよ。ところでアリサ、寝ていなくていいの？　お願

いだから、無理はしないでね？」

ガイアスが言うと、アリサは「だいじょうぶです！　今日のアリサは元気なんです！」と力強く言うのだが、これ以上の無理は、姉である彼女たちが許さなかった。

ジャスリーンとエルミナは、シャーリットとガイアスに一言断り、メイドを呼び、アリサを預ける。

「きちんと、部屋で休ませておいてね」

「畏まりました。行きましょう、アリサお嬢様」

メイドは言うと、アリサの手を握り、アリサの速度にあわせて歩き始める。少しは抵抗の意思を見せていたアリサだったが、メイドが歩き出すと諦めたらしく、シャーリットとガイアスに「またきてくださいね」と声をかけ、メイドと共に、部屋へと戻っていった。

そして、それと同時に、ジャスリーンとエルミナの纏う気配は、アリサの来る前のそれに戻る。

「さて、シャーリット、ガイアス。あなたたちは、そろそろ帰りますか？」

「なら、馬車を呼んであげますよ」

今の二人の雰囲気には、絶対的に逆らえない。そう悟ったシャーリットとガイアスは、二人の言葉に従い、呼んでもらった馬車で自分の屋敷へ戻るのであった。

そして翌日。

「すまない、ジャスリーン。王妃様に、説得できるまで通いつめろと命令が下ってしまって……」

「お……怒らないでくれ、エルミナ。僕もシャーリットと一緒に呼び出されて、同じ命令を下されたんだよ」

ドーリス公爵家の客間には、この日もジャスリーンとエルミナの婚約者である二人がいるのであった。

――それを知ったアリサは喜んでいたが。

「シャルにいさま！　ガイアにいさま！」

二人の来訪を知らされたアリサは、走る。走って二人へ駆け寄る。そして、それについてきているカインは、面白くなさそうだ。

「お久しぶりです、シャーリット、ガイアス」

「久しぶり、カイン。今日はアリサの付き添いかな？」

「えぇ、まぁ」

カインはそう言いながら、早めにアリサを部屋に戻そうと、タイミングを計っていた。

アリサに、二人の目的である説得の内容を、アリサを王子の婚約者にしようという、王と王妃の考えを聞かせないためにも。

そして、タイミングよくアリサがくしゃみをすると、すぐにカインはアリサの手を取る。そして、額に手を当てた。

「あぁ、熱は無いみたいだけど、用心に越したことは無い。アリサ、部屋に戻って、安静にしていようね」

「だいじょぶなのに」

「そう言って、アリサは熱を出すじゃないか。ほら、戻るよ」

カインは、アリサの手を引き、客間から出て行く。少し渋ったアリサだったが、自分の体のことを一番よく知っているのは自身であ

るが故か、大人しくカインと一緒に部屋を出て行った。
その後は、もちろん、カインの手によってベッドに横にされ、毛布をかけられる。

「だいじょうぶなのに」

意外なところでしつこく根に持つアリサであった。

後悔　－ＲＥＧＲＥＴ－

最近、とうさまやかあさまのみならず、にいさま、ねえさままで一緒になって、私に必死で隠していることがある。それが何か分からないが、何故、そこまで必死で隠すのだろう。

私が幼いから？　でもそれなら、別に私が来た瞬間に話を止めなくてもいいと思う。どうせ分からないだろう、と言う考えで話を続けそうなのに。

とうさまたちが私に隠れていろいろと話をし始めたのは、王妃様から、ねえさまたちに招待状が来た頃からだ。

その頃から、ねえさまたちの婚約者でもあるシャルにいさまや、ガイアにいさまが家によく来るようになった。今までは、たまに顔を出しに来るくらいだったのに、最近は毎日のように来ている。

とうさまたちは、何を私に隠しているのだろう。知りたい。でも、教えてもらえない。

ねえさまたちが行った、王妃様主催のお茶会で、何かあったのかな？　でも、それなら私が聞いても問題はなさそうだから、却下。

じゃあ、シャルにいさまたちが最初に来たときに、何か言われたのかな？　……でも、それも私が聞いても何も分からないだろうから、問題ないよね。

……むー、何があったんだろう。元、登校拒否引きこもりのオタクには分からん。

何か悩んでいるのならば、五歳児の体ではあるが、少しくらいは相談に乗りたい。

何も分からないフリをして、愚痴くらいは聞いてあげたい。

だって、とうさまたちは、私にそう思わせるほどに、無償の愛を注いでくれた。

病弱な子供なぞ、公爵と言う立場の家では、迷惑ではないだろうか。

公爵家の子供は、いいところに嫁ぎ、子を生す役目があるだろうに、今の私の体では、恐らく、子を生すことは敵わない。

このまま成長すれば、間違いなく、子を産むことは私の命を削り、下手をすれば命を奪っていくだろう。

だから、それを考えれば、私は使えない子供のはずだ。

結婚によって関係を深めていく貴族。そこで、私はどう生きていけばいいのか。

ねえさまたちは、二人とも公爵家へ嫁ぐことが決まっている。だが、私は何も決まっていない。決められない。

子を生せるかも分からない使えない子供は、誰か貴族と婚約など、させられるはずも無い。

だから、私は貴族としては出来損ないだろう。

でも、とうさまも、かあさまも、にいさまたちも、ねえさまたちも、そんな私に無償の愛を注いでくれる。

体調を崩して寝込めば、付きっ切りで看病をしてくれる。

みんな、優しい。だから、わがままを言いたくなる。

わがままを言えば、受け入れてくれることもあったし、それが馬鹿なわがままなら、心から叱ってくれた。

ねぇ、私は、この国のことや貴族社会についてはよく分からないけど、話を聞くだけなら出来るよ。

――だから、思いつめないで。

私が邪魔だと言うのならば、私は喜んで姿を消すから。
無償の愛を注いでくれたあなたたちには、幸せになって欲しい。
だから、邪魔なら邪魔だと言って。出て行くから。
でも、邪魔じゃないのなら、邪魔になるまでは家にいさせて欲しいな。

私は、あなたたちを、心から愛しています。
前世の本当の両親のように、私は心から家族を愛している。

失いたくないけれど、あなたたちの幸せのためならば、私は喜んで失う悲しさを受け入れる。
だから、早く大きくなりたい。一人で家を出ていても怪しまれない程度に、成長したい。
今の私は幼すぎる。私が一人で外に出れば、兵に怪しまれて、家に戻されることは必須。
だから、早く大きくなりたいよ。

そして、私はあなたたちに迷惑を掛けないように、いつの日か、姿を消すことにする。

公爵家息女と言う立場なんていらない。
前世で一般人だった私は、市井に馴染むことは、そう難くは無いだろう。

ねぇ、神様。私、選択肢を間違えたかな。
生きたまま転生って、早まったのかな。
死ぬのを待って転生していれば、丈夫な体を持って生まれてこれ

たのかな。
そうしたら、私、出来損ないじゃなかったかな。

いまさら後悔しても、遅い。
あの日、私は選んだはずだ。第二の親となった叔父叔母を泣かせてでも、新たな人生を生きると。
そうして、私は死んだんだ。
違う。私じゃない。神埼有紗は死んだ。
私は、アリサ・クライシス・ドーリス。神埼有紗とは違う。

もう、神埼有紗という少女はいないのだから。

それが、私の選んだ道なんだ。
私は、自らの意思で転生する道を選んだ。
ならば、この道を精一杯行こう。

――たとえそれが、自分の首を絞める行為であろうとも。

思案

可愛いアリサが、最近ずいぶん思いつめているような気がする。元気に振舞ってるけど、どうみても、元気がないよ。

ある日、アリサの様子を見ていて気がついたらしいエルミナは、アリサ以外の家族全員にそれを告げる。

何かあったとき、家族全員でサポートに回れるように。アリサを不幸に突き落としたりしないために。

可愛いアリサ。生まれながらに病弱と言う枷を背負った、可愛そうな愛妹（娘）。

故に、家族は全員アリサを愛していた。アリサは自分たちが守るべきものだと、彼らはアリサが生まれてすぐに理解していた。

病弱で、何かあるとすぐに熱を出してしまう、可愛い妹。

熱が無いときは、遊んで欲しそうに、潤んだ瞳で見つめる可愛い妹。

そうして遊んであげると、とっても嬉しそうに微笑む、愛らしい妹。

故に、彼らはアリサに害を成すものを、絶対に許さない。

今のところはアリサは基本、家に閉じこもっているため、アリサに害を成そうとするものはいないが、仮に、アリサに何かあったら、ドーリス公爵家総出で害を成したものの排斥に向かうだろう。

ちなみに、この総出の中には、家族や騎士以外に、メイドたちも含まれる。

メイドも、病弱な主の末娘を、心から愛しているのだから。

だから、彼らは今日もアリサの部屋へ向かう。アリサから少しで

も不安を取り除けるように。
その思いつめているものを、どこかへ追いやれるように。

「アリサ」
「かあさま、にいさま、ねえさま」

母や兄弟たちがアリサの部屋を訪れると、アリサは微笑みながら彼らを受け入れる。
だが、その笑みは若干無理やり作っているようだった。
アリサをよく知らない者が見れば、普通に笑っているように見えただろうが、アリサが生まれてから五年間、ずっと見てきていた家族の目をごまかすことは出来なかった。

「アリサ、何を無理やり笑っているの？　辛いんでしょう？　辛いなら、無理に笑わなくていいの」

母は、そう言ってアリサの小さな体を抱き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。
抱きしめられたアリサの目には、少しずつ涙が溜まっていく。
そして、しばらく抱きしめられ続けていたアリサの涙腺は、ついに決壊した。

アリサの瞳からは、止め処無く涙が溢れ落ちる。

「ずっと泣きたかったんでしょう？　我慢しなくていいの、たくさん泣いちゃいなさい」

母が告げると同時に、アリサは声を上げて泣いた。どれだけ我慢していたのか、母たちが考えるほどに、アリサは思い切り泣き続けた。

それこそアリサの体力が切れて、泣き疲れて眠りにつくまで、アリサは母の胸で延々と泣き続けていた。

そんなアリサを見ながら、母は明日は侍医を呼ぶ用意をしておかなくてはと考えていたそうな。

アリサにとって、泣くことは時に、命を縮めてしまうことだと、ドーリス公爵家の者たちは全員よく知っていた。

だが、時には思い切り泣くことが、いい治療法になることだってある。

それを分かっているから、母は、アリサを泣かせた。泣かせて、アリサをその胸で受け止めた。

そうして泣き疲れて眠るアリサをベッドに横たわらせ、毛布を掛けた母は、子供たち全員に体質を促し、自身はアリサについておく。

仮に、魘されていたら、起こすために。

この子は、一体何をそんなにも思いつめていたのだろう。

何が、この子にあれだけ溜め込ませたのだろう。

母は、眠るアリサの寝顔を眺めながら、真剣にそう考えていた。

「本当に、何があったの？　アリサ」

母は、返事が返ってくることの無いのを分かっていながらも、静かにアリサに問いかける。

そうでもしないと、母には、五歳児がここまで思いつめる原因など、想像もつかなかったのだ。

それに、アリサは基本的に外の世界を知らない。外出の機会がほ

とんどないため、当たり前だが。だから、外の世界で何かを感じたわけではないだろう。
それ故に、何故そこまで思いつめるのか、母の思案は続く。

母は、娘の不安の種は、とことん取り除くつもりだった。それが、アリサを順調に成長させることになるのならば。
それは、母のみならず、父も、兄弟たちも一緒だ。だから、彼女たちはアリサを王子の婚約者にしようとした王に、とことん逆らった。
アリサを王子の婚約者などにして、精神的ダメージを受け、死期を早めないように。幸せに生きていけるように。

そうして秘密を抱かれていると言うことが、アリサに不安を与えていることを、母は知る由も無い。

そして翌朝。――――アリサは消えた。

抗えぬ別離

私の考えていたことは、かあさまや、にいさま、ねえさまに筒抜けだったらしい。

知られたのならば、消えなくちゃ。いなくならなくちゃ。このまま私がドーリス公爵家にいたら、迷惑をかけるだけだ。

だから、出て行かなくちゃ。

熱のせいで重たい体を引き摺りつつ、私はドーリス公爵家の私兵の目を盗み、屋敷を抜け出した。

体がだるい。でも、行かなくちゃ。迷惑になる前に、姿を消さなくちゃ。

少し動いただけで、かなり息が切れる。でも、早く、屋敷から離れなくちゃ。

あぁ、視界が霞む。相当熱が高いのか。でも、それでも。それでも、私は。

――――さよなら、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。

これは、抗えない別離だ。

＊＊＊＊＊

「旦那様っ！　奥様っ！　坊ちゃま方っ！　お嬢様方っ！　大変ですっ！　アリサお嬢様の姿が、どこにも、見当たらないんですっ！」

その日の朝、いつものようにアリサを起こそうと部屋に向かったシャーナが、まず、アリサのいないことに気がついた。

そして、ほかのメイドたちにも話し、屋敷中を探したのだが、アリサの姿は見当たらない。
結果、シャーナは急いで主たちに報告をしに走ってきたのであった。

「何故だ!?　何故アリサがいない!?」
「シャーナ、あなた、心当たりは無いの!?」
「その辺、探してくるっ!」
「兄さん、私も行く!」
「僕も行く。カイン、剣を持って来い。お前も一緒に行くんだ」
「当然。アリサは僕たちが見つけ出してみせる」
「なら、私も行かなくちゃ。行こう、兄さんたち」

そうして、子供たちは揃ってアリサの捜索に、街へ出て行く。そして、父は登城の用意をし、子供たちの職場にそれぞれ連絡をいれ、休みを取るのであった。
すべては、可愛い愛娘、アリサを見つけるために。

「ドーリス公爵殿。アリサ嬢は、将来の王妃です。国の兵を使って、アリサ嬢の捜索を行います。かまいませんね?」
「……――お願い、します」

苦渋の決断だった。それは、アリサが王子の婚約者であると公に発表するような行為ではあったが、私兵のみで探すよりは、国兵を投入してもらったほうが、アリサを見つけるのは容易くなるだろう。
急がなくては、手遅れになりかねない。アリサの今の体では、外の世界で生きることなど、絶対に出来はしない。

アリサに何かある前に、見つけなくては。取り戻さなくては。
あぁ、お願いだから、無事でいてくれ、アリサ。

＊＊＊＊＊

家を出て、家族との別離を果たした私ですが、今、熱がちょっとやばいみたいです。

今は街をふらふらしながら歩いているときに声をかけてきてくれた夫婦のお宅にお世話になり、ベッドを使わせてもらい、休んでいます。

「突然、ごめ、なしゃい。おじゃま、して」

「あぁ、あんたみたいな子がそんな言うんじゃないよ。ところで、あんたはどこの子だい？　一人で街を出歩くのは危ない。親御さんに連絡を入れてあげるから、言ってごらん」

「あの……えと……」

言えない。私がドーリス公爵家の末子だとは、口が裂けても言えない。なら、どう言うべきなのだろう。焦る。

そんなしていると、おばさんは優しく微笑んでくれる。

「あぁ、言い辛いんだね。でも、親御さんも心配していると思うから、早めに教えてもらえると嬉しいね」

「あう……。ごめなしゃい」

「いいよいいよ。今は、とにかく眠って、熱を下げるんだ」

「ありがと、ごじゃます」

うぅ、熱のせいだろうか、何も考えたくない。だるい。辛い。だから、今は眠ろう。お言葉に甘えて、ゆっくりと。

「――――あの服、どうみても貴族の子女だ。うまくいけば、身代

金をがっぽり取れるかもしれないよっ」
「しかし、あの子はどこの子か分からないだろう」
「この辺のあんないい服を着れる貴族は、公爵家しかないだろう。年的に、ドーリス公爵家の末っ子だ」
「そ、そうか。なら、公爵家に手紙を出そうか。娘の命が惜しければ、ってな」

身代金？　何で？　――私は、それ目当てでこうやって、ベッドで寝かされているの？
そのせいで、とうさまたちにまた迷惑をかけるの？　――イヤダ。逃ゲナクチャ。

私は、迷惑をかけるために家を出たんじゃない。幸せに生きて欲しいから、家を出たんだ。

逃げよう。私は、熱に魘され重たい体を引き摺って、あの夫婦にバレないよう、外に出る。
バレたら、とうさまたちに迷惑をかける。だから、逃げなくちゃ。

「あ、おい！　ガキがいないぞっ！」
「逃げたんだよっ！　探しておいでっ！」

私がこっそり抜け出して、家を離れた頃に、あの夫婦の叫び声が聞こえる。もう、気づかれたか。
なら、急いで逃げなくては。見つかる前に、ここを離れなくては。
そう思うのに、体はうまく動いてくれない。……この病弱な体が憎い。
それがたとえ、自分の選んだ道だとは言っても、こんなときくらいは、このくらいの悪態をついてもいいでしょう？　お兄さん。

「いたっ！」

その瞬間、そんな声が聞こえてくる。――あぁ、終わった。私は、とうさまたちに迷惑をかけることになる。

ごめんなさい、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。

「おっと、騎士様。私の知り合いの子が、何かしましたか？」

「貴殿の知り合いの子？　この子か？」

「えぇ。ですから、私が連れて帰りますよ」

「ほう」

気がついたら、私の後ろには騎士の人がいて、あのおじさんは、その騎士に、私が知り合いの子だと告げて、引き取ろうとする。

だが、騎士の人は、私をそのおじさんに渡そうとはしなかった。

「貴殿と我が妹の関係を、我が家で詳しく尋ねたいところですね。――捕らえろ」

その瞬間、どこからか騎士の人がたくさん現れ、おじさんを捕まえる。

そして、私の後ろにいた騎士の人は、しっかりと顔が見えるように制服を調える。

――――そこにいたのは。

「探したよ、アリサ。帰ろう？」

「セイ、にいさま？」

何でにいさまがここに、って、言うまでもないか。にいさまは騎士。市民の平和を守る、立派な騎士だ。

「心配した。外は危ないことがたくさんなんだよ、アリサ。だから、帰ろうね？」

にいさまは言う。だけど、戻れない。だって、私は私の意思で、貴族としての地位を捨てた。家族を捨てた。

そんな私が、大手を振って家に戻れるはずも無い。

なのに。それなのに。私の体は、私の命令を聞かず、深い闇に沈んでいった。

発見の喜び

セインがアリサを見つけ、優しく抱きしめて帰りを促すと、安心したのか、アリサは彼の腕の中で気を失う。

「その男を家へ連れて来てくれ。僕は、アリサのために馬車で早く家へ帰る。――家の私用に巻き込んで、すまなかったな」

「いいえ。妹姫が見つからないと、いつまでも隊長は使えませんからね。隊長を使える状態にするためには、必要な任務ですよ」

隊員は、頭を下げる隊長に笑いながら告げる。

セインの所属する近衛第三隊は、久しぶりの休養日だった。

いつも忙しい近衛隊。その中で、隊士は一時の急速を楽しんでいた――血相を変えたセインが駆け込んでくるまでは。

「アリサがいなくなったあぁぁぁぁぁぁああぁぁぁあ！！！！」

「た、隊長？　どうしたんです？」

「聞いての通りだ。アリサがいなくなった、頼む、一緒に探してくれぇえぇええ！」

「わわ、分かりました！　分かりましたから、落ち着いてください！」

そうして自分の隊の隊員を味方につけたセインは、隊員を導入し、アリサを捜索し、そうしてようやくアリサを見つけたのであった。

――あのおじさんが、アリサを連れて行こうとしたときは、本気で殺そうと思ったらしいが。

セインは、アリサを抱きかかえたまま馬車に乗り、早馬を飛ばし、家に、アリサの発見を伝える。

それと同時に、王にも連絡をいれ、国兵の導入は必要ない旨を伝えた。

それに、家族一同、ホッとしたことは、最早言うまでもない。王に借りを作らなくてよかった。アリサを王子の婚約者と、暗に認めることにならなくてよかった、と。

そして、セインが家に帰ると、玄関には家族と、メイド、執事など、全員が揃っていて、アリサの無事を確認していた。

「母さん、侍医呼んで。アリサの熱が高い」

「もう、来ています。あぁ、確かに、かなり熱が高いようですね。セイン坊ちゃま、アリサお嬢様をお部屋へ」

セインは侍医の指示に従い、アリサを抱きかかえたままで、アリサの部屋へ向かう。その後ろには、家族やメイドたちがぞろぞろと続く。

そして、アリサの部屋に着いたセインは、アリサを起こさないよう、そっとベッドに下ろした。

「では、診察をさせていただきますので、申し訳ございませんが、男性の方々はしばし、部屋の外にてお待ちください」

侍医の言葉に、父や、ルウィン、セイン、カイン、そして執事は部屋を出て行く。部屋に残ったのは、母と、ジャスリーン、エルミナ、シャーナだけだ。

シャーナ以外のメイドたちも残りたがっていたのだが、父が多くいすぎても、邪魔になる。そう言って、下がらせたのである。

そして、男性が完全にいなくなったことを確認した侍医は、アリ

サの服を捲り、肌を露出させる。そしてその後、怪我などはないかしっかりと調べて行くのであった。

「怪我をしている様子もありません。ただ、相当無理をしたのでしょう。熱が高いです」

確かに、ベッドに横たわるアリサの息は荒く、熱が高く、辛いことが見て取れる。そして、それを聞いた母は、思い出したかのように、侍医に告げた。

「以前王宮医師の方に頂いた座薬、まだ使えますか？」

「あぁ、そんなものがありましたね。まだ、そこまで経っていませんから大丈夫でしょう。……入れましょうか？」

「お願いします」

母はそう言って、メイドを呼び、座薬を持ってくるよう指示する。同時に、心からアリサが目を覚まさないことを祈った。

恐らく、今目を覚ますと、具合が悪かろうがなんだろうが暴れることは必須だ。

しばらくして。

薬が効いてきたのか、アリサの呼吸が先ほどと比べると、若干マシになっている。それを確認した侍医は、いつものように薬を置いて去っていった。「容態が急変しましたら、お呼びください」と言い置いて。

それからは、父や兄もアリサの部屋に戻り、ずっとアリサを見守った。時折額に置かれたタオルを交換してやりながら。

それから、アリサが目を覚ましたのは翌朝だった。

「ん……ぅ……」
『アリサ！』
「え……？　とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま？」
目を覚ましたアリサに、徹夜で付きっ切りだった家族は、嬉しそうに声をかける。
最初は寝ぼけ眼だったアリサだったが、不意に、今まで家族の見たことのないような表情に変えた。それは、有紗の表情だった。
「アリサ、どうしたの？　まだ辛い？」
「……ごめんなさい」
「アリサ、謝らないで。かあさまたちは怒っていないから。ね？」
「……ごめん、なさい」
ごめんなさい、ごめんなさい。アリサは、ずっと謝罪の言葉を重ね続ける。
家族が、何度謝らなくてもいいと言っても謝罪を続ける。その表情は、やはり家族の誰もが見たことのない表情で、何を考えているのか読めない表情だった。
そして、いつまでも謝ることを止めないアリサを、母が無理やり黙らせた。母は娘をぎゅっと抱きしめたのだ。
「アリサ。謝らなくてもいいから、どうして出て行ったのか、教えてくれる？」
「私が……邪魔だったから」
アリサが言うと、家族たちは全員、何のことだ？　と首を傾げる。
「とうさまたちが幸せに生きるには、私は邪魔（出来損ない）だから、出て行った」

「アリサ、誰が、君に出来損ないなんて言った？　言って、アリサ。――殺す」

アリサの言葉に、まずカインが切れた。それにセインが続き、二人揃って剣を抜き、今すぐにでもアリサを陥れようとした馬鹿を殺しに行きそうだった。

ここでは、アリサがいるので剣を抜くことはしないのだが。

「誰にも言われてない。私が、一人で考えた」

「アリサ、どうしてそう言う考えに至ったのか、教えてくれるかい？」

父の問いに、アリサは静かに口を開く。今まで、ずっと溜め込んできていたことを、静かに吐き出す。

「だって、貴族は結婚で、家同士のつながりを強くするんでしょう？　でも、私は結婚しても、子を生せない。ならば、結婚自体出来ない。つまり、つながりを作れない。――これを、出来損ない以外に、何ていうの？」

これが、アリサがずっと悩んできたこと。家族が自分に隠し事をしている理由を漁ろうとして、分かってしまったこと。

それが、今までアリサを苦しめてきた。自分の存在が、家族の幸せを奪っていると。

だから、逃げだした。これ以上、邪魔にならないように。

「だから、出て行ったのに」

アリサが言った途端、母の、アリサを抱く力が強まる。アリサの目に、涙が溜まり始めていた。

「かあさま……、痛い……」

アリサが訴えても、母はアリサを抱く力を弱めようとしなかった。

ただただ、もう離さないように、強く抱きしめ続けた。

娘の心

アリサの告白を聞いた家族は、真剣に思案していた。何故、五歳のアリサがそこまで考えていたのだろうかと。

彼らの娘、アリサは、まだ生れ落ちてから五年少々しか経っていない。普通の子供なら、そんな考えを抱くこと自体、ありえないはずだ。

事実、彼らの上の子供たちが五歳の頃は、兄弟年が近かったので、勉強のないときはとにかく遊んでばかりだった。

しょっちゅう問題を起こし、叱ってばかりだった。

だが、アリサにはそれが殆どない。体が弱く、遊んだり勉強をしたりと言うことが出来ないせいだろうと、今までは考えていたのだが、先ほどのアリサの言葉を聞いて、考えを改めた。

アリサは、自分たちが思っている以上に賢く、優しい。優しすぎるくらいに、優しいのだ。

現在、アリサは再び眠りについている。母が力強く抱き続けていたせいで、疲れ果ててしまったためだ。

故に、彼らはそんなアリサを見守りながら、話をし、思案していた。

「アリサは、賢すぎるんだね」

「だから、何度も勉強を強請ってたのか」

もっと、学を得て、早く自立するために。家族の枷にならないために。

それでも、彼らにとってアリサは可愛い愛娘で、可愛い妹で。た

とえアリサが自分の意思で離れることを選んだとしても、彼らがそれを許すことはなかった。
次に、アリサが家を出たとしたら、彼らは全力で捜索し、そして、見つかった後は完全に家に閉じ込めるだろう。それこそ、軟禁だ。

彼らは、そうまでするほどに、アリサを愛しているのだから。
当のアリサは、自分がそこまでされるほどに愛されているとは思っていないが。

「とにかく、これからはアリサが出て行かないように、アリサは必要な存在なんだって、分からせなくちゃ」
「でも、どうするのさ？」
「今まで以上に、かまって、可愛がればいいんじゃない？　そうすれば、私たちがアリサを愛してるってこと、分かってもらえると思う」

家族は、ジャスリーンのその言葉に、心から同意した。
そして、この日から家族はアリサとふれあう機会を増やし、アリサを愛し続けていくのであった。

そして、お昼時。アリサを起こすこのときから、先ほどのジャスリーンの言葉は、実行されていた。

「アリサー、お昼だよ。朝ごはんも食べてないんだから、お昼は食べようねー？　ほら、起きて」
「アリサ、起きなさい。ごはんを食べないと、お薬飲めないでしょう？」
「ん……んぅ……」

アリサが目を覚ますと、そこでは、家族全員が揃っていて、アリ

サの食事の補助をしようとしていた。
それを見たアリサが、びっくりして目を丸くさせたのは、最早言うまでもない。

「はい、アリサ。あーん」
「かあさま。自分で食べるから、いいよ」
「いいから。はい、あーんして」

今の母に何を言っても無駄だと判断したアリサは、大人しく口を開く。
すると、母は微笑みながらアリサに食事をさせ始めた。その笑みは、嬉しそうだ。
そして、薬を飲んだ後、アリサは、家族のほうを見て、告げる。

「とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。私の話を、聞いて欲しい」

それは、いつものアリサの話すスピードとは違い、子供速度ではなく、大人速度だった。家族は、まずそのことに驚く。
だが、次にアリサの口から放たれた言葉は、その驚きを遥かに凌駕した。

「私は、前世の記憶を持った転生者だ」

私の前世の名前は、神埼有紗。名前は、今と同じだね。前世では、身分制度のない日本って言う国に住んでた。
楽しかったよ。――――十歳までは。

「十歳までは、って、十歳のときに何かあったのか？」

カインが尋ねると、アリサの、いや、有紗の表情は歪んだ。そのまま、告げる。

「実の両親を、事故で亡くした」

「……ごめん、アリサ。無神経だった」

「いいよ、カイにいさま。紛れもない真実だから」

その後、私は十五歳のときに、事故に遭った。十歳のときの事故よりも、タチの悪い事故。

私は、事故に遭い、意識不明の重体まで陥った。そのとき、神様に会った。

「生きたまま、転生してみない？」

軽い雰囲気で言われたから、最初は冗談かと思ったけど、彼は本気で、私も新しい人生を送れるのなら、転生するって答えた。

でも、生きたまま転生するわけだから、対価もあった。それが、この病弱な体。

一つの魂が二つの体を持っているわけだから、自動的に、この体は弱くなった。

「そのときに、死ぬのを待っていたら、出来損ないじゃなかったかもしれないね」

そう告げるアリサの表情は悲しげで。それを聞く家族の表情も悲しげで。

みんな、悲しそうで。

「でも、私がアリサ・クライシス・ドーリスであることに代わりはない。でも、……とうさまたちが、こんな子供イヤだっていうなら、

私は出て行くから。そのときは、遠慮なく言って」

アリサがそう言った瞬間、家族は動いた。みんなで争うように、アリサを抱きしめたのだ。

そして、次々に口を開く。

「馬鹿なことを言うな、アリサ。アリサは、一生私たちの子だ。いらないなんてこと、あるはずがない。大切な、私たちの宝物」

「とうさまの言う通りよ、アリサ。私たちは、あなたを心から愛している。どこにも行ってほしくない。もちろん、出て行くなんてもってのほかですからね」

「今まで、ずっとそうやって悩んできたのか？　相談してくれればよかったのに。僕らは、君の兄なんだからね」

「兄さんの言う通りよ、アリサ。今度からは、行動に移す前に相談してちょうだいね」

「全くもう。アリサ、僕が君を見つけたとき、どれだけ安心したと思ってるの。今度からは、あんな心配、かけないでくれよ？」

「セインにぃの言う通りだ。君が見つかったと聞いて、どれだけ安心したと思ってる？」

「だからね、アリサ。私たちは、アリサを使って身代金を取ろうとした馬鹿、絶対に許さないからね？」

父や母、兄たちの言葉に涙ぐんでいたアリサだったが、最後のエルミナの言葉を聞いて、その涙は引っ込んだ。

自分に親切にし、家に連れ込み、身代金を奪おうと話していた夫婦のことを思い出したのだ。

「とうさま、かあさま、あのおじしゃ……っ、おじさんたちは？」

舌噛んだ。痛い。やっぱり、いつもみたいにゆっくりが話しやす

いや。そう言うアリサの頭を、家族は全員で撫でる。
やはり、そのほうがいつものアリサのようでいいと。

そうして、アリサを誘拐しようとした馬鹿のことは、アリサに話そうとしない家族だった。

愚者の召喚

アリサの告白を聞いて、数年のときが流れた。
ある日、父は城へ行き、査問会へ出席していた。その席には、宰相補佐であるルウィンも同席している。
その査問会から帰ってきた父の表情は、暗い。
「とうさま、どうしたの？　大丈夫？」
アリサが問いかけると、父は、優しく微笑みながら己の心配をするアリサの頭をくしゃりと撫でる。そして、口を開いた。
「それは、ご飯の時間に話してやろう。全員に、聞かせねばなるまい」
そして、その日の夕飯時、父は、査問会のことを告げた。――査問会で起こった、問題を。
「謀反の疑いがかかっていた伯爵が、召喚術を使い、召喚獣ではなく、人を召喚した」
父のその言葉に、その場で召喚された少女を眺めていたルウィン以外の人間が、驚きに目を見張らせる。
――――但し、アリサは回りに合わせて驚いただけで、実際は何のことかよく分かっていなかったが。
「謀反自体が大罪だというのに、召還と言う大罪まで重ねれば、伯

爵は死罪は免れんだろう。まぁ、それはどうでもいいとして」

いいのか。瞬時にアリサは心の中で突っ込む。

一応、仮にも元平和な国、日本国民であるアリサは、死刑とか、そういう危ない言葉に縁はなく、はっきり言って、そんな言葉を聞くのが、嫌いである。

故に、父のそのあっさりとした物言いに、少し引っかかりを覚えたアリサであった。

「問題は、召喚された少女にある。彼女は、この国ではありえない魔術を使って、伯爵を捕らえるのに貢献してくれた。だが」

「だが、何です？」

「――――今現在、生死の境を彷徨っている」

父のその言葉に、またも、ルウィン以外が目を見張らせた。そして、子供たちは同時に「何で？　どうして？　伯爵が何かしたのっ!?」などと、父につめかかる。

そんな子供たちに、父は、静かに答えた。

「少女は、召喚されたときは、既に胸元が血まみれだった。アレグラ殿曰く、あの状態で動き回り、魔術を使っていたこと自体、奇跡だと」

またも止まったドーリス侯爵家の人間たち。その中で、比較的早くまともに戻ったのは、エルミナだった。

「あぁ、だから、アレグラさんから魔力増強剤の作成注文が来たのか」

「その通りだ」

ちなみに、アレグラとは、王宮医師であり、今はアリサやエルミナ、ジャスリーンの主治医として働いている侯爵家の息女である。
数年前まで、アリサの侍医は公爵家付きの医師だったのだが、成長に伴い、医者とは言えど、異性に肌は見せないほうがいいだろうという父の判断の元、医者が代えられた。
まぁ、その侍医は今も父やルウィン、セイン、カインに何かあったときに、すぐに駆けつけ処置をしているが。

「それで、その少女が無事だった場合だが、もしかしたら、家が後見人になるかもしれない。――――かまわないか？」
「かまいませんよ。ところで、その少女はいくつなのです？」
「正確な年は分からないが、見た目で考えれば、アリサと同じくらいだろう」

父がそう言うと、アリサは目を輝かせる。そして、父を見て言う。

「なら、その子、私の友達になってくれるかな？」
「あぁ、年も近いだろうしな。そのときは、仲良くしなさい」
「うん」

そう答えるアリサは、本当に嬉しそうだ。そんなアリサに、家族もほんわりとした気分になる。
そして、それに耐えかねたジャスリーンが、アリサを思い切り抱きしめた。

「あーもう。アリサってば可愛いんだから！」

むぎゅー。ジャスリーンは、最愛の妹を抱きしめ続ける。アリサもそれが嬉しいのか、にこにこにこにこと笑いっぱなしだ。
それを見つめる兄弟の目が、優しいものであることは、絶対にあ

りえない。

「アリサ。僕のところにもおいで」
「ルゥにいさま」

ルウィンが言うと、アリサはジャスリーンの腕から逃れ、今度はルウィンの腕の中に納まる。そして、ルウィンはそんなアリサに頬ずりをする。

「ルゥにいさま、お髭、痛いよ」

アリサはそうは言っているが、顔は笑っている。痛いというよりは、こしょぐったいのだろう。

そしてもちろん、それを眺める兄弟の目は、剣呑である。

「アリサ。次、僕ね」
「セインにぃずるい。アリサ、僕だよね？」
「うるさい。アリサ、こっちおいで」

結果、まだアリサを抱きしめていない下三人で、アリサ争奪戦が始まったのであった。

家族は、アリサが前世の記憶を持ったままで転生したからといって、態度を変えることをしなかった。

寧ろ、今まで以上にかまい、可愛がるようになった。――まぁ、これはジャスリーンが言ったことでもあるが。

アリサは、それが嬉しかった。自分の精神年齢が見た目よりも上であることを知られ、今までどおりには過ごせないだろうと考えて

いたのに、家族は、いたっていつもどおり、今までどおりに過ごしてくれた。
それが、どれだけ嬉しかっただろうか。

私は、神埼有紗ではなく、アリサ・クライシス・ドーリスだと、しっかりと教えてくれた。

だから、アリサも態度を変えず、今までどおり、小さい子供として振舞う。たとえ、それが振舞いではなく、本気だったとしても。
だから、アリサはいつものように兄弟に抱きつく。優しく抱きとめてくれる腕に、安心して飛び込む。

『アリサ』
「にいさま、ねえさま。だぁいすきっ」

だから、ずっと一緒にいてね。アリサは、兄たちには聞こえないよう、小さく呟くのであった。

召喚獣との対面（前書き）

ごめんなさい。
やっちゃいました♪

言の葉のチカラのキャラが出てきます。
同様に、言の葉のチカラの方ではアリサたちが出ます。

こちらはアリサ主体の話、
あちらはアキラ主体の話となっております。

よろしければ、言の葉のチカラのほうもどうぞ。

召喚獣との対面

謀反人（愚者）が人間を召喚した数日後、その召喚された少女は、ドーリス公爵家で引き取るのではなく、クレメンス侯爵家で引き取られることが決まった。

それを聞いたアリサはつまらなさそうな顔をしていた。やっと、同じくらいの年の友達が出来ると思ったのに。侯爵家に召喚された少女が引き取られることが決まって以来、アリサはしょっちゅうそう呟いている。

そんな、連日の気の沈みが原因だったのだろうか。突然、アリサは高熱を発した。

「アリサ、大丈夫？　今アレグラを呼んだからね」
「かあさま……、熱い。脱いでもいい？」
「だぁめ。きちんと着ていなさい。いいね？」

熱い熱いと呟くアリサ。だが、母の許可を取らずに脱ごうという考えには至らなかったらしく、今は、きちんと着込んでいる。

その後、つまらなそうな顔をしたアリサの基に、アレグラと、その後ろにアリサと同年代くらいの年頃の少女が現れる。

アリサの部屋を訪れたアレグラは、まず、アリサの診察を始めた。

「今日は、どんな調子ですか？」
「熱い。だるい。何もしたくない。……ところで、後ろの子が」
「それは診察が終わってからにしましょうね。さ、胸を出してくださいね」

アレグラの質問に答えながらも、アレグラの後ろの少女に興味を隠せないアリサ。だが、アレグラはそんなアリサをあっさりと黙らせて、しっかりと診察にかかる。

「はい、いいですよ。では、いつものように薬を出しておきますから、きちんと飲んでくださいね？　飲まなかったらいつまでも熱は下がりませんからね」

「分かってますー。で、後ろの子は？」

熱に魘されていながらも、アレグラの後ろの少女への興味は一切薄れなかったらしい。アリサは目を輝かせて尋ねる。

アレグラはそんなアリサに苦笑しながら、少女をそばに呼んだ。そして、紹介をする。

「この子は先日よりうちの家族になった、アキラです。アキラ・モガミ・クレメンス。年は同じですね。アキラ、自己紹介を」

「アキラ。よろしく」

「初めまして、アキラ。私はアリサ・クライシス・ドーリス。横になったままの紹介で悪いけれど、調子が悪いから容赦して欲しいな」

「気にしてない」

「ありがと。で、年、同じなんだよね？　私、今まで年が同じ友達っていなかったから、仲良くして欲しい」

アリサが言うと、アキラは完全に黙り込む。そんなアキラの代わりに、アレグラが返事を返す。もちろん、アキラの口を、アリサに分からないように塞いだ上で。

「もちろんです。私からもお願いします。仲良くしてあげてください」

「うん。ありがとう、アレグラ。よろしくね、アキラ。私のことは

アリサって呼んでね」
「……」
「さぁ、そろそろお休みください。元気になりましたら、またアキラを連れて遊びに来させていただきますから」
「ホント!?　約束だよ、アレグラ」

アリサが嬉しそうに言うと、アレグラはにっこりと微笑み、そして、アリサの診察に使用したものを片付ける。
その後は、始終無表情だったアキラの手を引っ張り、ドーリス公爵家を出て行った。

そして、それからアリサはアレグラの言うことに従い、休むことにしたらしい。目を瞑り、呼吸を落ち着ける。
その数十分後、母が様子を見に来てみると、そこには健やかな寝息をたてて眠る末娘の姿があったそうな。
母は、そんな娘の寝顔を眺めに、静かに部屋に入る、のだが、その僅かな音で、アリサは目を覚ましてしまったらしい。そこには、寝ぼけ眼の娘がいた。

「かあしゃま？　ど、したにょ？　も、ごひゃん？」

完全に寝ぼけているアリサの舌は、回っていない。母は、そんなアリサを可愛いと思いつつも、「何にも無いから、アリサはもう一度休もうね」と言って、娘を寝かしつけるのであった。

「ほーら、アリサはいい子ね。だから、しっかり休んで、早く元気になりましょうね」
「ん……、すぅ」

そうして再び寝入った娘の寝顔を、今度こそ母はゆっくりと眺め

るのであった。

数時間後。

シャーナが控えめにアリサの部屋の扉をノックし、昼食の支度が完了したことを伝える。それを聞いた母は、容赦なくアリサを起こした。

「アリサ。お昼ごはんの用意が出来たらしいから起きなさい」

「むー……」

「きちんと食べて、お薬飲んだらまた寝ましょうね。だから、今は起きなさい」

母のその言葉に、アリサは目をこすりながら、ぼんやりと起き上がる。その目は、まだ開かれていないが。

「アリサ？　きちんと起きてる？　目が開いてないよ」

「んー、だって、眠たいもん」

アリサはそう言いながらも、フラーっと横向きに倒れかけている。そんなアリサを急いで支えた母は、アリサを無理やり起こす手段に出たらしい。

母は、アリサの額に乗っていたタオルを、再び水に浸し、絞り、そして、それをアリサの首筋にべったりと当てた。

「ひゃっ！」

冷たいタオルが首筋に当てられた瞬間、アリサは変な声を出して、体を起こす。その目は、しっかりと開かれていた。

「よし、きちんと起きたわね。さ、ご飯食べましょうね」

「かあさま、強硬手段に出すぎ」
「アリサが起きないのが悪いの。はい、お昼」
アリサは礼を言って昼食の入った器を受け取り、スプーンで掬い、食べ進めていく。
だが、今回もやはり、半分も食べることなく、もういいと言って母に器を返した。

ちなみに、アリサがいつも食べないからと言って、量を減らすことはしない。何故か。量を減らせば、減らした分の半分すら食べなくなるからだ。
以前、母の指示で量を減らしたときがそうだったのだ。

よって、それ以来ドーリス公爵家のメイドたちは、アリサの体調が悪いときの食事の量は一定とするようにしているのであった。

「はい、お薬飲みなさい」
「うえー、やっぱ苦いー」

いくつになっても苦い薬。そんなものも、あるだろう。アリサの飲む薬が、実際そうである。成長に伴い味覚も変わってくるため、少しくらいは苦味が抑えられるかと思えばそうでもなく、アリサの風邪薬は、今尚一定の苦さを保っていた。
そうなったアリサが、次に甘いものを求めたことは、言うまでもない。
そして母は、そんなアリサのために、あらかじめホットハチミツミルクを用意しておいてやるのであった。

仲良きことはよいことかな

そしてアリサの熱が下がってから数日後、父や母に頼み、クレメンス侯爵家に連絡を取ってもらったアリサは、自分と同い年他と言う少女―アキラ―の到着を今か今かと待っていた。

その目は、輝きに満ち溢れている。そして、母や、この日ちょうど休みだったジャスリーンは、そんなアリサを微笑ましい目で、そして、心配そうな目で見つめていた。

微笑ましげな視線は、アリサを可愛いと思うが故に、心配そうな視線は、興奮したアリサが、熱を出さないかと言う、心配からだった。

そうしていると、メイドが来客を伝える。来客は、アリサの待ちに待った客だった。

「お招きに預かりまして、クライシス侯爵妹、アレグラとアキラ、貴家を訪問させていただきました」

「そんな堅苦しい挨拶はやめてちょうだい、アレグラ。今回は家が呼んだんだから」

そう言った母は、その後、アリサの方を見て、口を開く。

「アリサ。アキラ嬢と、アリサの部屋で遊んでなさい」

「うん！　行こう、アキラちゃん」

アリサは母の言葉に目を輝かせ、アキラの手を取り部屋へ向かう。

そんなアリサに、母やジャスリーンは、「無理はしないようにねー」と、後ろから声をかけるのであった。

そして、アキラを連れて自分の部屋に来たアリサは、前置きも吹っ飛ばして、自分の疑問に思っていたことを問いかけた。
それは、アキラにも衝撃を与えるもので。ほかの人に聞かれれば、ほかの人もかなり驚くことであった。

「アキラちゃん。日本って言う国、知らない？」

アリサの言葉に目を見張らせ、動きを止めたアキラ。それが、アリサにとっては答えとなったらしい。

「やっぱりね。じゃあ、モガミっていう漢字はこうかな？」

アリサはそう言ってそばにある紙を取り、漢字を書く。『最上』と。
そして、少しして正気に戻ったアキラは、剣呑な目つきでアリサを睨む。そして、口を開いた。

「何で、それを知ってる」
「……私が、前世の記憶を持った転生者だから」

私の前世の名前は神埼有紗って言って、どこにでもいるような子供だったよ。
で、十歳のときに事故で両親を亡くして、私は十五歳のときに事故で死んだ。

本来は意識不明で、生きている状態で転生を果たしたのだが、アリサはそこは伏せるつもりらしい。そのまま続ける。

それで、この世界に転生したんだよ。見ての通り、アリサ・クライシス・ドーリスにね。まぁ、体は病弱だけど。

――ねぇ、アキラちゃん。本当の年齢は、いくつ？　日本では十歳はそんなに大人びてないよね。本当はいくつなの？

アリサが問いかけると同時にアキラを見てみると、アキラは涙を流していた。その様子に、アリサが焦ったことは言うまでもない。

「あ、アキラちゃん？　どうしたの？　えっと、一応ごめん？」

泣き出すアキラに、アリサはおろおろとしながら、とりあえず謝り、そしてタオルを差し出す。アキラは何も言わずにそのタオルを受け取り、目から伝う涙をしっかりと拭った。

その後、ゆっくりと口を開いた。

「謝らなくていい。いや、違う。寧ろ、私が悪い。で、何で、分かった？」

「言ったでしょ？　私は、元日本人。日本人の年くらい、大体予想はつくよ」

「なら、いくつくらいに見える？」

アキラが尋ねると、アリサは淡く微笑みながら、思案する。そして、少しして答えが出たらしい。口を開いた。

「うーん、私の死んだときがそんな感じだったから、十四・五ってところかな？」

「あたり。十五だ」

アキラが答えると、アリサは自分の考えがあたっていたことが嬉しいのか、優しく微笑む。そして、アキラの手を、優しく握る。

そんなアリサに、アキラは反射的に手を引くのだが、アリサは引かれた手を追いかけて、しっかりと手を握った。

「……っ離せ！」
「やーだ♪　精神年齢お姉ちゃんである私の言うことは、聞いてね？」

ちなみに、アリサの精神年齢（アリサの勝手な判断）は、事故に遭ったときの年齢プラス今の年齢。つまり、二十五歳となる。
つまり、現在進行形で十五歳であるアキラよりは、確かに姉となり得るのである。まぁ、実年齢は十歳であるため、アキラよりは年下となるのだが。

「そんなもん、知らない！　離れろ！」
「……ねぇ、アキラちゃん。日本で、何があった？　私の死んだ後に、日本は何か変わったの？」

特に、子供に対するまわりの接し方とか。そう続けるアリサに、アキラは目を見張らせる。
アリサは、日本で私に襲いかかったことを、知っているのだろうか、と。――もちろん、アリサは知らない。単純に、アキラの反応を見て予想をしているだけだ。
それでも、アリサはアキラの反応を見て、その予想は当たっていたと考える。

「本当に、何があったのさ」

アリサはそう言いながらアキラを抱き寄せた。アキラは嫌がるのだが、アリサは無理やり抱きしめた。
アキラが本気で抵抗すれば、病弱なアリサなど、簡単に振り払えるだろうに、アキラはそうしなかった。
――アキラは、アリサを信用し始めていた。

そして、それ故か、アリサの胸の中でアキラは思い切り泣き始めた。そんなアキラを、アリサは優しく見守る。

何かを言うわけではなく、何かをするわけでもなく、ただただ、見守り続けた。

そしてしばらくすると、泣き疲れたアキラは寝入ってしまう。そんなアキラをベッドに運ぼうとするのだが、アリサの力では、それは出来ない。

誰かを呼びに行こうにも、今アリサがアキラの元を離れると、アリサに寄りかかっているアキラは、倒れ落ちることになる。

……どうしよう。本気で考えるアリサだった。

そうしていると、ちょうどよく帰ってきたルウィンがアリサの部屋を訪れる。

ナイスタイミング！　本気でそう心の中で呟くアリサに、ルウィンは不思議そうな顔をする。

だが、妹の腕の中で眠る少女を見て、合点がいったらしい。何も言わず、静かにアキラを抱き上げた。

「で、客間に運ぶかい？　アリサ」

「ううん。私の部屋に寝かせてあげて」

そうして寝かされたアキラの寝顔を、アリサはしばらく微笑みながら眺めるのであった。

その結果、放っておかれたルウィンが分からないように拗ねたそうな。――――何とも言えない兄である。

家族とのふれあい

そして、アキラが戻ってこないことに心配したらしいアレグラが、母やジャスリーンと共にアリサの部屋を訪れると、アキラはアリサのベッドに寝かされていて、その横で、アリサがベッドに突っ伏して眠っていた。そんなアリサには、毛布がかけてある。

毛布をかけてやったのは、ルウィンらしい。アリサが眠ったのに気づくと同時にメイドに指示を出し、毛布を持ってこさせ、アリサに掛けたのである。

ついでに、そのルウィンも、椅子の上で眠っていた。仕事で疲れたせいなのか、アリサがかまってくれなかったのが面白くなかったのか、真実を知るのはルウィンただ一人である。

そして、アリサの部屋に足を踏み入れた母とジャスリーンは、まずはアリサを起こすことにしたらしい。優しく声をかけ、体を揺らす。

「んぅ――っ」

起こされたアリサは、そんな声を上げるのだが、完全に起きてはいない。一度頭が上がったのだが、またすぐに落ちた。

母とジャスリーンは、そんなアリサを起きるまで、徹底的に起こす。起こし続ける。

「アリサ、起きなさい」

「ほら、起きて」

そうやって起こされたアリサは、目をこすりながらも、何とか目

を覚ましたらしい。――またすぐに寝そうではあるが。

そしてその後、今度はアレグラがアキラを起こす。

「アキラ、起きてください。帰りましょう。アキラ？」

そうして、アレグラの手がアキラに触れた瞬間、アキラは飛び起きた。完全に熟睡しているときは、ルウィンが抱き上げても何の反応も見せなかったというのに、半覚醒状態では、見事なものである。

「起きましたね、アキラ。あぁ、そんなに殺気を放とうとしないでください。帰りましょう」

「……いきなり、触るな。――気持ち悪い」

アキラはそう言いながらも、起きた後はアレグラが触れても何の問題も無いらしい。そのまま、支えられたまま、アレグラが母に礼を述べ、そして、帰っていった。

そしてその後は、ドーリス公爵家、家族団らんの時間である。ジャスリーンと母は、ソファーに腰掛け、アリサにも座るよう促す。もちろん、席は二人の間、真ん中である。

「アリサ、クレメンス侯爵家の養子はどうだった？　仲良く出来そう？」

「うん。可愛かったよ♪」

「可愛かった？　アリサ、あの子と何してたの？」

「お話ー。いろいろ話したよ。で、途中で疲れて寝ちゃったの」

何をしていたのか尋ねられ、しっかりとごまかし、アキラが泣いたことを二人にバレないよう、しっかりと画策するアリサであった。

そして、背顔の裏にあるアリサのそんな考えに、アリサ大好き二人は全く気がついていない。してやったり。心の中で呟くアリサであった。

そうしていると、椅子に座ったまま眠っていたルウィンが目を覚ます。目を覚ましたルウィンは、二度三度左右を見渡し、それでここがどこか合点がいったのか、にっこりと微笑む。

そして、ルウィンは母やアリサ、ジャスリーンの座るソファーの対面の席に腰掛ける。ルウィンもアリサと話がしたいのである。

「おはよー、ルゥにいさま。よく眠れた？」

「あぁ。久しぶりによく寝たよ」

「兄さん、最近ずっと遅くまで起きてるでしょ？　そのせいだよ」

「最近は仕事が多くてな」

ちなみに、その仕事とは、アキラを召喚した伯爵のしてきたことの洗い直しや、アキラのこれからのことをまとめられたものをクレメンス侯爵家から回収し、それを見直すこと、などだ。

この仕事は、王にも同様に割り振られているし、宰相にも割り振られている。つまり、今現在、国のトップスリーは、全員無駄に忙しい状態である。

王は、宰相や宰相補佐であるルウィンが目を通し、まとめたことに再び目を通し、大丈夫そうならサインをし、宰相は、王命に従い、伯爵の領地を調べ、伯爵と繋がっていたものを調べたりとしている。ルウィンはその補佐である。

そして、ルウィンはそれとほかに、アキラのこれからについてのことを、任されていた。その結果が、遅くまで仕事をする、というこのになるであった。

「ルゥにいさま、無理しすぎたらダメだからね」

アリサは嬉しそうに微笑む。いつも、自分が言われている言葉を他人にいえるということが、何となく嬉しかったのだろう。

そんなアリサに母やジャスリーン、そして、ルウィンは微笑ましそうな目で見つめ、頭を撫でる。ルウィンは、「分かっているよ」と言いながら頭を撫で、ジャスリーンは、「アリサは本当にいい子だね」と言いながら撫でてやり、母は、何も言わず、ただ微笑みながらアリサの頭を撫でていた。

アリサがそれにさらに喜んだことは、言うまでもない。

そうしていると、いつの間に帰ってきたのか、セイン、カイン、エルミナが揃ってアリサの部屋を訪れる。エルミナは迷うことなくジャスリーンの横を陣取り、セインとカインは、アリサの座る席の対面である兄の横へ座る。

そしてメイドにお茶やジュース（アリサに限る）を持ってきてもらった後は、完全に談笑の時間となる。

「ん？　今日僕たちがしたこと？　んー、僕は今日訓練日だったな。もうちょっとで隊長に勝てるところだったんだけどねぇ」

アリサに、今日何をしたのかと尋ねられたカインは、のんびりと思い出しながら話を進める。

「お前じゃまだ無理だ。体の返し、まだ改善して無いだろう？」
「あー、それ、隊長にも言われた」
「だろう？　強くなりたいんなら、まずはそれを直せ」

そんな会話をしながら、ドーリス公爵家の時間が過ぎて行くのであった。

またまた街に出よう

この日、両親を説得したアリサは、二人の兄を護衛に、街に出てきていた。

ちなみに、アリサが街に出るのは、以前家を出たとき以来になる。あれから何年もの年月が流れているのだが。この日まで、両親の許可が下りなかったのである。

アリサがその両親に何度も何度も何度も何度もお願いをし、ようやく今日の外出の許可が下りたのであった。但し、護衛である兄たちの目の届かないところには行かない約束で、ではあるが。

ちなみに、両親がアリサの外出に反対した理由は、多々ある。

一つは、外に出たアリサが、またいなくなりそうで怖いため。

一つは、外が危険であるため。

一つは、アリサを王子の婚約者にしようとしている王が、本腰を入れてきたため、だ。

まぁ、本題は、三つ目の王の攻撃を避けるためなのだが。

王ならば、どこからかアリサの外出を聞き入れて、アリサを王子の婚約者とするための行動を取ることくらい、容易いだろう。

両親は、それを避けるために、この数年間アリサの外出を徹底的に回避してきたのである。――今回は、アリサの潤んだ瞳に勝てなかったのだが。

「アリサ、そんなに急ごうとしなくても、街は逃げたりしないから」

「ほら、落ち着いて」

かなり久しぶりの外出に、はしゃぎ、まだ用意のできていない兄

たちに「まぁだ？　まぁだ？」と目で問いかけるアリサに、セインとカインは微笑みながらそう告げる。
そんな二人に、アリサも分かっているとは答えるのだが、それでも興奮は冷めないらしく、期待の目は止むことがなかった。
ただただ、目を潤ませ、出発の用意をするセインやカインを眺め続ける。

――――こうかはばつぐんだ。

セインとカインの用意の速度が若干早まる。
そして数分後、しっかりと用意が完了した兄二人は、可愛い末妹の手を取り、馬車に乗り込み、街へ向かうのであった。

「で、アリサは街に出て、何が見たいんだ？　見たいのを言ってくれれば案内するよ」
「今日は、お店を見て回りたいな、って思って。にいさまたち、よくお土産買ってきてくれるでしょう？　それを見て、そのお店はほかにどんなのが置いてあるのか、興味があったんだ」
「そうかそうか。なら、今日は店巡りだね。聞こえたか？　カイン」

馬車の中からセインが問いかけると、馬車の外で馬に乗って走っているカインが反応を見せた。

「聞こえた。案内する店、僕も考えておくから」

そうして走っていると、あっという間にアリサたちの乗った馬車は、降りるべき場所へと到着する。この先は、人が多くて馬車では行けないのだ。
まずは、アリサはカインの手を借りて馬車から降り、それに続い

てセインが馬車から降りる。そして、二人はしっかりと剣が腰に佩いてあることを確認し、そして、アリサの手を取り、歩き出すのであった。

「ここが、以前僕たちがアリサに本を買った場所だね。あの本は面白かった？」

「うん。にいさまたちが買ってくれた本は全部面白かったよ」

「そか。なら、今日も何冊か買っていこうか？　僕が買ってあげるから」

セインが微笑みながらアリサに言うと、アリサは喜びに目を輝かせる。そして、買ってもらう本を探しに、店をうろつき始めた。もちろん、セインやカインの目の届く範囲内で。

「にいさま、この本、買って？」

そうしてアリサに見せられたのは、大人用の、この国の神話が書かれた本だった。

二人の兄たちは、アリサにはまだ難しいと考え、止めにかかる。

「アリサ。アリサにはまだ難しい。ほかの本を持っておいで？」

「それはアリサがもうちょっと大きくなったらにしようね」

私、これがいいのにな……。二人から同時に止められたアリサは、悲しそうに、下を向き、俯く。そんな姿に罪悪感を感じた二人は、どうしたものかと目を合わせる。

この本を買ってやり、アリサの機嫌を直すか、買わずにほかの方法でアリサの機嫌を直すかのどちらにするか、目で話し合いをしていた。

そして、結果はと言うと。

「仕方ないなぁ。でも、アリサには難しいと思うよ？」
「なら、にいさま、読んで♪」
で、説明してくれると嬉しい。またもアリサは、潤んだ瞳で兄たちを見つめる。兄たちがその瞳に籠絡したことは、最早言うまでもない。
その日から、この二人の兄や、話を聞いた兄姉たちにこの本を読んでもらい、説明をもらうアリサの姿が見受けられたそうな。
そして、次に来たのは、その二軒隣の店、小物屋だった。以前、エルミナやジャスリーンがお土産にリボンを買った店である。ちなみに、父の買ってきたカチューシャも、この店で取り扱っている。
店内に入ったアリサの行動は、早かった。いろいろな商品を見て回り、自分がもらったものを見つけ、はしゃぎ、ほかのものも見て回った。
そんなアリサを、二人の兄たちは心配そうに眺めていた。はしゃぎすぎているアリサ。熱を出さないかどうか、それだけが心配だった。
そうしていると、小物屋に新たな来客が訪れる。その人を見た瞬間、セインとカインは、焦った。アリサを早く連れ出さなくては。
だが、その前に二人はその人に、――この国の第一王子に見つかり、つかまった。
「おや？　ドーリス公爵家のセイン殿とカイン殿ではないですか。どうしてこんなところに？」
にっこりと微笑みながら問いかける王子に、二人はどう答えるか、真剣に考える。

――アリサに会わせてはならない。アリサに、王子の婚約者云々の話は、聞かせてはならない。

二人の兄は、真剣に思案し、結論を出した。

「お土産を買いに来たのです。ところで、殿下こそ、どうしてこんなところに？」

「あなた方と同じですよ。少し城を出たので、せっかくだから王妹にお土産を買っていってあげようかと思いまして」

では、失礼。そう言って店内を巡る王子は、――すぐにアリサを視界に入れた。

「初めまして、ドーリス公爵家の末の姫君。僕はこの国の第一王子ですが……、父君たちから、何か聞いていらっしゃいますか？」

「王子、殿下？　えっと、何のことでしょうか？」

王子の問いに、正直に答えたアリサ。その後ろで、二人の兄は完全に焦っている。

そして、最後の手段として、二人はアリサを強制的に店から出した。

「アリサ、そろそろ次の店に行かなくては時間が無くなる。出よう」

「殿下。失礼いたします」

そうして、店を巡り、家路に着くアリサ。

店を巡っている間、一切王子の発言については兄に尋ねなかったアリサだったが、馬車の中では違うらしい。しっかりと兄の目を見て尋ねる。

「にいさま。殿下が仰られていたこと、何のことなの？」

家に着くまで、何と返事を返せばいいのか分からず、右往左往しているセインの姿が、馬車の中で見られたそうな。

そして、家についてアリサと分かれると同時に、父や兄に相談に走るセインの姿が屋敷のメイドたちに目撃されたと言う。

振り返りし過去

「ねぇ、お母さん。産まれてくるの、弟かな？　妹かな？」
「僕も気になる。どっちだろ」
「さぁ、ねぇ。カインとエルミナは、どっちがいいの？」

昔のドーリス公爵家。そこでは、数年ぶりの奥方の出産に、屋敷はほんわかした空気に包まれていた。
おそらく、最後の子供になるであろう、奥方のお腹の中にいる子供。公爵家の人間は、ただただ、無事に産まれてくることを祈っていた。

「順調ですから大丈夫ですよ。安心してください」

往診に来た医者は毎回そう言ってはいるのだが、年が年である。
母が、以前子を産んだとき、つまり、カインとエルミナを出産してから、ゆうに十年以上が経過していた。
その間に、母もずいぶんと年をとった。その中で、もう子を生すことはないだろうと思っている時に判明した妊娠だった。

父や母は、この年での出産の危険性をしっかりと学んだ上で、産むことを決意した。

少しずつ大きくなっていくお腹。それを見たカインやエルミナは、弟か妹が産まれるのを、楽しみに待っていた。
それまでは自分たちが一番下であったため、自分たちよりも下の兄妹が出来ることが嬉しいのだろう。
母の腹の膨らみが目立つようになってからは、しょっちゅう産ま

れてくる子供は弟なのか妹なのか、気にしていた。

そしてある日、母に陣痛が来た。それは、予定よりもずいぶんと早いものだった。

「旦那様とお坊ちゃま方は、部屋の外でお待ちになっていてください」

メイドは母の出産の用意をしながら、部屋の外で心配そうに待つ父や子供たちに告げる。

そうしてメイドが部屋に入っていくと、そこはずいぶんと静かになった。

それからは、待った。時間の感覚が分からなくて、あまり時が経っていないのか、かなりの時が経っているのか分からないほどに、待った。

そうしていると、部屋の中から慌ただしい声が耳を掠める。何事かと思った父や子供たちは、同時に耳を澄ませた。

「先生！　どうやっても泣きません！」

「貸しなさいっ！」

医者やお手伝いの人の、焦った声が聞こえる。それで分かったことは、既に子は産まれていること。

そして、もう一つ分かったことは、産まれた子供がいまだ、産声をあげないということだ。

そこで父や兄弟たちは、黙っていられなくなり、部屋へ入り込んだ。

それと同時に、それに驚いた声が響くが、父たちは一切気にしな

かった。とにかく、産まれた子供の下へ向かう。
そして、子を受け取り、思い切り引っ叩いた。早く産声をあげるように。

――生きて、この世界を楽しんでもらうために。普通よりも小さな可愛い赤子を、死なせるつもりなどさらさら無かった。

「おぎゃあ、おぎゃあ」

その願いが届いたのか、産まれたての子供はようやく元気な産声を上げた。
それと同時に、産まれた我が子を医者の手に戻す。そして、赤子を見た医者は告げる。

「あぁ、女の子のようですね。カインくん、エルミナちゃん、妹が出来てよかったですね」
『はい！』

元気いっぱいに返事をするカインとエルミナ。そんな二人を、ルウィンやジャスリーン、そして、まわりの大人たちが微笑ましげに眺める。
そして、父は再び医者から渡された我が子を抱き、妻の下へ向かう。そして、産まれたての小さな赤子を、妻の胸に抱かせた。

「お疲れ様。よく、頑張ってくれた」
「あぁ、この子はあなた似かしら？」

赤子を抱き、しっかりと顔を見た母は、息を切らしながらも、微笑みながら告げる。

「いいや、お前似だろう。この子は将来、きっと美人になるぞ」

そんな会話を展開させる両親に、しっかりと妹の姿を見たい兄弟たちは集ってくる。母は、そんな子供たちに、産まれたての小さな娘をしっかりと見せてやる。

泣き疲れてぐっすり眠る我が子の姿を。

「かぁわいー」

「ね、名前もう決めたの？」

「ホント、かわいいなぁ」

「何だか、サルみたい」

「うん。私もそう思う。ねぇ、この子、本当に育つの？」

カインとエルミナのそんな言葉に、両親は吹いた。思い切り吹いた。

そして、笑いが収まった頃に説明をしてやる。

「お前たちだって昔はこうだったんだ。大丈夫だよ」

「で、名前の話だったかしら？　実は、もう決めてあるの」

――この子の名前は、アリサ・クライシス。だから、正式名称はアリサ・クライシス・ドーリスになるわね。……嫌？

尋ねる母に、子供たちはぶんぶんと首を横に振る。そして、再び眠っているアリサの顔を見て、次々に告げた。

「ルウィンお兄ちゃんだよ、アリサ。これからよろしくね」

「ジャスリーンお姉ちゃんですよー」

「セインお兄ちゃんだよ。僕がいっぱい可愛がってあげるからね」

「カインお兄ちゃんだよ。よろしくね、アリサ」

「エルミナお姉ちゃんだよぉー。これから仲良くしようね」

五人がそう言って自己紹介をしたとき、微かに笑ったような気がする。これは五人の言った言葉なのだが、産まれたての子供に笑うと言うことはありえない。つまり、幻覚だった。

子供たちがその話を蒸し返すたびに、そう告げる父と母なのであった。

そしてそれ以来、彼らは病弱ですぐに病気をするアリサに振り回されていくことになる。

赤子とは泣くものではあるが、アリサの場合、泣く時間が長くなると、必ず発熱し、医者のお世話になった。

はいはいを覚え始めると、好き勝手に動き回り、無理をして熱を出し、医者のお世話になることになった。

言葉を覚えてからも、必ず一度は無茶をして熱を出し、歩き出してからも同様に無理をして熱を出した。

そんなことが繰り返されたため、父たちは、アリサをより一層可愛がるようになった。体の弱い末娘。無理をするとすぐに熱を出す可哀想な子。

だから、たくさんかまってやろう。外に行けない分、たくさん話をしてやろう。アリサの欲しいものは、出来るだけ揃えてやろう。それが、アリサの体調に異変をきたす物でない限り。

アリサ。君は、死なないで。無事に、大きく成長して欲しい。

幼き日々

体の弱い、小さなアリサ。そんな小さなアリサも成長した。兄弟たちのアリサくらいの年頃と比べると体は小さいが、それでも成長していた。

そして、アリサが片言ながら話すようになると、兄弟たちの争いが激しくなった。

「アリサ、ルウィンだよ、ル・ウィ・ン」

「あら、最初にアリサに呼んでもらうのは私よ、兄さん。アリサ、ジャスリーンって、言ってみて」

「姉さんの名前は長いから無理だよ。アリサ、僕の名前なら簡単だから、呼んでくれるよね。セインだよ、セイン」

「なら、僕の名前も呼びやすい。だから、僕だ！」

「カインうるさい。ねぇ、アリサ。最初はすぐ上の私だよね？」

兄弟たちは、自分が一番最初に名を呼んでもらうために、日々奮闘していた。肝心のアリサは、依然として兄弟たちの名を呼ぶ気配は無いが。

ただ、その代わりに父と母を呼ぶことは、覚えた。

「ちょーちゃま、ちゃーちゃま」

まだうまく舌が回らないため、きれいにとうさま、かあさまと呼ぶことは出来ないが、そう呼ばれるのに、父とは母喜んでいた。

事実、アリサがそう呼ぶと二人は相好を崩し、「どうしたの？アリサ」とアリサを抱きかかえていたのだから。

「ほーら、アリサはいい子ねー」
「あーう！」
「アリサったら、今日はずいぶんとご機嫌なのね。もー、本当に可愛いんだから」

抱きかかえられ、いい子だとほめられたアリサは、分かってはいないだろうが、雰囲気が何だか嬉しいのだろう。ニコニコと微笑みながら奇声を上げる。

そんなご機嫌なアリサのおかげで、それを見ていた家族やメイドたちもご機嫌だ。

「母さん、僕もアリサを抱っこさせて。アリサ、こっちおいで」

ルウィンが母に駆け寄りそう言うと、アリサは嬉しそうにルウィンの腕の中に移動する。

アリサを抱いたルウィンは、アリサの目を見て微笑み、そんな兄の姿を見たアリサもまた、嬉しそうに微笑む。

そして、その喜びを腕をぶんぶんと振り、行動で示す。――ルウィンにとって、アリサのその行動は、自分に拳が飛んでくる危険なものではあったが。

まぁ、実際アリサの拳が当たったところで、まだまったく痛くないので問題はないのだが。

「兄さん、次私ね。ほーら、おいで、アリサ」
「あー♪」
「その次、僕だからねっ！」

そうして兄弟たちは、自分も順に抱こうと、並ぶ。

次々と大好きな兄や姉に抱かれていくアリサは始終嬉しそうにしていた。そしてその後、爆弾を落とした。

「るーいーまっ？」

アリサはルウィンを見て、そう告げる。そしてその瞬間、ルウィンは悟った。アリサは自分を呼んでいると。

つまり、先ほどのアリサの言葉を訳すと、「ルウィンにいさま」となることを。

「いよっしゃあっ！」

そして、それを完全に理解したと同時に、彼は拳を突き出し、ガッツポーズをする。

そんな兄の行動が理解できない弟妹たちは、目を完全にまん丸にしているが。

「アリサが僕を呼んでくれたんだ。そうだろう？　アリサ」

「あー♪　るーいーまっ。るーいーま♪」

兄に尋ねられたアリサは、兄が喜んでいるのが嬉しいのか、それとも覚えた言葉があることが嬉しいのか、ルウィンを呼ぶ言葉を連呼する。

もちろん、それを聞き続ける弟妹たちの機嫌はどんどんと悪くなっていき、そんな兄や姉の顔をふと眺めたアリサが、恐怖で泣き出すまでになってしまった。

そしてその後、ルウィン含み兄弟たちは母によってアリサのいる両親の寝室から追い出されることとなった。原因は、彼の弟妹たちの、表情の怖さだった。

母は、アリサが泣き出すと同時に彼らからアリサを奪い取り、泣き止ませようとあやしていたのだ。

そして、その途中で彼らは追放宣告を受けた。

「あんたたち、邪魔。出て行きなさい」

「え？　アリサが泣いたの、僕のせいじゃないよ！？」

ルウィンが訴えると、母は厳しい顔をして、ルウィンたちに告げた。もちろん、その顔はアリサには見せない。

「間接的に関わってるでしょうが。いいから出て行きなさい、邪魔」

そうして可愛い妹のいる部屋を追い出された兄弟たちは、追い出された扉の前で、見事なバトルを展開させていた。

「大体、お前たちが怖い顔をするから、アリサが泣き出して、何の関係もない僕まで部屋を追い出されるんだ」

「だって、兄さんばかり、ずるいもの」

「僕もそう思う。兄さんよりも、僕たちのほうがいっぱいかまってるのに」

「そーだそーだ。不公平だ。僕やエルミナは、しょっちゅうアリサと一緒に居るのに」

「カインの言うとおり。おもしろくなーい」

アリサ、早く私（僕）の名前も呼んでくれないかなー。兄弟たちは、小さく呟くのであった。

一方その頃、母はと言うと。

「アリサ、もう怖いのいないからね。大丈夫よー」

「ぴぎゃあぁあぁあぁあぁあぁあぁ」

未だに大泣き中のアリサを、必死であやしていた。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」

「大丈夫。大丈夫だからね、アリサ。もう怖くないよー」

ほーら、いい子いい子。母はそう言いながら、アリサのお気に入りのぬいぐるみをアリサの目の前に差し出す。いつもならば、それで泣き止むのだが、今日は何故か泣き止まなかった。

「あぁあぁん、あぁあぁあぁん……けひょ」

そして、泣きすぎて、噎せた。

その後、父が帰ってきて父に抱いてもらい、アリサはようやく泣き止んだのだが、この日は、あまりにもアリサは泣きすぎていた。結果、翌日は高熱を発し、再び泣き続けることになったのであった。そしてそれ故に、熱も中々下がらず、家族を心配させる日々が続いたそうな。

幼き日々（後書き）

明日からは本編に戻ります。

王子は敵

この日のドーリス公爵家の目標、それは、『アリサを王子に会わせない』ことである。

ことの始まりは、数日前、突然仕事で城に出ていた父が、王に捕まり告げられた一言にある。

「ドーリス公爵殿。実は、第一王子が先日アリサ嬢を見かけたらしく、一目で気に入ったらしいんですよ。ですから、今度、王子を公爵家に遣りますね。アリサ嬢とふれあわせてあげてください」

「恐れながら陛下、我々ドーリス公爵家一同、皆一様にして、アリサを殿下の婚約者とすることに反対しております。――その状態で、会わせるとお思いですか？」

父が言うと、王は面白そうに微笑む。そして、「お好きなように」と答えを返してきた。

曰く、「アリサ嬢を手に入れたいのならば、自力で父である公爵や、兄君たちを何とかしなくてはいけませんよ？」と、王自ら王子に説いていたらしい。

結果、王子は父や兄たちの目をかいくぐり、アリサとふれあう機会を作ろうと頑張っているそうだ。

そしてこの日、その王子がドーリス公爵家を訪れていた。

「公爵殿、ルウィン殿。アリサ嬢はどこに？」

公爵家についた王子は、あいさつもそこそこにアリサの居場所を尋ねる。だが、両親は教えるつもりは無かった。それは、兄姉たち

も同様である。
ちなみに、アリサは今両親の寝室で休まされていた。
体調を崩すのはいつものことだが、今回の熱は、アリサを激しく寂しがりにさせたらしい。アリサが自ら両親の休むベッドに来たのである。
「とうさま、かあさま。何だか、寂しいの。……一緒に寝てもいい？」
アリサは、そろそろ寝ようかとしていた両親の元に、枕を抱きながらそう言ってやってきたのだ。もちろん両親はそれを受け入れ、嘗ての定位置である真ん中にアリサを寝かせた。
そのおかげか、アリサはあっさりと眠りにつき、朝から少し目を覚ましたのだが、今もまた眠りについている。
そして、目を覚ましたときに寂しくないよう、エルミナをつけているのであった。
父や母、ルウィンたちは、完全に体調を崩し、寝込んでいるアリサを王子に合わせるつもりなどさらさら無かった。
――何とかして、王子にアリサを諦めさせるつもりだった。
だが、父も母も、ルウィンたちも知らなかった。王子が諦めが悪く、しつこい男だと言うことを。
「先に言わせていただきますが、私は諦めませんよ？　アリサ嬢本人に嫌と言われようとも、必ず首を縦に振らせてみせます！」
その瞬間、ルウィンは「王族は変なのばっかりなのか？」と本気でそう考えたそうな。

「殿下。アリサは体調を崩して休んでいるのです。無闇に年頃の女性の寝室に足を踏み入れるのは、ご遠慮いただきたいですね」
「おや？　将来の奥君なのですから、かまわないでしょう？」
「まだそうとは決まっていません。遠慮していただきましょう」

父の言葉に、ニコニコと言葉を返し、そばにいるメイドを捕まえて案内をさせようとする王子を、ルウィンはそう告げて、「失礼」と、後ろから羽交い絞めにした。
そんなルウィンに王子のそばに仕えていた騎士たちは剣を向けるのだが、王子本人がそれを止めた。

「かまいません。確かに、まだ本決まりではありませんでしたね」

そう告げる王子に、父やルウィンはホッと息をつく。だが、すぐにその安堵の心は吹き飛んだ。

「ですから、今、ここで決めてください。私がアリサ嬢の婚約者であると」
「――――ダメですっ！」
「認めません」
「却下です」

順に、母、ルウィン、父である。全員、見事に反対の言葉を返した。そんな三人に、王子は面白そうに微笑む。

「母上も賛成してくださっているというのに、ドーリス公爵家のみなさまは、頑固でいらっしゃいますね。認めてくださってもよろしいでしょう。アリサ嬢は、私が絶対に守りますよ？」
「アリサを守るのは、僕たち家族の役目です。殿下は、立ち入らないでいただきたい」

一方、その守られる立場のアリサはというと、目を覚まし、エルミナとしばし談笑していた。

目を覚ましたときに一人ではなかったからか、アリサは泣くことなく落ち着いており、それがエルミナを安心させた。

――泣かれたらどうしよう。エルミナはそんなことを考えていたからだ。

だが、アリサは泣き出すことなく、純粋にエルミナがいることを喜んだ。結果、眠れないと言うアリサとエルミナで、少し話をしているのである。

「アリサ、いい加減眠らなくちゃ。そうしないと、いつまでも熱が下がらないよ？」

「だって、ずっと眠ってたから、眠たくないもん。ところで、かあさまたちは？」

「お母さんたちはね、お客様の応対をしてるよ。アリサは気にしなくても大丈夫。だから、ちゃんと休んで、早く元気になろうね」

「お客様って、だぁれ？」

「アリサは知らなくてもいいんだよ。アリサが関わるのは、成人してからにしよっか」

エルミナはそう言って、アリサを寝かせるために、手を目の上に置いて視界を奪う。

小さい頃のアリサならば、いくら眠たくないと言っていてもそうすればあっという間に眠りについた。だが、大きくなってからはそう簡単には眠らなくなった。

「ねえさま、暗いよぉ。手、離して？」

「アリサが眠るんならね。休まないと熱も下がらないでしょうが」

お客様が帰るまではアレグラも呼べないし……。エルミナは呟く。
アリサもその呟きはしっかりと耳に入れていた。

「どうして呼べないの？　お客様、偉い人？」
「まぁね」

エルミナの言葉に、アリサは真剣に思案する。アリサの家は、公爵家。公爵家よりも偉いのは、王族のみだ。
そして、アレグラの家は侯爵家。侯爵家よりも偉いのは、アリサの家である公爵家と王族のみ。つまり、客は公爵家か王族と言うことになる。

――まぁ、いっか。

はっきり言って熱が高く、あまり物を考えたくないアリサは、そこで考えを中断させた。このまま考えていれば、また熱が上がって苦しみ、そして家族に余計な心配を掛けることになる。
アリサは火照った頭でそう考え、そして、そんな頭を冷ますためか、静かに目を瞑る。
それを見たエルミナは、妹の眠りを妨げるのも悪いと考え、黙り込み、音を立てないよう努力した。
そして数分後。部屋にはアリサの規則正しい寝息が響くことになった。

ちなみに、この日は王子はアリサに会うことは、かなわなかったそうだ。
アリサに会おうとすると、父であるドーリス公爵や宰相補佐であるルウィンのみならず、母の反対までも飛んできたからだ。

結果、王子はまた来てもいいかという約定を結び、この日は大人しく城へ戻っていった。

王子が帰った後、家族が「王子殿下がアリサ目当てで家を訪れることが、二度とありませんように」と希ったのは、余談である。

王との密談

「お忙しい中、こんな時間にわざわざ時間をとっていただき、感謝いたします。陛下」
「いえいえ。私も執務室から逃れられる分、嬉しいですからお気になさらず」

王子がドーリス公爵家を訪れた二日後、父であるドーリス公爵は、ルウィンを通して、王に二人きりで話が出来る時間を作ってもらっていた。
結果、今、父と王は護衛の兵もなく、二人で部屋で話をしているということになる。

「ところで、お話とは先日の王子の来訪のことについてですか？」
「ええ。我々は、アリサを王子殿下の婚約者と認めたわけではありません。ですから、殿下には行動を考えていただけるよう、陛下から伝えていただきたいのです」

先日王子が来訪した際、王子は（今の時点では）何の関係もない異性の寝ているところに押し入ろうとしたのである。それは、問題だ。
だが、彼らは仮にも自分たちの主のお子に、強く進言できるはずが無い。故に、強く命じることの出来る、父である王に直接頼みごとに来ているのだ。
ちなみに、二人きりにしてもらったのは、アリサが王子の婚約者だと言うことを、他人に聞かれたくなかったからである。何せ、自分たちはまだ認めていないし、アリサ自身も知らないことなのだから。

「あっはっは。積極的ですね、私と王妃の愛し子は」
「笑い事ではありません。アリサは、その前日から熱を出して寝込んでいたんです。そんな女性の寝室に向かおうなど、失礼でしょう」
父は王にそう告げるのだが、王は自身の笑い声が勝り、聞こえていない。王は腹を抱えて笑い続けていた。
そんな王に、父はそれのどこがそんなに笑えるのか、真剣に思案していたそうだ。

そうしてようやく王の笑いが収まった頃、父は、笑いすぎで喉が渇いているであろう主のために、侍女を呼び、お茶の支度をさせる。
そうして、お茶の支度が整った侍女が部屋を出た後、父は再び静かに口を開いた。

「陛下。アリサは、ただの子供です。王子殿下の婚約者でも何でもない、ただの貴族の子供に過ぎません。アリサが不安になるようなことを、しないでいただきたい」
「不安になるようなことなど、していないでしょう」
「陛下がアリサを殿下の婚約者にしようと言う、その行動がアリサを不安にさせるんです。アリサに負担をかけるんです。あなたは、アリサの寿命を削りたいのですか」

それは、悲痛な声だった。幼い頃から体の弱いアリサ。このまま成長すれば、命はそんなに永くは無いと宣告を受けていた、小さなアリサ。
幸いながら、アリサの体は昔と比べると、少しは丈夫になった。だが、人並みには遠く及ばない。アリサは、弱い。
そんなアリサの体調は、精神状態にかなり左右される。アリサの気分がいいときは体調がいいときが多いし、アリサが不安になったりすると、体調も崩れる。

アリサが王子の婚約者になったと知ると、アリサは絶対に不安がる。自分は王子の婚約者としては生きていけないと。

それは、昔アリサが家出したときに、本人が言った言葉。

『私は結婚しても、子を生せない。ならば、結婚自体出来ない。つまり、つながりを作れない。――これを、出来損ない以外に、何ていうの？』

あの日の娘の自虐的な言葉を、父は一言一句違わず覚えていた。あのときのアリサの悲しげな表情も覚えている。

泣きそうだと言うのに、泣くのを堪えていた五歳の小さな娘。五歳の子供に出来ない、悲しげな表情を浮かべていた娘。

熱が高くて辛かろうに、それでもしっかりと理由を述べた、可愛い愛娘。

彼は、あの日改めて決意したのだ。――絶対にアリサを守ると。アリサをきちんと成長させて見せると。

だが、アリサを王子の婚約者にすれば、アリサは間違いなく子を生せないことを悔やみ、精神状態を悪化させるだろう。そうすれば、アリサの体は間違いなく崩れる。寿命を削ることになる。

そんなこと、許さない。それは、彼の家族も同じだ。彼らの共通する思考の一つは、アリサを守ること。

彼らは、そのためならば何だってした。それが、王に、王妃に楯突く行為であろうとも。

「陛下。アリサを王子殿下の婚約者にするといったその言葉、撤回していただけませんか？」

少しでも、アリサを大事に思ってくださるのならば、撤回してく

ださい。
そう言う父の表情は悲しげで、王もそんな父の言葉に、少し居心地の悪そうな顔をする。
深く、頭を下げ、懇願した父。全てはアリサのために。アリサを守るために。そのためならば、父は名誉など必要なかった。

「ド、ドーリス公爵殿。頭を上げてくださいませんか？　私が公爵殿をいじめているみたいではありませんか」
「陛下が殿下とアリサの婚約を破棄していただけるのであれば、すぐに頭を上げます」
「し……しかし、アリサ嬢と王子の婚約は王妃も楽しみにしていまして……。私の一存では……」
「ならば、王妃様とお話し合いの上、後日、また時間を取ってくださいますか？」

父が言うと、王は「わ……分かりましたから、頭を上げてください……」と、焦りながら告げる。そんな王に、父は「ありがとうございます」と礼を一つ言い、そしてようやく頭を上げた。

その後、父は帰途につく。

「とうさま、お帰りなさい」

そして、家について愛娘のそんな言葉を聞いた父は相好を崩し、アリサの頭をよしよしと何度も撫でた。
そして、改めてまた決意した。この子は、絶対に自分たちが守ると。守ってみせる、と。

守るべきもの（1）

これは、決意。ドーリス公爵家の、父、母、兄、姉たちの決意だ。

『絶対にアリサを守る』

そのためならば、彼らは手段を選ばない。アリサを守ることが出来るのであれば、どんな手を使ってもかまわない。

同時に、アリサに害を成したものに対する制裁に対する手加減は、一切無い。

――この日、アリサはアリサを王子の婚約者にすることに反対する貴族に誘拐されていた。

ことの始まりは、数ヶ月前。突然、公爵家に雇って欲しいと言うメイド候補が来てからだった。そのときは、何の違和感も感じていなかった。

その候補のことを調べても埃は一切出ない。ならば、問題ないだろうと思って雇った人間だった。

だが、そのメイドは今回の犯人の仲間だった。

犯人は、どこからかドーリス公爵が末の姫君を王子の婚約者にしようと画策していると言う嘘の情報を手に入れ、それを阻止するべく、アリサを誘拐したのだ。

「大事な大事なお嬢様を返して欲しいのならば、このお嬢様を王子殿下の婚約者にしようなど、考えず、陛下に辞退の言葉を述べに言っていただきましょうか」

これが、アリサの誘拐された後に届けられた、犯人からの声明。
それを見た父はすぐに、その手紙を出した人間を探し出した。
こんなとき、公爵家というものは便利だった。父には、思い通りに動く手足があったため、すぐにそれにアリサを探させた。
そして、父はそれと同時に、犯人に下す制裁の内容を考えていた。

「あなた、だぁれ？」

一方その頃、誘拐されたアリサはというと、公爵家の末の姫と言う立場からか、拘束などはされず、見張りがいるだけの部屋のベッドに横たわらされていた。
アリサの体が弱く、ちょっとしたことですぐに体調を崩すのは、貴族のみならず庶民の中でも広まっている周知の事実。故に、誘拐犯は一応、体調を崩したときのために、とベッドに寝かせ、同時に医師も用意しているのであった。
アリサに何かあれば、交渉もへったくれもない。その瞬間、自分たちが社会的に抹殺されるだけだと、彼らは分かっているからである。

但し、ここで問題が一つ。アリサは、今まで一人で知らない人と遭遇したことは全く無い。
つまり、アリサは人見知りである。そして今は、頼れる人間が誰もいない。結果としては、不安による発熱へと繋がるのであった。

「大丈夫だよ、おじさんたちは怖くないから」
「や……、怖い……。とうさまは？　かあさま、にいさま、ねえさまは？」

うわーん！　助けて、とうさまぁ――――っ！！　アリサはそう

言って大泣きし始めた。その様子に、犯人が焦ったことは、言うまでもない。

助けてにいさま、ねえさま――――っ！！　アリサの泣き声（叫び）はまだまだ続く。

「あー、ほら、泣かないで。おじさんたち怖くないからね。泣き止んでくれたら、お嬢さんのお父さんを呼んであげるから」

誘拐犯はアリサを泣き止ませるために、必死でいろいろと話すのだが、アリサは聞いていない。ただただ、泣き叫び続けていた。

だが、それが救いとなった。外にまで響くアリサの泣き声。それを、父の手足が聞き届けたのだ。

手足は、急いで主にそのことを伝えるべく、馬を無理させてでも急いで屋敷へ戻り、犯人の名、いる屋敷の場所を伝える。

その後は、家族の役目だ。

「ご、ご主人様！　ドーリス公爵家のみなさまがっ！！」

「な、何っ！　絶対に屋敷に入れるな！　入れるんじゃないぞっ！」

そう言うが早いか、それとも否か。突如、どおぉぉぉんと言う音が響く。

それは、セインとカインの騎士コンビが誘拐犯の屋敷の扉を破壊した音だった。

そして、屋敷に入った彼らは、アリサの泣き声を頼りに、あっという間に犯人の下へたどり着いた。

「さて、家の可愛い娘を返していただけますか？　男爵殿」

そう告げる父の目は冷たく、逆らうとこの場で切り捨てると、その目が語っていた。

そうして男爵が父の目に射抜かれている間に、母やジャスリーン、エルミナは部屋の中に入る。そして、大泣きしているアリサを抱きしめた。

「うわーん！　かあさま、ねえさまぁあぁぁ！」

アリサはようやく会えた家族に、思い切り抱きついて泣きじゃくる。母や姉も、そんなアリサを優しく抱きしめた。『もう、大丈夫』と。

よほど怖かったのか、母や姉が抱きしめても、アリサは中々泣き止まない。それが、父や兄たちの怒りを増幅させた。

「さて、男爵殿。家の可愛い娘に、――――何をなさいました？」

「内容によっては、この場で切り捨てますので、言葉は、よく考えてから発してくださいね」

「僕と兄の二人でしたら、あなたのご家族すべてを切り捨てることも容易であるということも考えた上で、発言してください」

「それと、この件に関しては、我々が処断を許されておりますので、ご安心を」

父やセイン、カイン、ルウィンが完全に男爵にとどめを刺していく。

そして、男爵は観念したのか、静かに口を開いた。

「特に、何もしていませんよ。ここに連れてきてからは、ずっとベッドの上ですし、着替えたりもさせていません。――突然泣かれたんです」

男爵がそう言った瞬間、いつの間に剣を抜いたのか、セインがその剣を男爵の首元に宛がう。
男爵の首からは、少量の血が流れていた。

「それだけで、可愛いアリサが泣くはずがないでしょう。正直に言いなさい」

守るべきもの（2）（前書き）

分割したので夜もＵＰします。

守るべきもの（2）

そう告げるセインの瞳は冷たく、正直に答えなければその瞬間、男爵の首が飛ぶことは明らかであった。

そうしていると、ようやく泣き止んだアリサが、母や姉たちと手をつないだ状態で、男爵や父、兄たちの元に近づいてくる。だが、セインの剣を見た瞬間、再びアリサの目に涙が溜まる。

そんなアリサを見たセインは、急いで剣を仕舞った。男爵に「変なことをしたら、何が何でも切り捨てますので」と静かに告げた上で。

そして、兄たちはにっこりと微笑み、アリサを不安にさせないよう気にかけながら、優しくアリサに話しかけた。

「アリサ。あのおじさんに何をされたか、言える？　言えるのなら、教えてくれるかな」

「えとね、気がついたらベッドに寝かされててね、近くにあの人がいたの」

「うん、それで？」

「あの人、私知らないでしょう？　だからね、怖くなったの」

あたりを見回しても、とうさまも、かあさまも、にいさまも、ねえさまもいないし。だからね、怖かったの。アリサは告げる。

アリサは基本的に、ずっと誰かがそばにいた。熱が無いときは母と一緒にいることが多かったし、熱を出せば、母のみならず、父や兄、姉もそばについていた。

だが、今回は誘拐されたため、そばに見知った人間はいない。い

るのは、知らないおじさんだけ。それが、アリサの恐怖を増幅させたらしい。
その結果が、あの大号泣だったわけである。

それを聞いた兄たちは、優しく妹の頭を撫でる。「不安にさせて悪かったね」と謝りながら、頭を撫でた。
それに安心したのか、唐突にアリサの瞳は、落ちた。父たちが焦りに焦ったことも、最早言うまでもない。

「父さん。アリサ、一度連れて帰るよ。アリサを寝かせたらまた戻ってくるから、それまではよろしく」
「あぁ、頼んだぞ、カイン」

そうして寝入ったアリサをカインが背負い、母や姉たちと共に男爵の屋敷を出て、止めてあった馬車に乗り込む。
そして、公爵家の屋敷に着くと同時に、母はアレグラに連絡をいれ、カインとエルミナはアリサを部屋に寝かせに向かう。
メイドたちはアリサの着替えを用意し、カインを部屋から追い出して、体を拭いて着替えさせた。
その間、アリサはずっと眠りについたままである。よほど、泣き疲れたらしい。
カインとエルミナ、そしてメイドたちは、そうして眠り続けるアリサの寝顔をしばし眺めていた。――母がアレグラを連れてやってくるまでの間。

「失礼します」

アレグラがそう言って入ってくると、カインは自分が邪魔であることを理解し、そのまま部屋を出て、扉の前で、扉に背を向ける。
それを確認したアレグラは、診察の用意をし、診察を始めた。

「怪我をしている様子など、ございましたか？」
「いいえ。先ほどお体をお清めしたときは、怪我をしている様子も、痣なども見当たりませんでした」
「そうですか。でしたら、問題はこの熱ですね」

アレグラはそう言うと、鞄から注射器を取り出した。アリサが眠っている今なら、反対は飛んでこない。
それを幸いとし、アレグラはアリサの腕を取り、注射を入れた。これならば、少し休めば熱も下がるだろう、と。
その後はいつものように母たちに薬を渡し、帰っていく。そして、カインが部屋に戻ってくることになったのであった。

「もう、大丈夫かな？」
「ええ。だから、カイン。あの男爵の屋敷に戻りなさい。――絶対に許さないから」
「任しといて。大体、許す人間がどこにいるのさ。許すはず、無いじゃないか」

カインはそう言って、再び剣を持ち、男爵の屋敷へ戻るべく、馬の支度をして戻っていった。

その後、母とエルミナは一緒にアリサの寝顔を見つめていた。若干荒い呼吸。それでも、今ここにいると証明してくれる確かな証。
母たちは優しい瞳でアリサを見守り続けた。これからは、絶対に手を離さないように。こんな恐怖を、二度と味わわせないためにも。

一方その頃の男爵家の屋敷では。

「さて、どうする？　父さん。ここで切り捨てる？」

「まぁ、それでもかまいはしないな。処断の権利は僕たちにあるのだから」
「ひとまず、ほかにこんな愚考に走りそうな馬鹿の名を聞くのが先だな。もう少し待て、セイン」

父と息子たちによる恐ろしい会話が展開されていた。
この四人に裁かれれば、間違いなく男爵の命は無いだろう。今の怒り具合からして、この場で切り捨てられるか、ほかの場所で切り捨てられるか、だ。
男爵に出来ることは、聞かれたことに正直に答えて、家族に対する罰を何とかしてもらうことだけだ。

結果としては、父や兄たちの深い温情の元、処断の権利は王や王妃に委ねられた。
が、どのみち死は免れないだろう。なにせ、アリサは王のみならず、王妃、王子のお気に入りなのだから。

その後、貴族の中では絶対にドーリス公爵家に喧嘩を売ってはならない。喧嘩を売るのならば、自身の命を失う覚悟で売るべきだ。
そういう言葉が広がったそうである。

国中で危険一家認識されているドーリス公爵家であった。

守られる立場

犯人の行動は素早かった。気がついたら、誰かが私の後ろにいて、私に何かをした。その瞬間、私の意識はとんだ。

その後、気がついたら知らない場所にいて、知らない人がいた。怖かった。とっても怖かった。

だから、思い切り泣いた。恐怖で、思い切り泣いた。

「大丈夫だよ、おじさんたちは怖くないから」

そんなの、嘘だ。とうさまも、かあさまも、にいさまも、ねえさまもいなくて、こんな知らないおじさんだけの場所なんて、怖い以外に何も無い。

怖いよ。助けて、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。だから、泣き叫んだ。父や母、兄と姉を呼び続けた。

私がそうやって泣いていると、その変なおじさんはまたも怖くないからと告げるが、怖いものは怖い。

そうやってしばらく泣いていると、突然大きな音が響き渡った。何の音だろう。泣きながらそう考えていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「さて、家の可愛い娘を返していただけますか？　男爵殿」

とうさまだ。とうさまが助けに来てくれた。そう思っていると、扉と知らないおじさんの隙間から、またも見知った顔が現れる。

「うわーん！　かあさま、ねえさまぁ！」

私がその姿を視認すると同時に、涙が激しく溢れ出てきた。安心からの涙だろうか。

でも、それもどうでもいい。私は駆け寄ってくるかあさまやねえさまたちに、ベッドから降りて思い切り飛びついて、泣きじゃくった。

「よしよし。怖かったね、アリサ。もう大丈夫だからね」

「遅くなってごめんね、アリサ。怖かったよね」

「かあさま、ねえさまぁぁあぁ」

かあさまやねえさまたちは、私を優しく抱きしめ、優しい言葉をかけてくれる。それが、さらに涙を誘った。

私は、かあさまたちに抱かれたままで、思い切り泣いた。――それが、兄たちの怒りを増幅させていることになど、まったく気づかずに。

「さて、男爵殿。家の可愛い娘に、――――何をなさいました？」

「内容によっては、この場で切り捨てますので、言葉は、よく考えてから発してくださいね」

「僕と兄の二人でしたら、あなたのご家族すべてを切り捨てることも容易であるということも考えた上で、発言してください」

「それと、この件に関しては、我々が処断を許されておりますので、ご安心を」

……処断って、何だっけ。私は泣きながらもそんなことを考える。

でも、今はどうでもいい。

今は、とにかく母や姉たちに甘えていたい。離れていた分、知らない人と二人っきりでいた時間の分、母たちと一緒にいたいんだ。

そうして、あの恐怖を振り払いたいんだ。

それからしばらく泣いて、ようやく涙は引っ込んだ。本当に、思い切り泣いた。

その後は、母や姉たちと共に、そのおじさん―男爵―の元へ向かう。その際、私はかあさまの手をぎゅっと握った。もう、離れたくないから。

そうすると、ねえさまたちも開いている反対の手をしっかりと握ってくれる。これなら、もう離れなくていいよね。私は安心して男爵の元へ向かった。

そうして男爵の元につくと、セイにいさまが男爵の首に剣を当てていた。男爵の首からは血が流れている。――怖い。

そんな私の様子に気づいてくれたのか、セイにいさまは急いで剣を仕舞ってくれた。

その後は、にいさまたちが揃って、優しく微笑みながら私に質問を投げかけてくる。

「アリサ。あのおじさんに何をされたか、言える？　言えるのなら、教えてくれるかな」

「えとね、気がついたらベッドに寝かされててね、近くにあの人がいたの」

「うん、それで？」

「あの人、私知らないでしょう？　だからね、怖くなったの。あたりを見回しても、とうさまたち、誰もいないからね、怖かったの」

私のそばには、いつだってかあさまやにいさま、ねえさまがいてくれた。とうさまも、家にいるときは仕事中以外は何度も私の部屋に来てくれた。

だから、いないことに違和感があった。そして今回は、誰もいなかった。それが、怖かった。自分を守ってくれる絶対的な存在がな

いというのが、とても怖かったんだ。

「そっか、そうだよね。不安だったろう？　アリサ。助けに来るのが遅くなって、悪かった」

にいさまたちは、そう言って私の頭を撫でる。それが、とても心地よい。

あぁ、なんだか眠たいよ。眠ってもいいだろうか。もう、大丈夫だよね。私は一人じゃない。

右手の感覚を確かめる。右には、かあさまがいる。

左手の感覚を確かめる。左には、ねえさまたちがいる。

だから、もう大丈夫だよね。そう思いながら、私は眠りの世界へ旅立った。

それから目を覚ますと、そこは見慣れた自分の部屋で、そばにはかあさまやねえさまたち、そして、シャーナがいた。

「目が覚めた？　調子はどう？」

ぼうっとする頭。働かない思考。その中で、何とか私は思い出していた。――誘拐されていたと言う事実を。

このぼうっとする頭は、あの男爵家で思い切り泣き叫んだが故の発熱のせいだろうか。何も、考えたくない。だるい。

「アリサ、大丈夫？　話すのも億劫？　そうなら、首縦に振って」

コクン。私は首を縦に振る。もう、話すのも何か考えるのも、全部が億劫だから。

そう思いながらかあさまたちのほうを見てみると、かあさまがシャーナに何か指示を出している。何だろう。

そう思っていると、しばらくしてシャーナは、お盆を持って戻ってくる。お盆の上には、恐らく麦を煮込んだお粥。……ご飯かぁ。

「アリサ、口を開けて。少しだけでも食べて、お薬飲もうね」

「お薬飲んだら少しは楽になるから。ね？」

ねえさまたちはそう言って、お粥を乗せたスプーンを横になったままの私の口元へ運ぶ。

楽になるのならば。そう思いながら、私はだるい体に命令を下し、口を開いた。そして、少し噛んだだけで嚥下する。

うー、食べるのもだるい。

「アリサ、もう一口くらい食べよう？」

だから、私はねえさまのその言葉に首を横に振る。もう十分。

すると、今度はねえさまの手から飲みなれた薬が現れる。——飲めば確かに楽になるだろう。だが、苦い。でも、飲まなくちゃ。

ミアねえさまは横になっている私の体の下に手を入れ、何とか起き上がらせる。リンねえさまは、その間に水に薬を溶かしていた。

……飲まなくちゃなぁ。

そして、薬がしっかり水に溶けたことを確認したねえさまは、コップの口を私の口に運ぶ。

覚悟を決めて、薬の溶けた水を口に含んだ。——苦い。苦い。苦い。

でも、しっかりと飲まなくちゃ。これ以上、ねえさまたちに余計な心配をかけないためにも。

でも、やっぱり苦い。

薬を頑張って飲み干した後は、ねえさまが用意してくれていた甘い飲み物を口に含む。その甘いもののおかげで、口に残った苦味が飛んでいく。

そしてそれが、眠気を誘った。眠っても、大丈夫だよね。

だって、ここは私の家。そして、ねえさまたちがそばに付いてくれている。なら、大丈夫だ。

「お休み、アリサ」

私はねえさまたちのその声を子守唄に、眠りに落ちていった。

王の決断

アリサの誘拐事件が起こって数日後、ドーリス公爵家は、焦っていた。何故か。それは来客者にあった。

この日、王が宰相や護衛の騎士以外には内緒で、ドーリス公爵家を訪れていたのだ。

「陛下。御用がございましたら、私が城へ上がります。ですので、無茶をなさらないでください」

「いいえ。此度の事件、原因は私にあります。私が悪いのですから、直接謝罪に訪れさせていただいたのです」

今回、王がドーリス公爵家を訪れた理由は、先日のアリサ誘拐事件にあった。

自分がアリサを王子の婚約者としようとしていたことを間違って知られたが故に、起こった事件。その原因は自分にあると、王は思っているのである。

故に、宰相や護衛の騎士たちに無理を言って、直接ドーリス公爵家を訪れた。

公爵家の全員が、依然としてアリサの誘拐事件のことで奔走しているがために、誰も仕事には行っていなかった。

故に、家族の誰かに言付けることも出来ず、直接訪れることになったのであった。

「本当に、申し訳ございませんでした」

王は、そう言って頭を下げる。その様子に、ドーリス公爵家全員

が焦ったことは言うまでもない。
家族は、急いで王の頭を上げさせる。だが、王は中々頭を上げないため、家族はさらに焦った。
そして、しばらく頭を下げていた王がようやく頭を上げたかと思うと、そのまま口を開く。

「アリサ嬢は、事件の日からずっと臥せっていると耳にしました。これではお詫びにはならないと思いますが、栄養満点の食材を手に入れてまいりましたので、アリサ嬢にどうぞ」

本当は直接謝りたいのですが、熱が下がっていないと言うのならば、誰かと会うのも苦痛でしょうから、無理でしょう？
王が言うと、父や母は少し考える。主の頼みなのだから聞くべきか、アリサの将来を考え、会うのを諦めてもらうべきか。
そして、答えが出たのか、父が静かに口を開いた。

「お詫びの品に関しては、アリサの父として深く、御礼申し上げます。ですが、臥せっているアリサに会うことは、申し訳ございませんが、ご遠慮ください」
「謝らないでください、ドーリス公爵殿。それが普通ですから」

その後、王は一拍置いて、今回のお詫びの本題を切り出した。

「此度は私の失態のせいで、アリサ嬢に辛い思いをさせてしまいました。王妃とも話し合った結果、アリサ嬢と王子の婚約を、一時的に凍結させます」

王のその言葉に、ドーリス公爵家の面々は、嬉しそうな表情を見せる。だが、先ほどの王の言葉を考えて、引っかかる言葉があった。

「一時的に？」
「凍結？」
「どういうことです？」

その疑問は、セインやルウィン、父が王に尋ねる。
すると、王は苦笑しながらも、こう答えた。

「やはり、私も王妃も、アリサ嬢を諦めきれないんです。ですが、今のままだと間違いなくアリサ嬢は危険に晒される。だから、危険分子を取り除いた後で、また、アリサ嬢を王子の婚約者として発表させてください」

その言葉に、父や母、兄、姉たちは完全に停止した。せっかく、王や王妃がアリサを諦めたかと思ったら、実は諦めておらず、いつの日かまたアリサを王子の婚約者として発表するなんて……。
彼らの先ほどの喜びは、塵と化し風に乗ってどこかへと飛んでいくのであった。

そして、しばし放心状態に陥るのであった。
――シャーナが、非礼を詫びながらも、アリサが泣いて目を覚ましたことを知らせに来るまで。

「非礼はお詫びいたします。ですが、お嬢様が大泣きで、奥様を呼んでいらっしゃるので……」

それを聞いて正気に戻った母は、同様に王に非礼を詫びた上で、シャーナと共にアリサの部屋へ向かう。
泣いている我が子を泣き止ませるために。我が子に安心を与えるために。

「さて、では私もそろそろ失礼します。アリサ嬢が早く元気になることを祈っていますよ」
「ありがたいお言葉です」
そして、王を見送った家族は、急いでアリサの眠る部屋へと向かう。心なしか、全員が駆け足だ。
『アリサッ！』
そうして父や兄、姉がアリサの部屋の扉を開くと、そこには母に抱きしめられているアリサがいた。
もう既に泣き止んではいるらしい。父たちは、そのことにひとまず安堵する。
「アリサ、怖い夢を見ていたの？」
「大丈夫だよ。それは、夢であって現実ではないんだから」
「うん、ありがとう、ねえさまたち」
アリサは顔だけは優しく言葉を紡いだ姉たちのほうを見るのだが、それでも母からは離れない。母は、アリサが移動したいのならば移動できるよう、手を離しているのだが、アリサ自身が母の元を望んだのだ。
兄たちは、そんなアリサに近寄り、頭を撫でる。そして、口を開いた。
「それにね、アリサ。仮にその夢が現実になっても、僕たちがアリサを守るから」
「アリサに害を成すものは、僕たちが許さない。――絶対に守るよ」
アリサは、そんな兄たちの言葉に、笑顔で頷いた。嬉しそうに微

笑む。

その後、母がアリサに眠るよう促し、ベッドに横にさせると、少しの時間ですぐに健やかな寝息が聞こえてくる。

母たちはそんなアリサを優しく見守り、そして、シャーナたちにせっかく王からもらった栄養満点の食材をアリサの食事に使うよう、指示を出す。

そうして栄養満点の食材を使った食事を食べ、薬を飲んで眠ると言う生活を数日間続けたアリサは、すっかり元気になり、いつもの調子に戻った。

だが、事件のトラウマが消えたと言うわけでは、無かった。アリサは目を覚ますとすぐに、ここがどこであるのか、そばに誰がいるのかを確認するようになった。

そして、その場所が自分の部屋や見慣れた場所ではないと、恐怖に体を震わせ、泣き叫ぶようになった。

可哀想なアリサ。絶対に、君は守る。守ってみせる。

君に害を齎すモノを、絶対に許してたまるか。

覚醒のとき

怖い。怖い。怖い。
誘拐されたあの日のことを思い出して、怖い。思い出したくもないのに、何故か頭の中にはそのときのことを思い浮かべる。

突然、私に何かをして眠らせ、攫ったメイド。その顔は、よく覚えている。優しそうな顔をしたメイドだった。
それなのに、彼女は私の誘拐に加担した。私を眠らせ、私を屋敷から出した。

人は、どうやって信じればいいの？　信じて裏切られたらどうするの？
裏切られたら、何を信じて生きていけばいいの？

怖い。怖い。怖い。
シャーナ以外のメイドみんなが怖い。執事たちも、みんな怖い。

誰が、裏切るの？　誰も裏切らないの？　信じられない。
私は一人では何も出来ない。自分の身を守ることすら、出来やしない。だから、余計怖い。

今回は、とうさまたちが早く助けに来てくれたから、生き延びることが出来た。
だけど、次があったとき、とうさまたちが早く助けに来てくれるとは限らない。

――そのとき、私は生き延びることが出来るのだろうか。

頼ってばかりでは生きていけない。私自身が、生きる術を覚えなくては、生きていけなどしない。

私の身は、自分で守らなくてはならない。頼ってばかりで生きていっては、いけない。

自立しなくては。いつまでも両親や兄弟たちに頼って生きていってはいけない。

――私は、生きる。生き延びてみせる。

パシン。

その瞬間、私の中で何かが音をたてて弾けた。

それと同時に、体の中から何かよく分からないものが出てこようとする。これは、何だ。

「アリサ！」

そう思っていると、ドタバタと廊下を走る音が聞こえて、扉が乱暴に開かれる。開いたのはかあさまだ。

扉を開いたかあさまは、私の姿を見て焦る。でも、どうして焦ってるの？　分からないよ。

「アリサ、今、魔力を発しているのが分かる？　分かるのならば、放出を止めなさい。これ以上は、危ない」

「まりょく……？」

「そう、魔力。分かったら、抑えなさい」

抑えるって言っても、どうやって抑えるの？　分からない。何もかも、分からない。

「前、本で読んで教えてあげたでしょう？　人には生きるために魔

力が必要だって。そのときに、話したはずよ？」

そういえば、聞いた。小さい頃に強請って読んでもらった本にそう書いてあったっけ。

人間は生きるために魔力が必要で、魔力が無くなったら体が持たなくなって、死ぬんだって。

今の私は、魔力をどんどんと外に出している状態。このまま出し続ければ、いずれ枯渇する。

――そこで待っているのは、『死』だ。

――死？　私は死ぬの？　さっき、生きると決めたのに。

魔力の放出は、どうやったら収まるんだ？　念じればいいのかな。とにかく、放出が止めばいい。

「そう。その調子よ、アリサ。その調子で魔力の放出を止めようね」

そっか、これでいいのか。そう思いながら念じ続けると、体から何か、いや、魔力が出て行くような感覚は消える。

それと同時に、私はベッドへ倒れこんだ。

「アリサ！　大丈夫？　今、アレグラを呼ぶからね」

「かあさま……、へいき。ちょっと……疲れただけだから」

「ダメ。初めて魔力を使ったときは、みんな無理をするものだから診てもらわなくちゃ」

かあさまはそう言ってアレグラを呼ぶ。

それから然程時間を空けずに、アレグラが急いで部屋へやってきた。……そこまで急がなくてもいいのに。

「遅くなりました！　お嬢様の様子は……？」
「魔力を抑え込んだら、倒れたの。魔力切れを起こしているかもしれないから、しっかり診てくれる？」
「分かりました。お嬢様、力を抜いて、警戒しないでくださいね」
アレグラはそう言って、私の服を捲り、心臓の辺りに手をかざす。
……何だろ？

「大丈夫です、魔力切れは起こしていません。ですが、魔力を相当出したみたいですね。――お嬢様、起き上がることは出来ますか？」
「ん」
言われて体を起こす。――起こせない。何でだ。
うりゃっ！　えいやっ！　必死で体を起こそうと足掻くのだが、起こせない。
というか、あまり体を動かすことが出来ない。

「もう結構ですよ。疲れたでしょう？　今は魔力が命を保てるぎりぎりくらいしかありませんから、体が命を守るために、動かさないようにしているんですよ」
ですから、魔力が回復するまでは絶対安静ですね。体が動かせるようになったから大丈夫、と思っていたら痛い目を見ますからね。
アレグラは私の目をじっと見て告げる。……怖いな、おい。

「これからは、少しずつ魔力のコントロールを覚えてくださいね。そうすれば動けなくなるほどまではならないでしょうから」
「はーい。――――かあさま、いいよね？」
アレグラの言葉に、一応かあさまに許可を得る。許可を得ずにや

れば、絶対に後が怖い。

「魔力のコントロールは必要だからね。かあさまが教えてあげる」
「ホント！？」
「ええ。かあさまならアリサの調子も分かるし、アリサは知らない人に教えてもらうの、怖いでしょう？」

ぎくり。図星だ。
だって、知らない人は怖い。あのときのメイドや男爵のように、私を使ってとうさまやにいさまたちを陥れようとするかもしれない。
そんなのは、もう嫌だ。あんな怖い目には二度と遭いたくない。
私がそう考えていることが分かったのか、かあさまは私の頭をくしゃりと撫でた。そして、優しく微笑みながら告げる。

「アリサはかあさまたちが守るからね。もうあんな怖い目に遭うことはないよ」
「うん……、うん」

かあさまの笑顔は、優しい。その優しい笑顔は、私に落ち着きを、安心をくれる。
大丈夫。大丈夫。――私は、大丈夫だ。

とうさまたちが守ってくれる。だから、次は無い。
次があっても、魔力のコントロールを覚えて、自力で何とか出来るようになってやる。

私は、生きるんだ。

ちなみに、これは余談なのだが、メイドたちの噂を小耳に挟んで

知ったこと。

私を攫った男爵は、王命により死刑となり、男爵の家族、係累のものは爵位取り上げの上、王都追放になったそうだ。

本気で怒ったとうさまたちの恐ろしさを知った瞬間だった。

覚醒のとき（後書き）

やっと、タグに偽りなしになりました。
魔法が、魔術がやっと出せました。

祝・覚醒

この日のドーリス公爵家は、めでたいムードに包まれていた。理由は、アリサの魔力の覚醒にある。

この国では、魔力の覚醒は大人に一歩近づいた印とされ、順調に成長している証となっているのだ。

普通の子供は、七・八歳ごろに魔力を覚醒させ、そこからコントロールを覚えていく。

事実、ルウィンやカイン、エルミナは七歳のときに、ジャスリーンとセインは、八歳のときに魔力を覚醒させた。

だが、アリサは普通の年齢を過ぎた九歳になっても覚醒しなかった。医者に相談した結果は、病弱ゆえの、体の小ささから遅れているのだろう、とのことだった。

そして、十歳にしてようやく魔力を覚醒させた。

魔力の覚醒は、成長の証。父たちは、末の娘の成長を心から喜んでいた。

その当の本人（アリサ）は、現在魔力の消費のし過ぎで完全に自室のベッドでダウンしているが。

「魔力覚醒のお祝いは、アリサの魔力が回復してからだな」

「だね。さて、アリサには何をあげようかな」

「いっそ、みんなでお金出し合って、いいものを買う？」

「それもありだね。でも、何を買ってあげるのさ？」

「アリサの属性が分かれば、それにあうものを買うんだけど」

「私は自分で作った魔力回復剤あげよ」

エルミナの言葉に、兄弟たちは過敏に反応した。

「エルミナ、それは別にやったらどうだ？　今回は、全員でいいものを送ろう」

「んー、まぁ、それでもいっか。アリサ、何が喜ぶかな」

兄弟たちはそうやって楽しそうに話し合う。父は、そんな子供たちを微笑ましげに眺めていた。

そして、父自身もアリサに送るプレゼントを何にするか、真剣に思案していた。

ルウィンが魔力を覚醒させたときは、父は魔術本をルウィンにプレゼントした。

ジャスリーンが覚醒させたときも、ルウィン同様魔術本をプレゼントした。

セインとカインは、小さい頃から騎士を目指すと言っていたため、父は二人に剣をプレゼントした。

エルミナには、魔力の媒体となるピアスをプレゼントした。

さて、アリサには何をあげようか。

そして数日後、魔力が回復し、いつものように過ごせるようになったアリサは、再びアレグラのお世話になっていた。

とは言えど、熱を出したわけではなく、父や母たちの希望により、アレグラにアリサの適正属性を調べてもらおうとしたのだ。

「お嬢様の属性は、風と水のようですね。二属性とは、さすがです」

「二属性？　それってすごいの？」

アリサの属性を知ったアレグラは、目を見張らせ告げる。だが、アリサはそのすごさに一切気がついていないらしい。
アリサは首を少し傾げ、アレグラに尋ねた。そんなアリサに、アレグラはゆっくりと説明を始めた。

「この国では、大体の人が一属性しか持たないものなのです。二属性持っているのは、今、分かっているだけで国に十人もいないでしょう」
「ふえーぇ。そうなんだぁ」

ちなみに、数少ない多属性の持ち主の一人は、今の国王であり、国王は何と三属性も持っている。そして、その息子である第一王子が二属性持ちなのだ。
故に、多属性を持つものは、国に申請すればそれ相応の名誉が与えられるようになっている。

アリサはそんなものには一切興味を抱いてはいないが。

ちなみに、この家ではエルミナが炎と水の二属性持ちである。そして、ルウィンが光属性。ジャスリーンは雷属性。セインが土属性。カインが水属性となっている。

そして翌日の晩、アリサを囲んで、ドーリス公爵家では祝いの席が設けられることになった。
参加者はもちろん、父、母、兄、姉、メイドたち、執事たちであり、ほかの人間は一切いない。だって、アリサが怯えるから。それが、兄たちの言葉である。

「魔力覚醒おめでとう、アリサ」
「これでアリサも大人に近づいたわね」

「ほら、アリサ。風属性の媒体の翡翠石（エメラルド）と、水属性の媒体の蒼玉石（アクアマリン）の入った腕輪（ブレスレット）。僕たちみんなからだよ」

ルウィンはそう言って、兄弟みんなでお金を出し合い、買ってきた魔力媒体となる腕輪（ブレスレット）をアリサに手渡す。

それを受け取ったアリサは、翡翠石の腕輪を右腕に、蒼玉石の腕輪を左腕にはめた。そして、それをくれた兄たちをじっと見つめる。

「似合う？」

「よく似合ってるよ」

兄たちのその褒め言葉に、アリサは更に笑みを深める。そんなアリサを見る兄たちの笑顔も、既にやばいところまで来ているが。

そうしていると、次は父と母が、アリサにプレゼントを手渡した。

それは、新品の魔術本だった。

「これで勉強しなさい、アリサ」

「でも、かあさまの見ていないところで、実践に移そうとはしないようにね。するなら、絶対にかあさまの前ですること。約束できる？」

「うん！　ありがとう、とうさま、かあさま」

アリサはそう言って両親から受け取った本をぱらぱらと捲る。――その目は、完全に釘付けだ。

始めて見る魔術本。家の図書室には、魔術本は置かれていなかった。

正確には、アリサが本に興味を持ち始めた頃に、父が全てアリサの知らない場所に隠した。

理由は単純。子供と言うものは、いろいろなものに興味をもちやすい。特に、魔術などと言うものは、子供にとっては最大の興味の

対象だろう。
だが、魔力はある程度大きくならなくては覚醒しない。つまり、それまでは絶対に使えない。
それでも、本で学ぶことは可能だ。――それが、諸刃の剣となる。
なまじ知識として知っているが故に、いざ魔力を発動させたときに、油断して大惨事を招きかねないのだ。
事実、昔、ある貴族の家でそんな事件も起こっていた。

だから、父は子供たちが小さい間はとにかく、魔術本には触れさせなかった。
カインやエルミナが大きくなると、魔術本を図書室に置くようにもなったが、アリサが生まれてからはまた隠した。
それが、子供を守るためだから。父は、そうして子供たちを守ってきたのだ。

そして、魔術本に読みはまるアリサを、両親や兄弟たちは優しい瞳で見つめ続けるのであった。

魔力コントロール

「アリサ。落ち着いて、魔力を感じてごらん」

家で魔力の覚醒の祝いを終えた翌日、アリサは早速母を教師に、魔力のコントロールを覚えようとしていた。

「魔力を放出させたらダメだからね。あくまで、感じるだけだよ」

「……むぅ」

アリサは母の指示に従い、実践してみようとするのだが、どうしても感じるだけではなく放出されてしまう。

そのたびに放出を抑え、また魔力を感じるという作業に戻っていた。

それが、何度続けられただろうか。

「疲れた……」

「相当魔力を放出しちゃったからね。じゃあ、実践はここでお終い。後は知識ね」

魔力の覚醒と言うものは、大人に近づいた証であり、そして、それは子供の体から大人の体へと、少しずつ変貌を遂げる印でもある。

子供が大人になれば、できるようになることが増える。その一つが、魔力。

魔力を放つのは当然だが、魔力を受けるのにも耐性ができるようになっている。

故に、大人になると、治療用の魔術を受けることができるように

なる。
子供に治療用の魔術は、使うことはできない。大きすぎる力は害しか齎さない。

だから、今回の魔力の覚醒を一番喜んでいたのは、父や母なのだ。
魔力が覚醒すれば、治療に魔術が使えるようになるため、治るのが早くなる。アリサの苦しみを減らすことが出来る。

ちなみに、アリサが魔力を覚醒させた日、アレグラがアリサの魔力値を調べた方法も、魔術によるものである。

そして、魔力は生きるのに必要なものである。覚醒していない子供でも、一応魔力自体は持っている。だが、それは生きるためだけのものであり、その容量は小さい。
だが覚醒すると、生きるのに必要な魔力以外にも余裕が出来る。その力を使って、人はいろいろなことをしているのである。

「かあさま、魔術見せて」
「んー、じゃあ、こんなのはどう？」

たとえば、このように。
母は魔力を使って、指先に小さな火を灯す。そして、少し暗くなり始めたアリサの部屋の燭台に火を灯す。
そんな母の魔術に、アリサは完全に興味津々だ。

「かあさますごい！　私もそうやって使えるようになる？」
「アリサの属性は風と水だけど、こんな小さな火くらいなら、熾せるかもね。頑張ろうか」
「うん！　頑張る！」

でも、今日はもう魔力は使わないからね？　優しく告げる母に、アリサは不満げだ。大丈夫なのに。そう呟いていた。

そんなアリサに、母は頭を撫でてやりながら優しく微笑み、告げる。

「いきなり無茶はいけないわ。ゆっくり、きちんと覚えて行こうね」

「ん――――分かった」

アリサの答えを聞いた母は、ホッとした表情を見せる。何せ、アリサは少し無茶をするとすぐに熱を出す。それに、今回は魔力が関わっているため、無理をして使いすぎれば、それは生命すらも脅かす。

だからこそ、素直に聞き入れた娘に、母はいい子いい子と、声をかけながら頭を撫でてやった。

アリサは、嬉しそうに、気持ちよさそうに微笑む。

「さ、疲れただろうから、しばらく休んでなさい」

「そんなに疲れてないよ？　大丈夫」

「いいから休んでなさい。ほーら、いい子いい子」

母はそう言ってアリサを小さな子供扱いし、寝かしつけようとする。アリサはその子供扱いは嫌なようだが、ここで無理をして体調を崩したくはないらしい。

アリサが母の言葉に従い、ベッドに横になり毛布を肩までかけると、母はそんなアリサを優しく見守る。

そして、アリサは母の見守る安心できる空間で、気持ちよく夢の世界へと落ちていった。

それからアリサは毎日魔力のコントロールに励んだ。とにかく励

んだ。
その甲斐もあってか、数日後にはアリサは指先に小さな炎を灯すことができるようになっていた。
本人の持つ属性以外でも、きちんと魔術を使うことが出来る。これ便利だ。これが、炎を灯すことに成功したアリサの感想だった。

「アリサは覚えるのが早いわねー。じゃあ、次はアリサの属性の水の魔術を使ってみましょうか」

アリサの魔術の覚え方の早さに喜ぶ母は、そう言って指先から水を出し、その水をコップに半分ほどためる。
そして、その水に少し命令をしたかと思うと、その水はあっという間に蒸発してしまった。

「まぁ、これは炎属性との組み合わせだけどね。アリサは、まずは水を出してごらん」
「うん！」

アリサはそう言って、水を出すために集中する。――のだが、いつまで経っても水は出てこない。

「かあさまー、水、出ないよぉ」
「水をきちんと感じなさい。水は、この辺一体にあるんだから」
「むー――」

アリサは、魔術を行使する。だが、水は一向に現れない。そして、またも魔術を行使する。何度も何度もそれを繰り返した。

「んー、よし、もう一回」
「今日はもうダメ。予想以上に魔力を使っちゃったでしょう」

「う……。――もう一回。もう一回だけ！」
「だーめ。今日はお終い」
ほら、たくさん魔力を使ったから疲れたでしょう。夕飯まで休みなさい。
魔力を使うための集中を止め、その疲労により床に座り込んだ娘に、母は優しく告げる。そして、手を貸し立ち上がらせ、そのままベッドへと向かった。
そして、ベッドに横になったアリサは、毛布をかける余裕すら残っていなかったのか、あっという間に眠りに付く。そんな娘を微笑ましげな瞳で眺めながら、母はきれいに毛布をかけてやるのであった。

無茶は禁止

夕飯時。眠っていたアリサが起き上がり、母たちのいる部屋へとやって来る。

「とうさま、かあさま、お腹すいた。ごはん、まぁだ？」

「もう少しだよ。アリサ、こっちにおいで。一緒に待っていよう」

父は眠たそうに、されど空腹に耐え切れずやって来たアリサを微笑ましげに眺めながら、自分のほうへと呼び寄せる。

呼ばれたアリサも微笑みながら父のそばへと駆けて行った。父は、駆け寄ってきた娘をしっかりとその腕で受け入れる。

「今日も頑張ったみたいだね、アリサ。疲れただろう？」

「うん。でもね、どんなに頑張っても、水出てきてくれないんだよね」

私の属性、水なのにな。呟くアリサに、父は頭を撫でてやりながら、優しく告げる。

「そう簡単に出来るものではないさ。何事も基本がなっていないと、何もできない。基本が固まれば簡単に水を出すようになれるさ。今は、頑張って基本を覚えるんだ」

「ちっちゃい炎は結構簡単に出たのに……」

そう告げるアリサの表情は不満たらたらだ。

だが、その直後のメイドの言葉で、その不満そうな表情はどこへやらか飛んで行った。

「旦那様方、夕飯の支度が整いましたよ」

その瞬間にアリサの瞳は輝く。アリサの表情は歓喜のそれに変わる。

そして、アリサは父や母たちと共に食事を取るために移動をするのであった。

そして翌日。中々起きて来ない主の末の子供を心配したシャーナが、アリサの部屋へ様子を見に向かう。――アリサは、眠っていた。すやすやと、気持ちよさそうに眠っている。シャーナ個人としては、そのまま寝かせておいてあげたいところなのだが、シャーナは職務を遂行するために、アリサを起こす。

「お嬢様、朝ですよ。起きて下さい」

シャーナは力を込めてアリサの体を揺らしているのだが、アリサが起きる気配は無い。

まさかと思ったシャーナは、アリサの額に手を当てる。――――アリサの額は、熱かった。

それを知ったシャーナは、急いで主夫婦の下へ報告に駆ける。アリサの発熱を知らせに、急いだ。

＊＊＊＊＊

目を開くと、いつものように見慣れた天井が目に映っているはずなのに、どうしてだか、えらく歪んで見える。グラグラと、目の前が揺れる。

――――あぁ、また熱が出たのか。ここまで視界が歪むのならば、結構高いのだろう。

体を起こそうとする。だが、起こした瞬間に目の前がぐらりと揺れ、私の体はベッドに戻される。

そのまましばらく天井を眺めていると、ドタバタと足音が響いてきた。――かあさまたちに知られてたか。

「アリサ！　大丈夫？　ごめんね、昨日無理をさせすぎたのね」

「かあさま……、へいきだよ。ちょっと、クラクラするだけだから」

「無茶をしないの。辛いでしょう？　辛いときは、正直に辛いと言いなさい」

かあさまは少し厳しい表情でそう告げる。うーん、確かに辛いけど、小さいときと比べると結構楽だから、そんなに激しく無茶はしてないと思うんだけどな。

小さい頃は、こんなことを考える余裕なんて全くなかったのだから。あの頃は、熱を出すととにかく何も考えずに、深く、深く眠っていたかった。

でも、今は考える余裕がある。だから、大丈夫だよ。

だから、かあさま。そんな顔をしないで欲しい。私は大丈夫だよ。

「かあさま、本当に大丈夫だから。――大丈夫」

「……アリサ。後でアレグラを呼ぶから、それまで眠ってなさい」

私が言うと、かあさまは溜め息をついて、そう告げる。えっと、何で溜め息？　私、大丈夫だって言ってるのに。

でも、眠っていろと言う命令は、聞いておく。だって、だるい。クラクラする。

今目を瞑れば、そのまま夢の世界へ直行しそうだ。

＊＊＊＊＊

「奥様！　お嬢様がまた高熱を……！」

アリサの高熱に気がついたシャーナは、急いで母や父、兄弟たちにアリサの発熱を知らせる。

それを聞いた家族は、揃ってアリサの部屋へ、急いで足を向けた。

母たちがアリサの部屋の扉を開くと、アリサが目を覚ましていることに気がつく。

そして、そうして目を覚まし、されどベッドに横たわったままのアリサに母が声をかけると、アリサは大丈夫だと、平気だと告げる。

強がりを言う。アリサの言葉を聞いた母たちは同時にそう考えた。

だから、母たちは主治医であるアレグラに連絡をつけることを考える。同時に、アリサを再び寝かしつける。

母に命じられたアリサは、辛いのか、あっという間に眠りに付いた。

「本当に、無理をさせすぎたわね。ごめんね、アリサ」

母は、眠っているアリサの頭を撫でながら、優しく告げる。そんな母の様子を、家族は心配そうに眺めていた。アリサは大丈夫だろうか、と。

だが、そうやってずっと眺めておく時間は無い。父や兄姉たちは、急いで食事に向かい、仕事に遅れないように家を出るのであった。

しばらくして、アレグラがアリサの発熱を聞き、公爵家へやって

来る。それを確認した母は、アリサを起こした。

「アリサ。アレグラが来たから起きなさい。ちゃんと診てもらおうね」

「ん……んぅ……」

「おはようございます、お嬢様。今日はどんな調子ですか？」

目を覚ましたアリサは、まだ眠たいのか、目をぱちぱちをしながら、アレグラの質問の意味を考える。

アレグラもそれが分かっているからか、アリサに回答を急かすことなく、ゆっくりと待った。

「だるい。頭も少し痛い」

「そうですか。では、失礼しますね」

アリサが答えると、アレグラはアリサの服を捲り、胸のところに手をかざす。

そんなアレグラをアリサは不思議そうに眺め、尋ねる。

「何、してるの？」

「お嬢様の魔力の反応を見ているんですよ。相当辛いでしょう？」

「んー」

「回復の魔術をかけておきますからね。……注射よりはいいでしょう？」

「うん……。注射、いやだもん」

アリサが言うと、アレグラは微笑み、いつものように母に薬を手渡して帰っていく。

母がアレグラから薬を受け取り、アレグラを見送った後にアリサの部屋へ戻ると、アリサは眠っていた。

母は、そんな娘を優しく見守る。
早く善くなることを祈りながら、ずっと見守り続けた。

対価は大きい

「ねえ、かあさま。何で、小さいときは治癒魔術を使っちゃいけないの？」

アレグラを見送った後、アリサを見守っていた母は、目を覚ました娘に突然問われ、しばし考える。

そして、優しく微笑みながらアリサに答えを返した。

「どうしたの？　突然そんなことを聞いて」

「だって、気になるんだもん……」

今まで熱が高いときは注射だったけど、今日は治癒魔術だったでしょう？　どうせなら、小さいときも治癒魔術で治して欲しかったなぁって。

アリサが告げると、母は微笑む。そして、娘の頭を撫でてやる。

「大きすぎる力は害にしかならないからね。だから、子供のときは注射で熱を下げていたの」

「むー」

母が答えると、アリサはそうやって呻る。そんなアリサを、母は再び寝かしつける手に出た。

アリサの額に濡れた、冷たいタオルを置いて同時にアリサの視界も奪う。

「ほら、考えすぎたら熱が上がるから。今は何も考えずに眠りなさい」

そうして少しすると、アリサの健やかな寝息が母の耳に届く。そうしてようやく安心した母は、眠る娘を優しく見守るのであった。

アリサの考えていることも、もっともだと母は思う。母も、小さい頃は熱を出すとよく注射を打たれていた。それが、嫌いだった。

母の場合はアリサほど頻繁に熱を出すことが無かったため、注射を打たれる回数は僅かではあったが、それでも嫌いなものに代わりはなかった。

だが、大きすぎる力は害となる。小さな魔力しか持たない子供に、大きな魔力を送り込んだらどうなるか。

それは、限界まで膨らんだ風船に無理やり空気を送り込むようなこと。最後は、風船（体）が送り込まれる空気（魔力）をその内部に溜めきれず、破壊される。

風船（体）が割れる（壊れる）と同時に、無理やりにでも溜め込まれていた空気（魔力）は一斉に放出される。

――そして、生きるために必要な魔力すらも失い、死に至るのだ。

だから、大人は子供に魔力を使うことを絶対にしない。この公爵家に於いては、見せることすらしない。

見せれば、子供は絶対に興味を持つ。そして、破滅への一歩を踏み出すことになるのだから。

熱が下がったら、そこのところもきちんと説明をしてあげなくちゃ。アリサの寝顔を見つめながら、のんびりそう考える母であった。

それから少しして。

「ん……ぅう……」

眠っていたアリサが目を覚ました。目を覚ましたアリサは、母に声をかけることなく、ただただ、何かを探していた。

母はそんなアリサに声をかける。何を探しているのか、尋ねるためにも。

「んー、お水、欲しいなって思って」

「なら、言ってくれればいいのに。はい、お水」

母はそう言いながら、コップに水を汲み、アリサの体を起こす。そして、水を汲んだコップを手渡した。

「ありがとー、かあさま」

アリサはそう言って、コップに入っていた水を一気に飲み干す。よほど喉が渇いていたらしい。

そうして水をもっと欲しいと強請るアリサ。そのアリサを見た母は気がつく。アリサがずいぶんと汗をかいていることに。

「シャーナ、たらいにぬるま湯を入れて持ってきて。あと、タオルを数枚お願いね」

「畏まりました」

母はアリサに水のおかわりを手渡した後に、シャーナにそう命じる。アリサは不思議そうな表情をしながら、母を眺めていた。

そして、母に、シャーナに命じた内容について尋ねる。

「かあさま、どうしてたらいとかが必要になるの？」

「だって、アリサ、今汗だくでしょう。汗をきちんと拭かなきゃ、

冷えて熱が上がっちゃう」
「……あぁ、なるほど」
母の言葉を聞いたアリサは、ようやく得心がいったらしい。熱のせいでそこまで頭が働いていなかったようだ。
――そして、ベッドに横になり、再び眠りに付くために目を瞑った。が、もちろん、母はまだ寝かせない。
「アリサ。汗を拭かないと熱が上がるでしょう。それとも、アリサが寝ている間に勝手にやってもいいの？」
アリサの体もどんどんと大人の女性に近づいてきてるみたいだし、ちょうどいいから、今のうちにアリサのサイズを測って、服を注文しておきましょうか。
母が言うと同時に、アリサの瞳はぱっちりと開かれた。その目は、恨みがましい。
「かあさまのいじわる」
「あはは。ごめんね、アリサ。冗談だから」
母とアリサがそんな会話を展開させていると、ぬるま湯を張ったたらいを持ったシャーナと、タオルを持ったメイドがアリサの部屋へとやって来た。
それを確認した母は、アリサを起こし、服を脱がせていく。
「本当に、汗でびっしょりね。よかった、気がついて」
「んー、だって、熱いもん」
アリサはそう言いながらも、大人しく母に体を拭かれていた。が、途中で完全に寝入った。

「シャーナ、アリサの体を支えていてくれる？」

そして母は、寝入ったアリサの体をシャーナに支えてもらい、アリサの体の汗をきれいにふき取り、服も着替えさせ、ベッドに横にするのであった。

その後、昼食のためにアリサを起こし、きちんと食事を取らせ、薬を飲ませるとアリサは再び眠る。

早く熱を下げて元気になるためにも、アリサはぐっすりと眠っていた。深く。深く。

そんなアリサを、母は優しい瞳で見つめる。

つい最近まで小さくて、幼くて、何かあるとすぐに泣いていた末娘。そのたびに、翌日は発熱した。

兄や姉と遊ぶのはいいのだが、無理をしすぎてしょっちゅう熱を出していた子供。

それが、ずいぶんと大きくなった。

魔力も覚醒し、体つきも少しずつではあるが、大人のそれに近づいてきている。

この子は、いつまでこうやって世話を焼かせてくれるだろうか。反抗期が来たら、そのときはどうしようか。

アリサの寝顔を見ながら、真剣に思案する母であった。

仕事を終え、急いで家に帰ってきた兄弟たちは、皆一様にして同じ場所を目指していた。
目指す場所は、アリサの部屋。兄弟たちは急いでアリサの部屋へと向かう。

『アリサっ！』
「うるさい」

アリサの部屋の扉を開け、アリサを呼ぶ兄弟たちだったが、母の一言であっさりと黙らされた。母、強し。

「アリサは寝てるから、静かになさい。起きたらどうするの」

兄弟たちは母のその言葉に従い、口を噤み、静かにアリサの部屋に足を踏み入れる。
アリサは、母の言うとおり、眠っていた。気持ちよさそうに、心地よさそうに、すやすやと寝入っていた。
そんなアリサを見た兄弟は、ホッとする。意外と元気そうであることに。

それからは、母はアリサの部屋を去り、代わりに兄弟たちがアリサを優しく見守る。
時に、無意味にアリサの頬をつついたりしながら、それでも優しい瞳のままであった。

「ん……ぅっ」

そうしてしばらくすると、アリサが目を覚ます。そして、そばに大好きな兄や姉がいることに気がついて、嬉しそうに微笑んだ。

「おはよう、アリサ。調子はどう？」

「おかえりなさい、にいさま、ねえさま。もう大丈夫だよ。元気元気」

アリサはそう言って微笑むが、兄弟たちはにっこり微笑みながらも、信じていなかった。

アリサは、苦い薬を飲みたくないがために大丈夫だと強がることを兄弟たちはよく知っていたからだ。

それを知っているがために、代表してジャスリーンがアリサの額に手を当てる。もちろん、その額はまだまだ熱い。

「まだ、熱高いね。本当は大丈夫じゃないでしょう？」

「……、大丈夫！　大丈夫だよ！　今日は、いつも熱出したときよりも楽だもん！！」

アリサがそう言うと、兄弟たちは「アリサ、君って子は本当に強がりばっかり言うんだから」と、生暖かい眼差しをアリサに向ける。

アリサもそんな目で見られているのに気づいているため、「本当に大丈夫だよっ！」とベッドから起き上がり、兄弟たちにアピールする。

だが、兄弟たちの生暖かい視線は止まない。そして、兄弟たちはその目で見つめたままで、元気だとアピールするアリサをベッドに戻し、寝かしつける。

「アリサ、まだ熱が高いんだから、休まなくちゃ」

「眠たくないもん。……何か、お話して？」

アリサのその言葉に、兄弟たちは軽く溜め息をつくのだが、話をすれば、それで聞きつかれて眠るかもしれないと考えたのか、口を開く。

「何の話がいい？　アリサ。リクエストして」
「んーっと、神様のお話聞きたいな」
「神様の話？　それならジャスリーンが一番詳しいか。頼むぞ、ジャスリーン」
「分かった。じゃあ、簡単なところから説明しようね」

この世界では、神様をとても神聖なものと考え、祀っている。神は一人ではなく複数おり、一人一人に能力がある。
例えば、火の神ミカエル、水の神ジブリール、地の神ウリエル、風の神ラファエルのように、一人一人、司る能力が違うのである。

「アリサ。転生する前に神様に会ったって言ってたよね？　どんな人だったか、覚えてる？」
「んとね、金髪のお兄さん」
「金髪のお兄さんかぁ」

アリサの属性を考えれば、多分、その神様は水の神、ジブリール様だろうね。
水の力は、回復の力。多分、ジブリール様はアリサの前世の魂の傷を癒して、転生させてくれたんだと思う。
そして、多分アリサはジブリール様の加護を受けてるよね。だから、今まで何度か死にかけても生き延びてきたのだと思う。水は、回復だから。

「あぁ、だからか。それは、ジブリール様に感謝しなくては」

ジャスリーンが言うと、ルウィンたちが揃って手を合わせ、水の神ジブリールへ感謝の言葉を、心の中で告げる。

そうしていると、横になったままのアリサがうとうととし始めた。話を聞いて眠たくなったのだろう。

兄たちは、そんなアリサを寝かしつけるために、きれいに毛布をかけてやる。すると、アリサはあっという間に眠りに落ちていった。

「アリサは、ジブリール様とラファエル様に好かれているんだろうね。属性が二つだしね」

「あぁ。アリサの前世が前世だから、神様も気にしてくれているんだろう」

アリサの前世は、二度の事故で命を落とした。人生を好きだと思えなかった有紗。だから、神様はそんな有紗を可哀想に思ったのか、死を待たずして転生させた。

生きたままで、次の人生を歩ませると言う荒業に出た。結果、アリサの体は弱くなったが、それでも人生を楽しむことが出来ていた。

「この複数属性が、アリサに負担を掛けることにならなければいいんだけど」

「大丈夫だ。何があっても、僕たちが守ってやればいい」

「それも、そうか。そうだね」

「それに、複数属性に関しては私もいるしね」

ジャスリーンの言葉に、ルウィンたちは優しく告げ、そして、エルミナは微笑みながら告げる。それが、ジャスリーンを安心させた。

そして、兄弟たちは新たに決意する。絶対にアリサを守ると。アリサを守るのは自分たちであると。

魔力属性が複数であることは、貴重であるが故に、どうしても国

中で評判になりやすい。

アリサの場合は、それが負担になる可能性が極めて高い。だから、兄弟たちはアリサを守る。それがアリサのためだから。

アリサを守る。それが、兄弟たちの役目でもあるから。

神との再会

この日、夕飯を食べたアリサはあっという間に眠りについていた。
そして、夢を見た。

「久しぶりだね、アリサ。魔力が覚醒したそうじゃないか」
「久しぶり、お兄さん。……いや、ジブリール様？」

アリサが言うと、お兄さん、訂正、ジブリールは目を見張らせる。
そして、優しく微笑んだ。

「確かにそうだけど、アリサには今までのようにお兄さんと呼んで欲しいな」
「んー、じゃあ、今までどおりお兄さんて呼ぶね」
「あぁ。そのほうが嬉しいな」

アリサの言葉にジブリールは嬉しそうに微笑む。そして、アリサの頭を撫でた。自分が転生させたが故に小さくなった少女を優しく見つめながら。
それでも、最後にこうやって合見えたときと比べると大きくなっているのが分かる少女。

「それとね、今日は紹介したい人を連れてきたんだよ」

ジブリールはそう言って、一人の少女をアリサの前に立たせる。

「彼女は風の神、ラファエル。もう一つの君の属性を司る神だ」
「はじめまして、アリサ。私は風の神ラファエル。ジブリールがお兄さんだから、私はお姉さんって呼んでと嬉しいかな」

「うん。よろしくね、お姉さん」

アリサがラファエルににっこりと微笑みながら告げると、ラファエルは萌える。萌え、そして、顔を両手で覆った。

その様子を、アリサは不思議そうに眺める。お姉さん、何でこんなことをしているんだろう、と。

「アリサ。気にしなくても大丈夫だよ。もう少ししたら元に戻るからね」

そうしてアリサがジブリールと共にしばらくラファエルの奇行を眺めていると、しばらくしてラファエルが元に戻る。そして、ジブリールと共にいるアリサに手を伸ばした。

「アリサちゃん、ジブリールとばっかり一緒にいないで、こっちにおいで」

「うん」

ラファエルに言われたアリサは。ジブリールのそばを離れ、ラファエルの元へと走る。そして、自身の元へよってきたアリサを、ラファエルは優しく抱きしめた。

そして、アリサの頭を撫でる。小さな子供をあやすように、優しく撫で続けた。

「アリサ、君にはジブリールの加護がある。だけど、それだけじゃ危ないよね」

「……そう？」

「うん。だから、私の風の加護もあげようね。風の力が、君の身を守ってくれるように」

ラファエルが言うと、アリサは不思議そうな表情を浮かべる。そして、その表情のままラファエルを見上げた。
そのアリサの表情に、ラファエルは再び萌える。萌えて、再びその両の手で顔を覆う。

「本当に、アリサちゃんは可愛いなぁ。ジブリールが前代未聞の生きたままで転生させた理由が分かった気がする」
「ふえ？」

ラファエルはそう言って、アリサを思い切り抱きしめた。思い切り、ぎゅうっと抱きしめる。そんなラファエルの様子に、アリサは完全に不思議そうな表情のままだ。
そんなアリサを、ジブリールは優しく見守る。

「水の加護は体内に宿ってるけど、風の加護はもう体内に宿らせられないからね……。うーん、そうだ」

ラファエルが言うと、いつの間にかラファエルの手の中にネックレスがラファエルの手に現れる。そしてその手にあるネックレスをアリサの首にかけた。
アリサはかけられたネックレスをまじまじと眺める。

「これ、もらってもいいの？」
「もちろん。これは君のためのネックレスなんだから」

ラファエルが言うと、アリサは嬉しそうに微笑む。そんなアリサを見るラファエルやジブリールも嬉しそうだ。

「受け取ってくれてありがとう、アリサちゃん。さ、そろそろ起きなくちゃね」

ラファエルが言うと同時に、アリサの視界は真っ暗になる。そして、次に視界に光が戻ったとき、そこにはアリサの愛する母がいた。

アリサが目を覚ましたことに気がついた母は、アリサの首元に光るネックレスに気がつく。そして、尋ねた。

「アリサ。このネックレスはどうしたの？」

「ラファエルのお姉さんがくれた」

「ラファエルって、風のラファエル様のこと？」

「うん。お兄さんが紹介してくれたの」

アリサが若干寝ぼけ眼で告げると、母は驚いた表情で娘を見つめる。

今まで、生まれる前に神に会い、加護をもらったものはいても、生れ落ちた後に神に加護をもらったものなど一人としていなかった。だというのに、母の可愛いアリサはそれをやってのけた。それが、どんなに驚くことだろうか。

これが、アリサに負担を掛けることにならなければいい。母はそう考えるのだが、それは無理だろう。

ただでさえ、複数属性持ちというものは国中から見られることになる。アリサの場合、それに生まれた後に神の加護を受けたと言う、更に貴重なものまでも付く。

そうなると、アリサはどうなるだろう。国中から注目され、持てはやされ、どうなるだろうか。

その中でも元気に過ごしていてくれればいい。だが、それで体調を崩したりしたらどうしたらいいのだろう。

そのときは、権力を以ってアリサを守ればいいのだろうか。

権力を無視して、とにかくアリサを守ればいいのだろうか。

アリサに害を齎そうとするもの、全てを倒せばいいのだろうか。

「かあさま、どうしたの？　大丈夫？」

その思案が、アリサを不安にさせたらしい。アリサは黙っている母に、心配そうに声をかける。

そんなアリサに、母は優しく微笑みかけ、大丈夫だと伝えるのであった。そして、アリサを安心させたところで再び寝かしつけるのであった。

世間の目（前書き）

昨日は間違って、予約を入れた夜に更新をしてしまいました。

その件については、活動報告にて謝罪しておりますが、
ここでも記載させていただきます。

世間の目

「おい、知ってるか？　つい最近魔力が覚醒したらしいドーリス公爵家のお姫様、多属性持ちらしいぜ」
「本当か？　さすがは公爵家じゃないか。あそこ、すぐ上の姫様も多属性じゃなかったか？」
「エルミナ様だろう？　あの方は水と火の二属性だろう」
「で、そのお嬢様は？」
「風と水の二属性らしい」

ドーリス公爵家のある王都。その城下町では庶民たちがつい最近魔力が覚醒したドーリス公爵の末の姫、アリサの噂をしていた。
体が弱いという理由の元、社交界に一切顔を出さない公爵家の末の姫。
よって、庶民の誰もが、いや、殆どの人がアリサの顔を知らない。
知っているのは、アリサがほんの僅かな回数だけ出てきた街で見かけた人間だけだ。

「噂では、美少女だって話だろ？　お目にかかってみたいものだ」
「だなー」

街中でのアリサの噂は、そんなものである。とにかく、一度くらいはアリサの顔を見てみたい。噂の美少女を見てみたい。そんなものである。
とにかく、アリサの顔を見たいという話で、街中の噂は広まり続けていた。

そしてある日。噂の張本人であるアリサが、両親に外出を強請っていた。

「とうさま、かあさま。お外行きたい」
「え……？　えっと……。どうしようか？」
「あなたがどうするかによるでしょう」

父の言葉に母が返すと、父はたじろぐ。そして、真剣にどうするかを考え出した。その間、アリサは潤んだ瞳で両親を見つめ続ける。アリサのその目は、やはり凶悪的で父は勝てそうに無い。完全に負けそうだ。

「ア、アリサ。その目は、ちょっとキツいな……」
「ふえ？」
「アリサの目は可愛すぎるんだよ。ちょっと、やめてもらえるか？」

父が言うと、アリサは不思議そうに父を眺める。そんなアリサを、父は優しく微笑みながら頭を撫でる。そして、その目に勝てず、許可を出した。

「かあさまと一緒に行ってくれるのなら、かまわないよ。そして、護衛の兵士もきちんと連れて行くんだよ？」
「うわぁい！　ありがとう、とうさま」
「すまないが、頼んだぞ」
「分かりました」

父の言葉にアリサは喜び、そんなアリサを眺めながら父は母にアリサを頼む旨を伝える。そして、母もそんなアリサの外出を快く受け入れた。

その後、アリサは喜んで外出の準備に向かい、母もそんなアリサ

と共に外出の用意のために移動をする。

そして、アリサや母の用意の間に父は護衛の兵士に声をかけ、アリサの外出の旨を伝えに走る。アリサのために、急いだ。

その後、アリサと母、そして護衛の兵士は馬車に乗って街へ急いでいた。

「アリサ、そろそろ降りようか」

街に着いた馬車は、あっという間に降りるべき場所へと着き、アリサと母は護衛の兵士と共に馬車から降りていた。

そこには、街の人間がぞろぞろと集まってくる。その様子に、アリサが驚いた。驚いて、母の背に隠れる。

それを見た護衛の兵士は、しっかりとアリサと母をその背に庇い、街の人間を追い払う。

「散りなさい。奥様とお嬢様に害を齎すようでしたら、手加減しませんよ」

「今すぐ離れなさい。お嬢様が怯えておられます」

護衛の兵はアリサと母を守るために、急いで街の人間を散らす。

だが、街の人間は散らない。

兵や母たちがその理由を尋ねると、街の人間たちは嬉しそうな表情をして、口を開く。

「普段からお嬢様を見ることは叶わないのです。ですから、たまには見たいのです」

「そいつの言うとおりです。たまには、ご尊顔を拝したく存じます！」

庶民たちが兵士たちに告げると、母が溜め息をついて、アリサを後ろから引っ張り出す。そして、庶民に顔を見せた。

「この子がアリサよ。アリサ、挨拶なさい」

「アリサ、です」

アリサは母の横で自己紹介をすると、すぐに母の後ろに隠れる。それと同時に、護衛の兵たちは再び街の人間を追い払いにかかった。

「さあ、もういいでしょう。お嬢様が怯えていらっしゃいますから、退きなさい」

「だな。目的はお嬢様を怯えさせることじゃない、全員、退こう」

街の人間たちは、そう言って散っていく。それで、ようやくアリサは安心したらしい。母の後ろから横に移動し、母と手を繋ぐ。

それからは、アリサは母や護衛の兵士と一緒に街を巡り始めた。

「アリサ、今日はお外で何がしたかったの？」

「今日は……――――何となく、お外に出たかっただけ」

アリサが言うと、母は軽く溜め息をつく。だが、すぐに微笑み、アリサの頭をくしゃりと撫でた。そして、言う。

「なら、今日はどうする？　適当に街を見て、お家に帰る？」

「ん――――……うん」

そうして母とアリサは、手を繋いだままで街を一緒に巡る。護衛の兵士は、二人の二歩ほど後ろだ。

「アリサ、何か欲しいものはある？　この機会に買ってあげるわよ？」
「本当！？　なら、新しい本が欲しい！　魔術の本が欲しい！！」
「うーん、でも、まだ無茶をしちゃダメよ？　無茶をしたらまた熱を出してしまうからね」
「分かってる。今は読むだけだよぅ」

アリサが言うと、母は優しく微笑む。そして、そのアリサの手を引いて本屋へと足を向けた。

「いらっしゃいませ、アリサお嬢様、公爵夫人様」

本屋に着くと、本屋の店主が来たのがアリサだと気づいたのか、店主は名指しでアリサと母を歓迎する。
そして、母はそんな主に声をかけ、アリサの属性にあった魔術本を購入し、屋敷へと戻るのであった。

その後、家に帰ってきたアリサが、母に買ってもらった魔術本に読みはまり、分からないところを兄や姉に聞いていたことは、最早言うまでもない。

魔術本は面白い

街に出て、母に新しい魔術本を買ってもらったアリサ。そんなアリサは、食事を終えて、お風呂にも入り、その後は自分の部屋のベッドで楽な体勢をとり、買ってもらった本を読んでいた。

アリサが本に読みは待っているためか、この部屋には兄や姉たちはいない。アリサが読みはまっていることに気がついた時点で自分の部屋に戻ったのだ。

風の魔術。それは、風の神ラファエル様の力の一部をお借りし、使う魔術。

例えば、風の力を借りて自らの体を浮かし、早く目的地に着くと言う方法も、風の魔術である。

だが、それは初心者は使ってはならない。ある程度風に慣れたものでなければ、この魔術は大怪我を伴うものとなる。

初心者が使う風の魔術は、例えば小さな竜巻等を召喚し、物を浮かせる等である。これならば、消費魔力も少ないし、失敗しても自らの身に返る負担はない。

だから、初心者が風の魔術を使うときは、まずは小さなものを浮かせる魔術の練習から始めよう。何か、軽いものから浮かせられるよう、頑張ろう。

魔術の基本は、全てが集中である。物を浮かせる際にも、軽いものだろうがなんだろうが、とにかく集中することだ。

集中して、目の前の浮かせたいものに意識を向けてみよう。うまくいけば、目の前のそれは浮いてくれるだろう。

後は、練習あるのみだ。練習して、とにかく練習して使えるようになろう。

だが、初心者は無茶は禁止だ。初心者が無茶をすれば、簡単に魔力が尽きて、命を危険に晒しかねない。魔力の残量を考えて、練習に励んでくれ。それが、説明をする私からの願いである。

「風は……とうさまが確かそうだったよね。見せてもらってこよう」

風の欄を読み終えたアリサは、本を閉じて父の元へ向かうため、ベッドから降りる。

そして、ベッドから降りたアリサは、父のいる寝室へと一目散に駆け向かった。

「とうさま」

両親の寝室へと現れたアリサは、驚く両親をよそに、父のそばに駆け寄り、いつものように潤んだ瞳で見つめる。

そして、静かに口を開いた。

「とうさま、風の魔術見たい。かあさまに買ってもらった本読んだんだけどね、実際に見たくなったの」

「へ？」

「とうさまの属性、風でしょう？　風の魔術見せて欲しいな」

アリサが言うと、父は目をまん丸にする。確かに、父の属性は風。だが、突然そういわれるとは思ってもいなかったのだろう。

ちなみに、母の属性は火である。

風と火の相性はとてもいい。だから、この二人は日常生活でも、戦闘のときでもとにかく相性がいいのだ。

「とうさま、……ダメぇ？」

父は、やはり娘の潤んだ瞳には勝てない。軽く溜め息をついた父は、アリサのリクエストに従い、風の魔術を使う。
父は、手のひらを上にし、その手のひらの上に小さな竜巻を発生させる。

「危ないから、触ってはいけないよ」
「うん。ありがとう、とうさま」

父が竜巻を発生させると、アリサはその竜巻に目を奪われる。そんなアリサに、父は危ないから絶対に触らないよう告げ、そして少しして、その竜巻を消し去る。
その後は、アリサの背を押し、アリサを部屋へといざなった。

「さ、もういいだろう？　アリサはもうおやすみ？」
「えーっ！　まだ大丈夫だよぅ」
「いいから休みなさい。そうじゃないと、明日の魔力のコントロール、禁止するよ？」
「え？　――とうさま、それずるい」

父の言葉に、アリサは過敏に反応した。とにかく魔術に興味を持っているアリサにとって、魔力のコントロールのを禁止するという脅しの一つで、アリサは素直に従うことになった。
そして、アリサは父と手を繋ぎ、大人しく部屋へと戻る。部屋に戻ったアリサは、父の言葉に従い大人しくベッドに横になった。それと同時に、父は部屋の明かりの火を消す。

「さ、アリサはもう寝ようね。おやすみ」
「はぁい。おやすみなさい」

父に眠りを促されたアリサは、父の言葉に従ってそのまま眠りに

着いた。
アリサの健やかな寝息が、室内に響く。父はそんなアリサにきれいに毛布を着せ、風邪を引かないようにしたあとで、自身も部屋へと戻る。
アリサが、明日魔力のコントロールの練習に励むだろうことを楽しみに考えながら。

そしてそのアリサはというと、父が部屋を出て行くのを確認すると、寝たふりを止め、起き上がる。そして、先日覚えたばかりの火を魔術で出し、部屋に明かりを灯す。
そして、先ほどの本を取り出して再び本を開いた。

水の魔術。それは、水の神ジブリール様のお力の一部をお借りし、使う魔術。
水は回復の力。水の魔術は攻撃にも使えはするが、メインは回復のための力となる。
水の力は、体内に宿る水の流れを操作し、体の不調を治す。医療系魔術師の使う魔術は、それである。
だが、この力は子供には絶対に使ってはならない。魔力の覚醒していない子供に治療系の魔術は、善いものであるはずがなく、寧ろ、害にしかならない。
水の魔術で回復の魔法を使うときは、まず、そのことを覚えておいて欲しい。
回復の力を使うときは、まずは体内の水の流れを知るべきである。体内の水の流れを知らないままでは、回復など出来るはずもない。

「お嬢様、まだ起きていらしたんですか」

そうしてアリサがずっと本を読んでいると、アリサの部屋の明かりに気がついたシャーナがアリサの部屋に入り、アリサを寝かしつ

けようとする。

「もう遅いですから、いい加減お休みになってください。本は没収です」

シャーナはそう言うと、アリサの持っていた本を取り、アリサの届かない場所へ置いて、そして、アリサの部屋の明かりを消す。

その後、アリサにきちんと毛布をかけて、シャーナはアリサの部屋から出て行く。そしてもちろん、その後は主夫婦の寝室へとアリサの夜更かしの報告へと向かうのであった。

それと同時に、アリサの夜更かしの対価として翌日に熱を出さないかが心配であることを、シャーナは主夫婦へ伝えるのであった。

夜更かしの後で

シャーナがアリサを寝かしつけた後、アリサは素直には眠らず、ベッドの上で横になっておくだけにとどまっていた。
眠ろうにも、魔術に対する興味が勝って眠れないらしい。だが、暇つぶしの本はシャーナによってアリサの届かない場所へ移動されている。

「眠れない……」

アリサは呟くが、当然ながらアリサのその言葉に返す言葉は無い。
だがそれでも、アリサにベッドから降りるという選択肢はないのか、大人しくベッドの上で横になったままでいろいろと考えていた。

「眠れないけど、どうしよう。今とうさまたちのところに行ったら、勝手に魔術使ったことバレちゃうよね……」

アリサは呟くのだが、シャーナが父や母に報告をした次点で、すでにそれはバレてしまっている。だが、アリサはそれを知らないため、大人しくベッドの上だ。
だが、それも一時の間だった。しばらくベッドの上にいたアリサは、さすがに限界が来たらしく、ベッドから起き上がり、両親の部屋へと足を向ける。

「とうさま、かあさま、眠れなぁい」

えぐえぐ。アリサは目に涙を溜めながら両親の部屋へ向かい、両親に甘える。
そうして甘えられた父や母は、優しくアリサを受け入れ、ベッド

の真ん中に寝かす。但し、若干のお説教は含んだ上で、だ。

「アリサ。勝手に魔術を使ったでしょう？」
「え？　つ、使ってないよ？　かあさま、何でそんなこと言うの？」
「本当にー？　なら、お父さまが消したはずの明かりが、またついていたのはどうして？」
「あ……あうあぅ」

容赦なく攻め込む母に、アリサはたじたじである。横になったままのアリサは、母に攻められるため、母から視線を外すのだが、すると、次は父が攻め込んだ。

「アリサ。勝手に魔術を使ったらダメだと言っていただろう？　約束を破ってはいけないよ？」
「ご……ごめんなさい」
「勝手に魔術を使ったら危ないと、教えたでしょう？　アリサ。今度からは絶対にしたらダメだからね」

視線を変えた先では、父に攻められ、再び視線を戻すと、今度は母からの容赦なき攻撃が降ってくる。その状態では、嘘を突き通すことは出来なかったらしい。アリサは素直に謝罪した。
すると、アリサが謝ったことで満足したらしい両親は、アリサの頭を撫でる。
その撫で撫でが、とても気持ちがよくて。その気持ちよさが、アリサに睡魔を呼び込んだ。

「眠たくなったかい？」
「うん……眠たい……」
「なら、眠るといい。寝ている間に部屋に運んでおいてあげようね」
「うん……、とうさま、好き……」

そうしている間にアリサは眠りに落ち、父はそんなアリサを優しく抱き上げ、アリサの部屋へと運んだ。
気持ちがよさそうに眠り続ける娘。そんな娘を微笑ましげに眺めながら。

そして翌朝。アリサの部屋には兄弟たちが集まっていた。

「アリサ、朝だから起きて」
「んー、眠い。もうちょっと、寝るぅー」
「ダーメ。起きるんだ、アリサ」
「やーぁ。にいさまたちの、けちんぼぉ」

アリサはそう言いながらも、再び眠りに落ちかけている。兄弟たちはそんなアリサを容赦なく起こすのだが。

「けちで結構。いいから起きるんだ」
「母さんたちもアリサが起きるのを待ってるんだ」

兄弟たちはそう言ってアリサを起こす。が、やはりアリサは起きない。故に、兄弟たちは咄嗟にアリサの体調を調べる。アリサの額に手をあて、熱が無いか調べたのだ。
結果は、微熱。高いわけではないが、黙って見過ごしておいていい熱ではない。

「アリサ、調子が悪いかな？　微熱気味のようだけど、どうだい？」
「んー、眠い……」

そんなアリサを見た兄たちは、微熱気味であるが故に眠たいとい

うこともあるのだろうと判断し、部屋を出て行く。そして、両親にこのことを伝えに向かった。
アリサは起きてこないこと、そして、微熱気味であることを。

そして、それを聞いた両親は急いでアリサの部屋へとやって来、そして、アリサへ駆け寄る。

「呼吸……は正常。昨日の夜更かしのせいだろうな」

父が言うと、母もそれに同意する。そんな両親や兄弟たちの見守る中で、アリサは依然として眠り続けている。
両親や兄たちは何度も何度も起こしているのだが、それでもアリサは起きないのだ。

「アリサー、起きてよ。朝なんだから」
「だって、眠いぃぃぃぃい」

そう言いながらも、アリサは目をこすりながらも目を開く。その目は、まだ虚ろ気だ。

「おはよう、アリサ」
「むにゃ……。おはよぉ……」

何とか目が開いてはいるのだが、まだまだ眠たそうで、下手をすれば再び眠りに落ちてしまいそうである。
そんなアリサに、父や母は微笑みながら声をかける。

「アリサ、調子は悪くないかい？　悪いのなら、強がらずに正直に言うんだよ？」
「ん……眠い、だけぇ……」

だから、寝かせてぇ。アリサは言うのだが、父たちは寝かせない。今寝かせたら、間違いなく夜に眠れなくなることが決まっているからだ。

オマケに言うならば、アリサは昨晩も本の読みすぎで寝付けず、両親の部屋へ来て、泣きついた。そうして父たちのおかげでようやく寝付いたのだ。

「今寝たらまた夜に眠れなくなるだろう？　起きるんだ」

「やーぁ……。眠たいもぉん」

「起きなさい、アリサ。じゃないと……どうしようかなー？」

中々起きない娘に、母は嫌な笑みを浮かべながら告げる。だが、アリサはそんな母の言葉に反応する余裕も無いらしい。

――――完全に眠りに落ちた。

結果、母は起きないアリサで遊ぶのであった。

そして、目を覚ましたアリサは母のいたずらに驚くことになるのであった。

母のいたずら

中々起きない娘に、母は遠慮なくいたずらを実行する。何をしても起きないアリサ。それは、母にとっては絶好のおもちゃだった。

「母さん、これ、アリサが起きたらびっくりするだろ」
「起きないこの子が悪いの。私はちゃんと予告したわよ？」
「いや、でもさぁ……」

この日、折りよく休みだったカインは、母がアリサにいたずらをする様を、どう止めようか考えつつ、眺めていた。
母は、その間もアリサにいたずらを加え続ける。

アリサの顔にちょっとした落書きをしたり、そのまま服を捲り、お腹のところに落書きをしたりと、アリサが見たら本気で驚くであろういたずらを何度も何度も繰り返していた。
そして数十分後、アリサは母のいたずらによって、見事な状態になっていた。
それに満足した母は、容赦なく娘を叩き起こす。

「アリサ、いい加減起きなさい！　起きなさいったら！」
「んむ――――ぅ」

そうして目では文句を言っているアリサだが、それでもぐっすりと眠れてすっきりしたのか、先ほどと比べると簡単に目を覚ます。
そして、目を覚ますと同時に、お腹の辺りが冷えていることに気がついたらしい。そこに目を向ける。……母のいたずらに気がついた。

「かあさま、このよく分からない絵、何？」
「まぁ、よく分からないとは失礼な。――カイン、鏡持ってきて」
そしてカインが鏡を持って戻ってきて、己の顔にかかれた落書きを見たアリサは、再び不思議そうな顔をする。
「かあさま、この絵も何か分かんないよ？」
「再び失礼な。よく見て考えなさい」
「カイにいさま、この絵、何だと思う？」
「うーん、僕にも分かんないな」
アリサは兄と二人で、この絵が何なのか真剣に思案する。だが、二人とも答えは出ないらしい。
しばらく考えて限界が来たらしい。二人は、母に答えを尋ねた。
「かあさま、この絵、何？」
「んもー、二人ともどうして分かってくれないんだか」
母はそう言いながら答えを教えてやる。が、その答えを聞いた二人は、「は？」と言う顔をした。二人とも、そんな答えは一切考えていなかったらしい。
その後、アリサはシャーナたちに濡れたタオルを持ってきてもらい、顔とお腹をきれいに拭いて母のいたずらを消す。
「きれいに消えた？」
「まだだよ。アリサ、貸して。拭いてあげる」
シャーナに持ってきてもらったタオルでアリサが顔を拭きながら、兄にきれいに拭けたかどうか尋ねる。
そんなアリサに、カインはきれいに拭けていないと言いながら、

アリサからタオルを受け取り、アリサの顔のいたずらをきれいに拭っていった。

「ほぅら、きれいになった」

「ありがとう、にいさま」

その後、アリサはお腹にも書かれた落書きをせっせと拭っていく。その様を、母は面白そうに眺めていた。……またやりかねん。

そして、アリサの落書きがきれいに落ちると同時に、母はアリサに朝食を手渡す。

「はい、アリサ。お腹が空いたでしょう?」

「あ、ありがとう、かあさま！　お腹空いたっ！」

母が食事をアリサに渡すと、アリサは嬉しそうに微笑み、渡された食事を膝の上に置き、にこにこと微笑みながら朝食をとり始めた。

カインと母は、そんなアリサを嬉しそうに微笑みながら眺める。

そして、食事を終えたアリサは、満足そうに微笑み、食器をシャーナに預ける。

その後、アリサはベッドから降りて、シャーナに追いやられた本を取りに向かう。……のだが、シャーナはアリサがどう頑張っても届かない高さの場所に置いているらしく、アリサの身長では届かない。

アリサは、必死で背伸びをして本を取ろうと頑張るのだが、やはり届かない。

結果、アリサは兄や母に助けを求めた。

「にいさま、かあさま。本、取って?」

「ちょっと待って……」

「ダメよ。今日はその本を読むのは止めなさい」

アリサに頼まれたカインは、その頼みを受け入れ、アリサの希望の魔術本を取ろうとするのだが、母がそれを止めた。

それを言った母を、アリサはどうして？　という顔で見つめる。

――その目は潤んでいた。

「アリサにそれを渡したら、また夜更かししちゃいそうだからダーメ」

「今日はちゃんと寝るよぉ！」

「ダーメ。どうしても読みたいんなら、――カイン、読んであげて」

その瞬間、アリサの潤んだ瞳はカインに向けられた。

「にいさま」

「分かった。えっと、どこから読めばいいのかな？」

「水の魔術のところー」

アリサが言うと、カインはその言葉に従って本をパラパラと捲る。

そして、目的のページで手を止めて、アリサの希望通りに本を読み始めた。

「水の魔術ってすごいね。にいさま、水の魔術見せて」

本を読み進めていくうちに、アリサはどんどんと水の魔術に興味を抱いていく。そして、読み終えると同時にアリサは兄に水の魔術の実演を強請った。

何と言っても、カインの属性は水。双子の妹であるエルミナの属性の一つと同じ水だ。

「水の魔術とは言っても、僕は回復魔術は苦手なんだけど……」
「じゃあ、回復じゃなくていいから、水の魔術見たい」

アリサが潤んだ瞳のままで見つめると、カインは溜め息をつき、メイドにコップを持ってこさせる。
そして、水の魔術を用いて、そのコップに水を溜め込んだ。

「簡単な奴だと、こんな感じだね。まぁ、僕は魔術よりは剣術のほうが得意だからねぇ」
「じゃあ、今度剣術も見たいな」
「あー――母さん、いいのかな？　見せても」

アリサのおねだりに、カインはたじろぎながら、母に助けを求める。
そんな息子に、母は微笑みながら答えを返した。

「見るだけなら大丈夫でしょう。アリサ、するつもりはないんでしょう？」
「うん。だって、剣術って怖いもん」
「なら、いいわ。カイン、今度セインと一緒に見せてあげなさいな」

母の言葉に喜んだアリサは、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。そんなアリサを母が諫めた。

「アリサ。飛び跳ねたりしたら熱を出すでしょう？　止めなさい」

母に止められても喜びを隠せないアリサ。カインは、そんなアリサを微笑ましげに眺め続けるのであった。

剣術の見学

アリサが母のいたずらを受けた数日後、全員が休みの日に、セインとカインはアリサに剣術の様子を見せるために、稽古に励んでいた。

そのそばで、危なくないように公爵家の兵たちに守られたアリサや、そのアリサを同様に守ろうとしているルウィンたちがいた。

ジャスリーンはアリサを抱きしめながら二人の稽古の様子を眺め、エルミナは怪我をしたときのために一応自分の作った薬を用意しておき、ルウィンは何かあったときのために、アリサのたてとなるべくアリサの前に立っていた。

「アリサ、危ないから絶対に僕や兵の前に出ちゃいけないよ？」

セインとカインは、あれでも剣術に関しては国中で注目されるほどに強いんだから。

ルウィンがアリサに言うと、アリサは元気に頷き、大人しくルウィンや兵の後ろでしっかりと剣術を眺める。

辺りで、二人の操る刃を潰した剣のぶつかる音が響き渡る。その音を立てながら、剣でバトルを続ける。

アリサは、その剣戟を繰り広げる兄たちに完全に夢中である。

「セイにいさまとカイにいさま、すごぉい」

「うん。ホント、セインとカインは剣術に関しては国内でも最高レベルにいるだけあるよね」

そう言ってアリサとジャスリーンは話を続ける。だが、アリサのその目はセインとカインの剣術に向かっている。よほど楽しいらし

い。
ルウィンやジャスリーン、エルミナはそんなアリサを微笑ましげに眺め、そして、そのまま二人の剣戟を眺める。

「やあっ！」
「甘いっ！　脇ががら空きだ！」

カインがセインに切り込むのだが、セインはそんなカインをあっさりといなす。だが、カインは逆に返してくるセインを、必死で避けた。

「うおわぁっ！」
「お、成長したな、カイン。あれを避けるとは」
「それはっ、皮肉にしかっ、なってねぇ！！」

カインはそう言いながらも、必死でセインに切りかかる。だが、仮にも近衛隊三隊大隊長を任されているセインは、一般の近衛兵であるカインを一切寄せ付けない。とにかく、剣でカインの操る剣を右へ左へ動かし、避ける。
表情も、二人は全然違う。セインの表情にかなり余裕があるにも関わらず、カインの表情に余裕は全くない。とにかく必死だ。

「カイン、そろそろ攻めるぞ」

セインが言うとすぐ、カインに切りかかっていく。しばらくはその攻撃を必死で避けたり、防御をしていたのだが、だが、耐え切れなくなった。

「くあっ！」
「ほい、終わりっと」

セインがカインの首筋に刃先をあて、二人の剣戟は終了する。そして、降参の意思を見せたカインを確認したセインは、静かに剣を仕舞い、アリサの元へやって来る。

そうして来た兄を、アリサをキラキラとした瞳で迎え入れた。

「にいさまたち、すごい！　かっこいい！」

「んー、そうかな？　でも、アリサにかっこいいと言われるのは嬉しいな」

「アリサ！　僕はどうだった？」

「カイにいさまもかっこよかったよ」

アリサが素直に二人の兄を褒めると、褒められた二人は喜び、褒めてくれたアリサをよしよしと撫でる。その表情は、とても嬉しそうである。

そして、よしよしと撫でられているアリサは、気持ちよさそうな表情のままで、兄の目をしっかりと見つめる。そして、口を開いた。

「ねぇ、にいさま。にいさまたちの剣、持ってみたい」

「え！？　アリサには重たいよ？」

「持ってみたい」

潤んだ瞳で訴えるアリサ。アリサは、日本でも基本的に剣に縁が無かったため、剣に興味を持っていた。故に、アリサは兄たちに持ちたいと強請ったのである。

そして、強請られた兄たちは、アリサの売るんだ瞳にあっさりと負けた。

セインが鞘から剣を取り出し、アリサに握らせる。だが、セインはその手を剣から離さず、支えているままだ。

「にいさま、ちょびっと離してみて？」
「――――限界だと思ったら、すぐに手を離すんだよ？」

セインはそう言って、一度アリサの持つ剣から手を離す。その瞬間、アリサの腕がガクッと落ちた。

「重たいねぇ……、剣って」
「だろう？　だから、そろそろ手を離そうか」

アリサのそばで手を添えたまま待機しているセインは、アリサが重たいと言った後で、そろそろ下ろすよう促す。
促されたアリサも、素直にセインの練習用の剣を下ろした。そして、自身の腕を押さえる。ずいぶんと重たかったようだ。
そして、剣を鞘に仕舞ったセインは、優しくアリサに言葉をかける。

「アリサ。アリサは剣術なんて覚える必要はないんだから、剣を持たなくてもいいんだ。アリサは僕たちが守るからね」
「でも、私も自分の身くらい、自分で守れるようになりたいもん」
「うん、その心掛けはいいと思う。だけどね、アリサは僕たちに守らせて？　そう、決意したんだから」

セインが言うと、それに、カインが続く。そして、その後にルウィンやジャスリーン、エルミナも続いた。

「セインにぃの言うとおりだよ。僕たちは君を守ると決めたんだ。守らせてくれ」
「セインやカインの言うとおりだな。アリサ、僕は剣術は苦手だけど、権力の使い方はよく分かってる。何かあったら相談しておくれよ？」

「兄さんたちに相談し辛いことなら、私たちに相談してね。どうしても男には相談出来ないこともあるでしょう？」
「言ってくれれば、すぐに時間作って相談に乗るからね」

自分に向く優しい瞳。それを見たアリサはとても嬉しそうに微笑む。

自分に優しい兄と姉。そんな兄姉たちにとにかく愛される日々。

それは、愛おしき日々。
いつまでも続いていくであろう、愛おしき日常。

そんな日常と、愛を感じる幸せを噛み締めるアリサだった。

愛おしき日々

それは愛おしき日々。
兄妹や両親と共に過ごす、それが愛おしき日々。
愛し愛される、そんな愛おしき日常。

＊＊＊＊＊

「けほっ、げほっごほっ」

げほげほげほっ、こふっ。
セインとカインの剣戟を見て、興奮冷め止まぬ内に部屋に戻ったアリサは、げほげほと咳き込む。
そして、一度咳が出ると、中々止まらない。何度も何度も咳き込み続けていた。

「アリサ！　大丈夫じゃないね、早く横になって」
「だいじょ……」

兄たちの言葉に返事を返すアリサだったが、その途中で息を呑む音が兄たちの耳に届く。そしてその瞬間、アリサは再び激しく咳き込んだ。

「自分でも大丈夫じゃないのが分かったでしょ？　アリサ。早く横になって」
「ん……」

さすがにあれだけ咳き込んで疲れたのか、アリサは素直にベッドに横たわる。だが、アリサの咳は止まらない。何度も何度も苦しそ

うに咳き込み続ける。

「あぁ、熱が少し出てきてるのか。――興奮しすぎたのかな？」

「アレグラに来てもらえるよう連絡してくる。それまでアリサをお願いね」

「ああ。頼んだ」

咳き込むアリサの額に手を当てたルウィンは呟き、それに反応したジャスリーンはアレグラに連絡をしに向かう。

それからしばらくして、ジャスリーンはアリサを診にやってきたアレグラと共に、アリサの部屋へと戻ってくる。その間も、アリサの咳は止むことがなかった。

「アリサお嬢様、失礼いたします。ルウィン様方は申し訳ございませんが、退室願います」

そうしてルウィンたちが退室すると、アレグラは咳き込むアリサの服を捲り、胸元に手を当てる。

「無理をし過ぎましたね、お嬢様。ずいぶんと酷使しているようです。しばらくは、絶対安静ですよ」

「わかっ……げほっごほごほ」

「一応、治癒魔術で一時的にはありますが、咳は止めておきますね」

返事をしながらも咳き込むアリサに、アレグラは治癒魔法を使い、アリサの咳を止める。だが、それは一時的な処置にしかならないらしい。

だが、一時的にでも咳が止まったからか、アリサはアレグラに微笑みかける。感謝の気持ちのようだ。

そしてその後、アリサは部屋に残っていた姉たちの命令で眠りにつく。体調不良を早く治すには寝るのが一番だと言うことは、アリサ自身、今までの経験上よく分かっているからだ。

早く咳が止まないと、苦しむのは自分なのだから、それを避けるためにもぐっすりと眠る。

それから目を覚ますと、アリサのベッドのそばには、先ほどからずっといた兄弟たちのみならず、両親まで揃っていた。そのことに、アリサはまず驚く。

だが、その表情もすぐに消し去り、そして微笑んだ。

――――が、その瞬間、激しい咳がアリサを襲う。

「――――っ」

激しく咳き込むアリサに、家族たちは心配そうな表情を見せ、そして水を用意させ、アリサに手渡す。

「あ……りがとー……」

礼を言ってアリサが水の入ったカップを受け取ると、アリサはすぐにその水をごくごくと飲み干した。そして、おかわりを要求する。

それからは落ち着いたのか、呼吸も正常に戻り、今度こそアリサは家族に淡く微笑んだ。

「アリサ、大丈夫？」

「うん。へいきへいき。咳もしばらく出そうにないし」

アリサが言うと、家族たちはホッとした表情を見せる。そして、家族たちは未だ平気だとは言えない娘をベッドに横にさせる。

「寝れないからやーだぁ」
「眠れなくても横になっているだけでいいからね、アリサ」
無理やり横たわらされたアリサは、文句を返すのだが、それを父が黙らせた。
そして、黙らされ、横たわらされたアリサは、渋々と言った形ではあるが、ベッドに横になりきれいに毛布を肩までかける。
だが、アリサは自身が言ったように、眠らない。眠れない。
「眠れないから、何かお話しよー。それか、お話して？」
アリサが言うと、母たちが静かに口を開く。それに兄たちも続いた。
「何のお話をする？」
「リクエストをして、アリサ」
「アリサの希望があるなら、その希望に沿うからね」
「魔術の話がいい！　魔術の勉強するから」
「元気になるまで、絶対に魔術を使わないって約束するなら話してあげよう」
アリサがリクエストを出すと、父がアリサに釘を刺した上で話を始める。
父は、魔術の基本となる話から話を始めていく。魔術と命の関わりや、魔術の基礎の話を進めていった。
「アリサ、魔術を使うときは、加減を忘れてはいけないよ？　魔力は、深く命に関わっている。魔力が尽きたら人は死んでしまうんだ。アリサは、とうさまたちを悲しませないでくれ。約束できるね？」

「――うん。約束する。絶対に、無理しすぎない。とうさまたちを悲しませたくないもん」

アリサが言うと、父は優しく微笑み、アリサの頭を撫でる。そして、その父の手が離れると同時に、今度は母の手がアリサの頭を撫でた。

その後、母の手が離れると今度は兄弟たちの手が、代わる代わるアリサの頭をよしよしと撫でていく。

「な、何!?　とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま、何なの？」

「気にしないで、アリサ」

「お母さんの言うとおりだよ、アリサ。アリサがいい子だから撫でたくなっただけなんだからね」

「アリサが可愛すぎるのが悪い」

アリサの疑問には、エルミナが一番正確に答えた。母の回答は気にするなであるし、カインの答えは、最早誤りである。

――アリサに落ち度は無いはずなのだから。

そんな家族のアリサ可愛がりの会は、アリサが再び咳き込んだことによって、終焉を迎えた。

「さ、もう一度休もうね、アリサ」

「けほっ。……うん」

そうして父や兄弟たちの休みの日は、こうしてアリサに付きっ切りの一日となるのであった。

愛おしき日々（後書き）

激しく咳き込むのは、本気できついですよね。
何となく、書いていて苦しくなりました（笑）

咳き込むと、たまに胸まで痛くなるので、
私自身は咳き込むのは嫌いなんですよね。

でも、何となく主人公を苦しめてみたかった。

少しくらい苦しめても、
罰は当たらんでしょう。

愛おしき日常

愛おしき日常。
それは、家族がみんな自分のそばにいて、みんなで愛を確かめ合う日々。
家族たちに、愛とは何か教えてもらう日々。
そして、同様に家族を愛する日々。

そんな日常が、アリサにとっては愛おしき日常だった。
愛を見、愛を受け、愛を見せ、愛を感じる。

それが、今生における、一番の幸せ。
だから、アリサはこの人生を楽しいと考えていた。
前世を嫌っていた少女は、今生では人生をこよなく愛していた。

人生を好きだと言わせてくれるのは、彼女の大事な家族。優しい大切な家族。

「アリサ、調子はどう？」
「リンねえさま。咳も止まったからへいきだよ」
「本当に？」

アリサの様子を見に来たジャスリーンは、平気だと言うアリサに微笑みかけながら、アリサの額に手を当てる。

「ひやっ」

額に手を当てられたアリサは、ジャスリーンの手の冷たさに驚き、奇声を上げる。ジャスリーンはそんな妹を微笑ましく眺め、そして、

その頭を優しく撫でてやる。
頭を撫でられているアリサはとても気持ちがよさそうで、そのアリサを見るジャスリーンも幸せそうだった。

「ほら、まだ熱も下がってないみたいだから寝なさい。具合、まだ悪いでしょう？」
「ん……」

言うと、アリサはベッドに横たわる。

「いい子だね、アリサ。ゆっくり休んで早く元気になろうね」
「うん」

そして、アリサは姉の言うとおり、目を瞑り、眠る体勢を取る。
早く元気になるためにも。家族たちに余計な心配をかけないためにも。

その後、夢の世界に旅立ったアリサを、ベッドの空いているところに座ったジャスリーンは、優しく見守る。時折気持ちよさそうに眠るアリサの頭を撫でながら、それでもずっと見守っていた。
気持ちがよさそうに眠っているアリサ。熱が高くはあるが、それでも幸せそうに眠っているアリサ。家族の愛に、とにかく幸せを感じているアリサ。

それからしばらくして、昼食の支度が整ったらしく、シャーナが食事を持ってアリサの部屋を訪れる。

「アリサ、お昼だよ。ご飯食べなきゃだから、起きて」
「んぅ……」
「起きて、きちんと栄養を摂らなくちゃ」

ジャスリーンが告げると、アリサは眠たそうに、目を開ける。

「おはよう、アリサ。ご飯食べなくちゃね」

「うん……」

アリサが起きたのを確認すると、ジャスリーンはシャーナからアリサの昼食を受け取り、スプーンでその食事を掬い、アリサの口元へ運ぶ。

まだ眠たそうにしているアリサではあったが、それでもおこまでされると食べないと言う選択肢は無いため、口を開き、その食事を受け入れた。

「よしよし、いい子だね、アリサ。しっかり栄養を摂って、元気になろうね」

「ん――――」

そして、食事を摂ったアリサは、その後、いつものように苦い薬を飲む。飲んだ後のアリサの表情は、危険だ。

「うえー、苦いー、苦いー」

「うん、そうだね。でも、元気になるためにも、我慢して飲まなくちゃね」

「分かってるけど、苦い……」

そんなアリサに、ジャスリーンは甘い飲み物を用意させ、差し出す。アリサのために。可愛いアリサの笑顔を見るために。

その後、口の中の苦味が消え去ったアリサは眠り、ジャスリーンは一度部屋を出、自身も食事を摂りに向かう。

「お母さん」

アリサの部屋を出て、母のいるリビングへ向かったジャスリーンは、母の姿を確認し、声をかける。

「どうしたの？　ジャスリーン」

「今からご飯食べるから、それまでアリサについておいてもらおうと思って」

「あぁ、そういうことならいいわ。ゆっくり食べていらっしゃい」

「ありがと」

そうしてジャスリーンは食堂へと向かい、母はそれと入れ替わりにアリサの部屋へ向かう。

母がアリサの部屋につくと、アリサは気持ちがよさそうに眠っていた。すやすやと、アリサの健やかな寝息が部屋に響く。

「よしよし。いい子ね、アリサ」

母は眠る娘の頭を撫でながら、愛娘を褒める。それが聞こえたのかどうかは分からないが、その瞬間、アリサは寝ていながらも嬉しそうに微笑んだ。

母はそんなアリサを微笑ましそうに眺める。可愛い可愛い愛娘。具合は悪くても、それでも気持ちよさそうに眠っている娘。

それからもアリサは眠り続ける。その後、昼食を食べ終えたジャスリーンもアリサの部屋へ戻り、母と共にアリサの寝顔を眺める。

……それこそ、ほかの兄妹や父が帰ってきて、アリサの部屋を訪れるまで、ずっと。

「ただいま。アリサは眠ってるのかな？」

「おかえりなさい、あなた。アリサなら、ずっと眠っていますよ」

そのほうが、早く元気になれますしね。続ける母に、父は微笑みながら寄り添い、共にアリサの寝顔を眺める。ちなみに、それは兄妹たちも同じである。

帰ってきた兄妹たちは、みな一目散にアリサの部屋を訪れ、眠っているアリサの寝顔を眺めていたのだ。

結果、アリサが目を覚ましたときは全員がアリサの部屋に集まり、アリサを眺めていた。

「おはよう、アリサ。調子はどう？」
「お……はよう、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま」

アリサが目を覚ましたことに気がついた母は、微笑みながらアリサに問い、そしてアリサの額に手を当てた。アリサの額はまだ熱い。

「まだ調子は悪そうね」
「んー、でも、咳が出ないから大丈夫だよ」

アリサは言うが、だが、顔色だけで考えるとまだ調子は悪そうである。

結果、家族の考えは一致した。『アリサ、また強がりを言って』というものに。

「むー。大丈夫だよぉ、咳が出ないから」
「でも、まだ熱は高いよ？　本当は大丈夫じゃないでしょう？」
「大丈夫だったらぁ！」

いつも熱を出したときと比べると、大分楽だから、大丈夫だよ！アリサは言うのだが、家族はそんなアリサを微笑ましげに眺め、

そして、代表して父が抱きしめた。
突然抱きしめられたアリサは、当然ながら、驚く。

「とうさま？　どうしたの？」
「気にしなくてもいいよ、アリサ」

父は言うのだが、アリサは気になるらしく、そして、気になると寝付けないのか、家族が眠るよう促しても眠らない。

「だって、気になるもぉん」

アリサはそう言って眠らず、結果、熱が下がるまでの時間を長くすることになったのであった。
そして、家族はそんなアリサを献身的に世話をし、互いに愛を知ることになるのであった。

悪夢再び

何だろうね、私のこの運の悪さ……、って言うか、悪の貴族どもの多さ。

――私は、再び誘拐されています。

まぁ、またベッドの上だけどね。誘拐とは言っても、私を誘拐した貴族は私に害を成すつもりはないようだし。

「本日はこのような強硬手段を使用することになり、大変申し訳ございません、ドーリス公爵家の末の姫君」

「……帰してください」

「申し訳ございませんが、それは出来ません。公爵殿が我々の要求を飲んで下されば、すぐさまお返し致しますが」

……つまり、私をエサにとうさまに脅しをかけようとしているわけか。どうやって逃げようかな。とうさまたちに変な迷惑をかけるわけにはいかない。

とうさまに迷惑をかけるくらいならば、――死んでやる。

そう思った私は、すぐに手に火を出す。この火で燃え死んでやる。

そう考えたのだが、それは当然誘拐犯に止められた。

「末の姫君。申し訳ございませんが、しばし、お休みください」

そして、その言葉を最後に、私の記憶は途切れた。

＊＊＊＊＊

ドーリス公爵家。そこでは、怒りに顔を真っ赤に染めた家族がリビングに集まり、アリサの救出計画を練っていた。

「今回の誘拐犯（馬鹿）は誰だろうねーぇ」
「誰だってかまわないさ。――――どうせ、死ぬんだからね」
「まぁ、すぐには死なせないがな。……ほかに関わっている貴族の名を聞きだすまでは、待っているんだぞ？」

騎士であるセインやカインが告げると、それに静かに父が言葉を返す。

が、父のその言葉は危険で、さらに危ない言葉が続く。

「聞き出したら後は勝手にしてかまわない。切り捨ててもいいし、陛下に処断を任せてもかまわん」
「やだなぁ、父さん。決まってるだろ？　――――切り捨ててやる」

そして、ドーリス公爵家では、アリサを誘拐した犯人の末路が完全に確定した。

ちなみに、この間も父の手足がアリサの行方を捜索している。彼らは、待っているのだ。がむしゃらに探すよりは、場所が確定してからみんなで乗り込んだほうが話が早いのだから。

だが、彼らにはその待ち時間が半端なく長かった。時間にすればそこまで言うほどに長くはなかったのだろうが、だが、彼らには相当な時間に感じられた。

「公爵様。アリサお嬢様の居場所が判明いたしましたっ！」
「どこだっ！？」

彼らが知らせを待ってしばらくして、ようやくアリサの居場所を判明させた父の手足が、彼らに姿を見せることなく、アリサの居場所を告げる。

これからは、手足たちの役目ではなく家族の役目である。彼らは、目で会話を交わし、立ち上がった。向かうのは、公爵家の男性陣だ。

「こんにちは、伯爵殿。可愛い妹を返していただきに参りました」
「おやおや。何のことですか？　どなたのことを話しておられるのでしょうか、宰相補佐殿？」

いけしゃあしゃあと。伯爵の言葉を聞いた彼らは同時にそう考える。そして、問答無用に屋敷に足を踏み入れた。

「宰相補佐殿とあろうものや、公爵を名乗るあなた方が、不法侵入ですか？　陛下にお知らせせねば」
「そうなったら、あなたもお終いですね。――父の手足が、アリサがこの屋敷にいると知らせました。観念しなさい」

ルウィンが言うと同時に、伯爵は僅かではあるが顔を歪ませる。それが、父たちにこの屋敷にアリサがいることを知らせた。

「アリサがどこにいるか、吐きなさい」

セインは佩いていた剣を鞘から抜き、伯爵に突きつける。

「……怖いですね、セイン大隊長殿」
「そんなことを話す余裕があるのでしたら早くアリサの居場所を言いなさい」
「――――客間の一つに寝かせていますよ」
「どの客間ですか」
「教えません。自身でお探しなさい」

その瞬間、セインとカインの瞳に炎が灯る。同時に、カインも剣を抜きセイン同様に伯爵に突きつけた。

「アリサを殺したいのですか？　あなたは」

「ククク。それも面白いですね」

……伯爵の命、終了フラグが立ちました。

「父さん、こいつ、今すぐ殺す。楽には死なせるものか。散々苦しませてから殺してやる。……カイン、アリサを探しておけ」

「分かった。ルウィンにぃ、行こう」

「セイン、聞きたいこともあるから、一応話せるレベルで痛めつけろ」

そうしてカインは剣を鞘から出したままで、メイドを捕まえ、アリサのいる客間を聞き出そうとする。だが、メイドの殆どはアリサの存在は知らなかった。この屋敷にアリサがいることなど、客がいることなど知らなかったらしい。

カインは、ならばと、客間をすべて案内させることにしたらしい。手に持つ剣で脅しながら、案内をさせた。

だが、客間のすべてを順に探しても、中々アリサは見つからない。そうしてついに、次の部屋が最後の客間となっていた。

「ここに、アリサがいるのかな？」

「……あの伯爵だ。素直に教えているとは思えない」

カインとルウィンはそう話しながら、静かにその客間の扉を開く。その部屋のベッドには、アリサが静かに横たわっていた。

ベッドに横たわるアリサの姿を確認したルウィンとカインは、急いでベッドへ近寄る。ベッドに横たわるアリサは眠っていた。

「アリサ。……怪我とかは。ないみたいかな？」
「ああ。呼吸音を聞いていても、異常は感じられない。大丈夫だろう」

その後、カインが眠っているアリサを背負い、セインや父の待つ場所へと戻る。戻ると、すぐに父やセインは、カインの背中に眠るアリサを確認する。

「あぁ、アリサ。大丈夫そうだね、よかった」
「カイン、ルウィン。アリサを連れて帰ってくれ。後で、戻って来い」
「分かった。カイン、一度帰ろう」

そうして馬車を呼んだルウィンとカインは、アリサを抱きかかえたままで馬車に乗り、家に帰る。そして家に帰ると、帰りをずっと待っていた母や姉たちが、アリサを抱えた課員たちを出迎えた。

「カイン！　アリサは！？」
「怪我も無い様だし、大丈夫だと思うよ。でも、一応アレグラさん呼んで、診てもらおう」
「ええ、今呼ぶから、カインはアリサを寝かせてあげて」

それから母はアレグラを呼びに向かい、カインやルウィン、そしてジャスリーンとエルミナは、アリサを寝かせるために、アリサの部屋へと向かう。

その間、アリサはずっと眠りっぱなしで、全く目を覚まさない。少しくらい、何かの反応を返してよさそうなものなのに、それでもアリサは全く反応を見せなかった。それが、兄弟たちの不安を誘う。

そして、ベッドに寝かされたアリサは、アレグラの到着を待つことになるのであった。

眠り姫

眠り続ける姫。その名は眠り姫（スリーピング・ビューティ）。
数日経っても以前目を覚まさない、小さな眠り姫。
体に異常は現れず、ただただ眠り続ける姫君。

物語では、眠り姫は王子のキスで目を覚ました。では、現実の姫は――――？

＊＊＊＊＊

「遅くなりましたっ！　お嬢様のご様子は！？」

母がアレグラを呼んで少しして、アリサが誘拐されたことを聞いたアレグラが急いで駆けつけた。
急いで駆けつけたアレグラは、ルウィンやカインを部屋から追い出し、アリサの診察にかかる。そして、診察と同時に、服を着替えさせた。

「怪我はしていませんし、熱もありません。ですが、嫌なにおいがします」

アレグラが言うと、ジャスリーンやエルミナ、母はその言葉に反応しアレグラに問いかける。

「嫌なにおいって、何のにおいなの？」
「――――薬のにおいです」
「一体、何の薬のにおい？」
「……睡眠系の薬のにおいです。しかも、結構強いものですね」

その瞬間、母たちは目を見張らせた。そして、咄嗟に眠っているアリサを見つめる。

「ですので、お嬢様はしばらく眠り続けると思われます。使われた薬が何の薬か分からない以上、下手に中和剤は使用できません。――エルミナ様、薬はあなたの専門のはずです。何か、お分かりになりませんか？」

「――――ゴメン、分からない」

そう告げるエルミナの表情は悲しげだった。自分の力が至らないばかりに、アリサの治療が難しくなる。処置が辛くなる。

結果、彼女たちは直接伯爵の元へ出向き、アリサに使った薬の名称を聞くこととなり、その後ようやく中和剤を使うこととなる。

もちろん、その際はエルミナが魔法で伯爵を脅し、殺そうとしたことは言うまでもない。

だが、中和剤を使うときが遅かったのか、薬を中和してもアリサは目を覚まさない。そのまま眠ったままだ。

とにかく、深く、深く、昏々と眠り続けていた。

父たちは、アリサを起こすために頑張る。必死で、とにかく考え付く方法をとにかく試す。

アレグラ以外の王宮医師を呼び、仕方なくではあったが異性であるこの国最高峰の医師に診せても、それでもまだアリサは目を覚まさなかった。

「薬は中和できているようですから、後はお嬢様と、家族の方の力しだいですね。毎日、声をかけてあげてください。お嬢様が反応するような言葉を、かけ続けてあげてください」

それからは、家族の日課が定まった。母は基本ずっとアリサについていて、世話をし、声をかけ続け、父たちは仕事に行く前にアリサに話しかけ、そして、帰ってくるとすぐにアリサの部屋にやってきて、話しかけ続けた。

アリサが早く目を覚ますように。早く、元気なアリサを見るために。

「アリサ。朝だから起きよう？」

「さすがに寝坊すぎるよ。いい加減起きなくちゃね」

「ほら、起きて」

家族は毎日そうして声をかけるのだが、アリサは目を覚ます気配を依然として見せない。眠りっぱなしだ。

そんな日が数週間続いた頃、突然アリサは目を覚ました。

「か……あさま？　ここ……、お家？」

「ええ。ええ、そうよ。ここはアリサのお部屋よ」

目を覚ましたアリサに、母は涙をその目に浮かべながら答えてやる。そんな母の様子にアリサが不思議そうな表情をする。だが、母は娘のそんな様子に気がつかない。

結果、気づいてもらいたいアリサは母の服の袖を引こうと考えたようだが、その際にうまく体を動かせないことに気がついた。

結果、とりあえず声をかけるだけにとどまったようだ。

「かあさま、そうしたの？　私、大丈夫だよ？」

「え、ああ、ごめんなさい、アリサ。――何があったか、覚えている？」

「……また、誘拐されちゃったんだよね」

母の問いに答えたアリサの表情は、暗い。また、両親に、家族に迷惑をかけたことが、アリサに罪悪感を感じさせていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい、かあさま」

「どうして謝るの？　アリサ。アリサは何にも悪くないのよ？」

「だって、また迷惑かけちゃったもの。……ごめんなさい」

しょんぼりとしながら謝罪する娘を、母は優しく抱き上げた。そして、その頭をよしよしと撫でる。

「悪いのはあの伯爵だからね。アリサは全然悪くないの」

「あの人、伯爵だったの？　……言葉遣いは丁寧だったけど」

「そうよ。それでね、アリサはずっと眠ってたの。だから、体が動かしづらいでしょう？」

「ずっとって、どのくらい？」

そうして母に眠っていた期間を聞かされたアリサは驚きで目を見張らせる。

そしてその後、目を覚ましたアリサをベッドに戻し、母は家族たちにアリサが目を覚ましたことを知らせるために、人を飛ばす。

――もちろん、全員があっという間に家に帰ってきた。

『アリサ！』

「おかえりなさい、とうさま、にいさま、ねえさま」

「ただいま、アリサ。大丈夫かい？」

「うん。心配かけて、ごめんなさい」

「謝らなくていいよ、アリサ。悪いのは全部あの伯爵だし、それに、きちんとしかるべき罰は与えたからね」

それが、一族郎党誰もが被害にあったものであることを、アリサは知らない。

そして、主犯である伯爵の罰が処刑となったことは、誰もアリサに知らせてはいないが、アリサは何となくで予想はしていた。

それが、アリサを悲しませたことを、家族たちは知らない。自分のせいで誰かの命が奪われることを、アリサは望んでいない。

だが、家族は絶対にアリサに害を成したものは許さない。アリサもそれを知っているから、家族に何も言えず、ただただ、自分の心の中にその気持ちを押し込め続けることになる。

閉じ込めた気持ち

私が二度目の誘拐をされてしばらくして、私を攫った伯爵の処刑が完了したと、耳にした。私を誘拐した伯爵。だけど、そこまでしなくてもよかったのではないかと、私は思う。

でも、それじゃダメらしい。ここでその伯爵を許せば図に乗った貴族が増え、再び私に害を成そうとするかもしれない。そう言われて、私は仕方なく反論を諦めた。

でも、伯爵の件に関しては、聞きたくなかった。残酷な話は嫌だった。でも、聞かなくては無らなかった。――私は当事者なのだから。

とうさまやにいさまたちに伯爵のことを聞かされたとき、とても悲しかった

「アリサ、おいで」

そんな私の気持ちを分かってくれたのか、かあさまが静かに私を呼ぶ。その言葉に甘えて、私はかあさまに抱きついた。私を優しく抱きしめてくれるかあさまは、同じように、優しく私の頭を撫でる。

その撫で撫では気持ちがよくて、それだけでさっきの悲しい気持ちの一部が飛び去っていくような感じがした。

――かあさま恐るべし。たったの数秒で私の気分を変えてしまうだなんて……。

でも、いいか。気持ちいいし。というか、かあさまだけじゃなくて、みんな頭なでるの上手だよねぇ。

そう思っていると、突然頭を撫でていた手が離れ、別の手が私の頭に伸びてきた。とうさまだ。同時に、私はかあさまの腕の中からとうさまの腕の中に移動させられた。

「アリサ、悲しいだろうけどこれが貴族なんだよ。貴族は、いつだって危険と隣合せだからね。何かあったら、しっかりと罰しなくてはこんな事件が続いてしまう。だからね、今回の判断は仕方の無いことなんだよ」

分かってる。分かってはいるんだけど、心の奥底ではやっぱり反論を返してるんだ。『そこまでしなくても、何とかする方法はあったんじゃないか』って。

私は俯きながらそんなことを考える。

「分かってくれ、アリサ」

「分かってる。でも、やっぱり悲しい」

頭では分かっていても、やっぱり悲しい。でも、これ以上は言わないほうがいいだろう。そうしなくちゃ、とうさまたちが後悔しそうだから。

だから、私は俯いていた顔を上にしてとうさまにっこりと微笑んだ。それだけで、とうさまたちはホッとした表情を見せる。

――――単純だな。何だか私が腹黒くなりかけていると思う瞬間。

そして、私は悲しい気持ちを心の奥底に封印して、とうさまたちに笑顔を向け続ける。これ以上、余計な心配をかけないためにも。

……まぁ、ずっと私を見てきたかあさまくらいになら、バレるかもしれないけど、それでもとうさまくらいなら騙せるだろう。

ねぇ、だから。だから、心配しないでよ。私はだいじょぶだから。

それからはみんなでお茶やジュースを飲みながら話をする。家族団らんの時間だ。

ちなみに、私だけがジュース。いつものことだけど、私だけ。そ

れもちょっと悲しいんだけどね。

ちなみに、現在の席の状況。私の右に、かあさま。そして、正面にとうさま。心なしかとうさまが悲しげにしているように見えるのは――うん、放置しよう。

だって、私、はっきり言えばとうさまよりはかあさまのほうが好きだし。だって、いつもかあさまのほうが一緒にいるわけだし。

いやいやいや、とうさま、そこまで悲しそうな顔をしなくてもいいですよね？　私、何も言ってないよ？

「とうさま、その目は痛い……」

私が言うと、瞬間的にかあさまがとうさまを睨む。睨まれたとうさまは蛇に睨まれた蛙よろしく、縮こまる。だが、かあさまの表情は依然として怖いらしい。とうさまが縮こまったままだ。

今のかあさまはどんな表情をしているのだろう。そう思いながら、かあさまの顔をこそーっと盗み見る。だが、かあさまのほうが一枚上手だった。かあさまは私が盗み見ることを察知したのか、瞬間的に笑顔に戻る。

「どうしたの？　アリサ」

「……何でもない」

結果、かあさまに問われてもそうしか返せなかった。

そして、かあさまの表情が完全に元に戻ってからは、にこやかに団らんの時を楽しむ。とうさまやかあさまは、私の勉強のためも兼ねてか、たくさん魔術の話をしてくれた。

それは、とうさまやかあさまの昔の話らしいが。

「アリサは、昔この国が戦争をしていたのは、ルウィンたちから聞いているわよね？」
「うん。にいさまたちも生まれる前に、隣の国と戦ってたんだよね？」
「そう。かあさまはね、とうさまとその戦場で愛を確かめ合ったのよ」

……何となく、聞かないほうがいいような気がするのは気のせいでしょうか。その……いわゆる、こう……年齢制限をつけるべき話になるような気がするのは、私だけ？

ちなみに、その話を聞かされているとうさまは、昔を懐かしんでいるのか、遠い目をしている。いやいや、こんなときはとうさまがかあさまを止めなくちゃでしょう。

だが、とうさまはかあさまを止めるようなことはしない。その結果、かあさまの話が始まった。

「アリサは、魔術の相性は分かる？」
「相性？　火と水は相性が悪いとか、そうなるのかな？」
「その通り。で、アリサ。かあさまたちの属性はなんだったか、言える？」
「んと、とうさまが風で、かあさまが火」
「その通り、よく出来ました」

意外とまじめな話でした。おかげでホッとする。そして、魔術の相性が、どう、愛を確かめ合うことになるんだろう。私は首を傾げる。

すると、かあさまは淡く微笑みながら私の頭を撫でる。そして、続きを話してくれた。

「風と火は、とても相性がいいの。だからね、とうさまとかあさま

は基本、セットで戦場に送られていたのよ」
「かあさまも戦場に行ってたの？」
「ええ。あの時はね、貴族だろうが庶民だろうが、男だろうが女だろうが、みんな戦場に駆り出されていたのよ」

……それは、大変だ。それで、相性がいいからセットで戦場に送られて、一緒に戦ったから仲良くなったのかな？
ためしにとうさまに尋ねてみると、その通りだと返って来はするのだが、とうさまは目線を合わせてくれない。どうして？　私はかあさまに尋ねる。

「その話は、アリサにはまだ早いから、もっと大きくなったらしてあげるわ。さ、今は少し休みましょうか」

年齢制限来ましたね。それは、聞かないほうが正解だ。
だって、生まれ変わる前の前世でも、ひきこもりの登校拒否だったせいか、そう言う話には全く縁が無かった。
だから、いざ聞くとなると、何となく恥ずかしいんだ。だから、今は聞かないようにしておこう。

だって、今の私はまだ小さな子供なワケだし。うん、聞かないほうがいいよね。
そう思いながら、私はかあさまの指示に従って部屋に戻り、ベッドに潜り込んだ。――それからはあっという間に眠りに落ちた。

気持ちに左右されます

伯爵が処刑され、父や母がアリサと共に団らんの一時を楽しんだ翌日、アリサは熱を出して寝込んだ。理由は、家族の誰もが予想していた。

――伯爵の処刑が原因である、と。

アリサは基本的に人の生死に関わることを嫌っている。それは、突然家族を奪われた悲しみを、お兄さん（ジブリール）越しに聞かされ、知っているからだ。

彼女が前世でその命を失った後の、彼女の叔父や叔母の様子をジブリールから聞かされていた。故に、アリサは人の生死に関わることは大嫌いだった。

自分のせいで、誰かを悲しませる。自分のせいで、その命を奪われてしまう。

残されたものは、どれだけ悲しいだろう。どれだけ辛いだろう。

アリサは、結局は体験したことが無いので、詳しくは分からない。聞いた話でしか知らない。

だけど、それは悲しい。

そうして、自分一人で全てを抱え込み、抱え込みすぎた結果がこの発熱だった。

アリサは、伯爵の処刑が決まったその日から、熱を出したこの日に至るまでずっと、悪夢に魘されていた。

夢に出てくるのは、処刑の決まった伯爵と、顔も知らない伯爵の家族、親類たち。アリサは、いつも夢で伯爵が殺される場面を見る。

そして、伯爵の家族や親類に責められる。

アリサは、顔も知らない伯爵家の人間に、何度も何度も責められ

るのだ。それが何日も何日も続いた挙句、伯爵が殺されたその日はいつも以上に夢で責められた。

その結果が、この発熱だった。連日の夢における精神的ダメージ。それが、アリサにかなりのダメージを与え、発熱を促すことになった。

「アリサ。辛いときは相談なさい。何でも一人で溜め込もうとしないの」

「全くだ。それとも、僕たちは信用できないの？　信頼してくれていないの？」

「そんなはず、ないよ……。私、にいさまたち、大好きだもん。信頼、してるもん」

母やルウィンの言葉に、息も絶え絶えに返事を返すアリサ。そんなアリサの頭を、部屋に揃った両親や兄妹たちは優しく撫でる。

彼らの可愛い小さなアリサ。彼らはそんな小さなアリサを優しい目で見守る。

アリサが眠りに落ちて、兄たちが仕事に遅れると、急いで屋敷を出て行くまでの間、ずっと。

その後は、アリサについているのは母だけとなり、母は、シャーナに冷たい水を張ったたらいとタオルを用意させ、濡らしたつめたいタオルをアリサの額に置く。

その冷たい感覚が気持ちいいのか、眠っているアリサは眠っていながらも淡い微笑みを見せる。

母はそんなアリサを微笑ましげに眺め、同様に微笑を見せる。

そして、その後は母はシャーナにアリサを任せ、あれ裏を呼ぶためにアリサの部屋から立ち去る。

それからしばらくして、母がアリサの部屋に戻ってきたときは、母の横にはアレグラが控えていた。

「アリサ、アレグラが来たから起きなさい」

「お嬢様、お眠いかとは思いますが、お起きくださいませ」

母とアレグラが揃ってアリサを起こすと、アリサは呻りながらも、起きようとはしない。だが、母はアリサに対して容赦はしなかった。

「起きなさい、アリサ。……注射してもらう？」

「やだっ！」

母がその言葉を放った瞬間、アリサは本能か何か分からないが、飛び起きる。そして、その言葉を返したときはまだ寝ぼけていたのか、完全に目が開いたのは今だった。

そして、目を覚ましたアリサは、目を白黒させながら辺りを見回す。

「おはようございます、お嬢様。診察をさせていただきたいのですが、よろしいですか？」

「んあ？　アレグラ、いつ来たの？　今日はそんなに辛くないから、大丈夫だよ」

「無理をしないの。アレグラ、アリサをお願いね」

母が言うと、アレグラは畏まり、了承の意を見せる。そして、にこやかにアリサに声をかけながら服に手をかけ、捲り、魔力を以ってアリサの体調を探る。

胸の上に手をかざし、魔力の返り値を測っていた。そして、その魔力を以って、アリサに治癒魔法をかける。

「本当に、無理はいけませんよ？　強がりを仰らず、辛いときは辛いときちんと口にしましょうね？」
「……そんなに辛くないもん」
「魔力は嘘を言いません。強がりを仰らなくても大丈夫なんですよ」
アレグラの言葉に必死で言葉を返すアリサだったが、その反論はアレグラによって黙らされた。そして、そのアレグラの指示で再び寝入る。
そして、アリサが再び寝入ったことを確認したアレグラは、いつものようにアリサの薬を出し、母に手渡す。
「苦いですが、きちんと飲んでいただいてくださいね？」
「分かってるわ。アリサが嫌がってもきちんと飲ませます」
そうして寝入ったアリサを眺めながら、母とアレグラはそうやって話をし、その後、アレグラは母に挨拶をして帰っていく。
それからは母はずっとアリサを見守り続けた。熱のせいで辛そうではあるが、それでも気持ちがよさそうに眠っている愛娘。
そんなアリサの寝顔を見ながらも、母は考える。アリサの優しさを。
自身を誘拐したが故に処刑された伯爵。自分に害を成したものだというのに、それでも殺されたという話を聞くのは相当辛かったようだ。
辛いのならば、言って欲しかった。言ってくれれば、存分に甘やかし、可愛がり、アリサの心から、伯爵のことを消し去るつもりだった。
だが、アリサは言わなかったが故に、自分一人で抱え込むことが出来なくなって熱を出した。

「本当に、無理をしすぎよ――――アリサ」

そうして母は眠り続ける愛娘に、優しい瞳を向けながらそう告げる。

返ってくる言葉など、無いことが分かっていながらも――――。

家族の愛

この日の夕方、帰ってきた家族たちは急いでアリサの部屋へ向かう。そしてアリサの部屋に入ると、すぐにアリサのいるベッドへと向かった。

父たちの帰ってきたとき、アリサはちょうどよく目を覚ましていた。だが、まだ目はボーっとしていて、うまく焦点が合っていないよう、父たちには見えた。

「ただいま、アリサ。調子はどう?」

「おかえり、なさい。とうさまたち。具合、大分いいよ?」

アリサは言うのだが、それも強がりであることを父たちはよく知っている。アリサが強がりを言うことが珍しくないことを、父たちは知りすぎるほどに知っているのだ。

だから、父たちはアリサの言葉を完全に信用することをせず、何も言わずにアリサの額のタオルを取り、アリサの額に手を当てる。

アリサの額は、濡れタオルによって大分冷えてはいたが、それでも十分に熱かった。

「アリサ、強がりを言わないで」

「強がりじゃないもん」

「熱が高い以上、強がりにしか聞こえないよ」

「――――リンねえさま、嫌い」

その瞬間、ジャスリーンの表情は驚愕のそれに変わる。アリサに嫌いだといわれたことが、相当のショックを与えたらしい。ジャスリーンはふらつきながら、アリサの部屋のソファーへ飛び込む。

そして、そんなジャスリーンをルウィンが慰めに向かう。嘗て、

アリサに嫌いだと言われたルウィン。ルウィンはアリサに嫌いだといわれたときのダメージを知っているからこそ、ジャスリーンを慰めることが出来たのである。

「ジャスリーン、アリサの機嫌が戻るまでは、耐えろ。今度アリサを説得してやるから」

「――――ありがとう、兄さん」

それからは、ジャスリーンとルウィン以外の兄妹たちはアリサに付き添い、そして、それからも強がるアリサに優しい声をかけ、生暖かい視線を向ける。

その視線に、アリサは大丈夫であることを必死でアピールしようとするのだが、それでもやはり無理は辛かったらしく、あっさりと、起き上がっていた状態から横たわりの状態へと戻った。

「無理しちゃダメだって言ったろう？　ほら、しばらくお休み？」

「ん――――――、おやすみなさい」

それからは素直に目を瞑り、寝入る。アリサの部屋で、あっという間にアリサの健やかな寝息が響き渡ることとなった。

下がっていない熱。依然として高いままの熱。それでも、自分は元気だと言い張る、強がりばかりの愛し子。

でも、そんなアリサが心の底から愛おしくて。可愛くて。

だから、彼らは熱が高い状態で気持ちよさそうに眠るアリサを、優しく見守り続ける。アリサに嫌いだと言われたジャスリーンすらも、優しくアリサを見守っていた。

アリサに無償の愛を捧げ続ける家族たち。その愛に答えようと、気づかずとも努力をしているアリサ。

アリサのまわり、家族のまわりはいつだって愛に包まれていた。

アリサを愛おしく思う家族たち。自分を愛しんでくれる家族を、心から愛しているアリサ。

嫌いだと口にしたといえど、それでもアリサは家族全員を愛している。結局は口先だけなのだ。

アリサが心の底から家族を嫌うことは絶対にあり得ない。同様に、家族がアリサを嫌うこともあり得ない。

それが、ドーリス公爵家の家族愛。

「んぃ……」

「目が覚めた？　調子はどう？」

「リンねえさま……？　んー、ボーっとするぅ」

目を覚ましたアリサに、ちょうどすぐそばで見守っていたジャスリーンが問いかけると、アリサは寝ぼけ眼ながらも、素直に返事を返す。

――先刻、ジャスリーンに嫌いだと告げたことを、すっかり忘れた上で。

「よしよし、アリサはいい子だね。早く元気にならなくちゃね」

「んー、――はっ！　ねえさま、さっき嫌いって言ったじゃんか！」

「うん、でもね、私はアリサのこと大好きだから」

ジャスリーンが言うと同時に、アリサは顔を真っ赤に染めた。直接大好きだと言われたことはあまり無かったためか、アリサは耳まできれいに染めていた。

「あーもう、アリサは可愛いねー」

そんなアリサを、ジャスリーンはにこにこと微笑みながら抱きしめる。容赦なく、顔を耳まできれいに染めこんだアリサをぎゅっと抱きしめ続けた。

「ねえさま、嫌いだって言ったじゃん！　はーなーしーてーっ！」
「だーめ。私はアリサが大好きだから、抱きしめるの」

そんなアリサに、ジャスリーンはずっと微笑みながら、照れ続けている妹を優しく抱きしめ続けることにしたらしい。アリサが反論を返しているようだが、それでもジャスリーンはそんなアリサの反論を無視し、抱きしめ続けていた。

「アリサは本当に可愛いね。だから、大好きだよ」
「……私が可愛くなかったら、嫌いなの？」
「ううん。アリサがアリサでいる以上、私はアリサが大好きだよ」
「――――――っ！」

恥ずかしさに耐えられなくなったアリサは、自身を抱きしめる姉から離れようと暴れるのだが、暴れるアリサをジャスリーンがしっかりと止める。

思い切り抱きしめて、アリサを止めたのである。アリサが無理をして、熱を出さないように。

「ねえさま、離してぇっ！」
「ダーメ。暴れたら熱を出すじゃないの」
「ねえさまが離してくれれば暴れないもん！」

アリサは言うのだが、ジャスリーンはアリサを離すことをしない。離したら自分の下から去ると分かっていて、離すような愚行に走る

ジャスリーンではないのだから。

まぁ、結果としてはアリサは暴れることを止めず、姉の手から逃れようと足掻き続けるのだが。

そしてその後、暴れ疲れたアリサは再び眠りに落ちる。嫌いだと言った、だけど愛する姉の腕の中で深い眠りに落ちていった。

アリサが新たに見つけた愛。
愛する家族に教えてもらった愛。
嫌いだと口にしても、本当は愛している家族。
何度嫌いだと言っても、愛していると告げてくれる家族。

愛とは何か。それは、家族が教えてくれた。
失う恐怖は、新たな家族が奪ってくれた。
両親を失い、その数年後に命を落とした自分を後悔する気持ちを、新たな家族が奪ってくれた。

死にたくなかった。それなのに、死んでしまった。
悲しませたくなかった。それなのに、悲しませてしまった。

後悔した。あの日、出かけて事故に遭った自身を、深く後悔した。

でも、そんな嫌な気持ちは新たな家族が奪ってくれた。
そんなことを考える余裕も無いほどに、無償の愛を注いでくれた。
何があろうとも、自身を愛してくれた。

――だから、アリサは家族を愛した。

＊＊＊＊＊

「目が覚めた？」
「ん……、かあさま？」

アリサが目を覚ますと、そばにいる母の存在に気がつく。そして、

まだ少し寝ぼけ眼で母に抱きついた。突然抱きつかれた母は少し驚く。

だが、その驚きが消え去った後は、抱きついてきたアリサを優しく抱きとめる。

「どうしたの？　嫌な夢を見たの？」

違う。そう言うかのように、アリサは首を横に振る。だが、それでも母に抱きついたままで離れはしない。

母は一体どうしたのだろう、と不思議そうな顔をしてはいたが、それでも可愛い愛娘を優しく抱きとめていた。

――アリサが自ら離れるつもりになるまでの間。

「よしよし。何にも怖くないからね、大丈夫よ」

優しく告げながら、母はアリサの機嫌が戻るのを待つ。

それからしばらくして、ようやくアリサの機嫌は元に戻ったらしく、母から離れる。

「もう、大丈夫？」

「うん。かあさま、ありがとう」

自身から離れたアリサに母が優しく声をかけてやると、アリサは微笑みながら母の質問に答えた。そして、礼を言う。

そんなアリサを、今度は母が抱きしめた。アリサに可愛いと言いながら、ぎゅっと抱きしめる。アリサは、何が何だか分かっておらずに頭上に疑問符を出していたが。

「か、かあさま？」

「アリサ、絶対に一人でいろいろ抱え込んじゃダメよ？　約束して」

「……どうして？　私、大丈夫だよ？」
「抱え込んだ結果が、この発熱じゃないの？」
それでも、本当に大丈夫だって言える？　母の問いにアリサは視線を逸らす。
何せ、抱え込んだが故の結果が、この発熱なのだから。それで熱を出さなければ大丈夫だと言えただろう。だが、熱を出してしまった。だからこそ、母もこうして攻め込んでいるのだ。
何も言葉を返せないアリサ。母の腕の中で黙り込んでいる愛娘。母はそんなアリサをぎゅっと抱きしめた。優しく、丁寧に、されども愛が伝わるように。
「よしよし、攻めすぎたね。ごめんね、アリサ」
「……かあさま、いじわる」
「うん、ごめんね。でも、覚えておいて。かあさまたちはアリサが大事だから、一人で抱え込まないで欲しいの。相談して欲しいの。分かってちょうだい？」
母が静かに問いかけると同時にアリサは小さく頷く。
家族がアリサを大事に思ってくれていることは、アリサはよく分かっていた。分かりすぎるほどに分かっていた。
家族は自分に惜しみなく愛を注いでくれる。本当に惜しみないくらいの愛を自分に注いでくれるのだ。この状態で家族の愛に気づかないほど、アリサは愚かではない。
「今度からはきちんと相談してちょうだいね」
「……うん。心配させてごめんなさい」
「分かってくれればいいの。さ、早く元気になるためにも、そろそろ休みなさいね」

アリサが分かってくれたことを理解した母は、早く元気にさせるためにもアリサを休ませる。冷たいタオルをアリサの額に置いて視界を奪ったのだ。

そして、視界を奪われたアリサは、昔のようにあっという間に眠りに落ちていった。

深く、深く眠りについているアリサ。そんなアリサの頭を、母は優しく撫でる。

アリサの熱い頭。その頭を冷ましてやるためにも、母は時折手を冷やしながらアリサの頭を撫で続けた。

そうして撫でられているからか、アリサの表情は落ち着いていて、気持ちがよさそうである。その表情は穏やかなもので、悪夢を見ている気配など、一切感じられなかった。

だが、アリサは悪夢を見た。正確には、前世の夢を見た。

あり得ない夢。これは、真実か妄想か。分からない。

ただ一つ分かることは、これが夢であること。

何故、夢で自分の葬儀の場面を見なくてはならない。

何故、叔父や叔母の泣き顔を、今更私に見せる。

何故。何故。何故。

別れは、告げた。直接耳に届かずとも、心の中で告げた。二度と会うことの叶わぬ存在であるはずだった。

それなのに、どうして今、夢の中とは言えど、こうして会い見える？

いや、違う。会い見えるという表現はおかしい。だって、こちらの言葉は、叔母たちには届かないのだから。

ただただ、叔父叔母が自分を亡くし、悲しんでいる様を聞くだけ。聞かされるだけ。

耳をふさいでも届く、叔父叔母の啼き声。その泣き声は悲鳴のようで。
働哭が響き渡る。直接、脳裏に響く。

聞きたくない。
聞きたくない。
聞きタクナい。
――聞キタクナイ。

「アリサ。アリサ？」
「う、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「アリサ！？　どうしたの！？」

突然魘されだしたアリサを起こした母は、アリサの悲鳴を聞いて驚く。だが、すぐに正気に戻り、アリサを抱きしめた。
だが、アリサの焦点はまだ合わない。合わせずにいるままで、尚叫び続ける。

「見たくない！　聞きたくない！　やだやだやだやだやだっ！」
「アリサ！」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　だから、もう止めてぇっ！」
「アリサ！　大丈夫！　大丈夫よ！」
「聞きたくない聞きたくない！　もう見たくないっ！」

アリサの叫び声は、止まらない。母の言葉が耳に届くこともなく、叫び続ける。
今のアリサの耳に届くのは、自分の選択のせいで泣いている叔父

叔母の慟哭。

今のアリサの目に映るのは、その叔父叔母の泣いている姿。

そこに、母の姿も、声も存在しない。あるものは、絶望に満ちた過去のみ、だ。

――私は、誰？
私の名は、アリサ・クライシス・ドーリス。
違う。私の名は――神埼有紗。

ならば、アリサ・クライシス・ドーリスと言う少女は、一体誰？
私はそんな人ではない。私は神埼有紗なのだから。
ならば、目の前にいるこの女性は誰？　こんな人、私は知らない。
ならば、ここはどこ？　こんな場所、私は知らない。

この手は、誰のもの？　私の手がこんなに小さいはずがない。
この肌は、誰のもの？　私の肌がこんなに白いはずがない。

――ならば、この体は誰のもの？

「アリサ？　アリサ、どうしたの？」
「――誰？」

私は、あなたを知らない。　母に声をかけられたアリサは表情を変えることなく告げる。
その言葉は、母を動揺させた。母は、表情を変えずにその言葉を放った娘の肩をしっかりと掴み、自分と目を合わせる。
だが、それでもアリサの表情は一切変わらなかった。表情を一切変えずに、アリサは再び問う。「あなたは誰？」と。

「アリサ、ふざけないで！　何を冗談を言っているの！？」
「知らない。私は、知らない。あなたは誰なの？」
「あなたが私を知らないと言うのなら、あなたは一体誰なの！？」

「私は、有紗。神埼有紗」

それを聞いた母は目を見張らせる。その名が、以前聞いた覚えのある名前だったからだ。

それは、彼女の愛娘、アリサの前世の名前。彼女の子として生まれる前の、アリサの名前だ。

「ここ、どこ？　叔父さんと叔母さんのところに帰らなくちゃ」

「ここは、――あなたの家よ、アリサ」

「……？　違うよ、ここ、私の家じゃない。だって、こんな場所知らないもん」

「いいえ、ここはあなたの家、あなたの部屋よ」

「違うってば。っていうか、あなた、誰？」

アリサの言葉は母を完全に絶望に陥らせた。深い、深い悲しみに落ちた母。アリサは、そんな母を心配そうに見ていた。

「あの、大丈夫、ですか？」

だが、母は反応しない。結果、アリサは自力でここがどこか判明させようとしたらしく、ベッドから降りる。だが、足を進めようとした瞬間に、体がふらついた。

そして、ふらついたアリサは、そのまま床に座り込む。何故こうも体がふらつくのか、理解が出来ないまま。

その後、アリサは壁に身を任せながらも、部屋から出ようとする。

「お嬢様、何をなさっておられるのです。まだ熱が高いのですから、お休みになられてください」

「……誰？」

アリサが壁に寄りかかりながら部屋を出ると、ちょうどアリサの部屋に食事を持ってきていたシャーナとほかのメイドが、アリサが部屋を出て歩いていることに気がつく。もちろん、にっこりと微笑みながら、アリサに部屋に戻るよう促した。アリサの質問を完全に無視して。

「ダメですよ、お嬢様。熱があるのに無理をしては、さらに熱が上がってしまいます」

「だから、誰？」

アリサが再び問いかけると同時に、シャーナはアリサの額に手を当てる。アリサの額が予想以上に熱いことに気がついた。

「熱が高いのですから、お辛いでしょう。きちんと食事をお取りになって、しっかりとお休みになられてください。よろしいですね？」

「は……ハイ……」

アリサはシャーナの無言の圧力に勝てなかった。周りにいる人間が誰なのか理解できぬまま、一応と言った形でシャーナの言葉に従い、ベッドの上に上がった。

それを見たシャーナは微笑み、自分たちが持ってきた食事を、アリサのひざに置く。そして、無言で食べるよう促した。

そして、シャーナに無言で脅されたアリサは、恐る恐る食事に手をつける。恐怖に襲われながらも、一応食事をきっちりと摂る。

「はい、お薬です。きちんと飲んでくださいね」

「――――ハイ」

アリサはシャーナに逆らえない。恐る恐るで薬の溶けた水の入ったカップに口をつけ、一気に水を含んだ。――苦い。

苦味で、表情が一気に歪む。そんなアリサにシャーナは甘い飲み物を差し出した。

「お嬢様、どうぞ」

そうして甘い飲み物のおかげで何とか口の中の苦味が消えた頃、ずっと茫然自失状態だった母が、もとの状態に戻る。

そして、すぐさまベッドに座り込んでいるアリサを捕まえた。そして、その目をしっかりと見る。

「な、何ですか？」

「アリサ、私が分かるよね？　かあさまを知らないって言ったら今度こそ怒るからね」

「かあ、さま？　えと、それって、母親って意味でしたっけ？」

絶望の歌。娘をこよなく愛する家族を絶望の淵に追い込む悲しい歌。

その歌を、アリサは歌う。何も知ることなく、無意識のうちにその歌を言葉に紡いだ。

その後、アリサはさすがに辛くなったのか、出て行くことを諦め、眠りにつく。

母は、祈った。目を覚ましたらいつものアリサに戻っていることに。神埼有紗という前世ではなく、今生の娘である、アリサ・クライシス・ドーリスに戻っていることに。

そして、母はそう考えながらも、このことを父たちにどう説明をしようか、真剣に思案していた。

アリサを心の底から愛している家族たち。それなのに、知らないと言われたらどう思うだろう。

悲しいだろう。切ないだろう。辛いだろう。その悲しさを、家族たちにも背負わせることになる。

だから、母は目を覚ましたアリサがいつものアリサに戻っていることを、強く、強く願い続けた。

彼女の愛する家族のために。そのために、強く、強く。

家族会議2

結局、あの後目を覚ましたアリサは、アリサであり、アリサではなかった。

彼女はアリサであり、神埼有紗だった。そして、生まれ変わり、アリサとしてすごした日々を全く覚えていなかった。

『あなたたち、誰？』

父たちが帰ってきて、みんなでアリサの目覚めを待っていたのだが、目を覚ましたアリサはまず、その一言を放った。それが、父たちに深い悲しみを与えたことを、アリサは知らない。知り得ない。

アリサは今、神埼有紗であり、ドーリス公爵家のアリサではないのだから。

「アリサに、何があったんだと思う？」

故に、彼らは家族会議を行う。アリサが自分たちを思い出してくれるように。前世に縛られず、今生を楽しませるために。

ちなみに、アリサは現在、やはりシャーナには逆らえずに夕飯を食べ、薬を飲まされて眠っている。そのそばには、シャーナが付いていた。

「お母さん、アリサに何があってああなったの？」

「分からないの。突然、魘されてて、起こしたと思ったらああだったから」

それは、真実。事実、アリサが今生の記憶を失う原因は夢にあった。結果としては、心因性なのである。

アリサの夢の中での辛い経験が、事故のことを忘れさせた。付随して、事故の後に起きたことも全て忘れ去った。これが、アリサの記憶を奪った原因。

そして、この状態でアリサの記憶が戻った場合、アリサはどうなるだろうか。

事故のショックで、精神が壊れるかもしれない。あの夢の中にアリサが囚われているとしたら、アリサを元に戻すのは相当の力が必要になるだろう。

それまでに、アリサを封じる力は強いのだから。

アリサを封じているのは、死んだ後の叔父と叔母の慟哭と、その姿。

だが、家族たちはそんなことは一切知らない、知り得ない。だからこそ、アリサがアリサたり得なくなった理由が分からない。

――絶望的だ。

絶望の歌は、アリサが歌わずとも誰かが歌い続ける。

滅びのときが来るまで、ずっと流れ続ける。リフレインだ。

「とにかく、アリサを元に戻さなくちゃ」

「アレグラさんに一度診てもらう？」

「それがいい。母さん、呼んでくれる？」

子供たちの話し合い、それでひとまずアレグラを呼ぶことが確定する。その決定後、母は急いでアレグラを呼びに向かった。

だが、アレグラに診てもらっても結果は変わらない。アリサの体

に見られる異常は、発熱のみ。ほかに異常は見られないのだ。
故に、家族たちは更に焦った。異常は見られない、だが、事実アリサはおかしい。
アリサは、アリサでありながらもアリサではないのだから。

「どうする？　どうしたら、アリサの記憶が戻る？」
「そんなの、私たちに分かるわけないじゃない！」
「なら、どうするんだよ！？　アリサから、僕たちの記憶が消えたままでいいのか？」
「いいわけないじゃないの！　思い出してほしいわよ！」

解決方法を見出せない兄妹たちの喧嘩が始める。醜いバトルが勃発する。
何も覚えていないアリサ。事故に遭ったことすら記憶に無い、死んだ記憶など一切ないアリサ。
だから、彼女はアリサ・クライシス・ドーリスではなく、神埼有紗なのだ。全てを忘れた少女。転生した記憶を失った少女。
前世の、今の彼女は既に存在しない人間だと言うのに。

「本当に、何があったんだろうね、アリサ」
「ジブリール様に、お尋ねすることが出来ればいいんだけど……」
「――――それだ！　きっと、ジブリール様なら何かご存知のはずだ。神殿へ行ってくる。お前たちはアリサを見ておれ！」

そう言って父は急いで支度を整え、神殿へと向かう。神の祀られし神殿。その地で祈れば、ジブリールに愛されたアリサは何とかなるかもしれない。
父はそう考えながら、神殿へと向かった。

だが、結果は無残なもの。返ってきた答えは。

「これは、あの子が何とかしなくてはならない。乗り越えなくてはならないんだ。これは、試練なんだよ」

故に、父は諦めざるを得なかった。そして、決意した。必ずアリサの記憶を戻して見せると。それが、乗り越えるべきものならば、何をしてでも乗り越えさせて見せる。それが、父の新たな決意となった。

彼らの可愛いアリサ。彼らの愛するアリサ。必ず元に戻してみせる。記憶を戻してみせる。それが可愛いアリサのためだから。

だから、彼らは記憶を失った可愛い、可哀想なアリサと話をしてみることにしたのだ。――もちろん、体調は考慮した上で。

「アリサ。君の名前は、アリサだね？」

「私の名前は、神埼有紗。……これって、異世界トリップってヤツ？」

「その、いせかいとりっぷとやらが何か分からないが、そんなものではないと思うぞ」

だって、君は私たちの可愛い娘なのだから。父は、続けようとしたその言葉をすんでのところで押し戻す。今のアリサに、それを言ってもよく分からないまま焦るだけと言うことがよく分かっているからだ。

だが、言いたい。父たちはそんな気持ちに襲われる。それでも、何とか抑えた。父たちはアリサには告げない。

「ま、まぁ、熱が下がるまではゆっくりと休むといい」

「ハァ……ありがとーございます」

そうして父たちはアリサの部屋から去る。そして、各自の部屋に戻った父たちは激しく泣いた。

この日のドーリス公爵家内で、激しい慟哭が轟いた。

取り返しの決意

アリサが記憶をなくして、時が流れた。アリサの熱は下がり、アリサは早く帰ろうと考えたのか、母たちに返らせてもらえるよう頼む。

「叔母さんたちも心配してると思うから、帰りたいんですが」

熱も下がったし。続けるアリサに、母たちは焦った。焦って、何とかしてアリサをこの屋敷にとどめようと説得を開始する。

「だけど、ここはあなたのいた世界と違うんでしょう？　なら、ここにいてもいいんじゃない？」

「でも……」

「いいから。慣れない世界は疲れるでしょう？　少しお休みなさい」

「でも、迷惑だし……」

「そんなことはありませんから、お休みなさい」

母の言葉に、アリサは観念したのか休ませてもらうことにしたらしく、目を瞑る。そんな娘を、母は優しく見守る。早く思い出してくれることを祈りながら。

＊＊＊＊＊

「久しぶりだね、アリサ」

「……誰？」

あのまま寝入ったアリサ。その夢の中には、あの日、父に乗り越えなくてはならないと言うことを伝えた神、ジブリールが現れてい

た。

あれから時は流れても、アリサの記憶は戻らない。そんなアリサを見ておくのが忍びなくなったらしい。

「僕を覚えていない？　思い出して、アリサ。あの日、何があったか思い出すんだ」

ジブリールが言った瞬間、アリサの脳裏に何かの映像が写る。

――嫌だ、見たくない。アリサは目を瞑るのだが、脳裏に写った映像は消え去らない。

「目を閉じるな、アリサ。思い出すんだ」

「――嫌だ！　見たくない！　こんなの、私は知らない！　私は死んでなんかいない！」

「認めるんだ！　お前が認めないことで、どれだけの人間が悲しんでいると思う！？」

「知らない！　知りたくもない！」

「お前は、自身の家族をどれだけ悲しませるつもりだ！？」

家族？　そんなの、もういない。亡くした。失った。私の家族は、叔父と叔母の二人だけ。だから、帰りたい。叔父さんたちの下へ。

「この馬鹿！　お前は、もう死んだだろうが！」

「死んでない！　生きてる！　私は叔母さんたちのところに帰るんだ！」

その瞬間、ジブリールの顔が悲しみの色に染まる。とても悲しそうで。とても切なそうで。

「思い出せ。認めるんだ。――お前には聞こえないのか？　お前の

両親の、兄たちの泣き声が聞こえないのか？」
「知らない。そんなの、聞こえないよ」
アリサはそう言いながらも耳をふさぐ。アリサの耳にはしっかりとその声が届いている。耳をふさいでも聞こえる声。
だが、今のアリサの耳に届く声は、叔父叔母の慟哭のほうが強かった。
「私は死んでない。帰るから、泣かないでよ、叔母さん」
アリサの瞳から一筋の涙が零れ落ちる。――限界だ。
「今は戻りなさい、アリサ。また会おう」
「もう、嫌だ。会いたくない。二度と来ないで」
＊＊＊＊＊
そうして目を覚ましたアリサの瞳には、一筋の涙が浮かんでいる。
アリサは、その涙を服の袖できれいに拭った。
その後、アリサは夢で聞いたことを反芻させる。自分は死んでいるということ、叔父叔母を泣かせたと言うこと。
そして、今現在進行形で両親や兄たちを泣かせていると言うこと。
今のアリサには何も分からない。今生の記憶が全くないのだから。
だが、進展はあった。ジブリールがアリサに理解をさせた。――自分は死んでいるということを。だが、転生しているということまでは理解していない。次の課題はそこになる。
それさえ理解できれば、アリサは記憶を取り戻すだろう。転生を認めるということは、自身が神埼有紗ではないと理解することなの

だから。
それは、自身がアリサ・クライシス・ドーリスであることを認めるのと同義となる。

そうしていると、アリサの様子を見に来たらしいエルミナが、アリサの部屋を訪れる。

「調子はどう？」
「……おかげさまで」
「ねぇ、アリサ。まだ何も思い出せない？」
「……私が死んだことだけ、思い出した。でも、あなたたちが誰かは知らない」

ねぇ、死んだのならば私は誰？　尋ねるアリサを、エルミナは優しく抱きしめた。そして、静かに口を開く。

「アリサは、アリサだよ。神埼有紗の来世であり、私たちの可愛い妹」
「来世……？　そっか、私、死んだんだもんね」

転生、したのかぁ。叔母さんたち、泣かせちゃったなぁ。泣かせたくなかった。死にたくなかった。でも、死んだんだね。
そう告げるアリサの表情はとても冷たい。だが、アリサを抱きしめているエルミナには、全く見えていない。だが、大体の予想で判断をしていた。

「大丈夫。ゆっくり、思い出して行こうね」
「思い出したほうが、いいんだよね？　なら、頑張るよ」
「うん。……うん、頑張ろうね、アリサ。ねえさまたちも手伝うからね」

アリサ。それが、今の私の名前。神埼有紗じゃない、アリサ。
私の名前は、――アリサ・クライシス・ドーリス。ドーリス公爵家の末の姫。
転生したが故に、幼くなった私の体。私の今の年は、十。十歳だ。
私は、十五歳で事故に遭った。その五年後に、帰らぬ人となった。

私は、転生したんだ。ドーリス公爵家の末っ子として、転生したんだ。
私の名前はアリサ。アリサ・クライシス・ドーリス。
もう、叔父や叔母の慟哭は聞こえない。私が、全てを受け入れたからだ。

迷いはない。私は、全てを認め、全てを思い出した。

「ミアねえさま、ごめんね」
「え？　アリサ？」
「思い出した。心配かけて、ごめんねねえさま」
「本当に、アリサ？」
「うん。ぜーんぶ思い出した。私が死んだこと、転生したこととかね」

それは、喜びの歌。ようやく思い出したアリサの歌う、無意識の歌。
喜びに包まれたドーリス公爵家。そこでは、いつまでも歌が響き渡っていた。

取り返しの決意（後書き）

すみません。
あっという間に不幸終了です。

長引かせると、私の筆力上、
とんでもなく不幸になりかねなかったので……

アリサが記憶を取り戻したその日、帰ってきた家族たちは愛娘が自分たちを思い出してくれたことに喜び、順に抱きしめる。

「アリサ、僕の名前、言える？」
「私の名前はっ！？」
「僕！　僕も！」
「セインにぃたちずるい！　僕も！」
「アリサー、私もね」

兄妹たちが順にアリサに問いかけると、アリサは一人ひとり、指差し確認をしながら、順番に兄たちの名前を告げていった。

「ルゥにいさま、リンねえさま、セイにいさま、カイにいさま、ミアねえさま」
「アリサ！　君ってば可愛いんだから！」
「にいさま、痛いよ。力弱めてよぉ」

答えを返したアリサを、兄は嬉しそうに微笑み、ぎゅうっと抱きしめる。だが、それが力の入れすぎだったらしい。アリサは痛みを訴える。

だがそれでも、優しい兄が嬉しいのかアリサは微笑みっぱなしだ。にこにこと微笑み続けている。

それが、兄たちをさらに喜ばせ、抱く力を強めさせた。

「あぁ、僕たちの可愛いアリサ。思い出してくれて本当によかった」
「心配かけてごめんね、にいさま、ねえさま。もう大丈夫だよ。思い出したから」

そしてその後、アリサの身は母たちの元へ移動し、母に抱きしめられることになる。

「最初に誰かと問われたときは、本当に壊れてしまうかと思ったわ」
「だって、本当に誰だか分からなかったんだもん。今は、大丈夫だよ」
「そうね。ねぇ、アリサ。今日は久しぶりにかあさまたちと一緒のベッドで休まない？」
「……うん」

しばし考えたアリサだったが、笑顔で肯定の返事を返す。その瞬間、母も嬉しそうな表情を浮かべ、兄妹たちは面白くなさそうな表情をする。だが、母はそんな子供たちを一睨みだけであっさりと黙らせた。

それから、久しぶりに家族全員で話をしながら夕飯を食べ、久しぶりに母とジャスリーン、エルミナ、アリサが一緒にお風呂に入り、両親と共に寝室へ向かった。

「アリサ、今度私と一緒に寝ようね」
「うん、また今度ね、ねえさま」

そして両親と共に寝室へ来たアリサは嘗ての定位置である真ん中に横たわる。

大きくなった体で一緒に寝ても、まだ十分に余裕のある両親の使うベッド。狭さなんて一切感じられず、とにかくのんびりと休むことが出来た。

そうしてベッドに横たわり、あっという間に寝入ったアリサを、両親は優しい瞳で見つめる。もう二度と、あんな思いをしたくない。そう思いながらずっと見守り続けていた。

可愛い愛娘。一度、今生の記憶を全てなくしてしまった哀れな子供。記憶を取り戻したと言えども、それが完璧なのかどうかも分からない、小さな愛娘。

だけど、彼らのアリサへの愛は一切変わらない。変わるはずもない。彼らはアリサを心から愛しているのだから。

その後は、父たちも眠りにつく。二人で可愛い愛娘を挟み、二度と失わなくてすむよう祈りながら眠った。

そして、夜が明けて目を覚ました父と母は、まず、アリサの存在を確認する。きちんといるかどうか、第一にそれを確認した。

――ちゃんといる。

それが、両親を安心させた。そして次の憂いを無くすために、二人はアリサを起こす。きちんと思い出しているかどうか、確認したかったが故だ。

「アリサ、起きておくれ？」
「朝よ。起きてちょうだい」
「んー、もう、ちょっと……寝かせてぇ」
「ダメよ。一度起きてちょうだい」

母の言葉に、アリサは諦めを覚えたのか渋々ながらも目を開く。だが、その目はまだ途轍もなく眠たそうだ。

「なにぃ？　どうしたのぉ？」
「朝だから、起きなくちゃ」
「かあさまたちの起きる時間、早いもん。まだ寝るぅ」
「だぁめ。起きてちょうだい」

母が言うと、アリサはやはり渋々ながらも起き上がる。

「おはよう、アリサ」
「おはよ、とうしゃま、かあしゃま」

寝起き状態のアリサは、うまく呂律が回っていない。だがそれでも、きちんと両親に朝の挨拶をする。

が、その瞬間再び眠りに落ちた。アリサの瞼は唐突に閉じられる。

そんな娘の様子に両親は驚き、焦るのだがアリサの様子を見てその焦りは消える。何せ、アリサの呼吸はいたって穏やかで、眠っているだけだったのだから。

「起こすの、早すぎたかしら？」
「そうなんだろうな。もうしばらく、寝かせておいてやろう」

そうして母たちはぐっすりと眠るアリサを時間の許す限り、優しく見守る。起きなくてはいけない時間になるまでの間、ずっと。

それから然程経たずに起きるべき時間となる。二人は名残惜しそうではあったが、アリサの眠る自分たちの寝室から出て行く。その前に、アリサの額に手を当てて熱がないことを確認した上で。

「先に起きてるからね、アリサ」
「朝食まで、ゆっくり休んでいなさい」
「ん……う……」

それからしばらくして、朝食の支度が整うと、子供たちが揃ってアリサを起こしに両親の寝室を訪れる。アリサを起こすだけなので、本来は一人でもよかったのだが、兄妹たちがアリサを起こす役目を奪い合い、結果、全員で起こしにいくことになったのである。

「アリサ、朝ごはんの用意が出来てるよ。起きて、食べに行こう？」
「ほら、起きてよ、アリサ。朝なんだから」
「アリサ。朝ごはんを食べた後ならまた休んでもかまわないだろう。だから、今は起きてくれ」

兄妹たちがアリサの体を揺らしながら声をかける。体を揺らされているアリサは、まだ眠たいのか揺らされない位置まで寝返りをうって移動するのだが、兄妹たちはそれを追いかけ、更に揺らす。

「いやぁん、まぁだ、寝るぅ」
「だぁめ。起きなきゃ、お母さんが怒るよ？」

その言葉はアリサを起こすのにいい薬だったらしい。アリサはすぐにパチッと目を開く。その動作は、紛れもなくアリサ（彼らの妹）であることを教えてくれる。
母の恐怖に怯えるのは、彼らの妹であるいい証拠なのだから。

「おはよう、アリサ」
「おはよ、にいさま、ねえさま」
「さ、行こうか、アリサ。手を貸して」

そうして兄たちは両端からアリサの手を取り、エスコートする。
ちなみに、仲間はずれはカインである。カインは面白くなさそうな表情をしながら、アリサの後ろを追う。
それから、朝食を食べに向かったアリサは、母の愛を存分に受けることになるのであった。

母の愛は時に重い

「アリサ、あーんして」
「かあさま、自分で食べるってば」
「いいから。ほら、あーん」
「自分で食べる」
「いいからあーんってしなさい」
「自分で食べるからいい」
「ダーメ。ジャスリーン、アリサの腕掴んで」
「おっけー。アリサ、ほら、口開けなさい」
「リンねえさま!?　裏切り者ぉ!」

ジャスリーンが母の指示の従い、アリサの腕を掴んで自力で食べられないようにすると、アリサは怒ってジャスリーンを裏切り者と叫び、母とジャスリーンはにっこりと微笑む。
そして、叫ぶために開かれた口に、母は食事を乗せたスプーンを入れた。

「アリサ、叫ばないで、食べなさい」
「むーっ」

呻りながらも、口の中を空にしなくては叫ぶことは出来ない。そう考えたのか、アリサは大人しく口に入れられた食事をしっかりと噛み、嚥下した。
そして、飲み込み終えて反撃にかかろうと口を開いたアリサ。それは、狙いやすいターゲットでしかなかった。母はアリサに叫ぶ暇を与えず、再び口にスプーンを入れる。

「まだあるからね。しっかりと食べましょう」

「なら、リンねえさま、離してよっ！　自分で食べるからぁ！」
「だって。お母さん、どうする？」
「もうちょっと食べたら、離してもいいわ。アリサ、あーん」

母の言葉に、アリサは深い溜め息をつく。そして、早く離してもらうためには食べるしかないことを悟ったのか、大人しく口を開いた。そして、口内に侵入するスプーンを受け入れる。
そうしてしばらく食べていると、ようやく母からのオッケーが出たのか、ジャスリーンがアリサの拘束を解く。そしてそれと同時に、アリサはスプーンを手に取り、食事にかかった。

「アリサ、食べさせて欲しくなったらいつでも言いなさい。食べさせてあげるからね」
「うん、遠慮します♪」

とてもにこやかな答え。それに母は若干落ち込みはするのだが、然程激しいダメージにはならなかったらしい。すぐに正気に戻る。
そして、未だに食事中のアリサ以外の家族に声をかける。

「何をのんびり食べているの？　時間を考えなさい。ほら、急いで」
「え？　……げっ！　兄さんたち、時間、本気でやばい！」
「うわっ！　全員、急げ！」
「ごちそうさまっ！」

母の言葉を受けた兄妹たちや父は、急いで食事を摂り、仕事へと向かう。かなり急ぐことになった兄妹たちだった。
そして、家に母とアリサ、メイドたちになったドーリス公爵家では、母がアリサのそばに付いていた。アリサは若干迷惑そうにしていたが、母はそれもお構い無しだ。

「アリサ、本を読んであげましょうか？」
「いい。それより、一人になりたいな」
「あら、アリサはかあさまが嫌い？　もしそうなら、かあさま悲しいわ」
「嫌いじゃないよ。でも、今は一人で考え事したいの。かあさま、ダメ？」

アリサがその瞳を潤ませながら訴えると、母は軽く溜め息をつく。
そして、アリサの頭を一撫でしてアリサの部屋から去っていった。
アリサは母に聞こえないよう、小さく礼を言って、母に言ったとおり、考え事に没頭する。
――考え事の内容は、あの日の夢だ。

アリサがアリサである記憶を失うことになった原因。アリサの前世の保護者である、叔父叔母の泣いている姿、慟哭。
目を瞑っても、写る叔父叔母の泣き姿。耳をふさいでも、聞こえてしまう慟哭。

あれは、なんだったのか。現実なのか、夢に過ぎないのか。
だが、あれが現実だろうが夢だろうが、そんなものはアリサには関係ない。問題は、アリサに届いたもの。
あの、泣いている姿。慟哭。それが一番の着眼点なのだから。

見たくない。そう思って目を瞑った。
聞きたくない。そう思って耳をふさいだ。
――それが一番の過ちだったのだ。目を閉じず、耳をふさがずに受け入れるべきだったのだ。
受け入れず、拒絶した結果があれだった。アリサは今生の記憶を全て無くし、神埼有紗としてすごすことになった。それに付随して、家族たちを悲しませた。

自分は、ただ不安がり、そして言うことを聞いてさえいればよかった。いろいろなものを見せられ、記憶を揺さぶっていればよかった。

だが、家族たちはどうだっただろう。今までずっと愛してきた娘に、突然誰か尋ねられ、パニックに陥っただろう。

私が、させた。アリサは後悔する。それと同時に、アリサのその瞳からは止め処無く涙が流れ落ちる。

「アリサ」

そうしていると、部屋の扉のところに人が寄りかかり、立っていることに気がついた。母だ。

「何を泣いているの。無理はしちゃダメだって、いつも言っているでしょう?」

「か……あさま?」

アリサは涙でびっしょり濡れた睫毛を服の袖で拭いながら、扉のほうを見る。そこにいたのは、やはり母だった。

扉から体を離した母は、躊躇いもなくアリサの部屋に足を踏み入れ、アリサのそばへとやって来る。そして、アリサを抱きしめた。

「何を考えれば、そんなに涙が流れるの。相談してみなさい、楽になるから」

ぶんぶんっ。アリサは首を横に振る。

「いつまでも苦しんで、また熱をだすつもりなの? それで、またかあさまたちに心配をかけるの?」

ぶんぶんっ。アリサはまたも首を横に振る。母は、そんな強情な娘をぎゅっと、強く抱きしめる。娘が痛いと訴えてきても、それでも力を弱めたりはしなかった。とにかく、アリサを抱きしめ続ける。アリサが、話す気になるまで、ずっと。ずっと。

母は強し

「さぁアリサ、話しなさい」

あれから数分後、大きくなったアリサを抱えたまま、少し息を切らしながらリビングへと運んだ母はアリサを横に座らせそう切り出した。

そう言いながらアリサをじっと見る母の目は冷たくて、言わなければどうなるか分からない、と暗にその瞳が訴えていた。

――これ、何の尋問？

アリサが本気でそう考えるのも、無理もないことだろう。それほどに母の瞳は恐ろしいのだから。

だが、母にアリサを害する気持ちは一切ない。あるものは、アリサの不安を取り除こうと言う、完全なる親心である。其れ、時に過保護とも言う。

「人に話したほうが楽になるでしょう。言いなさい」

「かあさまに話すようなことじゃないから、嫌」

「あら、じゃあお父さまが帰ってきたら、アリサが泣いていたこと、包み隠さず話をしてあげましょう」

「え！？　ちょ、それ反則！」

父に知られると、自動的にそれはほかの兄妹たちの知るところとなる。そうなると、母単体からの尋問の比ではなくなるのが容易に想像できる。

それは避けたい。父母兄妹全員からの尋問は、間違いなく、地獄を見る。

でも、話したくない。これは、自分のかけた迷惑だ。それを掘り返す必要など一切ないはずだ。

だが、今の母に逆らえる人間など、どこにもいない。

「思い出してただけだよ」

過去を。前世を。夢を。思い出したくない、私の死んだ後の日本。あの夢で見た姿、聞いた慟哭。思い出したくなかったが、それでも思い出そうとした。

すべてを、吹っ切るために。その過程で、悲しくなった。涙が溢れた。

そのタイミングで、母が来て、涙を見られてしまった。本当にタイミングが悪かったと言うか、何と言うか。

「それで、どうして泣いちゃったの。それよりも、あの日、あなたは何の夢を見ていたの？」

あの日。それは、アリサがアリサの記憶を失った日。

何の夢。それは、アリサが死んだ後の日本。アリサを失い、泣く叔父叔母の姿、慟哭。

全てを拒んで、狂った。全てを受け入れれば、狂わなかったのか。

「たら、ればを言ったら何にも出来ないでしょう？　過ぎたことに、そんなに考え込まないの。いいわね？」

「……うん。ごめん、かあさま」

「謝る必要なんてないわ。それよりも、笑ってちょうだい？」

「うん。ありがとう、かあさま。――大好き」

自分を優しく慰めてくれる母。大好きな母。アリサは母に愛を告げ、抱きついた。抱きつかれた母は、微笑みながら娘を抱きしめる。

そうやって抱きしめられているアリサは嬉しそうで、気持ちがよさそうだった。

そうしていると、そんな主親子に微笑ましげな視線を向けながら、メイドが昼食の用意の完了を知らせにやって来る。

知らせを聞いたアリサはお腹が空いていたのか、瞬時に目を輝かせ、そんなアリサを優しく見つめた母は、一度アリサから手を離し、そして立ち上がってアリサの手を握る。

「ご飯を食べに行こうか」

「うん！」

それからの二人は仲睦まじく話をしながら食事を摂り、その後は疲れているであろうアリサを母が無理やり休ませる。

アリサは大丈夫だと言い張るのだが、先ほど思い切り泣いていたのを見ていた母としては、楽観視は出来なかったのだ。

「熱を出したりしたら大変だから、休んでいなさいね」

「大丈夫なのにィ」

「いいから。かあさまを心配させないためにも休んでおいてちょうだい」

アリサは母に逆らえない。母に逆らったときの恐怖はこの身に刻まれているのだ、逆らえるはずがない。それは、兄妹たちも同様だ。無論、父も。

幼い頃、兵士時代からの長い付き合いである家族は、昔から何度も何度も母に叱られている。だからこそ、全員母の恐怖が身に刻み込まれているのだ。

ちなみに、アリサが始めて母の恐怖を身を持って知ったのは、七歳のときだった。それまでは怖い思いをさせたらすぐに熱を出すだろう、と家族が考えた結果、母のお叱りは一応手加減されていた。だが、七歳になると、その手加減が少しずつ減っていったのだ。

そのとき、アリサは熱を出して寝込んでいた。母にもきちんと休んでおくよう命じられていたのだ。だが、アリサは眠れず、退屈だったためベッドから降りて部屋を探索していたのだ。

熱も大体下がっていて微熱状態であったため、アリサは体調的にはかなり普通だった。それ故の行動だったのだが、それが母の怒りの導火線に火をつけたのだ。

そのあとは散々だった。戻ってきた母に強制的にベッドに戻らされ、動かないように母の威圧で拘束し、お説教が開始された。

「アリサ。熱があるときは安静にしていないといけないっていうことは、分かるよね？」

「ウ……ウン、ワカル」

「なら、どうして部屋を歩き回っていたの？」

「タ、タタタタタ、退屈ダッタカラ……」

母に問われたアリサは、しどろもどろで、片言になりながらも一応理由を告げる。だが、無論母は許さない。

「ふぅん、退屈だったから、ねぇ。それだけで、無茶をしたの？」

母はそう言いながらアリサの額に手を置く。もちろん、熱は上がっている。それを確認した母は、深い溜め息をついた。

「だから、無理はしちゃダメだって言ってるのに……」

「あう……」

それからアリサは母によってしっかりと寝かしつけられる。無理をした分、アリサに反論を返す余地もなく、眠りたくなくても眠ることになった。

それが、アリサが始めて母の恐怖をその身に刻みつけた日の記憶。

あの日以来、アリサは極力母を怒らせないように努力してきた。

二度と、あんな怖い目には遭いたくないから。

母の恐怖は、いつまでも子供たちに刻み込まれていくのであった。

咲き誇る愛

仕事を終え、帰ってきた家族たち。家族たちは、家に着くと同時に一目散にアリサの待つ部屋へと飛び込んでいった。――アリサは眠っていたが。

『アリサ、ただいまっ！』

「すー」

家族たちは嬉しそうにアリサの部屋に飛び込み、アリサに声をかけたのだが、返ってきた返事はアリサの寝息でしかなかった。

だが、家族たちは気持ちよさそうに眠るアリサを優しく見つめる。

ただ、その部屋には先に母がいたわけだが。

「おかえりなさい。アリサは眠ってるから静かになさいね」

夫や子供たちの姿を確認した母は、優しく微笑みながら、人差し指を口にあて告げる。そんな母の行動を見た父たちは、口を噤み、音を立てないよう静かに部屋に足を踏み入れた。

気持ちよさそうに眠っている彼らの妹姫。泣いていたのか、鼻の頭がほんのり赤い、彼らの最愛の子。そんなアリサを彼らは見守り続けた。

……お腹が空いたらしいアリサが、きゅるるる、という子犬の鳴き声のような音をお腹から発し、潤んだ瞳で空腹を訴えてくるまでの間。

「お腹空いたよぉ。ご飯、まぁだぁ？」

「ははははっ。もうすぐ準備は出来るだろうが、今のうちに移動しておくかい？」

「うん」

アリサがそう答えると同時に、カインがアリサを抱き上げた。いきなり抱き上げられたアリサはびっくりとした表情を見せる。

「カイにいさま？　重たいでしょ？　下ろしてよ」

「全然重たくないよ。アリサ、僕は鍛えてるんだから、アリサくらい軽々だよ」

「その通りだよ、アリサ。カインは騎士なんだから、アリサくらい持てないとクビ」

にっこり。セインとルウィンは黒い笑みを浮かべながらカインに告げる。その言葉に、カインに抱えられたアリサは若干引き、当の本人（カイン）は引きつった笑いを浮かべていたが……。

そうして抱えられ運ばれているアリサは、その間にもお腹は空くらしく、何度も何度も子犬の鳴き声は屋敷に轟いていた。

「よしよし、もうすぐ着くからね。それまで我慢我慢」

「うん。でも、やっぱりお腹空いたぁ」

そうして話をしながら、彼らは食堂へ向かう。そして彼らが食堂に着くと、父と母が椅子に座って待機しており、席には夕食の支度がなされている。

それを見たアリサは目を輝かせ、そんなアリサを兄妹たちは微笑ましげな瞳で見つめながら、アリサを椅子に座らせる。

その後、彼らも席に着いたのを確認すると、まだ？　まだ？　と潤んだ瞳で見つめてくる末娘に苦笑しつつ、食事開始の挨拶をした。

その瞬間、アリサは喜びに目を輝かせ、食事に手をつけた。……すごい勢いで食べ進めていく。

「詰まらせないよう、気をつけるんだよ？」
「ん！」

食事を取る手の止まらないアリサに、父と母が優しく声をかけ、アリサは元気いっぱいに返事をする。だが、まだ口の中に物が残っているらしく、口を開かずの返事ではあったが。

だがそれでも家族たちには微笑ましく見えるらしい。皆が皆、アリサを暖かい瞳で見つめる。

そして食事終了後、彼らはリビングに移動し、飲み物と共にお話、兼、家族団らんの時間となった。

だが、それは一種の尋問の時間だった。

「アリサ。かあさまに聞いたが、どうして今日泣いていたのかな？」
「……かあさまの嘘つき」

話をしたら、とうさまに話さないんじゃなかったの？　アリサは恨みがましい瞳で母を見つめながら告げる。それに対する母の返答は飄々としたものだった。

「とうさまには話さない、とは言ってないわよ？　それに、包み隠さずは話していないから、約束は守っているわ」
「……屁理屈だよ、それぇ」

そう言いながらも、アリサは少しずつ逃走体勢に入ろうとし始めている。だが、それは兄妹たちが許しはしなかった。

「アリサ、泣いたの？」
「どうして泣いたの？　大丈夫？」

「あれ？　逃げようとしてるのはどうして？」
「話を聞かせてくれるまでは逃がさないよ」
「観念して話しちゃいなさい」

それは、純然たる尋問であった。アリサは逃げようにも逃げられない状態に陥り、それでも少しずつ、逃げようとタイミングを図っていた。

だが、もちろん逃げられるはずもない。アリサは逃げないように、と母のひざの上に乗せられていたのだから。

「アリサ、観念して包み隠さず話をしなさい」
「かあさま、いじわる。ずるい。卑怯者」
「アリサのためならどれだけ卑怯な人間になってもかまわないわ」

アリサの体調を崩す要素になるものは、みぃんなかあさまたちが排除するからね。そのためには、その要素を知る必要があるでしょう？

そう告げる母に、アリサは面白くなさそうな表情を見せるが、それが自分のためと言うのが効いたらしい。すぐに表情が元に戻った。

「観念したのなら、話なさい。お父さまたちが待ってるわ」
「んー、夢のことを考えてただけだよぉ」

ちょっと、思い出してただけだから、そこまで気にするようなものじゃないよ。心配しないで。アリサはそう告げるのだが、父たちは信用していない。

アリサの答えを聞いた父たちは、アリサのその言葉がとにかく信じられないらしく、疑いの瞳を見せる。

だが、アリサもそれ以上に答えようはない。何せ、それが全ての真実なのだから。

「大丈夫だってば。本当に、大丈夫なんだよ」

まっすぐな瞳でアリサは告げる。家族たちは、その目に負けた。そんなにまっすぐな瞳で見られてはこれ以上追求するのは難かったらしい。父たちは立ち上がり、母のひざの上に座らされているアリサの元に近寄り、頭をくしゃりと撫でる。

その後、ようやく開放されたアリサは、お風呂に入りしっかりと髪を乾かして眠りに着いた。

……熱を出すと怖い人がいるため、その辺に関してはアリサはしっかりとしていたそうな。

アリサです。愛が重いと思う今日この頃です。とうさまやかあさま、にいさまたちの愛がとにかく重たいです。

――――っていうか、今まで以上に過干渉になりました。

「アリサ、一緒に本を読もうか」

「僕が読んであげるよ」

「アリサ、私が魔術講習してあげようね。多属性の心得を教えてあげる」

「変な人に襲われたときの対処法を僕たちが教えてあげるよ」

「そういうのは僕たちしか教えられないしね」

順に、ジャスリーン、ルウィン、エルミナ、セイン、カインである。五人はアリサを奪い合うように声をかけ続ける。

そして、兄妹たちは結果としては喧嘩となった。肝心のアリサを放っておき、五人で喧嘩を始める。

その隙に、アリサはこそこそと兄たちの喧嘩の場であるリビングからこそこそと抜け出していた。こっそりと抜け出し、兄たちの目の届かないであろう両親の寝室へと逃げ込んだ。

誰もいない両親の部屋。アリサはそこで、のんびりと落ち着く。誰の干渉も受けないであろう部屋。受けても両親だけである寝室。

落ち着く場所は、何故か激しい睡魔に襲われる。両親の部屋で落ち着くアリサは、うとうととしながらも、必死で起きていた。が、限界は近かった。

「ふあぁっ」

一度欠伸をこぼしたアリサは、もそもそと両親のベッドに上がり、横になる。それからはあっという間だった。数分後にはアリサの寝息が寝室に響き渡る。

「アリサー、どこにいるんだーい？」
「いるんなら、返事してー」

アリサが両親の寝室に逃げ込んでしばらくして、ようやく喧嘩を終えた兄妹たちがいつの間にかいなくなったアリサを探しに、屋敷中を駆け回る。

まずは最初にアリサの部屋を確認し、次は図書室、父の書斎と、順にアリサを探して駆け回っていく。

だが、アリサは中々見つからない。探しても、探してもアリサは見つからなかった。

「アリサ、どこにいるんだよーぉ」
「あなたたちは、何をしてるの？」
「お母さん、アリサを見なかった？　探してるんだけど」
「アリサ？　いないの？」
「見当たらないの。ずっと探してるんだけど」

ジャスリーンのその言葉の後、母も兄妹たちのアリサ捜索隊に入り、捜索にかかる。

「アリサ、いるのなら返事をしなさい！」

母は大きな声でアリサを呼ぶのだが、眠っているアリサの返事は、もちろんない。その様子に、母は焦りながら屋敷を巡る。

それからしばらくして、残り探していない部屋は一室だけになっ

ていた。それは、両親の寝室。残された唯一の部屋。母と、揃った兄妹たちは恐る恐る、両親の寝室の扉に手をかける。

いて欲しいと願いながら、彼らは扉を開く。いなければすぐに公爵家の私兵に街を探させる予定の、母と兄妹たち。

閉ざされた扉を開くと、その部屋のベッドには、アリサが気持ちよさそうに眠っていた。

両親のベッドに眠るアリサを見た母たちは、ホッと息をつき、そしてベッドの空いている場所に座る。

その際のベッドの揺れが気になったのか、アリサは「んぅ……」と呻りながら寝返りをうつ。だが、まだ眠たいらしく、完全に目を覚ます気配はない。

「こんなところにいたんだね」

「見つけられないはずだわ」

「まぁ、見つかったからいいわ。本当に、心配させてくれて……」

母たちはそう言いながら、アリサの頭をよしよしと撫でる。よっぽど眠たいのか、何をしても目を覚ます気配を見せないアリサ。

とにかくぐっすりと眠り続けていた。

目を覚ましたのは、眠っているアリサを見て同様に眠たくなった母たちが、アリサに寄り添って眠りについて少しした頃だった。

「よく寝たーぁ」

アリサがそう呟きながら目を開けると、まず、びっくりした。何故母たちが揃ってこんな場所に寝ているのか。

起こすべきか、起こさざるべきか。

起こせば、再び過干渉の渦に飲み込まれる運命にある。だが、起こさなければ彼女の愛する家族たちが自分のように風邪を引いてしまうかもしれない。

「かあさま、にいさま、ねえさま。きちんと毛布着て寝ないと、風邪引いちゃうよ？」

結果、彼女は家族の苦しむ姿を見るのが忍びなかったらしく、眠っている母たちを起こすことにしたらしい。母たちの体を揺らし、とにかく起こす。

「かあさま、にいさま、ねえさま、起きてぇっ！」

起ーきーてーぇっ！　中々起きない母たちに必死で声をかけ続ける。

アリサはとにかく必死である。そして、ようやく目を覚まし始めたらしい母たち。それを確認したアリサは、過干渉の渦に巻き込まれる前に逃げることにしたらしく、物音を立てずに部屋から抜け出した。

その後、目を覚ました母たちはいつの間にかいなくなったアリサを探して、再び東奔西走することになる。

ちなみに、逃げ出したアリサは、今度は図書室にいた。自分の部屋に戻ってもどうせ母たちの襲撃を受けることになると言うことは、何も考えずとも理解できることであるからだ。

「おや、お嬢様お一人ですか？　お珍しいですね」

「そう？　今日は、魔術本が見たいと思ってきたんだ。初心者用の魔術本、紹介して？」

「魔術本ですか。旦那様や、奥様の許可はお取りになっておられますか？」

「え？　……と、取ってる、よ？」

「そうですか。では、人をやって確認させてきましょう」

魔術本を読むために図書室へやってきたアリサ。司書に魔術本の紹介を頼むのだが、思いもよらない質問が返ってきた。

両親からの許可。まさか、図書室で魔術本を読むためにそれが必要になるとは。

まあ、それくらいなら嘘をついても大丈夫だろう。その考えが甘かった。人をやって確認されると、嘘だと言うことがすぐに分かり、間違いなく後から母のお叱りを受けることになる。

それを避けるためには。

「ごめん、嘘。許可取ってないけど、許可いるの？」

「やはり嘘でしたね。――アリサお嬢様は、まだ魔力のコントロールに慣れていませんからね。危ないですから、一応許可を取ってからにしてください」

司書のその言葉を聞いたアリサは悲しそうな顔をし、そして、渋々ながら普通の本を探しに向かう。それからは、ずっと本を読み続けた。

――母や兄妹たちが、再び自分を探していることに気づくこともなく。

辟易する過干渉

図書室で本を読んでいたアリサだったが、アリサを探しに来た兄妹たちに見つかり、強制的に部屋に戻らされる。

「心配したよ、アリサ」
「にいさまたち、過保護すぎるよ。大丈夫だって」

兄たちの過干渉に遠まわしに文句を言うアリサ。だが、兄妹たちはその文句を笑み一つで弾き飛ばした。
兄たちは優しく微笑み、アリサの文句を華麗なまでに弾き飛ばす。

「ああ、アリサ。本当に探したんだから」
「まったくよ。めいっぱい探したわ」

……過干渉激ウザ。瞬間的にアリサは微笑みながらもそう考える。笑顔の後ろに隠れたその言葉は紛れもなく兄たちに向けられていて、その言葉を向けられた兄妹たちはそのことに気がついていない。
……私、こういう感情を隠すの上手になったなぁ。にこやかな微笑の下でそんなことを考えるアリサだった。

「さ、体調を崩す前に部屋に戻ろう」
「今日はかあさまたちの部屋で寝たから大丈夫だよ」
「いいから。アリサは簡単に体調を崩しちゃうからね。保険よ」

エルミナが言うと同時に、セインとカインが揃って両端からアリサの腕を掴む。そして、アリサの両足を浮かせたままで部屋へと連行した。

「セイにいさま、カイにいさま、離してぇっ！」
「大人しく一緒に部屋に戻るんならおろして上げる」
「セインにぃの言うとおりだよ。どうする？　アリサ」

むぅ。アリサはそう呻った後で渋々ながら頷く。そんなアリサを見たセインとカインは、微笑みながらアリサを下ろした。そして、一緒に歩き出す。

が、瞬間的にアリサが逃走体勢に入る。猛ダッシュで逃げ出したのである。未遂ではあるが。

逃げ出そうとしたアリサはすぐに兄たちに捕まり、しっかりと抱き上げられる。足掻いても足掻いても、兄たちの腕からは逃れられない。

「残念でした。僕から逃げようなんて甘いね」
「まったくもう。無理をしたら、また熱を出しちゃうでしょう？」
「むー」

兄たちに抱えられたままのアリサは、最早逆らう意味もなく、兄たちの手によって自分の部屋に戻されベッドに下ろされる。

それからは、起き上がろうとするたびに兄たちの手によってベッドに押し戻された。面白くない。アリサの表情は、明らかにそれを語っている。

それ故か、アリサは諦めない。諦めずに何度も何度も起き上がり続ける。何度も起き上がり、その度にルウィンやエルミナたちにベッドに押し戻されていた。

「アリサ、いい加減諦めるんだ」
「ここで無理をしたら、明日注射うつことになるかもしれないよ？　いいの？」
「注射は嫌。でも、大人しく寝ておくのも退屈だから嫌」

ベッドに横たわらされたままのアリサは、兄たちに屈するわけにもいかないとでも言うかのように、喰いかかる。
アリサは、どこまでも諦めない。根性で喰らいつき続けていた。

「暇暇暇暇暇ぁっ！　退屈退屈退屈退屈っ！　にいさまたちのいじわる」
「いじわるでもなんでもないよ、アリサ。僕らはアリサを思ってしているんだから」

それが一番たちが悪い。自分のためと言う理由が一番たちが悪いのだ。自分のためだと言うのならば、自分の望む行動を許して欲しい。
兄たちは、あまりにも自分の行動を制限しすぎる。制限だらけなのだ。束縛だらけの日々は、嫌だ。
だからこその、足掻きだ。絶対に束縛の日常からは逃げてやる。
アリサはそう決意し、さらに兄たちに喰いかかった。

「だって、私、大丈夫だもん！　元気だもん！」
「でも、今日はいっぱい動き回ったろう？　疲れたろうから、少し休もう」
「ヤ！　大丈夫だって言ってるじゃん！　絶対寝ない！」
「ダメ！　休みなさい！」
「やーだっ！」

休め、嫌のバトル勃発。にいさまも、ねえさまたちも諦めないな。でも、私も諦めないからね。大丈夫であるときに休むつもりはないんだ！
それでもまだまだバトルは続く。にいさまたちも諦めないし、同様に私も諦めない。アリサはそう考えながら、何度も何度もベッド

から起き上がる、戻されるを繰り返していた。

「アリサ、いい加減諦めようよ。ね？」

「ヤだ！　にいさまたちこそ、諦めてよ」

アリサは必死で、兄たちの目をしっかりと見ながら告げるのだが、兄たちはそんなアリサをにっこりと微笑み、その笑み一つで黙らせた。

「諦めるわけないだろう」

その笑みは、アリサにとっては悪意の篭ったものでしかなくて、兄たちにとっては純粋なまでの善意だった。

アリサを思う兄と姉の純粋な気持ち。兄と姉を愛してはいても、今は言うことを聞きたくないが故に逆らい、反発するアリサ。

だが、そんな反発を続けていたアリサにも体力の限界が訪れた。何度も起き上がり、ベッドに戻される、を繰り返して疲れたのだろう。息を切らしながら、完全にベッドに横たわった。

「あぁ、疲れたのね。いいから、休みなさい」

「ねえさまたちの、せい、だもんっ！」

横たわったアリサの頭を優しくなでながら言葉を放つエルミナに、アリサは息を切らせたままで言葉を返す。

その目は若干剣呑ではあるが、兄たちはそんな妹を優しい、温かい瞳で見つめる。アリサの剣呑な目つきが変わることはないし、兄たちの優しい瞳が変化することもない。

――――過干渉、本気でウザい。

アリサはその剣呑な目つきの下でそう考える。そして、その過干渉から一時的にでも逃れるために、アリサは眠ることを選択したらしい。剣呑な目つきを解除し、そのまま目を瞑る。

それからさほど経たずにアリサは眠りについた。目を覚ましたら、兄たちの過干渉から逃れられることを祈って。

辟易する過干渉（後書き）

……反抗期到来？

ストレスは敵

ストレスが溜まる。
嫌なほどにストレスが溜まる。
むかつくほどにストレスが溜まる。

気持ちが悪い。
気持ちが、悪い。
吐きそうなくらいに気持ちが悪い。

起きたくない。
目を覚ましたくない。
起き上がりたくない。

――今は眠っているはずなのに、それでも気持ちが悪い。
起きたくないのに、起きなくてはいけないと体のどこかがそう訴える。
なら、起きなくちゃいけないのか。あぁ、面倒くさい。

＊＊＊＊＊

「アリサ？　どうしたんだい？」

突然表情を歪めはじめた眠っているはずのアリサ。彼らはそんなアリサを起こすために声をかけ、体を揺らし起こしにかかる。
だが、何度声をかけても、何度体を揺らしてもアリサは目を覚まさず、表情を歪ませたままだった。

「どうしたんだ!?　起きて！　起きるんだ、アリサ！」

「起きろ！　起きろってば！」
「アリサ！」

兄妹たちは必死でアリサを起こそうと体を揺らし、声をかけるのだが、アリサは一向に目を覚まさない。それが、兄妹たちをより不安にさせた。

その不安を吹き飛ばすためにも、兄たちは目を覚ますまでずっとアリサを呼び続けた。何度も名を呼び、体を揺らす。

「アリサ、起きて！」
「――にいさまたち、うるさい」
「アリサ！」
「う、ええぇぇえぇぇぇ」

静かに目を開いたアリサは、兄たちに文句を言い、そしてその直後、移動する暇も与えられることなく、吐き戻した。

器等を用意する暇ももちろん無いため、アリサの吐瀉物はアリサの手に留まりきれず、毛布に落ちていく。

「アリサ、大丈夫!?　ちょっと待ってて！」

未だ少しずつではあるが、吐き戻し続けているアリサ。兄たちはそんなアリサを見、焦ってアリサのために器やタオル等を取りに向かう。

その間、エルミナだけは動かずにアリサの背を優しくさすり続ける。吐き出すものを全て吐き出してしまえるよう、優しくさすり続けた。

「うえぇぇぇえぇぇぇ」
「アリサ、出すものは全部出しちゃおうね」

そうして戻し続けていると、アリサの部屋に兄妹たちが戻ってくる。アリサの吐き戻したものを受ける器を持ち、アリサの手を汚した吐瀉物をふき取るためのタオルを持ち、そして、アリサ用の替えの毛布を持って戻ってきた。

ちなみに、そのときに母も一緒にアリサの部屋を訪れていた。アリサが吐き戻したと聞いて、いても立ってもいられなくなったらしい。

「アリサ！」

「か……あさ……、――うえぇぇ」

既に胃には吐くものは残っていないだろうに、アリサは戻し続ける。エルミナに背をさすられながら、何度も何度も戻し続けた。

兄たちによって毛布を替えられたアリサのベッド。アリサはそのベッドの上に座り、器に顔を埋めて何度も吐き戻し続けていた。

それからしばらくして、ようやく戻すものがなくなったらしく、アリサの吐き気がおさまる。

そして、吐き気がおさまり、吐き戻すことがなくなったアリサは、一瞬にして気を失う。そのままベッドに倒れこみ、家族たちを心配させる。だが、アリサにそんな家族のことを考える余裕があるはずもない。

アリサは気を失った状態で、兄たちにしっかりとベッドに寝かしつけられる。変な体勢で倒れこんだアリサは、毛布などあって無きが如し状態だったため、兄がアリサを抱き上げ、しっかりと毛布を掛けてやったのだ。

すべては、アリサのために。アリサの体調が、これ以上悪くならないように。

その後、しっかりと休まされたアリサの額に、母が静かに手をあて熱を測る。あれだけ吐き戻したのだから、恐らく熱が高いだろうと母は考えたのだ。

そしてその予想は当たることになる。アリサの熱は母の予想以上に高かった。

「ルウィン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ。アレグラを呼んでくるから、それまでアリサをお願いね」

「任せて」

「早めに呼んであげて。アリサが辛そう」

「分かってるわ」

そうして母は担当医であるアレグラを呼びに向かい、兄妹たちは気を失ったアリサを心配そうに見つめ続ける。

彼らの可愛いアリサ。大事なアリサ。アリサは絶対に守ると決意した彼らにとって、今のアリサの状態は見過ごせるはずもない。

「今回は、何が原因だろうね」

「うーん、あのときの言い合いかなぁ。あれ、かなり体力を削っただろうし」

そう言いながらも、彼らは濡れたタオルを氷を袋に入れたものを用意し、アリサの額に置く。ひんやりとしたタオル。それが気持ちがいいのか、アリサは眠っていながらも淡く微笑む。

それでも、目を覚ますことはないアリサ。とにかく眠り続けるアリサ。アリサは昏々と眠り続けていた。

「今は、ゆっくり休んで早く元気になろうね、アリサ」

兄たちは優しく声をかけ、アリサの頭を撫でる。濡れタオルや氷

に邪魔をされながらも、それでも優しく頭をなで続けた。
それからしばらくして、母がアレグラを連れ、アリサの部屋に戻ってくる。それを見た兄たちはアリサに声をかけ、起こそうとするのだが中々起きない。

「アリサ、一旦起きて」
「ほら、起きるんだ、アリサ」

だが、アリサは目を覚ます気配を見せない。

「かまいません。眠ったままで診察をさせていただきますから。――ルウィン様方は、部屋の外でお待ちください」

そうしてルウィンたち男性陣を部屋から追い出したアレグラは、母たちの了解を取って、アリサの服を捲って診察を開始させる。

「ずいぶんと魔力が減っていますね。それに、乱れています。この魔力の乱れが吐き気を齎したのでしょう」

魔力の乱れは私が調合するよりも、エルミナ様のお薬のほうが効くでしょう。アレグラが言うと、エルミナは急いで部屋を出て行く。そして戻ってきたときは、何か薬らしきものを持っていた。

「魔力調整剤持って来た。アリサにこれを飲ませれば魔力は安定するはずだよ」
「では、私はいつものように熱に効く薬だけ出しておきますね」
「えぇ、ありがとう、アレグラ」

そうして帰って行くアレグラを見送った後は、彼らは全員でアリサを見守り続けた。

突然、魔力が激減し、乱れた彼らのアリサ。そして、今は昏々と眠り続けている愛娘。

彼らは、いつまでもアリサを見守る。アリサの体調不良の原因に、自分たちがあることに一切気づきもせず、とにかく見守り続けていた。

限界到来

あぁ、気持ちが悪い。さっきたっぷりと吐き戻したはずなのに、それでもまだ吐き気がするんだ。

どうしてだろう。どうして、こんなにも気持ちが悪いのか。

今までは、吐き気に襲われることはあっても、ここまで頻繁ではなかった。それ以前に、眠っている夢の中でここまで気持ちが悪くなることなんて今までなかった。

この、異常は一体何なのか。どうして、ここまで異常が現れるのか。

分からない。何もかも、分からない。

それ以前に、もう何も考えたくない。考える余裕すらない。

今は、とにかく眠っていたい。

何も考えず、とにかく深い眠りについていたい。

それなのに。それなのに、頭は起きろと命令を下す。起きたくないのに起きざるを得ない状況に陥る。起きたくない。でも。でも。

「目が覚めた？」

「ミア、ねえさま？　――――吐きそう」

うえぇ。目を開くと同時に、とんでもない勢いで吐き気に襲われる。私が言うと同時に、ねえさまたちは焦りだし、急いで私が吐き気を催したとき用に用意してあった器を手に取る。

「アリサ、これに吐いちゃいなさい」

「う……ん。――うえぇえぇえ」

うー、口の中に胃液の味が広がって気持ちが悪い。口の中にすっぱい味が広がり、大量の唾液を分泌させる。

その、大量分泌された唾液すらも気持ちが悪い。何もかも吐き出してしまえ。私はねえさまの持つ器をしっかりと掴み、その器に胃液も唾液も何もかもを吐き出してしまう。

それでも、口の中に胃液のすっぱい感じはいつまでも残り続ける。それが更なる吐き気を誘うのだが、私の胃に戻すものは既に残されていないらしい。

「お水用意したから、口の中をすすぐといいよ。気持ち悪いでしょ？」

「うん……。ありがとー」

私は礼を言いながらねえさまから水の入ったカップを受け取り、その水で口の中を漱ぐ。それだけで一気に口の中の酸味が薄れていく。

そして、口を漱いだ水を器に吐き出して、それからはまたベッドに仰向けに横たわる。

が、そのまま眠ることはミアねえさまが許してくれなかった。ミアねえさまは、眠ろうとする私を寝かせまいと足掻き、そして何かを取り出した。

「アリサ、これ飲んで。これ飲んだら、吐き気がおさまるからね」

「何、これぇ？」

そう言ってミアねえさまに見せられたものは、小瓶に入った真っ黒の液体。……余計吐き気が増しそうなんですけど。

「大丈夫、ちゃんと善くなるから。私の作った薬を信じなさい」

……ねえさまの作った薬か。なら、大丈夫そうな気もするけど、でも、その液体の薬が何だか毒々しい。

それを飲んだら逆に体調を崩しそうな、ぶっ倒れそうな感じがしなくもないです、はい。

「いいから飲んで。はい、口開けてー」

ねえさまは言うと同時に、瓶の蓋を開き、その口を私の口元へと運ぶ。飲まないという選択肢はないらしい。

毒々しい。でも、飲まなくちゃ。

飲みたくない。でも、飲まないという選択肢はない。

逆らってみる？　いや、でも後が怖い。

結果、大人しくそれを飲むことにした。だって、逆らうの怖いし、それに、もう何か考える余裕もないわけだし。

――――すっごい苦い。

この薬、本当に効くの？　ものすごく苦い。気が……遠く……なっ……てき……た……。

――――きゅう。

ミアねえさま開発の薬の苦さに、完全にノックアウトです。

薬のあまりの苦さに、私は完全に気を失った。というか、ねえさまの薬は、いつも熱を出したときに飲むあの薬よりも苦かった。あの薬も十分に苦いのだが、ねえさまの薬はその上を走っていた。

そして、完全に気を失った私は、夢を見ていた。

懐かしき、幼き日々。何も考えず、ただただ家族の愛を受け続け

ていた幼き日々。何かを考えようと思っていても、体の幼さ故か、何も考えることがかなわなかった幼き日々。

＊＊＊＊＊

「アリサ、今日は調子はどう？」
「リンねえさま。アリサ、きょうはげんきだよ」
「本当にーィ？」
「ほんとうだもん！　それよりもねえさま、きょうのおしごと、もうおわったの？」
「うん。今日は早く終わったからね」

これは幼き日々。私の年がまだ三歳にもなっていない、幼き日々。まだ、うまく舌が回らなかったあの頃。上手に話が出来なかったあの頃。

話の意味を理解することは容易だった。日本で十数年生きてきた私には簡単に理解できる内容で、にいさまやねえさまたちは話をしていてくれたから。

そんな私の幼き日々。転生したばかりで、まだこちらの世界をよく知らなかった。とにかく、かあさまやにいさまたちの愛に甘えた。それに、かあさまたちに甘えると、嬉しそうにしていたからそれでいいんだろうな、って考えてた。

純粋な親からの愛に飢えていた私。私の、有紗の両親に愛された記憶は、あの事故の日に失った。事故の記憶が強すぎて、その前の両親からの愛を忘れてしまった。

失った愛。新たな家族は、その隙間に溢れるほどの愛を注いでくれた。

欠けた隙間に愛を注ぎ込んだ大好きなとうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。

大好き。――――愛してる。

だけど、過干渉は遠慮して欲しいな。そう思いながら、私は純粋に夢を楽しみにかかった。

愛のその後

薬を飲ませ、再び眠りについたアリサを、兄たちは優しく見守る。薬が効いてきたのか、顔色が少し善くなったアリサ。

それでも、まだ調子が悪そうであることに変わりはなくて。それが、兄妹たちを悲しませた。アリサを守ると決意したのに、アリサの体調を崩させた原因の一部に自分たちがあるかもしれないとなると、それは完全に悲しみだった。

「ごめんね、アリサ」

ジャスリーンはアリサに謝罪の言葉を零しながらも、眠るアリサを抱きしめる。ベッドの空いている場所に座り、優しくアリサを見守り続けた。

それから少しして、眠っていたアリサが目を覚ます。そして、目を覚ましたアリサは寝ぼけ眼で辺りを見回し、兄たちの存在に気がつく。

「おはよう、アリサ。調子は善くなった?」

「んー、気持ち悪いのは善くなったかなぁ。――あの薬は毒々しい感じがしたけど」

まぁ、確かに漆黒の薬は毒々しさを感じさせるだろう。だが、事実アリサの吐き気はおさまったわけだから、エルミナの作った薬の効果は確実だということがわかる。

だが、それでも二度とあの薬は飲みたくないと考えるアリサであった。

「顔色もずいぶんと善くなったね。熱も下がってきたかな？」
「んー、どうだろう。でも、結構元気になったと思うよ」

アリサの回答に微笑む兄妹たち。そうして微笑む兄妹たちをみて、何だか嬉しい気持ちになるアリサ。今現在のアリサの部屋では愛が溢れかえっていた。

ほのぼのとした雰囲気の漂うアリサの部屋。優しい空気に包まれたアリサの部屋。

それは、アリサを幸せにさせるもの。少なくとも、アリサを不快にするものであることはない。

奏でられるは幸せの歌。奏でるはアリサと愛する兄妹たち。穏やかなる奏で。

「熱も下がってきたみたいだね。でも、早く元気になるためにも、また休もうね」
「んー、でも、今はさっきと比べるとかなり調子がいいんだけどなぁ」
「それでも、まだ熱は下がってないからね。だから休まなくちゃ」
「……分かった。おやすみなさい、にいさま、ねえさま」

その穏やかな奏での中で、姉たちはまだ熱が下がりきれていないアリサを寝かしつける。早く元気になるように。また、みんなで遊ぶためにも。

彼らの愛しいアリサ。可愛いからこそ、一緒に遊びたい、いろいろと教えてあげたいと思う兄妹たち。

生まれてすぐからずっと体の弱かった彼らの小さな姫。生まれたときからとにかく守るべきものだと、無意識のうちに理解していた。

だから、ずっと守ってきた。普段から慈しみ、可愛がり、愛を注

ぎ込んだ。アリサが望めばたくさん遊んでやり、体調を崩せば付きっ切りで看病をした。

アリサが家を出たときは、連れ戻すために全力でアリサを探し回った。そして、連れ戻した。

彼らの可愛いアリサ。前世で辛い目に遭い、生きたままで転生を果たしたと言う可哀想な子。

それを聞いて、より一層アリサを守りたいと言う気持ちは強くなった。絶対にアリサを守ると決意した。アリサのためならば、何でもしようと新たに決意した。

「アリサ、君は僕たちが絶対に守るからね」

兄たちは眠っているアリサを見つめながら優しく告げる。そして、同様に思い出していた。あの日のことを、――アリサが誘拐されたあの日を。

あれは、兄妹たちのみならず家族、メイド、執事たち全員にショックを与え、そして同様に家族全員の怒りを買った。

だから、あの日は全員で男爵の家に乗り込んだ。男性陣が男爵を脅し、その間に女性陣がアリサを抱きしめた。

母たちの姿を確認した瞬間、激しく泣き出したアリサ。大好きな母たちが抱きしめてもアリサは中々泣き止まず、それが父たちの怒りを増させた。

だから、兄たちはその場で切り捨てようとした。だが、父がこの場で切り捨てることだけは反対したため、温情を与え、国王に判断を委ねた。

まぁ、結局国王の判断を以っても彼らと判断は殆ど変わらなかったのでかまわないのだが。

穏やかな寝息と共に眠るアリサ。それが彼らを穏やかにさせる。

目の前にいることが嬉しくて、いなくならないで欲しいと、元気でいて欲しいと思う反面、自分たちから離れないよう束縛してしまいたいとも考えてしまう兄妹たち。

だが、理性が働き、何とかそれを止める。束縛したくても、そうすればアリサから元気がなくなることを兄妹たちはよく分かっている。だから、彼らは欲望に任せて行動しない。

――――全ては、アリサのために。

「みゅー」

「アリサ？」

そうして兄たちがいろいろと思い出していると、寝言か目を覚ましたのか、アリサがよく分からない言葉を呟く。

成長したとは言えども、兄妹たちから見ればまだまだ幼いアリサ。その寝顔もとても可愛くて、兄妹たちの頬を緩ませる。

「こっち……おいで、みゅー……」

一体何の夢を見ているのだろう。兄妹たちは考える。アリサは夢の中で何か動物でも飼っているのだろうか。そうして呟くアリサは微笑んでいる。

だが、突然アリサは目を開いた。その突然さに兄妹たちは驚いた。そして、目を覚ましたアリサは、兄妹たちを見つけ、つかみかかった。

「みゅーは!?　みゅーはどこに行ったの!?」

「アリサ、落ち着いて？」

「みゅーはどこ!?　みゅー！　みゅー！　出ておいで、みゅー！」

アリサは完全に夢と現実が混同してしまっている。夢に出てきた

みゅーという名の動物を探して兄たちにつかみかかっている。

「みゅー！　みゅーっ！」

「――――アリサ、ごめんね」

そして、未だに夢から抜け出せないアリサを、兄妹たちはオとした。

アリサの意識は、再び深い場所へと落ちていく。みゅーを探しながら、再び夢に落ちていった。

大切なもの

みゅー。私の可愛い猫。抱きしめると嬉しいのか、ゴロゴロと喉を鳴らす可愛い子。

愛しいと思う。今まで守られてばかりだった私が、唯一守ることが出来る存在。

私の可愛いみゅー。それなのに、突然姿を消した。どこに行ったの、みゅー？　私は、あなたを見つけてみせるよ。

「にいさま、みゅーは！？　みゅーはどこ？」

「みゅー？　それは、一体何なんだ？」

白々しい。にいさまたちがみゅーをどこかに隠したんじゃないの？　私の可愛いみゅー。大事な大事なみゅー。

「みゅーを返して！　みゅー！　みゅー！！」

「――――アリサ、ごめんね」

その謝罪は、何に対する謝罪？　みゅーを私から奪ったことに対する謝罪？　そんなの、聞きたくない。言うのならば、みゅーを返して。

そう、考えているのに。それなのに。私の目の前は真っ暗になる。闇に包まれる。

その後、ようやく光が射したかと思うと、そこにはみゅーがお座りをして待っていた。

「みゅー！」

「みゃあーん」

私の目の前にいるみゅー。みゅーは私が名前を呼ぶと、一鳴きしてすぐに私の足元へ移動してくる。そして、私の足に体を摺り寄せた。

可愛いみゅー。君の望みなら、私は叶えてあげたいと思う。

「みゅー、どこに行ってたの。探したんだから」

「みぁーん」

「そう鳴かれても分からないよ。……みゅーは何をして欲しいの？」

「にゃおー」

私が問うと、みゅーは「撫でて」とでも言いたいかのように、まん丸な瞳で私を見つめてくる。

みゅー、君は本当に可愛いね。私はそう考えながら、みゅーの体をよしよしと撫でてやる。それだけでも十分に嬉しいのか、みゅーはゴロゴロと喉を鳴らした。

いつまでもこうしていたい。いつまでもこうして撫でていても、飽きが来ない可愛い子。

「みゅー。みゅーはずっと一緒にいてくれるよね。可愛いみゅー。大事なみゅー。もう、いなくなっちゃ嫌だ」

「みあぁーん」

私が言うと、みゅーは分かったとでも言うかのようにそう答える。

――――でも、またいなくなった。

どこにいるの？　みゅー。そうしてずっと探していて、気づいてしまった。気づきたくなくても気づかざるを得なかった。

――――みゅーなんて名前の猫は、実在しないということを。

よくよく考えれば、みゅーをこの家でかまった記憶がない。みゅ

ーをかまったのは、何もない世界でのみだ。みゅーを可愛がるのに必死で周りのことに気が向かなかったが、よくよく考えればそうなのだ。

つまり、みゅーは、私の夢物語なのである。

それが悲しみを増幅させた。悲しさしか感じられなくなった。今まで以上に猫を恋するようになった。

それ故、だろうか。私の熱は急激的に上がった。何も考えられないくらい、口を開くことすら億劫なくらいに、熱が上がった。

「今、アレグラを呼んだからね、アリサ。それまでは我慢してちょうだい」

かあさまはそう告げる。だが、返事を返す余裕は無い。呼吸がし辛い。苦しい。私の熱は、今、どれだけ高いんだ。

みゅー、会いたいよ。会いたい。お願い、会いに来てよ、私の可愛いみゅー。

『みあーん』

みゅーの鳴き声。みゅー、どこにいるの？

「……みゅ……、どこ、いる……の？」

「――アリサ？」

「会い……たいよ……、みゅ……」

それが、私の記憶の最後。気づいたら真っ暗な世界にいて、周りには誰もいなかった。とうさまも、かあさまも、にいさまもねえさまもいない。私だけ。

さっきまで聞こえていたみゅーの鳴き声も聞こえなくなった。み

ゅー、どこに行っちゃったの？　会いに来てくたのに、もういなくなっちゃったの？

「ここに、いるだろう？　アリサ」

――誰？　その声、だぁれ？　知らない。知らないよ。

「知らないはずないよ。さっきまで、一緒にいただろ？」

さっきまで一緒にいた？　なら、みゅー？　みゅーなの？

「あぁ。こうして会い見えることが出来て嬉しいな」

「うん。私も、嬉しい。これからはずっと一緒にいてくれるんだよね？」

「アリサが、僕の世界の人間になってくれると決意してくれたらね」

みゅーの世界の人間？　それってどういうこと？　私はそう考えながらみゅーに尋ねる。すると、みゅーはけらけらを笑いながら答えを返した。

「君の大事な家族たちと離れる覚悟はある？　それなら、ずっと一緒にいてあげられる。僕が、君を守ってあげる」

とうさまやかあさま、にいさまとねえさまたちと離れる？　それは無理だと思う。でも、そうすれば、みゅーが一緒にいてくれる。二度と離れない。みゅーが、守ってくれる。

私の可愛いみゅー。今度は、あなたが私を守ってくれるの？

「アリサが決意してくれたら、絶対にアリサを守るって約束するよ。この約束は絶対に違えない」

なら。ならば。私は、みゅーとともに歩む。そう決意した。でも、すぐにその感情は揺さぶられることになる。

『アリサ！　アリサ！』
『目を覚ましてよ、アリサ！　たったの十歳で死んだらダメよ！』
『アリサ、戻ってきて』
『生きて。死なないで、アリサ』
『私たちの大事なアリサ。起きて。目を覚まして。――こんなことで死んだりしたら、一生アリサを許さないからね』
『起きて。起きなさい、アリサ』
『早く目を覚ますんだ、アリサ。君は、とうさまたちを悲しませるつもりか？　あの日の言葉を忘れたのかい？』

揺さぶるのは、大事な家族たちの言葉。家族全員が、私の生を祈っている。

……ごめんね、とうさま。でもね、思い出したよ。あの日の言葉。とうさまたちを悲しませたくない。確かにあの日、にいさまたちの剣術の稽古を見た後で体調を崩したときに、私はそう言ったはずなんだ。

「ごめん、みゅー。やっぱり、私はみゅーよりも家族を取る。とうさまたちを、悲しませたくないんだ。本当に、ごめんね」
「――いいさ。最初から、そう予想していたんだ。でも、これでさよならだね、アリサ。幸せに生きてね」
「うん。ありがとう、みゅー。――さよなら」

私にとって、みゅーは大切な存在だった。でも、家族のほうが大切であることを、この日理解した。
大好きなとうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。私はあなた

たちを悲しませたくない。

だから、今から戻るよ、あなたたちの元へ。待っていて。絶対に、戻るから。

大好きじゃないよ

家族への愛を表すときは、どういう言葉を使う？　そう尋ねられて、みんなはどう答える？

『大好き』って答えるんだろうね、きっと。でもね、私は大好きなんて言葉で済まされるくらいじゃないんだ。私はね、『愛してる』よ。家族を心から愛してる。

あぁ、でも愛してるだなんて陳腐な言葉では表せないかもしれない。それ以上に、私は家族を愛しているのだから。

＊＊＊＊＊

「申し訳ございませんが、私の力ではここまでが限界です。あとは、お嬢様次第になります」

アリサがありえないほどの高熱を発したこの日、アリサを見たアレグラは息を呑み、そして治療に当たった。だが、アレグラの治癒魔法を以ってしても、アリサを命の危機から脱させることは出来なかった。

アレグラは自身の持つ最大の治癒魔法を使って尚、危険な状態から抜け出せないアリサを悲しげに見つめながら、母たちにそう告げた。

生きて欲しい。そう願うのに、自分の力ではここまでが限界だった。

――――これで意識が戻らなければ、間違いなくアリサは死ぬ。

それが分かっていても、手の施しようが無いということが、アレグラを悲しませた。そしてそれ以上に、家族を悲しませた。

「アレグラ、本当に、手の施しようはないの！？」
「申し訳、ございません」

彼らの愛する末娘（アリサ）。幸せに生きて欲しい、そう思うのに、今現在生命の危機に陥っている。守ると決めた可愛い子。愛しむと決めた愛し子。

彼らに出来るアリサを守る方法は、声をかけ、アリサに生きるという意志を持たせることだけだ。だから、彼らはとにかく声をかけ続けた。

「アリサ！　アリサ！」
「目を覚ましてよ、アリサ！　たったの十歳で死んだらダメよ！」
「アリサ、戻ってきて」
「生きて。死なないで、アリサ」
「私たちの大事なアリサ。起きて。目を覚まして。――こんなことで死んだりしたら、一生アリサを許さないからね」

兄妹たちが、まず続けざまにアリサに声をかけ続けた。それは悲痛の叫び。心から願う、アリサの生還。それが、彼らの祈り。

「起きて。起きなさい、アリサ」
「早く目を覚ますんだ、アリサ。君は、とうさまたちを悲しませるつもりか？　あの日の言葉を忘れたのかい？」

次に声をかけるは、父と母。母は泣くのを堪えながらアリサに呼びかけ、そして父はあの日の言葉を思い出させる。

アリサが言ったあの言葉。自分たちを悲しませたくないと、父たちにアリサが告げたあの言葉。

このままアリサが意識を戻さなければ、アリサは父たちを悲しま

せることになる。それを、アリサに分からせようとした。アリサが目を覚ますように。

家族全員が希う（こいねが）。アリサの未来を。とにかく祈り続けた。

「と……さま、かあ……ま、に……さ……、ね……ま」

『アリサ！？』

「心配……させて、ごめ……なさい……」

「あぁ、よかった、アリサ」

目を覚ましたアリサは、息を切らしながらも、家族たちに心配をかけたことを謝罪する。家族たちはそんなアリサを優しく抱きしめた。

アリサが無事だったことを喜びながら、アリサの未来の平和を祈りながら。

未だ呼吸が辛そうなアリサ。彼らはそんなアリサのために急いで、緊急時に備えて別室に待機していたアレグラを呼び戻す。

アリサの意識が戻っているのならば、アリサのその辛そうな呼吸はアレグラが何とかできるだろう、そう考えたのである。

「アレ……グラ？　く……るし……。何とか……でき……る？」

「はい。すぐに楽しにしてさし上げます」

いきなり焦ったメイドに呼び出されたアレグラは、呼吸が辛そうなアリサに駆け寄り、すぐに治癒魔法をかけた。

それで、アリサの呼吸が僅かではあるが落ち着きを見せるようになる。それでもまだ、苦しそうであることに変わりは無いのだが。

「さぁ、お嬢様。今はお休みください。まだお辛いでしょう。それ

に、休まないと善くなりませんからね」
「ん……。おやすみ……なさい、みんな」
「あぁ、お休みアリサ」

そうしてアリサは再び眠りに落ちていく。深い深い眠り。弱りきった体を癒すための深い眠りだ。
家族たちはそんなアリサを優しく見守り続ける。きちんと目を覚ますことを祈りながら、それでも優しい瞳で見守り続けた。

――――が、数分後、アリサが目を覚ましたことへの安堵感からか、いつの間にか家族たちは眠りについていた。アリサの部屋で、何かに凭れかかりながら、いつの間にか完全なる眠りに落ちきっていた。
アリサの無事を願っていた家族。その無事を確認できたが故か、家族たちは安心していたのだ。

だから、彼らはアリサと共に眠る。そして、同じ夢を見る。たとえアリサが悪夢を見ていたら、自分たちがそれを追い払う。そんな気持ちの中で彼らは眠っていた。
ただ、眠っている自覚はきわめて薄かったのだが。

それでも彼らは気にしない。アリサを守るためならば何も気にしない。アリサのためである以上何も気にすることなど無い。
全ては、彼らの可愛いアリサのためなのだから。

「とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま……。みぃんな、愛してるぅ……、むにゃ」

そんな、アリサの寝言を聞く人間はこの場にはいない。アリサの寝言は静かに空気に溶け、風に舞い、飛び散っていった。

恐怖を見ました

いつぞやかの悪夢が再び。これは、生命の危機に陥った後、粗方体調が善くなったアリサの気持ちである。

アリサは今、怒った母を目の前に、ベッドに座らされていた。そして目の前にはにっこりと微笑んでいながらも、それであってアリサに恐怖感しか齎さない母がいた。

――――怖い。逃げたい。でも、逃げたら後が余計怖い。

これは、今のアリサの心境。今のアリサにある感情は、母を恐れる気持ちのみ。それ以外の感情を持ち合わせる余裕などどこにも無かった。

「さぁ、アリサ。今日はどうして、まだ完全に善くなってないのに無理をしていたのかな？」

「あ……の、その……えーと……」

回答を迷うアリサに、母はにっこりと微笑んだままで急かすことなく、アリサに回答を促す。それが、アリサに更なる恐怖を植え込んだ。

恐怖を埋め込まれつつあるアリサ。それ故か、中々言葉を発することが出来なくなっていた。

母は、アリサのその様子に気づいてか、一度立ち上がり、ベッドの脇に腰かけ、アリサを抱きしめた。少しでも恐怖を取り除いて、アリサの無理の理由を尋ねるためにも。

そうして抱きしめられたアリサは、こうしてくれるのならば、怒りは少しくらいおさまっているだろう。アリサはそう考えた。故に、口を開く。

「んとね、熱も下がったし、退屈だから魔術本取って、読もうと思

ったの」
「読みたいのならば、誰か来るのを待って取ってもらえばよかったんじゃない？」
「だって、いつ来るか分からないもん」

母がアリサの答えに返事を返すと、アリサはその返事に文句を告げる。確かに、いつ来るのか分からないまま待っておくのも辛かろう。アリサはだからこそ、自分で本を取りに向かったのだ。
――そして、そうやって取りに向かっているときに、ちょうどよく母が訪れ、その後の結果がこれなのである。

「あなたが体調を崩しているときは、基本的に誰かがついているでしょう。そのときにいなくても、すぐに誰か来るわよ」
「分かってても、退屈なものは退屈なの！」

アリサは少し強めに文句を放つ。が、その瞬間に母から冷たいオーラが流れ始めた。その冷たさに、アリサは震える。
震えているアリサを見た母は、まずは毛布をとり、アリサの肩にかける。そして、お説教を再開させることにしたのか、再びにっこりと微笑んだ。

「ねぇ、アリサ。あなたはちゃんと分かってる？」

あなた、今回は本気で死にかけたのよ？　どれだけ危ないところにいたと思ってるの。母のその言葉に、アリサは下を向いて俯く。
アリサとて、死にかけたという事実は重く抱えている。それが、どれだけ家族たちを心配させたのかも、それはそれはよく分かっているのだ。
だからアリサは何も言い返せない。言い返そうにも返す言葉が思いつかないのだ。

「だからね、完全に善くなるまではきちんとベッドで休んでいてちょうだい。約束してくれる？」
「んー、でも、寝てばっかりなの、飽きた」
「――――アリサ？」
母の恐怖、再び。母は静かに、アリサの名を呼ぶのだがそれがアリサに恐怖を与えた。
「ねーぇ、アリサ？　さっき、飽きたって聞こえた気がしたけど、かあさまの気のせいかしら？」
もちろん気のせいよね？　だって、体調を崩してる子がそんなこと考える余裕なんて、無いはずでしょう？
母の言葉はとげを持ち、そのとげはグサグサとアリサを突き刺していく。
「うぅ……、かあさま、容赦なさすぎ」
「あら、あなたの自業自得でしょう？　いいから、横になりなさい」
「でもぉー」
「でもも何もないの。完全に善くなったら誰も止めないからね」
そして諦めたのか、アリサは渋々ながらもベッドに横たわる。それからは目を瞑りはしたものの、眠りにつくことはなかった。そして母も、娘のその様子に気がついていながらも、無理に寝かしつけようともしなかった。
ただただ、目を瞑ったままのアリサと、そのアリサを優しく見守る母。こうして二人の時間は過ぎていくのだった。
だが、アリサの恐怖を受ける時間はこれで終わるわけではない。

それは、兄妹や父たちが帰って来たときに再開されるのである。

「へーぇ、アリサってば、まだ善くなってないのに無理したんだぁ」
「アリサ、アレグラを呼んで注射をしてもらう？　そうすれば早く元気になって、動き回れるよ？」
「いやいやいや、注射はイヤだって！」

アリサの無茶を聞いた父や兄、姉たちはしっかりと怒った。一度生死の境を彷徨ったアリサ。そんなアリサにこれ以上の無理をさせたくなかった。

再び、生死の境を彷徨うようなことは、絶対にしてほしく、させたくもなかった。

だから彼らは怒る。それがアリサのためである限り。アリサを守るために、とにかくどんな手を使ってでも、無理をさせないつもりだった。

「注射が嫌なら、もう無理はしないよね？」
「まぁ、するっていうんなら、止めるための手段は問わないんだけどね」
「――にいさま、ねえさま、とうさま、……怖い」
「アリサが悪いんだよ？　アリサが無理をしないと約束するのなら、そんなことを考えたりしなくてもいいんだから」

そうしてアリサは、母のみならず父や兄、姉たちとも、完全に善くなるまではベッドで横になっておく、という約束を結ばされることになるのであった。

得たもの

熱が下がり、かあさまたちの許可も下りた私は、ようやく自由を謳歌していた。とは言っても、自由に庭に出ることすら出来ないが、それでも家の中では自由でいられる。それが嬉しかった。

「とうさま、お仕事大変？」

だから、私はのんびりと家を歩き回り、この日は家で仕事をしていたとうさまの執務室へ足を向ける。

だって、一度はとうさまの仕事、見てみたかったんだ。――今までは一度も見せてもらえなかったし。

「どうしたんだ？　アリサ。かあさまからの許可はもらって来たかい？」

「んー、ベッドから降りていいって言う許可はちゃんともらったよ？」

「そうか、ならかまわないよ。ところで、どうしてここに来たんだ？」

「とうさまの仕事、一度くらい見てみたかったから」

私が言うと、とうさまはにっこりと微笑み、自分のひざの上に私を乗せてくれる。そして、とうさまの決裁をしていた書類を見せてくれた。

でも、意味が分からない。何とか読めはするのだが、言葉の意味がよく理解できない。

日本で一応、まぁ、引きこもりだけどしっかりと勉強をしてきたのに、意味が分からないと言うことが少し悲しい。

「これは私の仕事だ。アリサが分からなくて当然だよ」
「でも、少しくらい理解できると思ったのに……」
「今はまだ理解しなくてもいいさ。成人してから理解できるようになればいいよ」

とうさまはそうやって励ましてはくれるが、それでもやっぱり悲しい。――今度、しっかり勉強させてもらおうかなぁ。
私が頼めば、とうさまもかあさまもオッケーしてくれそうだよね。
……うん、ご飯のときにでも頼んでみようっと。

「ちなみにアリサ。このことが理解できるようになりたいからって、新しく勉強を始めたいと言っても、とうさまは許さないからね？」
「えーっ！？　どうしてぇ？　今の勉強だけじゃ、理解できないもん。理解できるようになりたいよ」
「ダーメ。これが分かるようになるのは、成人してからでいい。成人したら新しい勉強をしようね」

とうさま、けちんぼだ。大体、今の勉強だって私がすぐ体調崩すから遅れがちだって言うのに。それでも、勉強スピードは速くしてくれないんだよね。
大体さ、一応日本で中学三年生までは自宅学習だけど、ちゃんと勉強はしてきたんだよ？　だから、今の勉強の基礎くらいは出来てるんだから、勉強のスピード速くしてほしいよ。

「ダメだよ。勉強の速度を速めたら、アリサの頭がそのスピードについていけず、体調を崩すかもしれないじゃないか」
「だいじょぶだよ！　前世で基本は勉強してるから！」
「アリサ、とうさまたちは心配なんだ。君が無理をすることが。無理をして熱を出してしまうことが」

この間は、その熱が悪化しすぎて生死の境を彷徨うことになっただろう？　あんなの、とうさまはもう見たくないんだ。

とうさまは告げる。でも、それとこれとは別じゃないの？　私は、ちゃんと私の体調を知ってる。無理だと思ったら、すぐに先生に言うようにしてる。

――ねぇ、とうさま。それでも、ダメなの？

「あぁ。アリサには悪いとも思うが、諦めてくれ」

「――とうさまのいじわる」

とうさま、本当にいじわるだ。私は学びたいのに。勉強したいのに。魔術だけじゃなくて、いろいろなことを学びたい。

それなのに、どうしてとうさまは反対するの？　私は大丈夫だって言ってるのに。

うりゅー。涙で視界が滲む。そして、それ故にとうさまが焦り始めた。

「な、泣かないでくれ、アリサ。アリサが成人したら絶対に勉強をさせるから。ね？」

「成人してからじゃ、遅いもん。もっと早く勉強したいもん！」

「いいから、成人するまで待ちなさい。それがアリサのためだ」

うりゅー。目の前がさらに滲んでいく。目に溜まる涙が邪魔で、完全に前が見えない。

とうさまは、そんな私を見ながら焦りに焦っているようだ。そしてとうさまはその焦った状態のままで、私の目に溜まる涙を拭っていく。

勉強を許してくれないとうさまは嫌いだけど、こうして優しく涙を拭ってくれるとうさまは好きだ。

そうしてとうさまが涙を拭ってくれたおかげで、今の私の視界は

はっきりと、鮮明になっている。だから、とうさまをじっと見つめた。

とうさまが許してくれるように、とうさまがやめてくれと言ったあの目でずっと見つめ続ける。

「あ、アリサ？　その目は、何なのかな？」

「懇願」

「な、何のかな？」

「とうさまが勉強のスピードを速めてくれるように」

「……」

じーっ。私はとうさまをじっと見つめ続ける。とにかく、何があろうと目を外さないという心意気でとうさまを見つめ続けた。

ちなみに、結果としては。

「ほ、ほんの少しだけなら早くするよう先生に話しておこうか」

「うわぁい。とうさま、ありがとう」

私の勝ち。やったね。

そうしていると、突然とうさまの執務室の部屋がノックされた。それと同時に、にいさまたちの声が聞こえる。帰って来たのか。

「アリサ、行っておいで」

「うん！」

とうさまに言われた私は、とうさまのひざから降りて、扉へと駆け寄る。そして、扉を開くと同時に、にいさまたちに飛びついた。

ちなみにターゲットはルゥにいさま。さほど鍛えていないルゥにいさまは、私の飛びつきを受けた瞬間に後ろに倒れこむ。

普通に考えればにいさまに飛びついた私もにいさまと一緒に倒れ

るはずなのだが、私に限ってはそれがない。
何故か？　だって、騎士であるセイにいさまやカイにいさまが支えてくれるからだ。

「お帰りなさい、にいさま、ねえさま」
「ただいま、アリサ。今日は何だか嬉しそうだね。何かあった？」
「うん！　あのね……」

こうして私はにいさまたちと共に自分の部屋に戻りながら、私のこの喜びの内容をにいさまたちにも話す。

「へーぇ、よかったね、アリサ」
「うん！」
「よしよし、アリサは可愛いね」

私の喜びを一緒に喜んでくれる兄と姉。私の大事な兄姉。大好き。愛してる。
――だから、失くさせないで。

愛してるだけじゃ、足りないけど

愛してる。でも、それだけじゃ足りない。
アリサの家族への愛を語るには、そんな言葉じゃ足りない。
でも、愛してるの上は一体何なんだろう。とっても愛してる？
違うよね。

「ねぇ、にいさま、ねえさま。愛してるの上は、一体何だと思う？」
「愛してるの上？　突然どうしたんだい？」
「んー、だって、にいさまたちへの愛を語るのに、愛してるじゃ足りない気がするんだもん」

アリサ、君は本当に嬉しいことを言ってくれるね。兄や姉は口を揃えてそう告げ、アリサを抱きしめた。
兄たちは、アリサが苦しまないよう力の調整をしながらも、それでも思い切り抱きしめた。

「言葉にこだわる必要なんてないさ」
「そうそう。それよりも、行動で示して？」

兄たちが言うと、アリサは微笑んで自分を抱きしめる兄たちに、思い切り抱きついた。
アリサが抱きしめても兄たちは無論、びくともしない。セインやカインは鍛えているので当然ではあるが、非力なアリサの力では、基本的に何の問題もないのである。

「にいさま、ねえさま、だぁいすき」
「僕たちもアリサが大好きだよ。だから、アリサは僕たちが守ってあげようね」

アリサの愛の告白に、ルウィンが兄妹を代表して答える。そして、兄妹たちのアリサを抱きしめる力が、強まった。

ちなみに、強めたのはセインとカインの騎士コンビ。結果としては。

「セイ……にいさま、カイにい……さま。……く……るしい……」

「え？　あぁっ！　ゴメン、アリサ。つい嬉しくて……」

そう言ってセインとカインがアリサから離れると、すぐさまジャスリーンとエルミナがアリサを自分たちのほうへと抱き寄せる。

野蛮な男共のそばに、自分たちの可愛いアリサを置いておきたくなかったらしい。しっかりと、奪われないように抱きしめた。

「姉さん、エルミナ！　アリサを二人占めするのはずるい！」

「知らないわよ、そんなの。大体、あんたたちがアリサを苦しめたからでしょうが」

「姉さんの言うとおり。自業自得ね」

アリサを抱きしめているジャスリーンとエルミナに、セインとカインは揃って文句を放つ。ちなみに、ルウィンは傍観の立場を貫いている。

そして、ジャスリーンとエルミナは、文句を飛ばす二人をあっさりといなし、より一層アリサを抱きしめた。

「あー、アリサは本当に可愛いわー。アリサ、ねえさまたち、好き？」

「うん！　リンねえさまも、ミアねえさまもだぁいすき！」

「私もアリサ、大好きだよ」

問うたジャスリーンに、にっこりと微笑んで答えるアリサ。そんなアリサが可愛いのか、エルミナはアリサの頭に優しくキスを落とした。

その瞬間、ルウィン、セイン、カインの男性陣が過敏な反応を見せる。

「エルミナぁっ！　何やってんだ、お前はっ！」

「何って、キス。お風呂とかでよくしてるしね」

「うん。別に珍しくないよ」

マジギレしたのは、カイン。嫉妬に狂った男とは、かくも醜いものか。そして、そんな弟や兄を、ジャスリーンは冷めた瞳で眺めていたと言う。

ちなみに、アリサとエルミナのキスに関しては、本当に珍しいことではない。もともとはエルミナがふざけ気味にしていたのだが、それをアリサが喜んだので定着したのである。

ついでに言うならば、ジャスリーンもアリサが喜ぶので、よくキスをしてあげたりしている。同様に、アリサも姉たちにキスをしたりしていた。

――――だって、ねえさまたちが喜ぶから。

アリサに何故姉たちにキスをするのか兄たちが尋ねると、アリサはあっさりとそう答えを返す。

「にいさまたちも、してほしいの？」

尋ねるアリサに、兄たちは大きく首を縦に振る。それを見たアリサは、期待に答え、兄たちにキスをしようとしたが、それは姉たちが阻止した。

「アリサ。異性にキスをするときは、結婚してもいいと思える相手

としかしちゃダメよ」
「兄さんたちとアリサは、結婚できないでしょう？　だから、だぁめ」

あ、されるのも同じね。本当に好きじゃない相手にキスされそうになったら、全力で逃げなさいね。
姉の言葉に静かに頷いたアリサは、残念だったね、と言うような目を兄たちに向ける。兄たちは、本当に残念そうだ。

「さ、馬鹿な男たちは放っておいて、ご飯食べに行こうか」
「う……うん」
「さ、一緒に行こ」

そうして残念そうにしている兄たちをよそに、ジャスリーンとエルミナはアリサの手を取り、一緒に食堂へと向かう。兄たちは完全に置いてけぼりだ。
ジャスリーンとエルミナは、アリサにそれを気にかけさせることなく、ただただ、一直線に食堂へと向かうのであった。

「……お腹空いた」

きゅるるー。アリサは空腹を訴える子犬の鳴き声と共に、姉たちに口でも空腹を訴える。
それを聞いた姉たちは微笑み、そして完全に空腹なアリサのために、食堂へ向かう速度を速めるのであった。――アリサが疲れない範囲内ではあるが。

その後、家族揃っての食事となり、空腹を訴えていたアリサはあっという間に平らげることになるのであった。

「アリサ、今日は一緒にお風呂に入る？」

そして食後、二人の姉がアリサにそう声をかけると、アリサは目を輝かせ、兄たちは恨めしそうな目でジャスリーンとエルミナを見る。

その目はいろんな意味で毒々しく、いとも簡単に母のお叱りを受けることとなる。

「ルウィン、セイン、カイン。いい大人がそんな目をしないの」

『だって！』

「だって、何よ？」

「ジャスリーンとエルミナばっかり、アリサといろいろ仲良くしてるじゃないか」

「そうだよ。僕たちだって、もっとアリサとふれあいたいのに」

兄たちのその言葉に、母は溜め息をつく。そして、あっさりと解決策を出した。

「なら、今日は兄妹みんなで寝なさい。客間の一つに、あんたたち全員が寝れる位の大きさのベッドがあったでしょう？」

『それいい！』

母の案に、兄たちのみならず、姉たちも賛成する。姉たちとて、アリサと一緒に寝たいのだが、さすがにそれだけは出来なかったのだ。

そしてこの日、兄妹たちは初めて兄妹全員で、同じベッドで床に就くことになった。

『おやすみ、アリサ』

「おやすみなさい、にいさま、ねえさま」

穏やかな時間（前書き）

すみません！
9時に予約するのを
忘れてました！

遅ればせながら、
更新します

穏やかな時間

初めて兄妹みんなで同じベッドで休んだその翌朝、兄や姉は既に目を覚まし、未だ眠り続けるアリサの寝顔を眺めていた。
気持ちがよさそうに眠るアリサ。心地よさそうに眠り続ける可愛い妹。
彼らはしばらくアリサを見続け、そして、しばらくして朝食の時間が近づくと、容赦なくアリサを起こし始めた。

「アリサ！　朝だから起きて」
「もうすぐ朝ごはんの用意が出来る。起きてくれ」
「お腹空いたでしょう？　起きて朝ごはん、食べに行こう？」
「ん――――んぅ……」

兄たちに容赦なく起こされたアリサは、依然として目は開かないが、それでも何とか目を覚ましているのか、淡くうめき声を上げる。
それから数分後、ようやく目が覚めたのか、アリサは目を開いた。

「おはよう、アリサ」
「おひゃよ、にいしゃま、にぇひゃま」

大分目が覚めてきているとはいえど、まだ目が冷め切れていないらしいアリサ。舌がうまく回らず、変な言葉になりかけていた。

「まだ、ねみゅい……」

もっと、ねりゅう。ねかしぇてよぉ……。
目は覚めたが、未だに眠たいらしいアリサは、目をしょぼしょぼさせながら、兄たちにもっと寝かせてくれるよう頼む。

……というか、既に再び眠りの渦に巻き込まれている。

「あ、こら。寝ちゃダメだよ、アリサ」
「セインの言うとおりよ、起きなさい」
「らって、ねみゅいのぉ……」
「だからって、このまま寝てたらお母さんに怒られちゃうよ？」

それは、アリサを起こすための鍵言葉（キーワード）。『母』・『怒られる』。
その二つの言葉がアリサを起こす鍵となるのだ。
そして、そのキーワードを放たれたアリサは、あっという間に飛び起きた。やはり、母の怒りは怖いらしい。

「今度こそ、おはよう、アリサ」
「おはよー、にいさま、ねえさま。脅し台詞ひどい」

アリサは文句の言葉を放ちながらも、空腹ではあるらしく、姉たちと一度部屋へ戻り、着替え、洗顔等を済ませてから食堂へと向かう。
そうして食堂へつくと、そこでは既に兄と両親が揃っていた。

「おはよう、アリサ。よく眠れたかい？」
「おはよ、とうさま、かあさま。ぐっすり寝たよ」

そうかそうか。父はそう言って微笑み、そして娘たちに着席を促す。そして三人が席に着くと、父が食事開始の挨拶の言葉を発した。
それからはみんなで楽しく朝食の時間である。今日は全員が仕事が休みであるが故に、時間を気にする必要もなく、焦って食べる必要もない。
結果としては、食べながら家族の会話を楽しむということになるのである。

「ルウィン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ、アリサ。初めてみんなで一緒に寝て、どうだった？」
「んー、楽しかったんじゃない？」
「寝る前にあれだけ話をしたの、初めてだわ」
「アリサはあっという間に寝ちゃったけどね」
「アリサ、可愛かった」
「普段聞けない話がたくさん聞けたわ」
「眠かったんだから、仕方ないもん！」

兄妹、各自感想を述べる。ただし、セインは事実を述べているだけであり、アリサの場合はセインの言葉に対する反論ではあるが。
それでも楽しかったのか、兄妹たちからは笑顔が溢れている。それを見る母たちも楽しそうだ。

それからも兄妹たちは昨晩のことを楽しそうに話し続ける。感想や、ちょっとした文句、そして、喜びの声。
姉たちは、純粋にアリサと一緒に眠ることが出来たことを喜び、兄たちはアリサとふれあう機会が増えたことを喜んでいた。
そしてアリサは、前世では一人っ子であったがためか、兄妹一緒の布団（ベッド）で眠ることに、憧れを抱いていた。今回、その憧れが叶い、本当に喜んでいた。

「またいつか、一緒に眠りたいな」

アリサのその呟きは、しっかりと聞きつけていた兄たちによっていずれ、また叶えられることになる。

ただ、この兄妹たちの話を聞いていて、面白くないのは父である。父とて、アリサと一緒に寝たい。

貴様はこの間一緒に寝ただろうが。誰かにそう突っ込まれようが気にならないほどに、父もアリサと一緒に寝たいと考えていた。

そして父のその考えは、母には見事なまでに筒抜けだったらしく、母が助け舟を出す。

「アリサ、昨日はルウィンたちと一緒に寝たんだし、今日はかあさまたちと一緒に寝ましょうか」

「うん。とうさま、いい？」

「――――もちろんだとも。とうさまが嫌だと言うはずないだろう」

「本当？　じゃあ、今日はとうさまとかあさまと一緒だね」

嬉しそうに微笑むアリサ。その様子を、兄妹たちは穏やかな瞳で見つめていた。その瞳に、父が一番安堵したという。

父は、はっきり言えば、子供たちが恐ろしいと感じるときがあった。

長男、ルウィンは宰相補佐という、国のトップ付近に君臨する職務についている。

長女、ジャスリーンは、司書として城で働いている。

次男、セインは近衛大隊長として、その腕を国内に轟かせているし、三男、カインもセインと同様、騎士としては国に名を馳せている。

次女、エルミナも、国の薬剤所で天才薬剤師と言われている上に、多属性魔術保持者だ。

父からすると、この子供たちは出来すぎるくらいに出来た子供なのだ。故に、時折父は子供たちに恐怖を抱くことがあった。

その中で唯一、アリサはそのような恐怖感を一切与えない。幼さも手伝っているのかもしれないが、穏やかなよい子だった。

だから父はアリサを可愛がった。病弱であることも手伝い、父はほかの子供たち以上にアリサを慈しんだ。

だが、ほかの子供たちを無下にすることはありえなかった。彼にとっては、ほかの子供たちも可愛い子供。いくら恐ろしくても、可愛い子供たちなのだから。

「今度、床にシーツを敷いて、家族みんなで一緒に寝るのもいいかもしれないな」

父は、家族たちの前で、小さくそう呟いた。

今回の敵は？

うとうと。ぐらぐら。――――ぐぅ。

朝食を終え、リビングに移動して家族で話をしていたアリサだったが、興奮して疲れたのか、突如船をこぎ始めた。

そして、家族たちがその様子に気づくと同時に、アリサは眠りに落ちる。が、その反動で目を覚ましたのか、目を開いた。

「疲れたの？　アリサ。なら、お部屋で休みなさい」

「んー、だいじょぶ。眠いだけだから」

そんなアリサの頭を優しく撫でながら、母は告げる。が、アリサは大丈夫の一点張りだった。

今の、家族全員が揃ったこの空間が愛おしいらしい。

「こうやってみんな揃ってるから、私だけいないの、いや」

「みんなが揃う機会なんて滅多にないわけじゃない。いつだって揃おうと思えば揃うよ」

「でも、一人だけなの、ヤだもん」

「なら、かあさまがついていてあげるから。ね？」

「……はぁい」

そこまで言われると休まないわけにもいかないだろう。そう考えたアリサは、渋々ながらも、首を縦に振った。

そんなアリサを愛おしく思ったのか、家族たちは揃ってアリサの頭を撫でる。そこで、アリサの頭が少し熱いことに気がついた。

そして、代表して父が、改めてアリサの額に手を当てる。

「アリサ、調子は悪くないかい？　少し、熱が出てるようだが」

「熱？　でも、元気だよ？」
「微熱だから、そんなに辛くないのかな？」
「うん。だって、元気だもん」
「なら、しっかり休めば大丈夫だろう。さ、部屋に戻って休もうか」
「うん」

それからアリサは、父や母、兄姉たちと共に自室へ戻る。そして部屋に着くと、家族全員からベッドを示され、抵抗する意思を見せることなく、ベッドに横たわった。
熱があるときはぐっすりと休むが賢明であることを、アリサはよく分かっているのだから。
それに、今日は少し熱が出ただけなので、少し休めば善くなるであろうことが目に見えている。だからこそ、アリサは素直に休んだのだ。
だって、早く元気になって、勉強したいし。アリサはそれを目的に、元気になるためしっかりと休むことを選んだのであった。

「さ、しっかり休んで早く元気になりましょうね。……これ以上熱が上がったら、アレグラを呼ぶからね」
「ちゃんと寝るよぅ。おやすみなさい」
『おやすみ、アリサ』

そうしてアリサは愛する家族の温かい視線の中で眠りにつく。気持ちよさそうに、すやすやと眠りについていった。
気持ちよさそうに眠るアリサ。父たちはアリサの寝顔を見ながらも、そこで家族の会話を楽しんでいた。
目を覚ましたアリサが寂しがらないように。アリサに何かあったら、すぐに対応できるように。
幸い、眠っているアリサは魘されることもなかったのだが。

そしてお昼。昼食の支度の完了をメイドに聞かされた家族たちは、気持ちよさそうに眠るアリサを起こす。

「アリサ、もうお昼だよ。よく眠れたろう？　そろそろ起きようか」
「兄さんの言うとおりよ、アリサ。ご飯、食べよう」
「んぅ……、もぉ？」
「そうだよ、ほら、起きて」

起こされたアリサは、目をこすりながらも何とか目を開く。だが、まだまだ眠たそうだ。

「はい、降りてー。一緒に食堂に行こうね」
「ん……」

それから家族たちはまだ目が開ききれていないアリサの手を取り、一緒に食堂へと歩いていく。――アリサは若干引き摺られ気味ではあるのだが。

「こら。アリサ、しっかり歩きなさい」
「眠いー。動きたくないー。……にいさま、おんぶして？」
「いいよ、ほら」
「カイン、アリサを甘やかしすぎないの。このくらい歩かせなさい」

アリサに頼まれたカインは、快くその頼みを聞こうとする。だが、母がそれを止めた。

まぁ、それもそうだろう。アリサの部屋から食堂までは、そこまで距離は長くないのだから。

そうした結果、アリサは兄妹たちに少し引き摺られながらも自分の足で歩き、食堂へとたどり着いた。そして、昼食のいいにおいを

嗅いだアリサは、そのにおいのおかげか、ぱっちりと目を開く。
そして、その開いた目で食事を確認したアリサは、キラキラと目を輝かせた。

「お腹空いたよぅ」
「そうだね。僕たちもお腹が空いた。父さん、早く食べよう？」
「そうだな。さぁ、食べようか」

それからは食事の時間だ。空腹を訴えていたアリサは、喉に詰まらせない程度の速度ではぐはぐと食べ進めていく。
嬉しいのか、とってもイイ表情で食べ進めていくアリサ。そのアリサを微笑ましげに眺める家族たち。
幸せが漂う食堂。幸せな空気に酔っている家族たち。無論、アリサもその空気に酔っていた。

その結果が、コレである。

「とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま――――気持ち悪い」

告げるアリサに、家族たちは焦る。焦ってメイドにアリサが戻したときのための器を用意させ、その間アリサはずっと口元を手で押さえていた。
その後アリサの口元に器が用意された瞬間、限界が来たらしく、アリサは吐き戻した。先ほど食べた食事も全てが器に吐き戻されていく。

「うえぇ……。気持ち悪いぃ」
「もう、戻すものはない？　なら、部屋に戻って休みましょう」
「うん……」

それから部屋に戻ったアリサはベッドに横になり、すぐに眠る。
眠りについたアリサの額は、先ほどと比べると、ずいぶんと熱くなっていた。

興奮の対価

熱い。熱い。熱い。
頭が熱い。体が熱い。全身が熱い。
はぁ、はぁ、はぁ。息が苦しい。きつい。
頭が痛い。頭がボーっとして何も考えられない。
――――何も、考えたくない。

「アリサ」
「に……さま、ね……ま？」
「あぁ、ずいぶんと熱が上がったんだね。辛そうだ」
「さっきアレグラを呼んだから、もうすぐ来るよ。それまでは我慢してね」

エルミナのその言葉は正しかったらしく、エルミナが言ってさほど立たずに母がアレグラと共にやって来る。それと同時に、ルウィンたちは部屋から去った。
それを確認して、アレグラはアリサの診察を開始する。

「今回戻したのは熱のせい、でしょうか。魔力は乱れていませんし。お嬢様、今日はどんな症状がありますか？」
「頭痛い。ボーっとする。何も考えたくない。以上」
「そうですか。……では、失礼します」

そうして診察が終わると、アリサはあっという間に眠りについた。
そうして眠るアリサを家族は見守り、そしてその間に母はアレグラからいつものように薬を受け取っていた。
アリサの嫌いな苦い薬。何故、薬とは全てが苦いのか。アリサはそのことをしょっちゅう考える。もっと飲みやすい薬はないのか、

と。

苦い薬はとにかく、飲むのに躊躇う。だが、当然ながら飲まないと言う選択肢は無い。そもそも、選択肢に飲まないと言うものを与えられることが無い。

――気にしたらダメか。

アリサはそう考えながら、完全に夢の世界へと旅立って行った。

＊＊＊＊＊

「ルゥにいしゃま、あしょんで？」

コレは昔の夢。私が三歳くらいのときの話。私は、無邪気にルゥにいさまに遊んでと強請る姿を、上から眺めていた。

……違和感あるなぁ。自分はここにいるし、下にも自分がいる。

「何をして遊ぶ？　何をして遊びたいの？」

「かあしゃまにカードもらったから、しょれであしょぼ？」

「いいよ。それにしても、このカード懐かしいな」

幼い私は遊んでくれると言うにいさまに微笑みながらカードを取り出す。それにしても、この頃の私はさ行がうまく発音出来てなかったのか。自分ではちゃんと言っていると思っていたのに。

それから幼い私とルゥにいさまは、カードをテーブルに並べていく。それにしても、今の私が見ても何だか懐かしい。

そうて遊んでいると、リンねえさまも私の部屋へとやって来た。

それが嬉しいのか、幼い私は嬉しそうに微笑みながらリンねえさまに飛びついた。

「アリサ。何して遊んでるの？」
「カードだよぉ。ねえしゃまもいっしょにあしょぼ？」
「いいよー」

それからは三人でのカードゲームだ。ちなみに、このカードゲームは日本のトランプのようなものである。模様があって、数字がある。

遊び方はさまざまなのだが、あの頃の私も、今の私もよく知らない。だからどうしても一定の遊びしかすることができなくなるのだ。

でも、楽しいんだろうね、幼い私。終始笑顔のままだ。

あ、だけど、すっごい嫌な予感がする。あの頃って、これだけはしゃいだりしたら、基本的に熱を出していた覚えが……。

そして、その予感は当たる。幼い私は軽くではあるが、咳き込み始めた。

今も昔も、本当に変わらないのが若干悲しい。

＊＊＊＊＊

「アリサ、もうお昼よ、起きなさい」
「ん……」

昼食の用意が整ったことを、メイドたちが主に知らせに走る。それを聞いた母たちは、眠るアリサを起こし始めた。

しっかりと昼食を摂らせ、薬を飲ませるために。早くアリサを楽にさせるために。

「ちゃんとご飯を食べて、薬を飲みましょうね」

「うん……。分かってるぅ……」

そうは答えるのだが、まだまだ眠たいのか、目は開かない。目を瞑ったままで返事をし、そして再びベッドに横たわった。

――――言っていることとしていることが完全に矛盾している。

「アリサ、言ってることとしてることが合ってないよ。ほら、起きて」

「らって、眠い……もん……」

「ご飯を食べて薬を飲んだら眠っていいから、今は起きなさい」

「やらぁ。ねりゅのぉ……」

アリサ、幼児化現象発生。寝ぼけているためか、アリサは舌足らずに、まだ眠ることを家族に訴えた。その訴えが聞き入れられることは無いが。

「ダメ！　起きなさい、アリサ！　いい加減にしないとかあさま怒るわよ！」

「やーらぁ！　かあしゃま怒るのも、やらぁ」

必殺・幼児語攻撃（昔を思い出そうぜ）。寝惚けた瞳、そして舌足らずなしゃべり方。まさに、小さい子供。

アリサはそれで懐かしさを感じさせ、気を逸らそうと考えたのだろう。寝惚けている割に、よく考えたほうだ。

まぁ、そんなもの、一時しのぎにしかならないのだが。

「ほら、いい加減起きなさい。早く食べて、早く薬を飲んで寝ようね」

「ちぇーっ」

結果、諦めたらしいアリサは大人しく体を起こす。それからは何の抵抗の意思も見せることなく、大人しく昼食を摂った。――例によって、全部は食べられないのだが。

「はい、薬」
「苦いー。不味いー」

そしていつものごとく、薬を飲んだアリサはその苦さに顔を顰めさせる。母や姉はそんなアリサに甘い飲み物を差し出し、その苦味を消せるようにしてやる。父や兄たちは、そんな母や姉、そしてアリサを微笑ましげに眺めていた。

その後、アリサが再び寝付くと、今度は彼らの食事の時間らしい。母を残して、静かにアリサの部屋を去っていった。

懐かしの歴史（前書き）

軽く番外編。

懐かしの歴史

「アリサ、ルウィンだよ、ル・ウィ・ン」
「るーぅ？」
「ジャスリーンって言ってみて、アリサ」
「じゃりー？」
「僕はセインだよ。セイン」
「せーん」
「カインって言って」
「かーん？」
「アリサ、エルミナって言ってみて」
「えゆみあ？」

小さな小さなアリサ。兄妹たちに自分の名前を言ってみるように言われても、まだ上手に呼ぶことが出来ないほどに幼い頃。

アリサが喋りだすようになると、兄たちは頻繁に自分たちの名前を呼ばせようと、何度も何度も自分の名前をアリサに告げた。

ちなみに、この頃の呼び方が、アリサの今の兄や姉の呼び方の由来になっていたりもする。

この頃の呼び方から、ルウィンはルゥになり、ジャスリーンは短くリンとなった。セインとカインは名前自体が短いため、最初の二文字を使ってセイとカイになり、エルミナはアリサの間違えた呼び方の後ろ二文字をとってミアとなった。

ただ、兄妹たちがアリサにそう呼ぶように頼むのは、まだ先の話だ。

今はただ、アリサなりに頑張って兄妹たちの名を覚え、言葉にし、愛らしく呼びかけるに留まっていた。

「アリサ、かあさまは？」
「かぁーま？」
「アリサ！　とうさまも！　とうさまと言ってくれ！」
「とーぁま？」

あぁ、可愛き我が娘（妹）。家族は舌足らずなアリサを微笑ましげに眺める。可愛いアリサ。病弱ですぐに熱を出すけれど、それでもいつも楽しそうにしている可愛い子。

だから、君は絶対に守るよ。そして、これからの人生も楽しいと思わせてみせる。いつまでも、笑っていて、アリサ。

家族は、みんなでそう思いながら、はしゃぎ、母にじゃれ付くアリサを眺めていた。

アリサは異様にテンションが高く、母にじゃれ付き、母がかまってくれないと分かると、父にじゃれ付きに向かう。てちてちという効果音が似合うような行動で、父に向かっていた。

「とーぁま、ぼっ」

訳：とうさま、遊ぼう。

だが、話しかけられた父はその意味が分からず、頭の上にはてなマークを浮かべている。そんな父に、子供たちが助け舟を出した。

「父さん、アリサ、遊んでもらいたいんだよ」
「お父さんを誘ってるの。ねぇ、アリサ？」
「きゃーうぅ！」

自分の言った言葉の意味が分かってもらえて嬉しいのか、アリサは嬉しそうに奇声を上げ、そして父を見上げた。

父を見つめるアリサの目は、とってもかまって欲しそうで、同時に、期待に満ち溢れていた。

「分かった分かった。アリサは何をして欲しいんだ？」

父が言うと、アリサは目を輝かせた。かまってもらえることがとにかく嬉しいらしい。

「あーぅ！　きゃーぁぅ」

父がかまうと、アリサのテンションは最高潮に達する。テンションが最高潮に達したアリサは本当に楽しそうだ。

だが、アリサの場合はその高すぎるテンションが仇となる。

はしゃぎ疲れたのか、アリサは唐突に眠りに落ちる。父にかまってもらいながら、いきなり糸が切れたかのように眠りに落ちた。

「アリサ！？」

「……寝てる」

唐突に眠りに落ちたアリサを家族が心配するが、眠っているだけだと分かると一気にホッとする。

そして、父は自分のすぐそばで眠りに落ちた娘を抱きかかえ、アリサの眠るべき場所である、自分たちの寝室へと運ぶ。

すやすやと眠るアリサは、父に運ばれている間も全く目を覚ますことなく眠り続けていた。

その後、アリサをベッドに寝かせた父と、その様子を優しく見守っていた家族たちは、寝室に置いてあるソファーに腰掛け、メイドを呼び、飲み物を用意させる。

出来るだけアリサと一緒にいたい、その気持ちが家族をこの部屋にとどめ置く。

そのアリサは、今は夢を見ていた。懐かしき過去。夢の中のアリ

サは、アリサでありながらもアリサではなかった。

彼女の名は、神埼有紗だった。

幼い頃は、何度も何度も前世の夢を見ていた。そうして夢を見ていると、どちらが夢で、どちらが現実なのか分からなくなって、何度も親にすがり付いた。

そのときは、親にすがり付き、思い切り泣きじゃくり、親の熱を感じて、それでようやく現(うつつ)と夢の区別が付けられていた。

そしてこの日も、目を覚ましたアリサはすぐに両親を探した。

前世の夢を見ていたアリサ。この小さな脳では処理できないデータを抱え込んだアリサ。

そして限界を訴えた頭は、これ以上処理を増やさないためにも考えることを放棄した。

アリサは何も考えず、ただただ両親を欲し、そして、抱きつき、泣きじゃくった。

「どうしたの？　また怖い夢を見たの？」

「大丈夫、とうさまたちが付いているから、何も怖いことなんてない」

激しく泣き叫ぶアリサを、両親はそうして宥め、泣き止ませる。

だが、よほど過去の記憶が辛かったのか、アリサは中々泣き止まない。とにかく泣き叫び続ける。

それを見ていた家族は焦った。とにかく焦った。中々泣き止まないアリサ。泣くことは、時に命を縮めることになることをよく知っている家族たち。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」
「大丈夫。大丈夫だからね、アリサ」
「うえぇぇぇぇぇん」
「もう怖いことなんてないよ。だから、泣き止もうね」

そうして泣き続けたアリサは、家族たちの心配していたとおり、泣き止んだ頃には見事に発熱していた。
その後、完全に寝込んだアリサを、家族たちが心配して見守り続けることになったということは、最早言うまでもない。

想いを込めて

気持ちがよさそうに眠り続ける愛し子。母は、アリサを優しく見守り続けていた。時に、額に置いてあるタオルを冷たい水に浸し、冷やしてから再びアリサの額に置いてやったり、頭を優しく撫でてやったりと、母はアリサのためにいろいろとしてあげていた。

眠っていながらもそうしてもらうのは気持ちがいいのか、アリサは目を開くことなく、目を覚ますこともなくとも、淡く微笑む。

母がそうやってアリサを慈しんでいると、食事を終えた家族たちが次々とアリサの部屋に集まってくる。

「お母さん、ご飯食べておいでよ。アリサは私たちが見てるから」

「……そうね、そうさせてもらおうかな。ジャスリーン、アリサの額のタオル、もう少ししたら冷やしなおしてあげてちょうだいね」

「分かった」

その後、母は父や子供たちにアリサを任せ、食事を摂りに向かう。そして、アリサの部屋に集まったほかの家族たちは、母の指示通りに時折タオルを冷やしなおしてやりながら、優しくアリサを見守り続けていた。

その、視線が痛かったのだろうか。それとも、何か気配を察したのだろうか。突如、アリサがぼんやりと眼を開いた。

「ん……うぅ、にゃ？」

「おはよう、アリサ。調子はどう？」

「ふに？」

目を覚ましたとは言っても、まだかなり頭は寝ているらしい。アリサの反応はほとんどない。あるのは変な回答だけだ。

「まだ眠たいんだね。なら、またお休み？」
「ん……」

家族たちにそう告げられ、頭を撫でられたアリサは、気持ちよさそうに微笑み、そしてその瞳は静かに閉じられていった。
それからは、少し荒いながらも、アリサの寝息が部屋に響いた。
が、すぐに再び目を開く。

「どしたの？」
「……あちゅい」

尋ねられたアリサは、尋ねられたことを知ってか知らずか、とにかく一応答えになるものを返した。
そして、熱いという言葉を言った後は、自分の肩までかかっている毛布を、一気に剥がした。そしてそれで満足したのか、また眠りに落ちていった。

「あぁもう。ダメだよ、ちゃんと着ておかなくちゃ」

まぁ、その直後に家族たちが剥ぎ取られた毛布を、再びアリサの肩までしっかりかけて行くのだが。
その後、アリサは再び目を開ける。やはり、熱いらしい。

「あちゅい。もうふ、いらにゃい」
「ダメだよ、アリサ。きちんと着ておかないと熱が上がるだろう？
そしたら、辛いのはアリサだよ」
「らって、あちゅい、もん」

文句を放つアリサ。だが、とにかく眠たいのか、ついさっき開い

たばかりの瞳は再び閉じられ、何とか口だけが開かれ、言葉を発していた。

「熱くても、熱があるときはしっかり着ていなさい」

「んみゅ……」

それからは諦めたのか、熱くなくなったのかは分からないが、アリサは大人しく寝入り始めた。すうすうすやすやと、眠りに落ちていった。

父たちは、そうやって寝入ったアリサが少しでも熱くないように、額に置かれたタオルを冷たい水に浸し、冷やしてやる。

それからは何度も何度もタオルを冷やしなおしてやりながら、眠るアリサを見つめ続けていた。

食事を摂った母が戻ってきてからも、ずっとずっと、家族みんながアリサを見守り続けていた。

「よしよし。ゆっくり休んで、早く元気になりなさいね」

「元気になったらまたたくさん遊んであげようね」

優しく声をかけてやりながら、優しく頭を撫で、とにかくアリサを慈しんだ。

きゅるるるー。子犬の鳴き声のような音を立てながら、アリサが目を覚ますまでの間、ずっと。

「お腹空いたぁ」

「ククッ。相変わらず、可愛い鳴き声だな、アリサ」

「……？　私、泣いてないよ？」

そんなの、見れば分かるよね？　目を覚ましたアリサは、頭上に

疑問符を並べながら、父に尋ねる。そんなアリサに、父は淡く微笑みながら、アリサの頭を撫でてやる。そして、口を開いた。

「そっちの泣き声じゃないよ。アリサのお腹の鳴る音が、子犬の鳴き声に聞こえたんだ」

「……あぁ、なるほど」

アリサが言うと同時に、アリサのお腹は再び子犬の鳴き声を発する。くぅーん。アリサの部屋で、アリサの小さな小さな子犬の鳴き声が響き渡ることになった。

だが、今の時間は夕飯までまだ相当時間が残っている。さて、どうしようか。真剣に考える家族たちだった。

そうして考えている間もアリサのお腹の鳴る音は止むことをしらない。お腹の鳴る回数が増えるたびに、アリサの目は少しずつ潤んでいった。

「お腹、空いたよぅ」

「うーん、少し、軽食を用意してもらおうか」

「うん！」

そうして軽く食事を用意してもらったアリサは、嬉しそうに微笑みながら、用意された食事をじっと見続ける。とにかく、見続ける。何が何でも、見続ける。

「いいよ、アリサ。お食べ」

アリサは父や母の許可を待っていたらしい。許可が出ると同時に、アリサははぐはぐと食べ始めた。

「アリサ、そんなに急いで食べるんじゃない。ゆっくり食べなさい」

もちろん、急いで食べるアリサを諫める父や母の言葉は、アリサの耳には届いていない。結果、目配せをされた兄たちが、後ろから羽交い絞めにして、急いでかき込むようにして食べるアリサを止めた。

止められたアリサは、いきなり自分を止めた兄たちを思い切り睨み付ける。

「アリサ、そんなににらまないでくれよ」
「私のごはんーっ」
「アリサがかきこむようにして食べるからだ。ゆっくり食べるんなら離してやるさ」
「とうさまの言うとおりよ、アリサ。あんなに急いで食べて、詰まらせたりしたらどうするの」

言われたアリサは、そこでようやく自分が食べるのに相当焦っていたことに思い当たったらしい。兄たちを睨み付けるその目を、普段どおりに戻した。

「ゆっくり食べるから、離して？」
「本当にゆっくり食べるの？」
「うん。だから、ね？」

その言葉を信用したのか、母はアリサを羽交い絞めにしている兄たちに目で離すよう伝え、その指示を受けた兄は、アリサから手を離す。

そして自由になったアリサは、ちゃんと指示通りゆっくりと食事に手を付け始めた。焦れば、まだ兄たちに止められることが目に見えている以上、ゆっくり食べるが賢明だと悟ったのだろう。

「よしよし、しっかりお食べ」
「食べたらまたお休みなさいね」

その後、満足したアリサは母の指示に従って再びベッドに横たわり、眠りについた。

家族たちは再び眠ったアリサを優しく見守り続ける。ほかにすることは無いのかと突っ込みを入れたくなるくらいに、彼らはアリサにべったりだったそうな。

恐れていた事態

「公爵殿。私は今まで、あることのためにとにかく尽力してきました。そろそろ、よろしいのではありませんか？」
「な、何のことでしょう？」

ある日、王に呼び出された父は、王を目の前に焦っていた。王が言いたいことが何か、父はよく分かっている。だが、しらばっくれたかった。
彼らの中ではあの話は、絶対にあってはならないものなのだから。

「いやですねぇ、しらばっくれてくださるなんて。王子と、アリサ嬢の婚約についてです」

アリサ嬢に害を成すような馬鹿は、私と王妃が徹底的に痛めつけ、危険だと思った者は排除してきました。これで、アリサ嬢を守れます。ですから、ね？
にっこりと微笑みながら告げる王に、父は完全に焦っていた。ここをどう切り抜けるべきか。
何を言えば、王がアリサを諦めてくれるのか。

父が真剣に考えていると、王と父の元に、思いもかけない人物が現れる。それは、王にとっては味方であり、父にとっては絶対的な敵だった。

「お待たせして申し訳ありません、父上」

彼らの元に訪れたのは、この国の王子だった。ステファン・エイリアス・アレグリウス。御年十四歳の、この国の第一王子。

――そして、現状でのアリサの婚約者候補だ。
まぁ、父を始め、家族たちはアリサを王子の婚約者にするなどと、認めてはいないし、認めたくもないのだから。

「お久しぶりです、公爵殿。アリサ嬢は、お元気ですか？」
「お久しぶりでございます、殿下。アリサのことをお気にかけてくださり、ありがとうございます。アリサは今、熱を出して寝込んでいます。ので、会いたいとは仰らないでくださいね？」
「う……。す、少しくらいは……」
「我がままを言うものではありませんよ、ステフ」
「も、申し訳ございません、父上」
「分かればいいんですよ。公爵殿も、申し訳ございません」
「勿体無きお言葉でございます」

そうして黙らされた王子と、素直に謝罪をした息子を優しく見守る王（父）。その中で、本当にどう切り抜けようか、父は真剣に考えていたそうだ。

その後、王と王子の目が父に向いた。その瞬間に、父が表情を変える。

「で、如何ですか？　公爵殿」
「僕としては、認めていただきたいのですが」
「ですが、アリサは依然、体も弱いですし……」
「そんなもの気になりませんよ。寧ろ、そのほうがより一層守ってあげたいと思えます」

そう言われると、父はどう返すか本気で考えることになる。
はっきり言って、断りたい。だが、相手は仮にも王と王子。この国でもっともえらい者たちだ。

王たちは、完全に無理強いをするような人たちではない。だが、彼らは純粋にアリサを望んでいる。

臣下としては、王の指示には従いたい。だが、その指示は彼の愛する愛娘のこと。

「まだ、安心できませんか」

「――――申し訳ございません」

王たちが害意を持つ貴族たちを徹底的に排除したとしても、それでも父たちの心配は消えないのだ。アリサの誘拐は、一度では済まなかったのだから。始めの貴族（男爵）でほかの貴族にどれだけ恐怖を植え付けても、次は起こってしまった。

アリサが誘拐されたとき、彼らはどれだけ心配しただろう。取り戻したアリサが、どれだけ苦しんでいただろう。

誘拐されたアリサは、戻ってきてから必ず寝込んだ。一番初めは高熱を発して寝込み、二度目は薬を使われた結果、寝込むことになった。

「本当に、申し訳ございません」

二度と、あんなアリサを見たくはない。父の頭の中で、その言葉が反芻する。

可愛いアリサ。可愛そうなアリサ。傷つけたくないと思うのに、貴族社会故の事情で傷つけてしまう。

「謝らないでください、公爵殿。今すぐ答えようとしても無理でしょうから、いつか、近いうちに答えをお聞かせください」

王のその言葉に背中を押され、父は帰途についた。その後は、アリサを除いた家族全員での話し合いの時間となる。

「まさか、ここでその話が掘り返されるとはね」
「まったくだ。陛下も何を考えておられるんだか」

帰って来た父と兄妹たち、そして母は、アリサを寝かしつけた後で、リビングで話し合いを開始する。アリサを守るために、アリサに害を齎すことがないように。

「だが、確かに今の陛下と殿下ならば、アリサをしっかりと守ってくれるかもしれない。だが」
「やっぱり、不安だよね」
「そのとおりだ。いくら陛下と殿下といえども、アリサを任せるわけにはいかない。アリサを守るのは、私たち家族の役目なのだから」

それ故に、彼らは彼らの主一家の望みをどう断るか、真剣に思案することになる。
彼らの大好きなアリサ。愛する小さな姫。

「いっそ、アリサに選ばせる？　アリサが望むなら、私たちは止められないし、アリサが嫌がるなら、何があっても全力で阻止する」
「……それも、ありかなぁ」

そうして彼らは決意する。この決定権を彼らの可愛いアリサに与えることに。
――――すべての決断を、アリサに委ねることに。

そして翌日。無理やりにでも休みを取った家族たちは、初めてアリサに王子との婚約話が出ていたことを、本人に告げた。

「アリサはどうしたい？　嫌なら、とうさまたちが陛下にお話して、

断るが」
「まだ、分かんない。婚約って、何をすればいいの？」
「あぁ、深く考えなくていい。今はまだ、殿下と仲良くしてくれればかまわないんだ」
「でも、婚約ってことは、いずれ結婚するんだよね？　……私、子供産めないんじゃないの？」

アリサが子を生せば、それが負担になり、死に至る可能性が高い。アリサはそれを知っているから、そうして考えるのだ。
そしてそのことは、王も王子も知っている。知っていて尚、アリサを望んでいるのだ。
かと言って、王も王子も、アリサを死なせるつもりなどさらさらなかった。仮にアリサが妊娠したら、国中の優秀な医師を集め、アリサを生かすために何とかさせるつもりなのだから。

恐れていた事態（後書き）

王子ネタ再び。

久しぶりの王子登場でしたー♪

謝罪と共に

先日の熱がようやく大体下がり、調子が善くなってきていたアリサだったが、王子との婚約話を聞かされ、考えすぎたせいか、再び熱を出した。

熱のせいで辛そうなアリサ。父たちは、アリサに申し訳なく思いながら、アリサを見つめていた。

「はう……、きつい……」

「ごめんね、アリサ」

家族たちはそう告げながら、アリサの額に氷を挟んだ濡れたタオルを置く。氷を挟んでいる分、冷たくて気持ちがいいのだろう、アリサは微笑んだ。

「きもち、いい……」

「うん、そうだね。気持ちいいよね。だから、休もうね」

「うん……」

何かを考える余裕も無いアリサは、家族の言葉に従い、静かに目を瞑った。それからすぐ、アリサは健やかな寝息をたてることになる。

＊＊＊＊＊

「やっほー、おもしろいことになってきてるねーぇ」

「……お兄さん」

おもしろがってる状況じゃないよね、これ。夢の中に出てきたお

兄さんことジブリールを前にしたアリサは、溜め息をついてそう告げる。

そしてその瞬間、アリサの目の前にいたはずのジブリールが消えた。そして、さっきまでジブリールのいた場所には、お姉さんこと、ラファエルが佇んでいた。

……ジブリールをラファエルが蹴飛ばしたらしい。

「久しぶり、アリサちゃん」

「ラファエル、いきなりの蹴りは痛かったぞ」

「うるさいわね。アリサちゃんの一大事を笑い事にしてるようなやつは、蹴られて当然よ」

ラファエルの言葉を聞いたアリサは感動する。――味方がちゃんといたことに。そして、アリサは自分の味方であるラファエルの胸に、思い切り飛び込んだ。

ラファエルはそんなアリサを優しく抱きとめ、そして、ジブリールには冷たい視線を向けた。あんた、こんな小さい子に何言ってんの？　と訴えんばかりに。

そうして抱きとめてくれる手が優しくて。見守ってくれる瞳が優しくて。それ故か、アリサは思い切りラファエルに抱きついた。

「あぁ、大丈夫だよ、アリサちゃん。何も怖くないから」

だから、震えなくてもいいんだよ。優しくそう告げてくれるラファエル。そこで、アリサはようやく自分が震えていることに気がついた。

――アリサは、怖かった。

仮に自分が王子の婚約者になったら、家族の社会的地位はさらに上がるだろう。だが、子を生せないのならば、どうなる。王子の婚

約者としては、妻としては失格だろう。
そうすれば、私だけじゃなくて、とうさまたちだって責められるだろう。私は、それが怖いんだ。
私一人が嫌な思いをするのはかまわない。だけど、家族が巻き込まれるのは嫌だ。

家族に自分が王子の婚約者になるかどうか決めるように選択を迫られたとき、アリサはそう考えていたのだ。
アリサの考えは、第一に家族。第二に、この国の行く末。そして、次が自分だ。はっきり言うと、自分がアリサ内では一番下なのだ。

「大丈夫だよ。アリサちゃんには、私のネックレスもあるでしょう？　これが、アリサちゃんを守るから」
「私はどうでもいいの。とうさまたちが、大丈夫ならそれでいいの」
「大丈夫。アリサちゃんが大丈夫なら、お父さんたちも大丈夫だろうから」
「ほんとう？」
「うん。ジブリール、あんたもそう思うでしょ？」

アリサに尋ねられたラファエルは、にっこりと、優しく微笑みながらアリサに告げる。そして、威圧感のある笑みを浮かべながら、ジブリールにも同意を求めた。
もちろん、その威圧に勝てないジブリールは、アリサを不安にさせないように心がけながら、そのとおりだと返事を返す。

「大丈夫だよ、アリサ。だから、泣かないでね」
「……泣いてないよ」
「うん。そうだね、そのままでいてくれ、アリサ」
「だからね、そろそろ起きようか、アリサ」

でも、忘れないでね。私たちは、いつだって君を見守っているから。

ラファエルの言うとおりだ。僕たちは、君が好きだから、ずっと見守ってる。そのことを、覚えていて。

＊＊＊＊＊

「おはよ、アリサ」

「ん……、おはよーにいさま、ねえさまぁ」

むにゃ。まだまだ眠たいアリサは、軽く欠伸をしながらも、きちんと兄たちの挨拶に返事を返す。

そして、これ以上眠らないためか、アリサは起き上がった。もちろん、兄妹たちはそんなアリサを諫めるのだが。

「アリサ。熱があるんだから横になってなさい」

「無理をしたら熱が上がる。寝てるんだ」

「でも」

『問答無用』

兄たちはアリサには容赦はしない。アリサを早く元気にするため、早く楽にしてあげるためにならば、兄たちは容赦はしないのだ。

そして、その容赦のない兄たちに攻め込まれたアリサは、渋々ながらも、大人しくベッドに横たわった。

だが、その顔には不満が溢れている。兄たちの目で見て分かるほどに、顔に”不満です”と書かれていた。

「アリサ。不満なのは見て分かるんだけどね、でも、寝ないと善くならないでしょ？」

「でもさー、さっきまで寝てたのに、また寝るなんて、無理だよぉ」

「眠らなくてもいいよ。でも、起き上がらないで、横になっていて。ね？」

「ぶー」

そう文句を言いながらも、アリサは大人しく横になったままだ。だって、にいさまたちに心配かけたくないし。アリサはそう言って、大人しく横になったままで話をすることにした。

アリサの大好きな兄と姉。兄と姉が愛する末の妹。

彼らは愛するもの同士で話をする。彼らはそうして、愛を確かめ合っていた。

決断のとき

「そういえば、今日はアレグラ呼ばないの？」

目を覚まし、のんびりと兄たちと話をしていたアリサは、ふと疑問に思ったのか、兄たちにその疑問をぶつける。

それは、アリサが熱を出すと必ずしていたこと。アリサが熱を出せば、必ず医師が呼ばれ、アリサは診察を受けていたのだから。

それなのに、今回は眠っていた記憶しか無い。アレグラが来た記憶が一切ないのだ。

だからアリサは尋ねる。アレグラを呼ばなくてもいいのか、診察を受けなくてもいいのか、と。

「アレグラなら、来たよ。アリサを起こしても起きないから、そのまま診察してもらったの」

「知恵熱だろうって。しばらくは物事を深く考えず、とにかく休みなさいね」

「あと、薬もちゃんと飲むようにね」

「……はぁい」

今回はいつもの苦い薬を飲まなくてもいいかもしれない。そう思ったアリサの期待は、あっという間に破壊された。

いつの間に。アリサは真剣にそう考えた。アレグラが来たこと、その際に起こされたことを全く覚えていないなんて。

そして、やはり例にもよってあの苦い薬はあるのか。それが、アリサを一番落胆させたという。

「あぁ、アリサ。そんなに落ち込まないで。しっかり休んできちんと薬を飲めば、早く元気になれるからね」

「そうすれば、苦い薬もあんまり飲まなくていいよ」
「むー」

あの薬、苦いから嫌いなのに。兄たちに衝撃の事実を告げられたアリサはそうして呻る。小さい頃からしょっちゅう薬を飲まされていたが故か、薬が嫌いなアリサ。

というか、単純に苦いから薬が嫌いなのだが。だが、薬が嫌いなことに変わりは無い。

「早く寝なきゃ治らないのは分かるけど、やっぱり眠れないよぉ」
「あはは。大丈夫だよ、横になっているだけでも少しは下がるだろうから」
「それに」
「ひゃっ」
「額を冷やせば熱も下がる。こうやって冷やしたタオルを置いておくだけでも、アリサの熱は下がってると思うよ」

急に冷たいタオルを額に置かれたアリサは、その冷たさに奇声を上げる。まぁ、実際はタオルがものすごく冷たいのではなく、アリサの額が熱いためにとても冷たく感じただけなのだが。

それでも、そのひんやりとした感じが気持ちいいのだろう。アリサは淡く微笑み、目を瞑る。

だが、眠るわけではなかった。ただ、落ち着いていたいだけだったのだろう。

「気持ちいい？」
「うん、すっごい気持ちいいの……」
「なら、そのまま寝ちゃいなさい。早く元気になりたいでしょ？」

そう言われても、眠たくはないんだよねぇ。アリサは小さく呟く。

だが、兄たちを心配させないためか、目を開くことなく、そのまま眠りの体勢に入る。そのまま眠れればよし、眠れなくても、目を瞑ったままならば兄たちも心配しないだろう。アリサはそう考えたのである。

「おやすみ、アリサ」

そしてアリサは、眠れるかどうか謎のままで、とりあえず目を瞑り、眠たくなるまで考え事に励むことにした。

考え事の内容は、もちろん、この熱を出した原因、王子との婚約についてである。

婚約の話を受けるべきなのか、断るべきなのか。ただ、悩むのは、王子のみならず、王や王妃までもがアリサと王子の婚約を望んでいるということ。婚約を断るということは、王家に刃向かうということ。

『陛下はお優しい方だから、アリサが望まないのならば無理に婚約を進めようとはしないだろう。だから、自分の気持ちに正直に答えなさい』

父は真剣に悩むアリサに、優しくそう告げた。自分の気持ちを偽るな、偽って病むくらいならば、自分たちは望んで陛下に刃向かってでも君を守るから。

だが、アリサには自分の気持ちがよく分からなかった。王子のことをよく知らないが故か、それとも、家族のことを考えすぎたが故か、何が自分の気持ちなのか分からなくなっていたのだ。

そしてその結果、眠ることも出来ずに、知恵熱でヒートした頭をさらにフル稼働させた結果、アリサの熱はさらに上がり、苦しみを増したという。

そしてその様子は、そばで見守る兄たちも気づいていたらしい。
何故かって？　秘密はアリサの額に置かれたタオルにあった。
アリサの熱が上がるに従って、アリサの額のタオルから少しずつ湯気が出てきていたのだ。

「アリサ、何も考えないで。落ち着いて」
「辛いでしょう？　頭の中を空っぽにして、休もうね」
「でも、眠れない……のぉ」

そう告げるアリサの額に乗ったタオルに、エルミナが手を伸ばす。
すると、湯気を発していたタオルが見る見るうちに凍っていく。

「ひんやり……気持ちいい……。ねえさま、何、したのぉ？」
「水の魔術で水の温度を下げて、凍らせたんだよ。冷たくて気持ちいいでしょ？」
「うん……」

熱が上がった頭が大分冷やされてきたからか、アリサは気持ちよさそうに目を瞑り、そして、辛いのかそのまま眠りに落ちて行った。

深い、深い場所へ落ちていく。
何も考えず、ただただ落ちていく。
昏々と眠り続ける少女。
熱を下げるために、眠りに落ちる幼子。

兄たちは優しく、そんなアリサを見守った。ただ、エルミナだけが時折アリサの額のタオルの温度を確認し、凍っていたタオルが溶けていたら、再び凍らせてやっていた。

彼らの愛する妹が早く元気になれるように。

また、アリサの笑顔が見れるように。

王子の来襲

「お願いです、公爵殿、宰相補佐殿。アリサ嬢と話をさせてください」
「申し訳ございません、殿下。今、アリサは熱を出しているんです。寝込んでいるのです。会うのは、遠慮していただきたい」
「ですが、アリサ嬢の熱の原因は、僕との婚約の件にあるのでしょう？　ですから、直接お話をして、考えていただきたいと思っているのです」

そのためには、この日しか時間が無かったのです。ですから、お願いします。王子は、父や兄たちに懇願する。そこまでされては、断ろうにも断ることが出来なかった。

「アリサに確認してまいりますので、少々お待ちください」

そうしてルウィンはアリサが起きているか、そして王子が来ているが、会えそうかどうかを確認する。

「んー、多分、平気。でも、変なこと言っちゃうかもしれないから、にいさまたちも一緒にいてね？」
「もちろんだよ、アリサ。そもそも、君と王子殿下を二人っきりにすることは、絶対にありえないから安心しなさい」

ルウィンが言うと、アリサは安心したように微笑む。そしてルウィンは王子にアリサが会うということを知らせに行くのであった。

そしてしばらくして、王子が父やルウィンと共にアリサの部屋に現れる。それを見たアリサは、咄嗟に体を起こそうとしたのだが、

熱にそれを阻まれ、同時に王子からもそのままでいるように指示が出る。

それに安心したのか、アリサはベッドに横たわったままで王子の話を聞くことを決意した。

「お久しぶりですね、アリサ嬢。この度は、本当に申し訳ございません。僕のせいで辛い目にあわせてしまいましたね」

「いえ、殿下がお悪いわけではありませんから……」

「ありがとうございます。ところでアリサ嬢。僕のことは殿下ではなく、名前で呼んでいただけませんか？」

僕の名前は、ステファンです。ステフ、とお呼びいただけませんか？　王子が言うと、アリサは少し躊躇いながら、父やルウィンにどうすればいいのかと、目で尋ねていた。

「殿下の望まれるとおりにすればいい」

アリサの疑問には、ルウィンが答えた。直接声を出して答えるわけではなく、目で答えたので王子には何が何だか理解できていなかったが。

「えと、ステフ、様？」

「何でしょうか、アリサ嬢？」

アリサに名前を呼ばれた王子は喜び、にっこりと微笑みながらアリサに問いかける。その笑みに、若干アリサが引いたが、王子は手加減なしだ。

「どうしたんですか？　アリサ嬢。何かあるのでしたら、遠慮なく仰ってください」

「いえ。ところで、ステフ様はどうしてわざわざこちらへ？」
「アリサ嬢と話がしたかったんですよ。突然、僕と婚約するかしないか決めろと言われても、僕と言う人間を知らないので、何ともいえないでしょう？」
「えぇ、まぁ、はい」
だから、お話をしましょう。ですが、辛くなったらすぐに仰ってくださいね。僕は、アリサ嬢に無理をさせるために来ているわけではないのですから。
王子が言うと、ルウィンや父もそれに続けて声をかける。
「アリサ、絶対に無理をするんじゃないよ？」
「少しでも辛いと思ったら、遠慮なく言いなさい。殿下に言いづらいのならば、ルウィンか、私にでもかまわないのだから」
「うん。分かってるよ、無理しない」
無理して、熱上がったら私がきついだけだしね。ルウィンや父に言われたアリサは淡く微笑みながらそう告げ、そして、王子にも微笑みかけた。その笑みに、往時の鼻の下が伸びる。
……ルウィンや父が、王子をロリコンだと考えた瞬間だった。
「ところで、アリサ嬢。あなたは、僕との婚約に、何をネックに悩んでおられるのです？　僕が何とかできることならば、全力で何とかします」
アリサ嬢、あなたのネックは、子供のことですか？　それなら、僕が何とかします。父上や母上のお力添えを頂き、医師を集め、あなたも、子も助けて見せます。
王子のその言葉は力強くて、それがアリサの悩みを少しずつ払っていく。

それからも、アリサは王子といろいろと話をした。最初は緊張でほとんど話せなかったアリサも、時間が経つにつれて少しずつ話が出来るようになっていった。

その結果、話が楽しいのか、興奮したアリサは、突如疲労に襲われていた。もちろん、アリサのその様子はルウィンや父だけではなく、王子も気づいている。

「少々無理をさせすぎてしまいましたか。申し訳ありません、アリサ嬢。僕はこれで失礼しますので、ゆっくりお休みになられてください」

「す、すみません」

「いえいえ。調子が悪いときに押しかけた僕が悪いのですから、アリサ嬢は謝らないでください」

そう言って王子はアリサの部屋を去り、ルウィンと父はアリサの頭を一撫でして、王子を見送るために部屋を出る。

その後は、アリサは眠った。今日の王子との話を整理するためにも、とにかく深い眠りについた。

王子を見送ったルウィンや父がアリサの部屋に戻ってきた頃には、アリサは完全に夢の世界の住民と化していた。

ルウィンと父はそんなアリサを優しく見つめ、そして、額に冷たいタオルを置いてやるのであった。

数年ぶりに見たもの

この日、アリサは王宮にいた。初めて入る王宮。数年前に城を外から眺めたことはあっても、入ったことはなかった。

だが、今日のアリサは王宮の中にいた。アリサの横には、ジャスリーンとエルミナがいて、それで何とかアリサは逃げ出さずにいることが出来た。

もしアリサが今一人ならば、恐らくアリサは逃げ出していただろう。基本的にアリサは人見知りなのだから。

「大丈夫だよ、アリサ。怖くないし、私たちがついてるからね」

「何かあったら、私たちの後ろにいればまもってあげるから、安心して」

「うん。約束だよ」

そうしてアリサはジャスリーンやエルミナと共に、アリサを呼び出した人物の元へと向かっていった。

ちなみに、この日アリサを呼び出したのは、貴族の恐れる女性ランキング第一位君臨者である王妃と、最高権力者である王である。

さすがに、手紙で二人の名が刻まれていれば、行かせざるを得なかったのだ。

だから彼女たちはアリサに付き添い、一緒に王宮を訪れているのだった。

ただ、ここで問題が一つ。姉たちは全く気がついていなかったのだ。初めて王宮内部に入ったアリサがいろいろなものに興味を持ち、きょろきょろとしている間に、姉たちを見失っていると言うことに。

「あれ？　アリサ？」

「――――アリサ！？」

そして、姉たちはここで、ようやくアリサが見当たらないことに気がついたらしい。

「姉さん、アリサを探して！　私はルウィン兄さんや陛下たちにお伝えしてくるから！」

「分かった！　陛下にお詫び申し上げておいて！」

それから、ジャスリーンとエルミナは別れ、ジャスリーンがアリサを探しに走っていた。

一方その頃、アリサはというと。

「ふえぇぇ、ねえさま、どこぉ？」

姉を見失い、姉を探して動き回った結果、完全に迷子になり、目に涙を溜めていた。

「ここ、どこぉ？　ねえさまぁ」

「どうしたの？　迷子？」

最早、半泣き状態のアリサ。そんなアリサに、一人の青年が声をかけた。人見知りの激しいアリサは、反射的に身を引く。

「大丈夫。怖くないよ。僕は君にひどいことをするつもりはないから。で、君は迷子なの？」

「ねえさま、探してるの」

「お姉さん？　お姉さんの名前は何？　知ってるかもしれないから、教えてくれる？」

「上のねえさまが、ジャスリーン。下のねえさまがエルミナ」
「ん、あぁ。じゃあ君はドーリス公爵家の末の姫か。うん、分かった。一緒にお姉さん探そうか」

やはり有名なドーリス公爵家。姉の名前を出せば、すぐにアリサのことも分かってしまったらしい。
そうして、青年とアリサは、姉を探すために一緒に歩いていた。

ちなみに、この青年はジャスリーンの同僚の人間だったりもする。

「さて、ジャスリーンさんは今日は休みを取ってるはずだし……。今日は、お姉さん二人と一緒に城に来たんですよね？」
「うん」
「なら、今頃あっちもアリサお嬢様を探してますよ」

そうして二人はジャスリーンと会うために、城の中を歩き回っていた。途中で疲れて、アリサが歩きながらですらも眠ってしまいそうになるまで。
結果、青年は完全に疲れて眠ってしまったアリサを背負い、ジャスリーンを探し回る。

「いたーっ！　ジャスリーンさん、待ってくださいっ！」
「悪いけど、今あなたと話してる暇はないのっ！」
「アリサお嬢様なら、ここにいますからっ、待って、くださいっ！」

その後、アリサを背負ったままでジャスリーンを探していた青年は、ジャスリーンを見つけ、声をかけるのだが、ジャスリーンには拒否される。
結果、アリサがここにいることを知らせて、ジャスリーンを止めたのであった。

「一人で泣いていたところを見つけたんです。探している間に、疲れたのか寝ちゃって……」
「あぁ、よかった、無事で……。ありがとね、この子に付き添ってくれて」
「いえいえ。あんなところで一人泣いてる子を放っておくわけにも行かないですしね」

その後、青年からアリサを受け取ったジャスリーンだったが、予想以上の成長（重さ）に驚く。いつの間にこんなに重たく、大きくなったんだか、と。
結果、アリサを抱きかかえることは無理だと悟ったジャスリーンは、遠慮なくアリサを起こした。

「アリサ、起きなさい。ほら、起きなさいったら」
「ん……ねえ、さま……？　……っ！！」

起こされたアリサが最初に気づいたのは、大好きな姉の存在。そして、ようやく会えたことに思い当たった瞬間、アリサは思い切り姉に抱きついた。
思い切り抱きつき、離れていた間の恐怖を少しずつ、少しずつではあるが振り払っていった。

「よしよし。ねえさまがいるからもう大丈夫。ほら、アリサ。アリサが寝てたのを、このお兄さんが背負って連れてきてくれたんだから、お礼言いなさい」
「ジ、ジャスリーンさん、いいんですよ、お礼なんて」
「いいから。アリサにはそう言うことをきちんとできる子になって欲しいからね」
「ありがとうございました、お兄さん」

青年は遠慮するが、ジャスリーンはその遠慮を跳ね飛ばす。そして、そのままアリサは青年にお礼の言葉を放った。

……アリサの極上の笑みを加えた上で。

「えっと、その、僕はこれで失礼しますーっ！」

「やっぱり、この子の笑みは凶器ね」

青年の走り去ったこの場所で、ジャスリーンはアリサに聞こえないように小さく呟いていたそうな。

謁見の時間

「大変申し訳ございません。アリサが迷子になっておりまして」
「城は広いですからね。……兵に捜索させますか？」
「いえ。姉が探していますので」

アリサが迷子になったあと、本の配達、回収などで城に慣れているジャスリーンはアリサを探し回り、はっきり言って職場である薬剤所（ここは別の棟）あたり以外殆ど知らないエルミナは、急いで王の下へ報告に向かう。

向かった先は、王と王妃の私室。格式ばった謁見にしたくなかった王と王妃がそう指定してきたのだ。

……ちなみに、ルウィンは王の宰相補佐としてではなく、純粋にアリサの兄として同席していた。アリサを守るために。何かあったら、何があってもアリサをこの場から遠ざけるために。

だが、この場にアリサはいない。彼の妹によると、アリサはこの広い城内で迷子になっているらしい。

「早く、見つけてくれよ……、ジャスリーン」

彼は、周りの誰にも聞こえないよう、小さく呟いた。

それからしばらくして、もう迷子にならないようにと姉と手を繋いだアリサが、王と王妃、ルウィンとエルミナの待つ王夫婦の私室へやってきた。

「お待たせして申し訳ございませんでした」
「お城を見てたら、ねえさまたちとはぐれちゃいました。心配かけて申し訳ありません」

「いえいえ。何事も起こらず、無事にこうして姿を見せていただけただけで十分ですよ。ねぇ？」
「そのとおりよ。――初めまして、アリサ嬢。私が誰なのか、お分かりになるかしら？」
「……王妃、さま？」
「せーいかーい。会えて嬉しいわ。ずっと、アリサ嬢に会いたいと思っていたの」

アリサを目の前にした王妃は、興奮しているのか若干鼻息が荒い。そんな王妃を、そばに控えているルウィンが少々諫めていた。「アリサが怯えますから」と言って。

それを聞いた王妃は、咄嗟にアリサを見、そしてそのアリサは、事実王妃に怯えていたらしく、姉の背中に隠れていた。

「あぁ、ごめんなさいね、アリサ嬢。もう怖くないから、出てきてちょうだいな」
「は、はい……」

一応答えを返すアリサだが、その顔にはまだありありと「怖いよぅ」と書かれていた。

「アリサ、王妃様はお優しい方だから、ね？」
「エルミナの言うとおりだよ。ねぇ、アリサ。僕、アリサのそんな顔を見ておくの、辛いな。笑ってよ」
「――――うん」

恐れているアリサを上手に宥めたエルミナとルウィン。ただし、王妃が優しいのは怒らせない限り、であるが、王妃を怒らせるとどれだけ怖いのか、貴族たちはよく知っていた。

そしてもちろん、ルウィン、ジャスリーン、エルミナはその貴族

に入っている。今この場では、アリサだけが本気で怒った王妃の怖さを知らないのであった。

淡く微笑んだアリサは、王と王妃たちに誘われ、テーブルにつく。そしてその両隣には彼女の愛する姉たちが座り、真正面に王と王妃が座っていた。

「もうすぐしたら、王子も来ますから、それまで待っていてくださいね」
「ステフ様も、来られるんですか？」
「おや。あの子が名前で呼ぶことを許すとは。アリサ嬢、気に入られていますね」
「そうなんですか？」
「えぇ」

そんな王とアリサの会話に、そのことを知らなかったジャスリーンとエルミナが過敏に反応する。いつの間にそこまで進展していたのか、と。

アリサが望むのならば、王子とアリサの婚約を喜んで受け入れる。そう考えている家族ではあったが、やはり、婚約＝王子にアリサを奪われるという考えに至るらしく、家族たちからすると少々辛いようだった。

だから、彼女たちは過敏に反応する。アリサを守るため、アリサを手放さないため、そのために、アリサを抱きしめた。

「ど、したの？　ねえさまたち」
「気にしないで」
「そうだよ。ちょっと、抱きしめたくなっただけだから」

いきなり抱きしめられたアリサは、不思議そうに両隣の姉たちに

尋ねるのだが、姉たちはあっさりとした答えを返す。
本当の答えを教えるつもりなどないのだから。本当の答えは、醜きものだから、教えようとは思わないのだ。

――だって、アリサにはきれいなままでいて欲しいから。

彼らの理由はそこにある。彼らの可愛いアリサ。きれいなアリサ。清らかなる少女。だから家族は、アリサに世の中の汚い部分は、極力触れさせようとしなかった。
アリサにはきれいなままでいて欲しかったから、とにかく守り続けた。

「ねぇ、アリサ。アリサはいつまでもこのままのアリサでいてね」
「……？　ねえさま、本当にどうしたの？」

心配そうに姉に問いかけるアリサに、問われた姉は少し引きつっていながらも、微笑みながら大丈夫だと告げる。
だが、アリサは信じていなかった。姉たちがいつもアリサを見ているように、アリサだって姉たちを見ているのだ。だから、その笑顔が作られた笑顔か、心からの笑顔か区別がつけられるようになっているのだ。

「ねえさま、大丈夫じゃないよ。……帰ろ？　帰って、寝よう？ね？」
「本当に大丈夫だから。それに、今日アリサが王宮に来たのは、殿下に会うためでしょ？　目的を果たさずに帰るなんて出来ないよ」

そう告げる姉たちの笑顔は悲しげで、それがアリサをより一層心配させたのだが、確かに、今回の目的を未だ果たしていない。そう考えたアリサは王子が来るのを待ち、少し話すとすぐに帰らせても

らえるよう頼んだのであった。

そして翌日、この日付き添っていた姉二人が仲良く熱を出して寝込んだ。

見舞うは姉二人

この日、ドーリス公爵家では珍しい人間が熱を出して寝込んでいた。

寝込んだのは、ジャスリーンとエルミナである。いつもならば、寝込んだと言えばアリサなのだが、今回はアリサは元気いっぱいで、珍しいことにこの二人が熱を出したのである。

「二人別の部屋だと看病し辛いから、一緒の部屋で休みなさい」

ちなみに、これは二人が揃って熱を出していることを知った母の言葉である。結果、二人は大きいベッドの置いてある客間の一つに移動し、休むことになっていた。

「ねえさま、大丈夫？」

「あぁ、心配かけてごめんね、アリサ。うつるといけないから、アリサは自分の部屋にいて？」

「――――やだ！　ねえさま、私が熱出したら絶対に看病してくれるから、私もねえさまの看病する！」

「アリサ。それでアリサも熱を出したらどうするの。アリサが熱出したら、私たちくらいの熱じゃ済まないでしょ？」

珍しく熱を出した姉二人を見舞いに来たアリサは、早速姉たちの手厳しい歓迎を受けることになった。「部屋に戻りなさい」「絶対にいや」の押し問答だ。

オマケに、姉たちの言葉は実際正しいのだから、アリサはあまり言い返すことが出来ない。

だが、もちろん、諦めるつもりはなかった。

「こーやって、タオルで口元塞いどけば、だいじょぶじゃないの？」
「……あまり長時間、ここにいないでね」

結果、姉たちが負けることになったそうな。

そしてしばらくすると、母から連絡を受けたアレグラが公爵家を訪れ、母からの案内を受けていた。

「アリサお嬢様のお部屋ではないんですか？」
「今日は、アリサじゃないの。こっちよ」

呼び出されたアレグラは、熱を出したのは例にもよってアリサだと思っていたらしく、迷わずアリサの部屋へ向かおうとしていたのだが、それを母が苦笑しながら止め、そして姉二人の休む客間へと案内をしていた。

「おやおや。ジャスリーン様とエルミナ様、揃ってお風邪を召されたのですか。お珍しいですね」
「言わないで。私たちも、何で二人揃って風邪引いたのか分かんないし」

案内された客間に休んでいるジャスリーンとエルミナを見たアレグラは驚き、そう言葉を放つ。それには寝込んでいた二人が過敏に反応した。

そして、その二人の言葉を聞いたアレグラは、どう答えていいか考え、分からぬままにとりあえず、診察をすべきだと考えたのか、どちらから診察をすればいいのか尋ねていた。

「さて、どちらから診察をさせていただければよろしいのでしょうか？」

「エルミナからしてあげて。私よりも熱が高いから」
「いいよ。姉さんだって辛いでしょ？」
「いいから。アレグラ、お願い」
「分かりました。エルミナ様、失礼いたします」

麗しき姉妹愛。互いに相手のほうが辛いと判断し、相手を早く楽にしてやろうと、診察の順番を譲り合う。
結果、エルミナが負け、アレグラはエルミナから診察、そして治療にかかった。
その後、ジャスリーンの診察と治療も終えたアレグラは、二人で薬が違うのか、二人分、別の薬を出していった。

「両方とも苦いですが、ちゃんと飲んでくださいね？」
「分かってる。アリサじゃないんだから、ちゃんと飲みます」
「そのとおりよ」
「私、ちゃんと飲んでるもん！！」

うん、そうだね。アリサはいい子だもんね。ジャスリーンとエルミナは、熱で辛いだろうに、反論を返すアリサの頭をよしよしと撫でた。
その直後、その様子を黙ってみていた母からの警告が飛ぶ。

「ほら、ジャスリーン、エルミナ。早く元気になるためにも、そろそろ休みなさい」
「そう、ね。おやすみ、アリサ。アリサはきちんと自分の部屋に戻ってね」
「あぁ、確かにそうだね。お母さん、うつるといけないから、アリサを部屋に戻していて」

早く元気になるために、休もうとした二人は、まず、最愛の妹の

ことを気にかけた。うつらないように、遠ざけることを考えたのだ。
そしてそのことは、この家の誰もが勝てない人間である母に任せる。母ならば、間違いなくアリサをこの部屋から出してくれるだろう。そう考えたのだ。
事実、頼まれた母はアリサの手を取る。

「……分かったわ。アリサ、おいで。部屋に戻ろうね」
「やだ。ねえさまたちの看病する」
「だぁめ。ほら、戻るわよ」

そうして母は抵抗するアリサを無理やり二人が眠る客間から引きずり出す。そして、後はメイドに任せることにしたのか、アリサを部屋に戻すよう命じて、自分は客間へと戻った。
その母の後姿を見つめるアリサの瞳は、潤んでいる。

「お嬢様、奥様やジャスリーンお嬢様、エルミナお嬢様のお気持ちもよく分かります。皆様、お嬢様を心配なされておられるのです。だから、――戻りましょう？」
「……ふえ、分かった」

えぐえぐ。分かったと答えてはいるが、アリサは若干泣きかけだ。
自分もいつも看病をされている分、姉たちの看病をしたかった。だけど、確かに今のアリサでは、看病をすればその後、自分が倒れてもおかしくない。それが、悔しかった。

大好きなのに、返せない。返したいのに、返すことが出来ない。
それが、今後もアリサを苦しませることになる。

ちなみに、寝込んでいた二人は、翌日にはしっかりと熱も下がり、

一応保険をかけて仕事を休んでいるくらいに終ったと言う。
そしてその日から、苦しみに襲われていたアリサが熱を出して寝込んだと言う。

「うぅ、元気なのは数日だけか……」

熱があることに気がついたアリサは、小さくそう呟いたそうな。

思考の排除

考えすぎたのがいけないのか。
何か返したいのに返せない。それで、どうやったら何かを返すことが出来るか、考えて、考えすぎていたのがいけなかったのか。
熱が高すぎる。辛い。数日前に熱が下がったばかりなのに、それなのに、また今日も熱出して苦しまなくてはならないのか。

何も考えるな。
苦しみたくないのならば、考えることを捨てろ。
全てを投げ捨てろ。
苦しむのが嫌ならば。
何もかもを、捨て去ってしまえ。

うん、苦しみたくないさ。苦しみたくはないけど、考えることを捨てれば、それは最早人間ではなくなる気がするんだ。
だから、私は考えるよ。辛いけど、考えるんだ。生きる意味。生きていく理由。生きているが故に、やっていきたいこと。
出来る範囲で成し遂げるつもりだった。生きているんだから。

でも、やっぱりちょっと、辛いなぁ。

＊＊＊＊＊

「お嬢様、大丈夫ですか？」
「ん……、シャーナ？　ど、したの？」
「また、熱を出されておられるようですが、どこかお辛い場所はありますか？」
「だるい、だけぇ」

アリサが起きて来ないことに疑問を抱いたシャーナは、眠っているアリサの額に手を当て、熱がないかを確かめる。そして、熱があることを確認した。

今回は、何があったのだろう。シャーナはそう考えながら、辛い場所等ないか、アリサに確かめていた。

「だから、もすこし、寝ててもいい？」

「ええ。ゆっくり休んでいてください。私は奥様方にお知らせして来ますので」

そして、シャーナは母たちに知らせるためにアリサの部屋を出て、アリサはシャーナに言ったとおり、眠りにかかる。

ただただ、何も考えなくていいように、深い眠りに落ちていった。

「……リサ！　アリサ、起きて！　ご飯食べなきゃでしょ」

「……いらない。寝る」

「だぁめ。きちんと栄養は摂りなさい」

「やぁだ。寝るもん」

そうしてアリサが寝入ってしばらくすると、母がアリサに朝食を取らせるために叩き起こしにやって来た。が、アリサは起きない。

目を覚ますつもりのないアリサは、いつの間にか再び眠りに落ちていく。だがもちろん、母はアリサを寝かせるつもりはさらさらなかった。

「こら、起きなさいったら！　寝ちゃダメよ！」

「ご飯より、寝るほうが元気になるよぉ……」

「それもそうかもしれないけど、ご飯を食べたほうが、後々楽だからね」

そんな母の言葉を受けて、アリサは渋々ながらも目を開け、体を起こす。そして、くわふと、大きな欠伸を零した。

「おはよう、アリサ。はい、ご飯。しっかり食べるのよ」
「おはよ、かあさま」

アリサはそう言って母から朝食の入った器を受け取り、もそもそと食べ始める。もそもそと、ゆっくりと食べ始めた。
だが、それからさほど経たずにアリサは「ごちそーさま」と言って、母に器を返した。それからすぐに、またベッドに横たわる。
それからすぐ、アリサの部屋ではアリサの健やかな寝息が響き渡る。

「むにゃ……すぅすぅ」

心地よい眠り。何も考えずにとにかく眠るのは、こんなにも気持ちがよかっただろうか。そう思いながらアリサはとにかく眠り続けた。
アレグラが来て、診察のために母や様子を見に来た姉たちに起こされるまでは。

「アリサ。ちゃんと診てもらおうね」

そうして起こされたアリサは目をこすりこすりしながらも目を覚まし、素直にアレグラの診察を受ける。

「また、難しいことでもお考えになられていたのでしょう。何も考えず、ゆっくりお休みくださいませ」
「ん……」

そうして診察を受けたアリサは、再び夢の世界へと旅立つ。眠るのがいいということを一番よく知っているのは、アリサなのだから。

ちなみに、アリサが眠った後、熱が下がったばかりのジャスリーンとエルミナは、アレグラにしっかりと釘を刺されていたそうな。

「熱はお下がりになられたようですが、まだ無理はいけませんよ？　無理をしたらどうなるか、よぅくお分かりでしょう？」

「わ、分かってるって」

「無理なんてしない、してないって。ね、姉さん？」

アレグラはアリサの看病のためなら無理をしそうな姉二人に、静かに、威圧感を漂わせながら告げる。

事実、無理をするつもりだった二人は、あわてて否定の言葉を放った。

「本当ですか？　無理をしたら、また熱が出てしまいますので、お気をつけくださいね」

「は、はーい」

そしてアレグラは、最後にもう一度威圧感を感じさせ、そしてアリサの薬を処方し、帰って行った。

「ジャスリーン、エルミナ。アレグラも言ってたでしょう？　無理せず休んでなさい」

「大丈夫だって」

「そうそう」

「ダメよ。明日からまた仕事に行くんでしょう？　ここで無理をしたら明日も休むことになるわよ？」

そこまで言われると、休まないわけには行かない。アレグラにも勝てず、当然ながら母にも勝てない娘二人は、仕方がないので、大人しく自分の部屋に戻り休むのであった。

結果、母だけがアリサに付き添い、看病をしていたのであった。

母の可愛い末娘（アリサ）。年をとってから授かった、母の最後の幼子。

だから、慈しむ。だから、心から愛する。母の、愛する末娘。

「ん……んぅ……んぅっ！」

「どうしたの？　大丈夫よ、何も怖くないわ」

だから母は、娘が魘されているのに気づくと、すぐにあやしてやる。大丈夫だと、安心させてやる。

それだけで、アリサは安心したのか、呼吸が穏やかに戻っていく。

そうして眠り続けるアリサを、母は優しく見守り続けていた。

妹想う姉の気持ち

ジャスリーンの部屋。そこでは今、母やアレグラに無理を止められた二人が、仲良く、ベッドに腰掛けていた。
始まりは、母に言われて部屋に戻っていたジャスリーンが、エルミナを部屋に誘ったことから始まった。

「一人でいるのもなんだし、一緒に休まない？」
「それも、いいね」

そうして二人は現在、ジャスリーンの部屋に一緒にいるのである。

「アリサ、大丈夫かなぁ」
「私たちのがうつっちゃったのかもね。うーん、完全に近づけないほうがよかったかなぁ」

でも、アリサだから、絶対に来たと思うよ？　普段、私たちがアリサの看病をしてる分、返そうとでも考えるだろうから。
エルミナが言うと、ジャスリーンは静かに頷く。その後、二人は仲良くベッドに横たわり、いろいろと話をし続けていた。

「それにしても、今回は一体、何を考えていたんだろうね」
「何だろう。殿下との婚約に関しては、この間じっくり考えたろうし」
「後で、聞きにいってみようか」
「……お母さんに怒られなければいいけど」

二人はそう言いながらも、今は休むことにしたのか、二人は静かに目を瞑る。そしてしばらくすると、二人の寝息が部屋に響いてい

た。

ところ変わってアリサの部屋。ここでは、目を覚ましたアリサが、眠れないからと母と談笑していた。

――これ、またの名を尋問と言う。

「今回は、一体何を考えて熱を出しちゃったの？」

「……おやすみなさい」

「あら？　眠たくないんでしょう？　なら、かあさまと話をしましょ。眠たくなるわよ」

「……ぐぅ」

「寝たふりはダメよ？　ほら、かあさまに聞かせてちょうだい」

母、強し。目を瞑り、寝ようと頑張るアリサを母は寝かせまいとし、何とかして聞き出そうとする。

「もう眠たくなったもん。寝るもん」

「あらあら、嘘ばっかり。ほら、聞かせてちょうだい」

「嫌だ、寝るもぉん」

そうしてバトルを続けたが故か、アリサは本当に眠たくなったらしく、静かになったなと母が思うころには、完全に夢の世界へと旅立っていた。

「ふふっ。疲れさせちゃったみたいね、ゆっくり休みなさいな」

母の優しい言葉を子守唄に、アリサの意識は完全に夢の世界へと向かっていく。浅い眠りの中で、のんびりと夢を見続けていた。

＊＊＊＊＊

「あれ？　アリサ？」
「ねえさま！」

眠るアリサの夢の中。そこには、アリサのみならず彼女の愛する姉二人がいた。二人も部屋で眠り、同様に夢を見ているらしい。

「大丈夫？　アリサ。辛くはない？」
「夢なんだから、大丈夫だよ。現実は、ちょっときついけどね」
「ごめんね、アリサ。多分、私たちの熱がうつっちゃったんだね」

そうして会話を続けるアリサとジャスリーン、エルミナの三人。ジャスリーンとエルミナはアリサを抱きしめながら話をしていた。姉たちの愛する妹。現実では、母や医者の威圧により、離されている姉妹たち。

だから彼女らは、会うことの出来る夢の中で、存分に、溢れるほどに愛を確かめ合う。

「アリサ、早く元気になって、夢じゃなくて普通に会えるようになろうね」
「うん。ねえさまたちも、無理しちゃダメだよ？」
「そうだね。約束しよっか」

絶対に無理をしないように。

「ゆーびきーりげんまん、嘘ついたら針千本のーますっ」
「……？　アリサ、それ何？」
「私の前世で約束するときに使ってた言葉だよー。嘘ついたら針を千本飲まなくちゃいけないの」

まぁ、本当に飲みはしないけど、それだけしっかりと約束を守ろうってことだね。

「へーぇ。面白いね」
「何て言ってたっけ？　もう一度言ってよ」
「ゆーびきーりげんまん、嘘ついたら針千本のーますっ、だよ」

そうして三人は声を合わせて再び約束の言葉を口にし、そして、指を切った。

「さ、次は現実で会おうね」
「またね、アリサ」

＊＊＊＊＊

そうして目を覚ましたアリサは、まず母に幸せそうに微笑みかけた。……まだ眠そうではあったが。
そうして目を覚ました娘に、母も微笑みながら声をかける。

「いい夢でも見ていたの？　幸せそうね」
「うん……。夢で、ねえさまたちとお話してきた……」
「あら、そうだったの。……もうすぐお昼だから、寝ずに起きてなさいね。あの子たちも呼んでくるから、今日はみんなで一緒にご飯を食べましょうか」
「うん。待ってるね」

また眠ってしまわないように、起き上がったアリサは微笑みながら返事を返し、それからはのんびりとしていた。
のんびりと、何も考えずにただただ、ベッドに座り込んでいた。

そうしていると、母が姉二人を呼んで戻ってきた。部屋に入ってきた二人は、まずアリサに優しく微笑みかけた。

「アリサ、調子はどう？」

「無理はしてないよね？　無理してたら……」

「してないよぅ。約束、したでしょ？」

そうして話を進める三人に、母はいつの間にそう言う約束をしたのだろうと考えつつも、気にしないことにしたのか、ただ、淡く微笑むだけに済ませる。

その後、部屋に入った二人は、アリサの座るベッドの開いている場所に腰掛け、母は部屋のソファーに腰掛ける。

それからしばらくして、四人分の昼食がアリサの部屋に運ばれてくる。母、ジャスリーン、エルミナの分はソファー備え付けのテーブルへ、アリサの分はベッドの上へと運ばれる。

そうして食事を摂った後は、ジャスリーン、エルミナ、アリサが互いに励ましあい、薬を飲み、そして再び寝入るのであった。

――結局全員、薬は苦いから嫌いなのである。かと言って、飲まないという選択肢は、当然ながら無い。

想い合う家族

集まった家族。幸せに包まれた家庭。
仕事を終え、家に帰って来た父や兄たちは、揃ってアリサやジャスリーン、エルミナの様子を見に来ていた。
父たちは、まずはジャスリーンの部屋へ行き、そこに娘二人がいるのを確かめた。

「調子はどうだ？　ジャスリーン、エルミナ」
「お帰り、お父さん」
「私たちは平気。明日から仕事も行けそう」
「そうか。それはよかった。なら、お前たちも一緒にアリサの様子を見に行くか？」
「そだね」

そうして父と姉たちは、揃ってアリサの部屋へと向かう。その途中で、ちょうどアリサの部屋へ向かおうとしていた兄たちとも遭遇した。

「お、もう大丈夫なのか？　ジャスリーン、エルミナ」
「姉さんもエルミナも、治るの早いな」
「ほぼ一日で治るなんて。アリサなら、何日かかるかな」

父や兄、姉たちはそうして話をしながらも、一緒にアリサの部屋へと歩んでいく。そして、アリサの部屋に入った兄たちは、アリサを視界に入れると同時に、ベッドへと駆けて行った。

「ただいま、アリサ。調子はどう？」
「お帰りなさい、とうさま、にいさま。大分善くなってきたと思う

よー」

だから、お薬飲みたくないなぁ。静かに告げるアリサに、父たちは苦笑を零す。ここまで大きくなっても、そういうところはまだ小さな子供なのだ、と。

だが、それはジャスリーンやエルミナも考えていることである。極力、あの苦い薬を飲みたくない。

そして同様に、兄たちもそれは考えている。滅多に風邪を引くことの無い兄や姉たち。だが、薬に関して考えていることは、兄妹みな同じなのだ。

「アリサ、無理を言ってはいけない。まだ熱は高いじゃないか。きちんと薬は飲もうね？」

「……はぁい」

ちぇーっ。そう言いそうなくらいに、アリサは表情を歪ませた。だが、父に逆らうことは出来ない。逆らおうとも思わない。結果、アリサは熱が下がるまではまだまだ薬を飲むことになる。

「早く元気になりたいな。そしたら、にいさまたち、遊ぼうね？」

「もちろんだよ」

「約束もあるから、無理をせずにゆっくり休むんだよ？」

「そしたら、早く元気になれるからね」

「うん。早く元気になるよ。元気になって、いっぱい遊ぶんだ」

赤い顔で、淡く微笑みながら答えるアリサ。兄妹たちはそんなアリサを優しく抱きしめたり、頭を撫でたり、とにかくかまった。

可愛いアリサ。素直なアリサ。体が弱いせいで、普通の子供と同じ道を歩むことの出来ない可哀想な子。

だから、兄妹たちはアリサを可愛がる。とにかくアリサを慈しむ。

「ほら、起き上がっていないで、横になって」
「早く元気になりたいんでしょう？」
「なら、きちんと横になっていなくちゃね」
「ほら、横になって、きちんと毛布を着て」
「約束はちゃんと守らなくちゃね」

兄妹上から順に言われたアリサは、それもそうかという顔をし、そしてベッドに横たわった。するとすぐに、カインが肩まできれいに毛布を掛ける。

「ありがとー、カイにいさま」
「どういたしまして」

そうして横たわったアリサだったが、眠たくは無いらしく、目はパッチリと開かれたままで、父や母、兄姉たちを見つめていた。その、アリサの瞳に兄姉たちが敗北して、アリサの頭を撫でるまで。

「眠らないと下がらないよ？」
「だって、眠れないもん」
「無理にでも休みなさい」

結果、父からの静かなる威圧感漂う命令が下った。もちろん、アリサはその命令に逆らうことは出来ない。仕方なく、目を瞑り、呼吸を落ち着け、眠る体勢に入ったのであった。

「よしよし、アリサはいい子だね」

そして、父たちのそんな言葉を子守唄に、アリサは眠る。――――

予定だったが、やはり眠れなかった。
お昼にものすごくよく寝たもんなぁ。アリサはそう考えながらも、目を開くことはしない。目を瞑っていれば、いつか自然に眠れるかもしれない。そう考えているからだ。

それから数十分後。眠れないと思っていたのはなんだったのかと思うほどに、あっさりとアリサは夢の世界へと旅立って行った。

「やっと、眠ったみたいだね」
「よっぽど眠たくなかったのね。時間がかかって」

そして、そうやってようやく眠ったアリサを、優しく見守っていた家族が優しい瞳で見つめていた。
それのおかげでもあるのか、アリサはぐっすりと、心地よい眠りにつくことが出来ていたそうだ。まぁ、束の間ではあるが。

「お食事の支度が整いました」

メイドたちがそうして知らせにくると、家族たちはアリサを起こす。きちんと食事を摂らせるために、容赦なく叩き起こした。

「アリサ、夕飯の時間だ。起きて、きちんと食べようね？」
「ほら、起きなさい、アリサ」
「んぅーっ！　もうぉ？」

起こされたアリサは、寝惚け眼で答えを返し、そして、再び眠ろうと枕に顔を埋めた。

「寝ちゃダメだよ、起きるんだ」

「いやぁん、せっかく寝たもん、寝るぅ」

そう言いながらも、アリサの瞳は少しずつ開かれている。そうやって家族と言い合いをしているだけでも十分に目は覚めるらしい。

そして、目を覚ましたアリサはしっかりと食事を摂り、いやいやながらも苦い薬を飲み、再び眠りについたのであった。

――明日、熱下がってればいいなぁ。

そんなことを、のんびりと考えながら。

元気だと言ってるのに

私が熱を出して、数日のときが流れました。熱も下がった私は、ぼっちり元気いっぱいです。何でも出来ます。

なのに。それなのに。どうして、まだベッドの上なの？

「大事をとって、でしょう？　これで熱が上がらなければ、明日からは無理をしすぎない程度に遊んでもいいから」

「だいじょうぶだよ。元気いっぱいだもん」

「今は元気でも、お昼から熱が上がったりするかもしれないじゃないの」

母はそう言いながら、ベッドに座る娘の肩を掴み、横にさせる。アリサは足掻くのだが、子供の力で母に敵うはずもなく、あっさりと横たわらされた。

「しっかり休みなさいね」

「だいじょぶだから、ヤだ」

「嫌じゃないでしょう。休みなさい」

「やーだっ！」

わがままな子供が約一名。そして、それに本気で怒っている母もまた、一名。この空間で、恐ろしいオーラが漂い始めていた。

「アーリーサー！　いつからそんなにわがままばっかり言うようになったのかしら？　仕方ないわねーぇ。かあさまが躾けなおしてあげるわ」

こ・わ。にっこりと微笑みながら告げる母に、アリサは完全に怯

えている。そして、その母のオーラから逃げるためか、アリサはきれいに毛布に包まった。
母は、そんな娘に優しい瞳を向け、告げる。
「最初からそうして休んでいればいいの。ゆっくり休んでなさいね」
「はーい」
結果、アリサは恐ろしい母に襲われるのを避けるためか、静かに目を瞑った。その後は、あっという間にアリサの寝息が部屋に響き渡ることになる。
すやすやと寝入ったアリサ。母は、そんなアリサの頭を軽く撫でてから、部屋を後にするのであった。
そして部屋を去る母を、寝たふりをしていたアリサはしっかりと確認する。そして、母が部屋を出て、足音が遠ざかったのを確認したアリサは、にやりとし、そして起き上がった。
その後、アリサはベッドから降りて、本棚のほうへと向かう。アリサの部屋の本棚には、いつの間にか本がたくさん増えていた。
「何読もうかなーっ」
そう言いながら本を物色するアリサ。そのときのアリサは気づく余裕もなかったのだ。
――――いつの間にか戻ってきていた母が、本を物色するアリサの横に立っていたことに。
「何をしてるのかな？　アリサ？」
びっくぅ！　声をかけられたアリサは、反射的に体をびくつかせる。そして、ぎぎぎぎ、という音を立てそうな動きをしながら母の

ほうを見た。
――母はにこやかに笑っていた。
「い、いつ戻ってきたの？　かあさま……」
「アリサが本を探している間。――かあさま、休んでなさいって言ったと思うんだけど……？」
かあさまの記憶違いだったかしら？　そう告げる母の目は、笑っていない。
「ご、ごめんなさい……」
結果、アリサは再びベッドに戻らされ、寝かしつけられるのであった。母の威圧感に勝てないアリサは、大人しく夢の世界に旅立つことになったそうだ。
そうして完全に眠ってしまったアリサを、母は優しく見守っていた。しばらくは見守り続け、途中で持ってきた本を開く。
その後は声に出して、本を読み始めた。母の持ってきた本は魔術本らしい。――睡眠学習のようだ。
母はゆっくりと、静かに書かれていることに時折説明を入れながら本を読んでいく。目を覚ましたアリサが、少しでも覚えていられるように、丁寧に読み進めて行った。
それから目を覚ましたアリサに、母はにっこりと微笑みながら、さきほど読んだ本の内容を尋ねてみる。
――アリサは何の迷いもなく答えた。そのことに、アリサが一番驚く。
何で、そんなことを知ってるんだろう。そう考えているのか、アリサは目を白黒させていた。

「睡眠学習の検証結果は、上々ね」
「へ？　睡眠学習？　かあさま、何かしたの？」
「えぇ。アリサが眠っている間に、コレを読み聞かせていたの」

母はそう言って、先ほど読んでいた魔術本をアリサに見せる。それでようやく得心がいったのか、アリサは小さく頷いた。

「だから、魔術に関して知ってることが増えてたのかぁ」
「えぇ。自分で読むよりもいいでしょう？」
「うん。何か、いっぱい覚えてるもん」

にこやかに微笑む母と、嬉しそうに微笑むアリサ。それからアリサは、きちんとベッドに横たわったまま、母に本を読んでと強請る。強請られた母は勉強にいいと考えたのか、そのおねだりを受け入れ、本を開いた。

「分からないところがあったらすぐに言いなさいね？」
「うんっ！」

おねだりを受け入れられたことが嬉しいアリサは、にこにこと微笑みながら返事を返し、その後は本に視線を向ける。

本を見つめるその瞳は、早く母が本を読んでくれないかと期待をたっぷり含んだ瞳で、その瞳は明らかに母を急かしている。結果、母はアリサを待たせすぎる前に口を開くことにしたらしい。

「魔術の基本は、第一にその力を感じること。その力を感じることが出来なくては、使用することは出来ない」

その力を感じ、その感じた力に魔力を込めることで、初めて力は魔術となる。

静かに、ゆっくりと読み進めていく母は、読みながらもアリサの様子を時折伺っていた。顔色が悪くなっていないか、いつの間にか眠ったりしていないか。

そうして起きていること、調子も悪くなさそうなことを確認し、母は続きを読んでいくのだ。

その後、話を聞いておくのが楽しくて少し疲れたのか、アリサの瞳は少しずつ落ち始めていた。

「眠たくなったのね。……ゆっくりお休みなさい」

「うん……、おやすみなさい、かあさま」

そうして落ちかけていたアリサの瞳は、完全に落ちた。

家族として

仕事を終え、帰って来た兄妹たちは、まず第一に愛する妹の部屋へ向かう。朝、大体熱は下がったとは聞いていたが、それでも不安だったのだから。

そうしてアリサの部屋に入ると、そこでは母がアリサに本を読んであげていた。

「あら、お帰りなさい」

「ただいま、母さん、アリサ」

「お帰りなさい、にいさま、ねえさま」

開かれた扉をノックして、アリサの部屋に入る兄妹たち。その姿を確認したアリサは、母の持つ本から目を離し、ベッドから降りた。

――――そして、ルウィンをターゲットに飛びついた。

「ぐっ！」

幼かったアリサならともかく、今のアリサは実年齢マイナス一歳くらいの子供の平均身長を保っている。つまり、体重もそれ相応に増えてきているのだ。

その中で、何故かアリサは男兄弟の中で唯一兵ではない、鍛えていないルウィンをターゲットに飛びつく。

結果、飛びついてきたアリサを抑えきれないルウィンは、うめき声を上げ、後ろに倒れこむことになる。

ちなみに、アリサは一緒にいたセインが倒れる前に抱きかかえていた。

「ただいま、アリサ。怪我は無い？」

「支えてくれてありがとう、セイにいさま。にいさまのおかげで、怪我してないよ」

そう言って笑いあう兄妹たち。その中で、ルウィンだけは未だに起き上がれず、うめいていた。

そんな兄の様子に、アリサもさすがに心配になったらしい。自分を支えるセインの手から逃れ、ルウィンの元へ移動した。そして、口を開く。

「ルゥにいさま、へいき？　もう、やらないほうがいい？」

「あぁ、ごめんね、心配させて。大丈夫だから、気にしないで。僕としては、アリサが僕を選んでくれることが、まず嬉しい」

「んっと、つまり？」

「これからも、僕を選んで、飛び込んできてくれる？」

ルウィンが言うと、アリサの顔に、一面の花が咲き誇る。そしてすぐに、ルウィンに抱きついた。

「ルゥにいさま、だぁいすき」

そして、ルウィンに抱きつきそう告げるアリサを見るほかの兄妹たちの目が優しいはずは、絶対にない。

その目をアリサが見たら、間違いなく泣き出すだろうと思えるほどに、兄妹たちの目は怖い。結果としては、兄妹たちは母にまとめて叩かれた。

「ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ。落ち着きなさい」

『でも！』

「でも何も無いわ。それとも、あなたたちまとめて、久しぶりにお説教をしてあげようか？」

それが、兄妹たちの怒りを止める鍵言葉（キーワード）。【母のお説教＝危険】という方程式が頭の中に成り立っている兄妹たちは、すぐさま首を横に振った。

ちなみに、アリサにこの言葉は一切聞こえていない。母が怒っていることを悟ったルウィンがアリサの耳をふさいだのだ。

結果、母は何の躊躇も無く兄妹たちに威圧感を感じさせ、考えを改めさせることが出来たのである。

「ルウィン。アリサの耳、もう押さえてなくていいわ」

母が言うと、ルウィンはすぐにアリサの耳から手を離した。そしてそれを確認した母は、アリサに優しく声をかける。

「アリサ。ルウィンばかりじゃなくて、ジャスリーンたちにも甘えてあげなさいね。じゃないと、焼きもち妬いちゃうから」

「焼きもち？　妬いてるの？　ねえさまたち」

「あー……、うん」

……私、そこまで愛されてたんだなー。アリサは、口に出すことはせずに心の中でそう考える。

今まで、愛されているとは言えども、家族愛の愛であって、焼きもちを妬かれるほどに愛されているとは思っていなかったのだ。

ただ、こう……、ほかの兄妹たちに負けたくない。そう考えているのだと、アリサは思っていたのである。

「ねぇ、にいさま、ねえさま。私、にいさまもねえさまもだぁいすきだよ？　誰が一番かなんて決められないくらい、だぁいすき」

『アリサ！』

アリサがにっこりと微笑みながら言うと、その瞬間に兄妹たちは破顔する。そして、兄弟みんなでアリサを抱きしめた。

「私も、アリサのこと、大好きだよ」
「僕だって大好きだ」
「僕もそうだよ。僕たちみんな、アリサが大好きなんだ」
「そのとおり。大好きだよ、アリサ」

うわぁい。兄たちの言葉に、今度はアリサが破顔する。

「さて、かあさまは兄妹水入らずにするためにも、お父さまのところに行っておくわ」

六人で、たっぷりと愛を確かめ合いなさい。母はそう言って、アリサの部屋を去り、父のいるはずの執務室へと向かう。
そして、残された兄妹たちは、母の言うとおりに愛を確かめ合っていた。

「アリサ。アリサはここに座って？」

姉二人はそう言って、アリサの部屋のソファーで、アリサを自分たちの間に座らせる。その正面の席は、兄たちだ。

「よし。これで思い切り話が出来るね。……でも、辛いと思ったらすぐに言うんだよ？」
「うん」

そうして兄妹たちの視線を受けたアリサは、かまってもらえるのが嬉しいらしく、にこにこと微笑み続けている。
その後、ソファーの前のテーブルにお茶の用意がされると、完全

に兄妹たちの会話が開始されるのだ。

「アリサ、今日はお母さんに何の本を読んでもらってたの？」
「魔術の本ー。いっぱい勉強できたよ」
「おー、そっか。よかったね、アリサ」

そうして話の弾む兄妹たち。その会話は、メイドが夕飯の支度の完了を知らせに来るまで続けられた。

それまでの間、兄妹たちはずっと話しつづけていながらも、疲れを知らないのかと言いたくなるほどに元気だった。

だが、食事を終えたアリサには、その疲れが一気に襲い掛かったらしい。食事を終えるとすぐに、部屋に自力で戻る余裕も無く、眠りについてしまった。

そうやって眠ったアリサを、兄妹たちは優しく見守りながら、部屋へと運ぶ。セインがアリサを抱きかかえ、ほかの兄妹たちはそうして運ばれるアリサを見守っていた。

『おやすみ、アリサ』

そうしてアリサをベッドに寝かせた兄妹たちは、すやすやと眠る可愛い妹に声をかけ、そして自分の部屋へと戻るのであった。

光と影

白い光。自分をいつも包んでくれている優しい光。
その光をくれるのは、大好きな家族たち。

だが、光が射せば影も射す。
家族と言う優しい光があれば、敵という冷たい影もあるのだ。

家の――ドーリス公爵家の敵は何人いるんだろう。
私は、あと何回誘拐されれば、平穏に暮らせるようになるのだろう。

きつい。辛い。直接座らされた床から、直に冷気が伝わる。
この腕を拘束する縄が、腕を締め付けて、とても痛い。

今までは誘拐されても、基本的にベッドの上だったのに。
それなのに、今回は拘束された上に、床に直座りか。
冷たい。痛い。辛い。

これで、またとうさまたちを心配させる。それが、辛い。
また、私が負担になっている。それが、心を痛める。

……そして、これでこの犯人が捕まったら、また処刑されてしまうのだろう。
また、私のせいで命を落とす人が出来てしまう。

どうすればいい？　本当に、どうすれば誰も悲しまなくなる？
もう、分からないんだ。何もかも、分からない。

「頼むから、大人しくしてろよ？　ドーリス公爵家のお姫様」
「お前、ばっかじゃねぇの？　お嬢様の腕、縄で縛ってんだぜ？　それで暴れることなんざ、出来やしねぇよ」

今回私を攫ったのは、貴族でもなんでもない、ただのチンピラらしい。私を攫って、とうさまに身代金を請求しようとでも考えているのだろう。

どうして、こんな馬鹿をするのか。とうさまたちに喧嘩を売っても、勝てるはずが無いのに。最後は、死しか残されていないのに。

なのに。それなのに。どうしてそんな馬鹿をするんだ。

「おんや？　具合が悪くなったか？　だが、もちっと我慢してくれや」
「おめーさんの親父が金を払ってくれれば、すぐにベッドに連れていってやるからよ」

誘拐犯の下卑た笑い声が響く。もう、その声を聞くのすらも辛い。だが、眠るわけにはいかない。気を失うわけにはいかない。

誘拐犯が貴族ならば、とうさまの恐ろしさを知っている分、馬鹿な真似はしないだろうが、今回の誘拐犯は、ただのチンピラだ。とうさまの恐ろしさなんて、全く知らない、ただの命知らず。気を失ったら何をされるか、分かったものではない。

「おやぁ、睨みつけてくるたぁ、気が強いじゃねぇか、お嬢様」
「う……るさ……」
「……生意気な餓鬼だな。少しくらい、痛めつけても大丈夫だよな？」
「ちっとくれぇなら、問題はねえさ」

誘拐犯の一人が言うと同時に、私の頬に鈍い痛みが走り、同時に

吹き飛ばされる。

「生意気言うからこうなるんだ。こうやって叩かれるのは初めてだろ？　苦労を、不幸を知らないお嬢様はよォ」

「不幸を、知らない？」

あれは、不幸じゃないのか？　私の交通事故死は、不幸に入らないのか？

前世で、お父さん、お母さんを失った日のことは、よく覚えてる。その記憶が辛すぎて、その前の記憶を失うほどに。

そして、自分が事故に遭ったことも、嫌なくらいによく覚えてる。目の前に迫る車のライト。鼻を衝く血のにおい。そして、痛み。

何もかも、鮮明に脳裏に刻まれている。忘れたいのに、忘れられない記憶。――これは不幸ではないのか。

「……本当に、クソ生意気な目をしやがって」

そして、私は再び殴られる。殴られ、吹き飛ばされ、そして埃が舞い、それを吸い込んで激しく咳き込んだ。

「おい。これ以上やったら死んじまうぞ。死んじまったら、何の取引にもならねぇ」

「わ、わりぃ」

「分かったのならかまわない。俺は時間だから、行って来る」

行くって、どこへだ……。考えようにも、殴られた痛みがひどくて、まともに考えられやしない。

そう思っていると、私の見張りとして残っているらしい誘拐犯の一人が、口を開く。

「今から、お前の家族から身代金を受け取りに行くんだ。それで金がもらえれば、お前はもう用無しだからな。帰してやんよ」

そんな……。とうさま、ダメだよ、身代金なんて払ったら……。私のために、そんなお金は払わなくてもいい……。お願い……とうさま……。

こんな奴等に、屈したりしないで……。

「……まだ、その目をやめねぇのか。畜生が。やめろってんだよ！」

誘拐犯は、私のこの目が気に食わないらしい。こんな奴等に屈して欲しくない。そう願う瞳。それが、嫌なのか。

結果、私は何度も何度も殴られた。意識が朦朧となるくらいに殴られ続けた。

誘拐犯がとうさまたちから身代金を受け取るために出て行って、どのくらい経ったんだっけ。もう、分からない。考える余裕も無い。

――――既に、殴られた痛みすらも鈍くなってきていた。

朦朧とした意識。それでも、何とか意識を失わずにはいれているが、それがいつまで持つか分からない。

すぐに意識を失いそうでもあるし、まだ持たせることが出来そうでもある。

――――分からない。何もかも、分からないんだ。

これは、何？　殴られて腫れた腕を見て、ふと思う。

正真正銘、私の腕のはずなのに、そんな感じがしない。

自分の意思で動かしているはずなのに、動かしている感じがしない。

もう、疲れた。意識を手放してしまいたいけれど、ダメだ。
今意識を手放したら、どうなるか分かったものじゃない。
我慢しなくちゃ。でも、でもさ。
――――もう、疲れた。

「アリサ！」

あれ？　気のせいかな。にいさまたちの声がした気がした。
気のせいだよね。だって、今ここに、にいさまたちはいないんだから。

「アリサ！！」

また聞こえた。なら、気のせいじゃない？　本当ににいさまたちがいるの？
――――なら、もう大丈夫だよね。私はそう考えて、意識を手放した。

優しい光

再び誘拐されたアリサを助けるため、身代金の用意をした家族は、受け取りに現れた男を脅して案内をさせる。
そして、剣を持ったカインが飛び込んだとき、そこには傷だらけのアリサがいた。

「アリサ！」

カインが叫ぶと、アリサはのろのろと視線を向ける。その顔はカインたちの見慣れたアリサではなく、既に顔も殴られ、相当腫れていた。
それを見たカインの頭に、一気に血が上る。そして即座に、アリサを殴ったであろう、この場にいる唯一のほかの人間の首に、剣の刃先を突きつけた。

「貴様が、アリサを殴ったのか」

それから少し答えを待ち、返って来ないことを悟ると、すぐさま剣の向きを逆にし、刃では無い方で男を殴りつけた。
仮にも重たい剣で殴りつけられた誘拐犯の男は、思い切り吹き飛んだ。
そして吹き飛ばした男に再び剣をあて、その後、カインは兄を呼ぶ。

「ルウィンにぃ。アリサを、連れて帰って。すぐに治療を受けさせて」

言われて部屋に入ってきたルウィンは、殴られ、体のいたるとこ

ろが腫れているアリサを見て、息を呑んだ。
そして、弟が剣を突きつけている犯人に近寄り、一撃、思い切り拳を入れる。

「ふざけた真似を。……カイン、手加減はしなくていい。思い切りやれ」

そして、カインにそう告げたあと、ルウィンは成長し、重たくなったアリサを抱え上げ、外に出てすぐに馬車を呼んだ。
それからは馬車を急がせ、家に帰る。そうしてルウィンがアリサを抱えて家に戻ると、そこにはほかの家族たちと、アレグラが待っていた。

「ルウィン様、お嬢様のご様子は？」
「殴られたらしくて、かなり腫れてる。……傷が残らないように、頼む」

ルウィンはそう言って、アリサを部屋に寝かしつける。その後、アレグラがアリサの傷を確認したのだが、ひどいものだった。
体中、いたる場所が腫れており、それか、腫れていなくても青い、大きなあざが出来ていた。

「ひどい……」

何をしたら、こんな小さな子をここまで傷つけることができるのか。アレグラはそう思いながらも、アリサの傷一つ一つに、治癒魔法をかけていった。
だが、アリサの傷は思いのほか、多い。アレグラは、一つ一つの傷に集中しているためか、全ての傷に治癒魔法をかけるまえに、魔力が限界を訴えた。

「申し訳、ございません。魔力が、限界の、ようです……」
「いいえ。ありがとう、アレグラ。ぎりぎりまでしてくれて、本当に、ありがとう」

魔力が限界を訴えているが故に、息切れを起こしているアレグラは、それでも見守っていた母たちに、まずは謝罪の言葉を零す。
だが母は、そんなアレグラにお礼を言った。自分の限界まで、他人に魔術を使い続けてくれたアレグラ。母たちは、アレグラに感謝をしてもし足りなかった。

「ほかの傷は、明日に、もう一度治療をさせていただきます。ですから、今日は腫れている場所を、少しでも冷やしてさしあげて下さい」
「分かったわ。また明日もお願いね。……でも、あなたも無理はしすぎないで」

息を切らしたアレグラは、そう言ってこの日は帰っていく。母たちはそんなアレグラを見送った後は、すぐにアリサの元へと戻った。
彼女たちの可愛いアリサ。可哀想に、どれだけ殴られたのか、いろんな場所が腫れて、あざだらけになっている娘。

母たちは、そんなアリサを優しく抱きしめた。傷が痛まないよう、細心の注意を払いながら抱きしめる。
その感覚が伝わったのか、母に抱きしめられたアリサは、小さなうめき声とともに、目を開く。

「か……あさま？　ここ……」
「ここは家よ。もう、大丈夫だからね」
「お家？」

「そう。お家よ。もう、怖い人はいないからね」

だから、安心しなさい。告げる母に、アリサは小さく頷く。

「なら、また寝ようね、アリサ。怪我、痛いでしょ？」

「んー、分かんないの……。途中から、わかんなくなっちゃったから……」

そう告げるアリサを、母は再び抱きしめた。

可哀想な子。このきれいな子が、どれだけ不幸の渦に嵌まり込まなくてはならないのか。

俗世の汚い部分を知らせないために、兄妹たちのアリサの社交界への参加の反対の意見に、母は賛成した。

なのに。それなのに。アリサは、知りたくなくとも無理やりにでも知らされている。それが、あまりにも哀れで。

「ほら、おやすみなさい、アリサ。顔の傷はアレグラがしっかり治してくれてるけど、ほかのところは、まだだからね」

「顔の怪我……、治ってるの？」

「えぇ。アレグラがしっかり治してくれたわ。明日、起きておけるなら、きちんとお礼を言いなさいね」

「うん……」

そして、母によってベッドに戻されたアリサは、再び夢の世界へと旅立つ。アリサの大好きな母の見守る中で、安心できる空間で。

アリサの意識は、完全に夢の世界へと旅立って行った。

だって、ここは自分の家だから。

だって、そばにはアリサの愛する母がいるから。

だって、ここには殴る人はもういないから。

だって、みんなが守ってくれるから。

だから、アリサは安心して夢の世界へと旅立ったのであった。

咲き誇るは光（前書き）

ついに１００話の大台に乗りました！

ここまで読んでくださった皆様に

感謝いたします！！

誘拐されたアリサを救出した翌日、誘拐犯たちを徹底的に痛めつけた父たちが、ようやく家に帰って来た。
そして、帰って来た父たちは、一目散にアリサの部屋へと向かう。
顔の怪我はよくなってはいるが、ほかの傷が、まだ治っていないところがあるのが見て取れる。

「アリサ。とうさまが悪かった。もっと、しっかりと守ってやらなくてはならなかったのに……」
「ただいま、アリサ。あぁ、傷、大分よくなってるね。アレグラさんに感謝だ」

父たちがそうしてアリサを慈しんでいると、その声に反応してか、アリサが薄く瞳を開いた。

「あぁ、起こしちゃったね。ごめん、アリサ」
「あれ……？　にいさま、とうさま……？」
「ただいま、アリサ。怪我の調子はどうだい？　痛くないか？」
「ん……へいき……」

アリサの答えを聞いた父たちは同時に安堵の息をついた。そして、アリサの頭を優しく撫でる。傷に障らないよう、気をつけながら撫でた。
その後は、メイドたちが食事の支度を知らせたため、父たちは怪我のせいで腕がうまく使えないであろうアリサの食事の補佐に徹する。

「アリサ、はい、あーん」

「あーん」

普段のアリサならば、そうされても自分で食べるといって拒否するのだが、今のアリサは自分でも腕が使えないことを分かっているのか、素直に口を開いた。

そうして素直に食事を摂っていくのだが、事件はそれから少しして起きた。

「とうさま……、気持ち……悪い、よぉ」

「え！？」

そしてアリサは、吐き戻した。

「うえぇえぇえぇえぇえぇ」

昨日は魔力が持たなかったため、気づくことが無かったのだが、何度も殴られ続けていたアリサの内臓は、かなりの被害を受けていた。

昨日は食事を摂ることなく休んでいたため、そのことにも気づかず、あれから初めて食事を摂って、やっと気づいたのである。

「あぁ、ごめんね、アリサ」

「吐き出すものは、今のうちに全部吐き出しなさい」

父たちのその言葉の中で、アリサは何度も吐き戻し続けていた。

それが、アリサがどれだけ激しいダメージを受けていたのか、否が応にも知らしめる。

父たち家族の愛するアリサ。守っていくと決めたのに、守りきれず、激しい怪我を負わせてしまったことを、父たちは深く後悔して

いた。
守ると言ったのに。守ると決めたのに。父たちの頭の中は、完全にその考えに包まれていたのだ。
そして、父たちのその考えを、再びベッドに横になったアリサは悟っていた。

「とうさま、にいさま。私、だいじょぶだよ」

気持ちは悪いけど、痛くはないから。だから、そんな顔しないで。そんな、悲しそうな顔をしないで。
そう告げるアリサの表情も、とても悲しそうで。

「僕らが心配させちゃったね。ごめん、アリサ」

兄たちが言うと、アリサは首を横に振る。そして、悲しそうな表情の兄たちを潤んだ瞳で見つめた。

「どうしたの？　まだ吐きそう？」
「んーん、へいき」
「なら、また休もうか。怪我、本当は痛いでしょ？」

だから、へいきだって……。アリサは言うのだが、やはり父や兄たちは信用していなかった。
アリサは昔から、薬を飲まないため、そして家族に心配をかけないために強がることをよく知っていたのだから。

「ほら、おやすみ？　アリサ」
「うん……」

そうして、アリサは眠りに落ちる。目を覚ましたときに、そばに

誰かがいてくれることを祈りながら、深く、深く眠りに落ちていった。

依然として傷の激しいアリサ。アレグラの魔力が回復していないが故に、治療が受けられない子。

父たちは、そんな娘を優しく見守っていた。自分たちも空腹となり、誰かのお腹がグーッという音を立てるまで、ずっと見守っていた。

ちなみに、お腹がなったのはカインだった。そのカインは、お腹がなると同時に顔を真っ赤に染める。父はそんな息子を優しく見つめたあと、メイドを呼び、アリサを任せて食事に向かうのであった。

そしてその後、先に食事を済ませていた母や姉たちが、アリサの部屋を訪れ、アリサを見守る役目をメイドと交代していた。

「アリサを見ていてくれて、ありがとう。変わるから、あなたは自分の仕事をしていらっしゃいな」

「ありがとうございます。では、失礼いたします」

部屋を去るメイドと入れ替わりに部屋に入った母や姉は、すぐさまアリサの眠るベッドへと向かう。

アレグラの治療のおかげで、見える場所の傷は昨日と比べてよくなっているが、見えない場所の傷は、冷やしたおかげで、腫れが少々減ったくらいだった。

「傷、痛いよね、アリサ。でも、もうちょっと我慢してね」

もうちょっとで、アリサも飲めるような痛み止めの薬、出来るから。

王宮薬剤所の天才薬剤師と謳われるエルミナ曰く、薬にもいろい

ろと種類があるらしい。
一に、魔力の覚醒していない子供用。
二に、魔力は覚醒しているが、まだ成人していない子供用。
三に、魔力が覚醒していない、成人した大人用。
四に、魔力も覚醒し、成人した大人用、だ。

まぁ、三に関しては殆どいないため、薬を作ること自体稀なのだが。

ちなみに、この国の成人年齢は、十五歳。つまり、アリサは二番目にあたる。
そして現在、痛み止めの薬は成人用しか作られていないため、アリサには使用できない。結果、エルミナが天才と謳われる技術をつぎ込み、アリサでも飲める薬を作っているのである。

「もう少しで完成するから、もう少し我慢してねー」

そして、アリサの無事を確認したエルミナは、アリサのために薬を作りに、この屋敷に作ってもらった研究室で薬の開発に励むのであった。
全ては愛する妹のために。妹の苦しみを少しでも減らすために。

求めるもの

もう、何も分からなくて。痛いのか、痛くないのか。それすらも、何も分からない。

今分かるのは、私が家の、自分の部屋のベッドに寝かされているということ。そして、そばにはかあさまたちがいてくれる、ということだ。

ここは、安心できる空間。まわりにいるのは、信用できる人たち。何も分からなくても、かあさまたちは信用してもいいことだけは、心に刻まれてる。かあさまたちは、絶対に私を守ってくれる。傷つけたりはしない。

目の前に広がる黒い色。どこを見ても、何もかもが真っ黒で。

かあさまたちがいるはずなのに、全部真っ暗だった。

かあさまたちは、私にとっての光。

かあさまたちがいるから、私も光の下にいることが出来る。

でも、かあさまたちがいないと、私は光を知らないんだ。

「あ、目が覚めたんだね、アリサ」

「ん……ねえさま？　――――っ！」

私の視界に光が戻る。目の前には、リンねえさまと、ミアねえさまがいた。

その姿を確認して、私は体を起こすのだが、その瞬間、激痛が体を走った。ちくしょう。さっきまでは痛みすらも鈍感で、何も分からなかったのに何故、今はここまで痛いんだ……。

「あぁ、怪我が痛いんだね。ほら、コレ飲んで」
「これ……何？」

ずきずき。あー、もう全身的に痛みがひどくて、どこが痛いのかすらよく分からない。
そうしていると、ねえさまが何か液体を差し出す。……あれぇ？
この黒い液体って、いつぞやかのあの嫌な記憶が……。
えと、これは飲まなきゃいけないフラグ？　それはちょっと遠慮したいなぁ。
でも、それは逃れられないらしい。ねえさまはにっこりと微笑みながら、その液体の入った瓶の蓋を外していた。

「アリサ。コレを飲んだら痛くなくなるからね」
「黒い……、怖い……、それ飲むなら、痛くてもいい……」
「いいから飲みなさい」
「んんーっ！　んーっ！」

飲めといわれたものを拒否すると、ねえさまは再びにっこりと微笑み、私の鼻をつまむ。……苦しい。
でも、口を開けば、間違いなくその隙間から薬が入ってくる……。
それだけは、絶対に拒否だ。

「あ、こら。強情張らずに口を開けなさい」
「んんんーっ！」

絶対に嫌だ。誰が口を開くものか。
そしてその対価は後ほど払わされることになる。目の前が少しずつ暗くなってくる。
……限界。

「アリサ！」
「この強情っ張り！」

ふんだ、どうせ強情だもん。でも、それでも黒い薬は危険を感じるから、絶対にいやだ。

そしてその後、鼻をつまむ手をねえさまが離した瞬間に、私は思い切り息を吸い込む。その瞬間に、思い切り息を吸い込んだことで肺が驚いたのか、胸が激しく痛んだ。

「アリサ！　強がらず、飲みなさい！」

嫌だ。絶対に拒否。そんな毒々しい薬を飲むくらいなら、痛いままでいい。

だが、ねえさまたちは今度こそは許してくれなかった。無理やり私の口を開き、その口に薬を流し込む。その後は、吐き戻さないよう、口を押さえられた。

「ちゃんと飲み込んで」
「苦味は出来るだけ抑えてあるから、ね？」

そう言われても、やっぱり苦いって。あぁ、でも前に気持ち悪くなったときに飲まされたあの薬よりはマシかも……。あの時は、あまりの苦さに気が遠くなったからなぁ……。

でも、苦い。というか、早く飲み込まなきゃ苦しいかな――。

「よし、ちゃんと飲んだね。もうすぐ痛みが消えるはずだから、辛抱して」

ずきずきずきずき。この痛みが、本当に消え去ってくれるのだろ

うか。分からない。でも、今はねえさまの言うことを信じるしかない。

どうせ、この痛みのせいで寝ようにも眠れやしないのだから。

「私の作った薬を信用しなさい、アリサ。絶対に、痛くなくなるから」

「う……ん……」

ねえさまの作った薬……。確かに、効くよねぇ。前のときのアレも、ねえさまが作ったやつだって言ってたし。あれは、実際効いたし。

でもさ、早く効かなきゃ、効いたって感じがしないよ。今は、とにかく痛いんだ。

「大丈夫。大丈夫だからね」

うん……、だいじょぶ、だよね。でも、やっぱりまだ痛いなぁ……。

痛いせいで、気が遠くなってきた。……でも、だいじょぶなんだよね。だって、ねえさまたちが、いるもん。

「ゆっくり休んで、早く傷を治そうね、アリサ」

「無理せずに休みなさい」

うん。お休みなさい、ねえさまたち。何だか、疲れちゃったよ。眠ってもいいんだよね。だから、――少し眠るね。

そうして落ちる、深い、深い眠り。傷を癒すための、深い休息。だって、本当に疲れたんだ。昨日は、途中から痛みを感じなかったのに、今日は恐ろしいほどに激しい痛みを感じた。

その痛みのせいで、疲れたんだ。ねえさまたちとの軽いおしゃべりすらも、疲れちゃったから……。
だから。だから。
私はねえさまたちの温かい視線の中で、深い眠りに落ちて行った。

幸せな時間。もう、何も痛くない。
感じるのは、痛みじゃなくて温かい気持ち。
昔とちっとも変わらない、柔らかな愛情。

その空気がとても心地よくて。
その空気が、私に安心をくれて。

温かい。気持ちがいい。
ありがとう、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。
大好き。――――愛してる。

束縛は嫌いです（前書き）

これも反抗期？

アリサが誘拐されて数日が経った。アリサの傷は、アレグラの処置のおかげで大分よくなっており、普段の生活には支障をきたさないほどまでに、治癒していた。

だがもちろん、家族たちはアリサをベッドから下ろすことはしない。無理をさせるつもりは無い。

「アリサ。怪我が大分よくなったからって油断すると、傷が開いちゃうよ？」

「ちょっとくらいならだいじょぶだよ？」

「だぁめ。ほら、ベッドに戻って、横になって」

「んむぅ……」

既にアリサの中では傷はよくなっているためか、とにかく、ベッドから下りたがる。その度に家族たちは、アリサに無理をしないよう言い含めてベッドに戻していた。

だがアリサは諦めなかった。諦めずに何度も何度もベッドから下りて、戻されて、再びベッドから下りて、戻されるを繰り返す。

その諦めの悪さに、母が観念した。

「アリサ。あなた、一体何をしたいの？」

「黙って寝ておくの退屈だから、何かするー」

アリサの答えを聞いた母は、深い溜め息をついた。退屈の一言で無理をしようとするなんて、と。

そしてもちろん、母は反対の言葉を返した。

「アリサ、あなたの傷が、どれだけひどかったと思ってるの。まだ

しばらくは、絶対安静」
「だって、退屈だもん。それに、だいじょぶだって」

自分の体のことは、自分が一番よく分かってるから。そう告げるアリサに、母は軽い一撃をおみまいした。突然叩かれたアリサは、何事かと目を白黒させながらも母を見る。

「分かってないから、体調を崩すんじゃないの？　アリサ、ベッドで安静にしてなさい。いいね？」
「う……っ、で、でも……」
「でも何もないの。ほら、横になりなさい」
「……やだ」

アリサは言うと同時に、再びベッドから下りる。そして、油断している兄たちの隙間を縫って、部屋を出た。

「……！！　こら、待てアリサ！」
「やだっ！」

アリサは小さい体を生かして、ひょいひょいと兄たちの伸ばす手を避けて、廊下を走っていく。兄たちは急いで追いかけた。
ここでアリサが無理をすれば、傷が開く可能性を高めるだけではなく、熱を出す可能性も高いのだから。

「無理をするんじゃない！　止まるんだ、アリサ！」
「やだっ！　……きゃうっ！」

「ダメですよ、お嬢様、無理をなされては」
「……シャーナ」
「よし、よくやった、シャーナ。アリサ、部屋に戻るよ」

廊下を走っていたアリサは、後ろを追いかける兄を気にしていたためか、前にいた人間に気づかない。結果、ぶつかることになった。

そしてそのぶつかったのは、シャーナだったのだ。ほかのメイドならばともかく、アリサはシャーナには勝てない。そのため、アリサはシャーナに捕まることになる。

そして、シャーナはアリサがぶつかると同時にしっかりと捕まえ、後ろから追いかけてきていた兄たちに差し出した。

「お嬢様、まだお怪我は完治していないのですから、無理はいけません」

「だいじょぶなのに……」

「ダメです。さぁ、お坊ちゃま方とお部屋にお戻りください」

そうしてしっかりと兄に抱きかかえられたアリサは、逆らい、逃げるのを諦めて大人しく部屋へ戻らされた。

戻らされた部屋では、アリサを捕まえられなかった母が、黒いオーラを後ろに纏わせながら、アリサの戻りを待つ。

そして、兄に抱かれて戻ってきたアリサを迎え入れた母は、アリサをベッドに横にするとすぐに雷を落とした。

「無理をしちゃダメだって、言ってるでしょう！　あなたは何を考えてるの！　もっと自分の体を大切になさい！」

「うう……、でもぉ……」

「反論は聞きません！　しばらく休んでなさい。ベッドから下りたら、かあさま怒るからね」

母の落とす雷は恐ろしかった。このお説教を受けた張本人たるアリサや、それをそばで聞いていた兄妹たちは、後にそう語る。

そして、母のお叱りが怖いアリサは、大人しくベッドに横になり、

毛布を手繰り寄せしっかりと着込み、それから眠りにつくのであった。

その翌日。兄たちの不安は杞憂となることなく、アリサは熱を出した。

「だから、無理はダメだって言ったじゃないか」
「辛いでしょ？　しばらくは絶対にベッドから下りたらダメだからね」
「はう……」

熱を出して寝込んでいるアリサに、アリサのお見舞いに来た兄たちは、ビシビシと突っ込みを入れていく。
そしてアリサは、兄たちの言葉が事実であるため、反論を返せなかった。
そうして反論を返せないアリサを、兄たちは優しく撫でた。よしよしと、丁寧に撫でてやる。

「だから、もう絶対に、無理はしちゃだめだよ」
「僕らを心配させないでね」
「次無理をしたら、またお母さんからの雷が落ちるよ」
「それ……、絶対にいや……」

かあさまのお説教だけは、絶対にもういやぁ……。熱で辛いアリサは、息も絶え絶えにそう告げる。
兄妹たちはそんなアリサを優しい瞳で見つめながらなで続け、そして、アリサの部屋の扉の前では、そんな子供たちを、彼らの両親が微笑ましそうに眺めていた。

「お前たち、そろそろ行かないと遅刻するぞ」

そうして、時間の限界に気づかない兄たちに声をかけ、仕事に行かせるまでの間、ずっと。

ちなみに父は、この日は仕事をしなくてもいいように先に済ませていたらしく、母と一緒にアリサの看病をすることになるのであった。

そのことで、アリサが喜んだことは最早言うまでもない。

外出禁止

外に行きたい。ある日、アリサは潤んだ瞳で父や母に告げる。だが、父も母も、兄や姉も、メイドたちや執事でさえも、アリサの外出には反対した。

彼らが反対をした理由はただ一つ。先日のアリサ誘拐・暴行事件が深く関わっていた。

痛かったろう。辛かったろう。

そんな思いをさせないためには、この屋敷から出さなければいい。外と接する機会を全て奪い、自分たち以外の目にさらさなければいい。

そうすれば、アリサが痛い思いをすることは、ない。

だから彼らは、アリサにしっかりと外出を許可しない考えを示した。

「アリサ。外出は許可できないよ。この間の事件で、外が怖いものだって、よく分かっただろう？」

「僕たちだけじゃ、守りきれない。だから、我慢して？」

「でもぉ……」

お外行って、この間の怖い気持ちを振り払いたいな。アリサは、うるうるとした瞳で、父たちに告げる。父は、その瞳に陥落寸前だ。

だが、そこには最後の砦である母がいた。

「アリサ、お外は危ないから、だぁめ。最近はね、この間の馬鹿みたいに危ない人が増えてるの。そんな中にアリサが紛れ込んだら、まさに飢えた狼の中の羊さんよ？　パクって食べられちゃうよ？」

「食べられないよ。だいじょぶだから、ちょびっとだけ！　ね？」

母よ、それは完全に脅しです。母の言葉を聞いた家族たちは、同時にそう考えた。……当然ながら、アリサ除く。

ちなみに、母は食べられる＝襲われるの意味で告げているのだが、アリサはそうは考えていない。純粋に食べられるだと考えている。

その結果が、不思議そうに首を傾げるという動作に繋がるのであった。

「絶対に食べられないから、ちょびっとだけぇ！」

「危ないからダメ。ねぇ、アリサ。アリサは、またかあさまたちを心配させるの？」

「だいじょぶだよ！　心配させたりしない！　約束するから！」

本当に大丈夫だと思っているアリサは必死に懇願するのだが、母がいい答えを返すことは、絶対にない。それがアリサを守るためなのだから。

「何言ってもだぁめ。しばらくはお家で何かしてなさい」

「……やだ！　お外行くもん！　うえーん！」

そうして完全に外出を禁止されたアリサの末路は、号泣だった。禁止された悲しさゆえか、母たちのいつもとは違う厳しさがゆえか。

とにかくアリサは泣き叫んだ。

「お外、行きたいのにぃーっ！　うえぇぇえーん」

「泣いたってダメよ。お外は危ないの」

「かあさまたちのけちんぼーっ！！」

アリサの泣き声は止まない。泣きながら外出の許可をくれない母

たちへの文句を連ねる。

「ちょっとくらいなら、だいじょぶ、なのにーっ」

そうして泣き叫び続けた結果、力尽きたアリサは、父や母たちの腕の中で眠りに落ちて行った。目元や鼻を真っ赤に染めて眠るアリサ。

その姿が可愛くて、愛おしくて。だから、この子を傷つけた人間が許せなかった。許せるはずが、なかった。

だから、彼らは誘拐犯を徹底的に痛めつけた。二度と、こんなことが出来ないように、こんなことをする馬鹿が現れないように、徹底的に。

それでも、絶対に安全だとは言えない。だから彼らはアリサの行動を制限した。

絶対に、外に出さないと決意した。危険から遠ざけるために、家の中だけでの生活を強要すると決めた。

「むにゃ……、お外……」

アリサのそんな寝言を聞いて、その決心が多少は揺らぎはするものの、それでも彼らの決意は変わらない。

――守るためならば、家に閉じ込めることすらも厭わない。

ちなみにその後、目を覚ましたアリサと見守っていた家族たちは、再びバトルを展開させることになる。

「お外、行きたい」

「ダメと言ってるでしょう。いい加減諦めなさいな」

「無理。諦めきれないもん、お外行きたいもん」

だめぇ？　再び潤んだ瞳で見つめてくるアリサ。その様子に、兄が堕ちた。

「母さん、庭くらいならいいんじゃないか？　街にはさすがに出せないけどさ」

「……そうね。アリサ、お庭でいいなら、出てもいいわよ」

「ホント！？　やったぁ！」

ただし。母は続ける。

「絶対に、一人になったらダメよ？　絶対に、かあさまか、セイン、カインたちの目の届く場所にいること。約束できる？」

「する！　出来る！　だから、今からお庭出てもいい？」

「セイン、カイン。大丈夫なら、一緒に行ってあげて」

「了解。アリサ、行こうか」

「うん！」

そうしてセインとカインがアリサと手を繋ぎ、そしてその後ろをほかの兄妹たちが追いかける。

その後、兄たちと共に外に出たアリサは、外に出ることが出来た嬉しさからか、兄たちが止めるのを聞かずに、はしゃぎまわる。

公爵家自慢の花を見て、においを楽しみ、移動して、駆け回る。

「アリサ、少し落ち着け。このままはしゃいでると、また明日熱を出すよ？」

「ただでさえ、さっき思い切り泣いてるんだから、少し落ち着いて」

「……だいじょぶなのに」

兄たちの意見にアリサは反論を返しはするのだが、その意見を素直に受け入れる。駆け回っていたのを一度止め、その場に立ち止まった。

「いい子だね、アリサ。走り回らず、ゆっくりとお庭で遊ぼうね」

そうして走り回ることを禁止されたアリサは、若干早足ではあるが、それでも走らず、歩きで庭を満喫したのだった。

月見の夜

ある日の夜。ベッドに上がり、そろそろ眠ろうかとしているアリサに、来客があった。

「アリサ、まだ起きてる？」

「かあさま？　まだ起きてるよ。どしたの？」

「今日は月がきれいだから、みんなでお月見しない？」

「――――する！」

この日は月がきれいだからと、母はアリサを誘いに来ていた。そして、その提案を受けたアリサは喜んで受け入れた。

そして、母の気分が変わる前に、とっととベッドから下りる。

「もうみんな、庭で待ってるわ。行きましょう」

あ、でも、外は少し冷えるから、上着を持っていかなくちゃね。

ベッドから下りたアリサの手を握った母は、そう言ってクローゼットに向かい、上着を一枚取り出し、アリサの肩にかけた。

「ちゃんと、かけておくのよ」

「うん」

そうして手を繋いだアリサと母は、ゆっくりと家族の待つ庭へ向かった。

アリサたちが庭に付くと、そこではテーブルや椅子を用意した父や兄妹たちがお茶を片手に談笑しながら、母やアリサがやってくるのを待っていた。

「あ、アリサ。まだ起きてたんだね」
「うん」
アリサは兄妹たちと話をし、そして、開いている席に座る。それから、やっと空を見た。
淡い光を放ちながら輝く月。その周りでキラキラと瞬いている星たち。
それは、きれいでもあったが、同時に悲しくもあった。
その淡い光が、命の淡さを語っているようで。
瞬く星が、命の呆気なさを語っているようで。
でも、その淡さが、瞬きが月や星の美しさを倍増させていて――。
「アリサ？　どうしたの？」
「へ？」
「涙が零れてる。何か、悲しいことでも思い出した？」
そう問われて、アリサは自分の目元に手を当てる。そこは、確かに熱い何かがあった。
アリサが思い出しているのは、前世。
長く、果てなく続いていくと思っていた命は、わずか二十年ぽっちで終わりを告げた。
生きている間はとても長いと感じていたその年数が、今考えればとても短くて、呆気なくて。
――それが、とても悲しかった。
「確かに、この月はきれいだけど、時々悲しくなるね」

「そうね。――――アリサ、こっちへいらっしゃい。かあさまのところにいれば、何も怖くないし、悲しくも無いからね」

突然、泣き出したアリサ。家族たちはそんなアリサを優しく見守り、そして母が代表して自分の下へ呼び寄せる。

呼ばれたアリサは流れる涙を拭うこともせずに、ただただ、母の胸に飛び込んだ。

「ほーら、どうして泣いてるのか言ってごらん」

「お月様とお星様見てたら、何だか、悲しくなったの」

確かに、お月様もお星様もきれいだけどね、なんだか悲しいの。

母はアリサの頬を伝う涙を拭いながら問いかけ、アリサも抵抗することなく、大人しく拭かれながら答えを返す。

そして、その答えを聞いた母は、アリサをぎゅっと抱きしめた。

「アリサ、とうさまのところにもおいで」

「僕のところにもね」

「あ、私もー」

その後、アリサは次々に家族に呼ばれ、抱きしめられる。そうしている間に、月や星を見て感じた悲しさなど、きれいに吹き飛んで行ってしまっていた。

それ故に、アリサは微笑む。悲しくないから、家族の愛が嬉しいから、アリサはにっこりと微笑んだ。

「もう、悲しくない？」

「うん！　とうさまも、かあさまも、にいさまも、ねえさまも、みんな大好き！」

「とうさまたちも、アリサが大好きだよ」

「にいさまたちもね。アリサ、ほら見て。今日は二つあるはずの月が、一つに見えるだろう？」

そう言われて、アリサは再び空を見た。空に浮かぶ月は一つにしか見えなくて、それだけを見れば、普段は二つあると言うことを考えられなかった。

二つの月が重なったこの日。そんな日は数年に一度しか訪れないものだから、父や母は子供たちを誘ってお月見をしていた。――それがアリサを泣かせることになるなど、全く予想もしていなかった。

でも、それでもこんな日は珍しいため、父たちはお月見をやめようとはしない。ただでさえ外の世界と接する機会が少ない末娘。それ故に父たちは、アリサにこれを見ていて欲しかったのだ。

「これが、明日にはまた二つに戻ってるんだね。……寂しいね」

たったの一日しか保てない現状が。あっという間に過ぎ去る、この時が。

「でも、一度きりってワケじゃない。また、いつかこうなるんだから、気にしちゃダメだろう」

「うん……」

アリサの小さな呟きに、父が返事を返す。そして、父はアリサの背を優しく押した。

「さぁ、アリサはそろそろ休もうか。少し夜更かしをしたから、明日は朝が辛いかもしれないね」

「んー、そう、かなぁ」

「きっとそうなると思うよ。さ、そろそろ眠たいだろう？　部屋に

戻ろう」

うん。そう小さく頷いたアリサを、父は優しく抱き上げた。その瞬間に、アリサは驚き、声を上げる。

「ふみゃっ！？」

「あぁ、アリサ、暴れないで。とうさまが部屋に運んであげるから」

それにしても、ずいぶんと大きくなったね、アリサ。持ち運んで運ぶのが、少し辛くなった。

父は抱き上げたアリサに微笑みかけながら、そう告げる。

その後、父にベッドまで運ばれ、横にされたアリサはあっという間に眠りにつく。父や、一緒に訪れていた母たちの優しい視線の中で、気持ちよく眠っていた。

家族勝負

「やっぱり、お家いや！　お外行く！　街に行く！」
「だから、何度もダメだって言ってるでしょう！」
「いやだったら、いや！　もう限界！」

アリサに庭以外の外出禁止令が発令されて数ヶ月。アリサは今まで、何度も何度も両親に庭に行かせてもらえるように頼み込んでいた。

だが、返って来る答えはいつだって同じ。「ダメ」の一言だ。

その言い合いの結果、アリサは限界を感じた。ここまで束縛されるとは思っていなかったのだろう。

「たまにはお外行く！　もうヤだ――っ！」
「ダメだったらダメ。お外は危ないの」
「兵士の誰かに、護衛としてついてもらえばいいじゃん！」
「この間は、護衛の兵の目を盗んで、あなたは攫われたじゃないの。もう、あんな思いはしたくないわ」

アリサと母のバトルは続く。

「じゃあ、かあさまも一緒に行こ？　手、繋いでよう？」

そしたら、絶対にかあさまと離れないよ？　アリサは言うが、母は渋い顔しかしない。

そして、アリサの目をしっかりと見て、告げる。

「それでも、やっぱりダメよ。我慢なさい」
「何で？　どうして？　かあさまも一緒ならいいじゃん」

「ダメったらダメ。ほら、もうすぐお勉強の時間よ。準備なさい」

言われたアリサは、急いで時計を見、その後、どたばたと用意にかかる。

「無理はしないのよー」

「分かってるっ！！」

そうして急いで部屋に戻ったアリサは、せかせかと勉強の支度を始める。そうして焦っている間に、アリサは母との勝負の内容を、きれいに忘れ去っていた。

その後、アリサはにこやかに微笑みながら現れた教師と、楽しみながら勉学に励んでいた。

「お嬢様。今日は古語を勉強しましょう。私が単語を書きますから、お嬢様は真似をしてかいてください」

教師はそう言って、アリサの前に置かれた紙に、単語をいくつか書いていく。

「これが、父。次が、母。兄、姉、弟、妹。一つ一つの意味を考えながら書いてくださいね」

「ん！」

これが、とうさまのことで、これがかあさまで、これがにいさま、ねえさま、で、おとーとにいもーと、っと。

アリサは呟きながら、せっせと教師の書いた字を見ながら必死に真似ていく。

「お上手ですよ。覚えるためにも、後五回は書いてください」

「はーい」

そうして指示を受けたアリサは、指示通りに幾度か繰り返し、その文字を書いていった。

そうしてしばらく書いた後、教師は一冊の本を取り出し、アリサに見せる。それは、古語で書かれた物語。

「お嬢様には、まだ全く読めないでしょう？」

「うん。全然分かんない」

「読み進めていきますから、お嬢様はしっかりと本を見ていてくださいね」

その後、教師はゆっくりと、時折アリサにも分かるような簡単な単語を見つけては、意味を教え、簡単な説明を入れる。

そして、その単語を覚えずとも、分からなくならないよう、しっかりと書き取らせる。

しばらくして授業が終ると、教師は屋敷を去り、そしてアリサは母の元へ向かう。

「かあさま。さっきのお話の続きー」

私、まだ諦めてないからね。にっこりと微笑みながら告げるアリサと、少し呆れ気味の母。二人はしばし、無言で睨み合っていた。

ちなみに、負けたのは母だった。母は深い溜め息をついて、アリサの目を見る。

「諦めなさい。絶対にお外には行かせません」

「絶対に行く！」

かあさまたちが許してくれないなら、私、お家抜け出してでもお外行くからね。アリサは興奮のあまり、思い切りそう告げる。

そしてその瞬間、母の背後に黒いオーラが現れた。その恐ろしさに、アリサはたじろぐ。

「勝手に、お家を出させると思ってるの？　出させるわけ無いじゃないの。何を馬鹿を言ってるのかしらね、アリサったら」

母は微笑みながらそう告げ、アリサの額をちょいっと突く。それが、アリサに更なる恐怖を与えた。アリサは、完全に怯えている。

そうしていると、玄関の扉が開かれた音がアリサや母の耳に響く。アリサはそれを幸いと考えたのか、急いで母から逃げ、玄関へと駆けて行った。

「ただいま、アリサ。どうしたの？　無理してない？」

「おかえりなさい、ミアねえさま。無理してないから、だいじょぶだよー」

アリサはそう言いながら、帰って来たエルミナを恐怖感を漂わせる母のそばへと誘う。そして、母の恐怖感を味わったエルミナは、静かに母に問いかけた。

「お母さん、どしたの？　怖いよ」

「あら、アリサが悪いのよ？　家を抜け出してでもお外に行くなんて言うから」

母が言った瞬間、アリサは即座に逃走体勢に入った。それを言われては、間違いなく、姉も怒る。アリサは、それは避けたかったのだ。

だがもちろん、それを聞いてアリサを逃がすエルミナではない。

しっかりと、アリサを捕まえた。

「どこに行くつもり？　逃がさないよ、アリサ」

「ミアねえさまってば、怖いなーぁ……」

あは、あははは、あ、はは……。乾いた笑いを浮かべるアリサに、エルミナと母は徹底的に攻め込んでいく。

「アリサが悪いんだよ？　家を抜け出すなんて、馬鹿なこと言うから」

「だって、お外行きたいし……」

「ダメ。外は危ないの」

そうして母や姉と勝負を続けるアリサ。ちなみにこの勝負は、父や兄たちが帰ってくると、その父や兄たちをも敵にし、バトルは続けられた。

意地でも外に出たいアリサと、安全のために家に閉じ込めておきたい家族たち。彼らの勝負は平行線のままで、いつまで経っても終わりを見せることは、ない。

家族旅行

この国有数の温泉地。アリサたち、ドーリス公爵家の家族たちは、温泉地にて家族団らんの一時を楽しんでいた。

「気持ちいいねぇ、アリサ」
「うん。ぬくぬくー」

その温泉の女湯では、母と姉たち、そしてアリサが気持ちよさそうに湯に浸かっている。
お湯に浸かっているアリサはとても気持ちがよさそうで、下手をすれば眠ってしまいそうなほどに、気持ちよさそうにしていた。

「本当に、お久しぶりですね、公爵様」
「あぁ、そうだな。アリサが生まれる前に来たのが最後だから、十年以上ぶりか」
「お坊ちゃま方も、お嬢様方もご立派になられました。して、あなたがアリサお嬢様ですか」

家族揃って馬車で温泉地に来た家族たちは、まず、この屋敷の管理を任せていた者たちに言葉をかける、
そして、屋敷の管理者は兄妹たちを順に眺めて、最後にアリサに目をつけた。そして、目を細めて優しく見つめた。

「お初にお目にかかります、アリサお嬢様。私はこの屋敷の管理を任されている者です」
「あ……、はじめまして……」
「こうやって旅行に来られるほど、お元気になられたのですね。公

爵様にお嬢様のお体のことを伺っては、勝手ながら心配しておりました」

昔は、何かあるたびに必ず体調を崩していたアリサ。そんな状態では、どう足掻いても旅行など出来はしなかった。

だが、最近のアリサはちょっとやそっとでは体調を崩さない。まぁ、無理をしすぎれば高熱を発するのだが。

それでも、大分体の調子が善くなっているので、父はアリサに王都以外の街も見せたくて、今回の旅行を計画したのである。

「それにしても、本当に大きくなられましたね。カイン坊ちゃま、エルミナお嬢様」

前に来たときは、二人揃って元気よく屋敷を走り回っておられましたのに。

屋敷の管理者が言うと、話のネタにされた二人は、思い出したくないのか目線を外す。

「確かに、あの時はすごかったな」

「カインとエルミナが、まだ幼かったもの」

「ちょ！　それって、前来た時じゃなくて、もっと前じゃないか！」

「そうよ！　前来た時は、そんな走り回った覚えなんてないもの！」

元気いっぱい双子。二人は恥ずかしい過去を振り払おうと必死で話を変えようとするのだが、母たちは面白そうに笑いながら、話を続ける。

「それで走り回って、屋敷で迷子になったのよね」

「あの時は頑張って探したなぁ……」

「なかなか見つからなくて、苦労したわよねぇ」

「僕、あんまり覚えてないんだけど」

そうして楽しそうに話す家族たちに、話の分からないアリサは着いていけない。結果、面白くなさそうだ。

そして、アリサのその様子に気がついたカインとエルミナは、コレ幸いと話をやめさせるために、アリサを使った。

「お父さん、お母さん。アリサが面白くなさそうにしてるから、そろそろやめようよ」

「そうだよ！　アリサ、面白くないだろ？」

「うん。話分かんないから、つまんない」

アリサが口を尖らせながら言うと、父や母は軽く微笑み、アリサの頭を撫でた。そして、告げる。

「よしよし、アリサには分からない話だったな。なら、今から温泉に行こうか」

「近くに、家の所有する温泉があるのよ」

ちなみに、普段は屋敷の管理者が共に管理をしており、民に開放している。指定された金額を払いさえすれば、のんびりと浸かることができるのだ。

だが、今日は公爵家一同が来るということで、この温泉は民の使用が禁じられていた。

「本日は、ご家族水入らずで使用できるよう、民の使用を禁じております、ごゆっくりどうぞ」

「ありがとう。でも、私たちが上がったら、民に開放してちょうだいね」

「かしこまりました」

そして、温泉に向かい、男性陣と女性陣で別れ、のんびりと温泉の湯に浸かる公爵家の面々。
その中でアリサは、湯の中でぐでーんとしていた。

「寝ないように気をつけなさいね、アリサ」
「うん。分かってるよぅ」

温泉があまりにも気持ちがいいのか、眠ってしまいそうなアリサに、母は寝ないよう警告の声を発するのだが、そんなものお構いなしにアリサは寝そうだった。
だがそれは、そばにいた姉たちが徹底的に阻止する。

「ほら、うとうとしてるよ。お風呂で寝たら危ないんだから、起きなさい」
「アリサ。体洗ったげるから、出ておいで」

うとうとと、眠ってしまいそうなアリサを起こすため、エルミナはアリサを呼び、予告どおりアリサの体を磨く。
ごしごしと、泡立てたタオルで優しくアリサの体を洗っていくエルミナは、アリサの成長に驚いていた。

「アリサ、胸膨らんできたね。体が大人に近づいてきてるんだ。よかったね」
「んー、そだねー」

ほのぼのとした空気が温泉内に流れる。そんなほのぼのとした空気の中で体を洗ってもらったアリサは、次は髪を洗われていた。
体を洗ったため、また湯に浸かろうとしていたアリサをエルミナが止め、そのまま頭にお湯をかけたのだ。

「一気に済ませよ？　ほら、目瞑ってー」
「はーい」

そして髪が泡だらけになったアリサは、エルミナの指示通り目を瞑る。エルミナはそれを確認してアリサの頭からお湯をかけた。
アリサの頭の泡が、少しずつ流れ落ちていく。その後、きれいに泡が流れ落ちたことを確認すると、エルミナがアリサに湯に浸かっておくよう告げた。

「体が冷えないようにしなきゃね」
「うん。ぬくぬくー」

その後、再び屋敷にて顔を合わせた家族たちは、ほかほかの状態でしばらく話を楽しむのだった。

淡い光と程よい熱

ほかほかぬくぬくー。やっぱり温泉っていいよねぇ。転生後、お風呂の定義が変わってないことに喜んだけど、温泉まであるとは思ってなかった。

しかも、お風呂だけじゃなくて、温泉までこの世界にあるだなんて。それが、嬉しい。幸せだぁ。

初めて家族みんなでの旅行。しかも、目的地は温泉地にあるドーリス公爵家の別荘。初めての王都以外の街に、アリサは興味津々だ。

「アリサ、興奮しすぎて熱を出さないようにね。熱出したら、温泉はダメだからね」

「分かってるよぅ。でも、王都以外の街、初めてだから……」

そう言いながら、馬車の窓からずっと景色を眺め続けるアリサの頭を、横に座っていた母は優しく撫でた。

アリサにとって、初めての王都以外の街。初めて王都を出るアリサ。その楽しみは、既に抑えられないものとなっていた。

「そうね。でも、はしゃぎすぎたら熱を出すから、別荘に着くまで、少し休みなさいな」

「でも、景色見たい」

「帰りにゆっくり見なさい。今熱を出したら、旅行は中止よ？　いいの？」

そこまで言われては、休まないわけにはいかない。アリサはそう判断したのか、アリサは窓から目を離し、母に凭れかかる。

「よしよし。着いたら起こすから、ゆっくり休んでなさいね」

その後、馬車の中にはアリサの健やかな寝息が響き、そこで、両親や兄、姉が優しくアリサを見守っていた。

アリサが生まれて初めての家族旅行。アリサにとっては初めての旅行。だから、アリサには楽しんで欲しかった。アリサの記憶に、旅行の楽しさを埋め込んで欲しかった。

だから母たちはアリサに無茶をさせない。別荘に着くまでに体調を崩さないようしっかりと気にかけ、アリサがはしゃぎすぎていると思ったら、休ませた。

「別荘までは、まだ時間かかるね」

「ええ。だから、あなたたちも休みたいなら休んでいてもかまわないわよ」

家族たちがそうして話している間も、馬車は走り続ける。公爵家の別荘を目指して走り続けていた。

そして数時間後。馬車の中では複数人の寝息が響いていた。

まず、アリサ。そして、ルウィン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナだ。疲れていたのか、子供たちは揃って眠ってしまっていた。

故に、現在起きているのは父と母だけだ。

「全員、大きくなっても寝顔は変わってないのね」

「ふふっ……。確かにそうだな。見た目が大人っぽくなっていても、寝顔だけは昔のままだ」

馬車の中で、すやすやと眠る子供たち。父や母の、愛する子供た

ち。いつの間にか、ここまで大きくなった。記憶の中の子供たちは、まだまだ幼くて、元気いっぱいに父や母に駆け寄ってきていたと言うのに。

今では、それも全ては記憶の中のみ、だ。そう言う行動をとりそうな子供（アリサ）はいることはいるのだが、アリサは体調を考えて、そう言う行動を控えているようだ。

「本当に、大きく、立派になったな」

父はそう言って、そばで眠るカインの頭をくしゃりと撫でる。本当に、大きくなった子供たち。両親は、そんな子供たちを優しく見守り続けていた。

そうして父と母が話をしていると、寝ていたはずの子供が、小さなうめき声を上げ、目を開く。

「ん……んん？」

「あら？　目が覚めたのね、ジャスリーン」

「……おはよ、お父さん、お母さん。私、どのくらい寝てた？」

「そんなに長くは寝てないわ。別荘までまだかかるし、また寝てもいいわよ」

父や母は言うが、ジャスリーンは既に目が覚めているからか、もう眠ろうとはしなかった。代わりに、まわりで眠る兄妹たちを眺める。

「みんな、よく寝てるね」

「疲れてるんでしょう。あなたも、まだ寝てていいのよ？」

あなたも疲れてるでしょう。母は言うが、ジャスリーンは淡く微笑みながら、首を横に振る。

「私は、みんなほど疲れてないから平気。寧ろ、お父さんとお母さんのほうが疲れてるんじゃないの？」
「心配してくれてありがとう。でもな、お父さんは平気だ」
「ジャスリーンはいい子ね。お母さんも平気だから、もう少し休みなさいな」

そこまで言われると、眠らないわけには行かなくなったのか、ジャスリーンは一度微笑み、そして再び目を瞑った。
数十分後、再び馬車内で子供たち全員の寝息が響き渡ることになる。

それから更に数十分後。子供たちが、少しずつ目を覚ます。

「ん……あ？　あれ？」
「おはよう、セイン。どうかしたの？」
「はよ。ね、母さん。僕、いつの間に寝た？」
「アリサが寝て、そう経ってなかったわね。みんな、よっぽど疲れていたようね」

目を覚ましたセインは、母に疑問に思っていたことを尋ね、尋ねられた母はその質問に答えながら、目をほかの子供たちに向ける。
セインもつられて、ほかの兄妹たちを見た。

「全員、熟睡？」
「えぇ。だからセイン、あなたももう少し休みなさい。ね？」
「んー。確かに、一人起きてても面白くないし……」
「そうでしょう？　ほら、休みなさい」

そうして母はセインを再び寝かしつけ、その後ちらほらと起きだ

したほかの子供たちも同様に、再度寝かしつける。
そうやって母は、馬車の中で夫婦二人っきりの幸せな空間を作り出していたのであった。

馬車の窓から差し込む柔らかな光。その光に暖められ、快適な温度を保った馬車。
それは、幸せな空間で。とても、気持ちのよい空間で。
だから、子供たちは眠りに落ちた。気持ちのよい空間で、気持ちのよい、眠りへと――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1708v/

掴んだ新たな希望

2011年11月2日12時00分発行